The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の発話冒頭における言語要素の研究 : 相互行為から見る冒頭要素の順序
Author(s)	伊藤, 翼斗
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/34547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博 士 論 文

日本語の発話冒頭における
言語要素の研究
－相互行為から見る冒頭要素の順序－

提 出 年 月　　２０１３ 年　１２ 月

言語文化研究科　言語社会専攻

伊　藤　翼　斗

要旨

本研究の目的は、日本語の会話における発話の冒頭に用いられる「えっ」「あっ」「なんか」「で」といった言語要素（発話冒頭要素）が複数使用される際に、それらの言語要素がどのような順序で使用されるのかについて明らかにすることである。そのために、本研究では会話分析の手法を用いて、日本語による電話会話の分析を行なった。これまでの発話冒頭要素に関わる研究の多くは個別的な要素に注目するものであるが、本研究は複数の発話冒頭要素同士の関係に着目するものであり、より現実の言語使用をトータルに扱っているという点で意義があると言える。

以下、本稿の各章で具体的にどのようなことを述べているのかについて、簡単にまとめる。

第１章

第１章では、論文全体の概要について述べ、本稿の構成について説明している。

第２章

第２章では、本研究が分析の手法としている会話分析について説明する。そして、発話の冒頭に関して会話分析はどのようなことを明らかにしてきたのかについて見る。

本研究は会話を研究の対象としている。会話は「相手がその場にいること」と「時間が経過すること」という二つの点で書き言葉と大きく異なる。この二つの会話の性質に明確な自覚を持っているのが会話分析である。会話分析の目的は、我々が「当たり前」に出来ている会話が、会話の参与者同士のどのような相互行為的な振る舞いによって達成・維持されているのかを明らかにすることにある。そのために、参与者が何に指向しているのかを記述する。また、発話がどのような行為を構成し、どのような発話の連なり（連鎖）の中にあるのかを重視している。

先行研究において、発話の冒頭は、前の発話と後続する発話がどのような関係にあるのかを示すことができ（Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)、前の話者が言ったことと現話者が言おうとしていることとの関係を伝える連鎖マーカー(sequential marker)を配置できる主要な位置である(Heritage 2002)として、会話における重要な位置であることが明

らかにされている。また、"oh"(Heritage 1984,1998,2002)、"and"(Heritage & Sorjonen 1994)、「いや」(串田 2005a, 串田・林 印刷中)、「へー」(Mori 2006)、"look"(Sidnell 2007)、「え」(Hayashi 2009)、"and/but/so"(Schegloff 2009)、"well"(Schegloff & Lerner 2009)、「なんか」(平本 2011a)など、研究も蓄積されつつある。しかし、これらの研究は個別的な要素に着目したものであり、複数の要素が用いられた場合についてはまだ明らかにされていない。本研究が焦点を当てているのは、まさにこの部分に「順序」という観点から検討するものである。

第３章

ここでは、本研究がどのように分析を行なったのかについて説明している。分析に際しては、Talkbank という電話会話コーパスを利用した。コーパスを利用した最大の理由は、本稿の読者がデータにアクセスできるという点にある。また、電話会話を利用したのは、ジェスチャーなどの視覚的情報を議論から省くためである。

本研究では、基本的にはＴＣＵ（turn-constructional unit; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974）を「発話」として分析の単位として考えている。発話の冒頭から伝達内容に関わる部分の直前までに使われる言語要素を「発話冒頭要素」として、これらが複数使用される際にどのような順序になっているのかについて分析を行なう。

第４章

この章から第６章までが、冒頭要素の順序に関わる分析である。

発話冒頭要素は複数使用される際に使用順序があり、その順序を説明するのに冒頭要素を二つに分類することが有効である。その二分類とは、①前に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す「遡及指向要素」(「えっ」「へー」等）と、②それ自体では発話を構成せず、直後に自身の発話が続くことを予期させる「後続指向要素」(「なんか」「で」等）である。複数の発話冒頭要素が使用される際には、[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序になる。

また、この二分類は、「同じ要素群に属するものを立て続けに用いることができるか」という観点から見るならば、発話の冒頭で後続指向要素は複数使用できるが、遡及指向要素は基本的には一つまでしか用いられないという制約がある。

第５章

遡及指向要素は、発話の冒頭で「基本的には」一つまでしか用いられない。しかし、特定の環境においては複数使用されることもある。その事例について第５章では詳細に検討する。そのような事例において、複数の遡及指向要素には順序があり、遡及指向要素を①特定の発話に対する「認識の不一致への対処」を行なう要素（「えっ」や「あっ」等）と②先行発話から「求められた反応」を行なう要素（Yes/No 質問の後の「うん」等）とに分類することで、その順序が説明できる。つまり、複数の遡及指向要素が使用される際には、[①「認識の不一致への対処」 → ②「求められた反応」]という順序で用いられるのである。

このような事例では、当該の発話で先行発話に対する二つの対処をする必要が生じたため、遡及指向要素が複数使用されている。多くの場合、先行発話から求められる対処は一つであり、第５章で検討したような複数の対処が必要な環境は少ない。また、複数の対処が求められた際には、二つ以上の発話で分割して行なうこともできる。このような理由で、遡及指向要素が複数使用される事例は非常に少ないのである。

第６章

後続指向要素は発話の冒頭で複数使用できる。その際の順序に第６章では焦点を当てる。

後続指向要素は「断絶をマークする要素」（「あ」「ねえ」「で」等）と「断絶をマークしない要素」（「なんか」「たぶん」等）とに分けることができる。

「断絶」とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続する発話が直前の連鎖との境界を示していることである。なお、新しい連鎖が開始されるとき、常に「断絶」が示されるわけではなく、ある特定の連鎖環境において示される境界を「断絶」と本研究は呼んでいる。その特定の連鎖環境とは、①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際、②関連のある複数のものを取り上げる際、③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際の三つである。

この「断絶」は、後続指向要素が複数使用された際の順序に関わっている。複数の後続指向要素が使用される際には、[「断絶をマークする要素」 →「断絶をマークしない要素」]という順序になるのである。これは、「断絶をマークしない要素」を先頭に配置し、その後で「断絶をマークする要素」を使用してしまうと、先行した要素との間に境界を作り上げてしまうからである。それゆえ、「断絶をマークする要素」は他の後続指向要素に先行するのである。

第４章からここまでの順序規則をまとめると次のような図になる。図の左から右は時間軸であり、左の方が発話の冒頭において先行するという意味である。

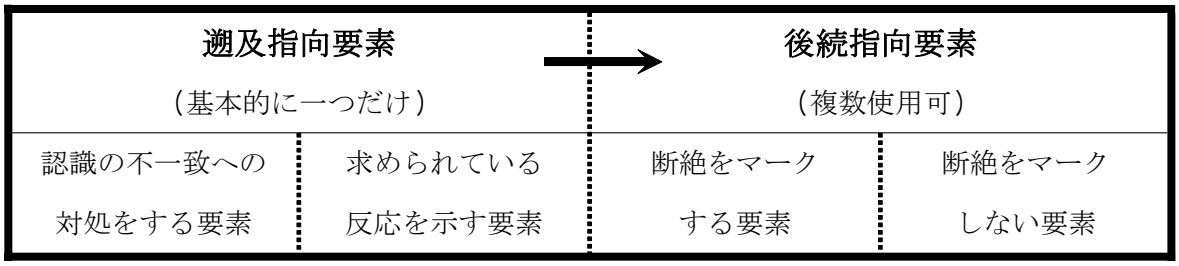

図１　発話冒頭要素の順序

<u>第７章</u>

第４章から第６章までは冒頭要素の順序規則について示してきた。第７章では、冒頭要素全般に関わる性質を見る中で、この順序規則が「使われる」規則であることを主張している。

第７章で検討したのは、通常の配置位置以外の場所で冒頭要素が使用される事例である。「通常の配置位置以外の場所」というのは、「冒頭要素の順序規則に反する位置」あるいは「発話の冒頭ではなく、発話の途中」のことである。このような場所で冒頭要素が使用されることで、「自己修復」、「引用」、そして「立ち遅れ反応」という特定の行為がなされていることを示す働きが生まれる。これは、冒頭要素が、その名の通り「冒頭」つまり発話の「始まり」をマークしており、それらが通常の配置位置以外の場所で用いられることで「始まり」ではない場所で「始まり」が示されることとなるためである。その結果、冒頭要素の直前と直後で依拠する統語構造にずれが生じ、そのずれが「自己修復」、「引用」、そして「立ち遅れ反応」という特定の行為を示す働きとなるのである。

以上のことは、冒頭要素の順序規則が何らかの行為を示すための道具になりうることを意味するだろう。

<u>第８章</u>

この章では、これまでの章で明らかにしてきたことをまとめ、今後の課題を述べている。今後の課題として、①「視覚的な情報」と「開始に先立つ要素」(Schegloff 1996)を分析に含める必要があること、②後続指向要素の順序規則について他の規則を見つける必要が

あること、③本研究で明らかにした「順序規則」（図１）と「遡及指向要素と後続指向要素のグラデーション」との関係について踏み込んだ考察をする必要があること、そして④発話の冒頭とターンの冒頭でどのような働きの違いがあるのかを考える必要があることという四つを指摘した。

以上が各章の簡単な概略である。

本研究で明らかになったことは、冒頭要素はランダムに使用されているわけではなく、規則的に用いられているということである。これまでの発話冒頭要素の研究では特定の要素のみに注目するものが多く、複数の要素同士の関係に焦点を当てているものはほとんど無かったと言える。本研究が順序という観点から複数の要素同士の関係を明らかにしたことで、新たな視点を提供できたと言えるだろう。

Abstract

The purpose of this thesis is to show the order of utterance-beginning elements in Japanese conversation when more than one elements are used. To this end, this study analyzes telephone conversations in Japanese using a Conversation Analysis approach. Though previous research has tended to focus on individual utterance-beginning elements, this research focuses on multiple uses of them.

Each chapter is explained below.

Chapter 1

Chapter One provides an overview and outline of the structure of the thesis.

Chapter 2

Chapter Two explains Conversation Analysis, which this study uses as the primary research method. This follows with a discussion of what has been said about utterance-beginnings in research based on Conversation Analysis thus far.

Conversation differs widely from written language in that the utterance is bound to a particular place in which the speaker is located as well as the time in which the utterance occurs. Conversation Analysis takes into account these two aspects of conversation. The aim of Conversation Analysis is to show how we manage and maintain conversation in terms of the interaction between speakers. For that purpose, Conversation Analysis factors in how a participant orients him/herself, what action an utterance represents, and the sequential placement of utterances.

Previous research has demonstrated that utterance-beginnings play an important role by encoding relationships between preceding and following

utterances (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974). Utterance-beginnings may also accomodate sequential markers (Heritage 2002), which convey the relation between what a previous speaker has said and what the current speaker intends to say. Though much research has discussed individual utterance-beginning elements (Heritage 1984, 1988, 2002; Heritage & Sorjonen 1994; Kushida 2005a; Mori 2006; Sidnell 2007; Hayashi 2009; Schegloff 2009; Schegloff & Lerner 2009; Hiramoto 2011a; Kushida & Hayashi in printing), research to date falls short of acknowledging cases in which multiple utterance-beginning elements are used. The present thesis focuses primarily on such cases.

Chapter 3

Chapter Three explains how the data were analyzed. This research uses TalkBank, a corpus of telephone conversations, as the source of its data. The main reason for choosing TalkBank is that readers can freely access TalkBank's corpora. Also, the use of telephone data removes the interference of visual information, such as gesture, from the set of variables to be controlled for.

This research considers TCU (turn-constructional unit; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974) the unit of an utterance, which is the basic unit of analysis. 'Utterance-beginning elements' refers to linguistic elements positioned from the beginning to just before the main content or substance of an utterance. After establishing the unit of analysis, this thesis turns to an investigation of the order in which utterance-beginning elements occur.

Chapter 4

In Chapters Four through Six, the author describes in detail the order of utterance-beginning elements.

To explain the order of utterance-beginning elements when multiple elements are used the author introduces two concepts: 'Retrospective Oriented Elements' and 'Prospective Oriented Elements'. The former, such as '*e*' or '*hee*', are elements which display the speaker's judgment or a change of state. The

latter refers to elements that do not constitute an utterance per se, but instead project continuation of the speaker's utterance. When multiple utterance-beginning elements are used, the order is [Retrospective Oriented Elements → Prospective Oriented Elements]. An utterance beginning may contain more than one Prospective Oriented Element, but basically only one Retrospective Oriented Element.

Chapter 5

Retrospective Oriented Elements can be used only once in an utterance-beginning. However, in specific environments, multiple Retrospective Oriented Elements are felicitously used in utterance-beginnings. In Chapter Five, the author analyzes such cases.

When multiple Retrospective Oriented Elements are used, they are positioned in the order [A → B]:

A Elements which treat a discord in perception between participants with regard to a specific utterance(s) (ex. '*e*', '*a*')

B Elements which display a reaction elicited by a preceding utterance (ex. '*un*' after a Yes/No interrogative)

In these cases, the speaker has to deal with the preceding utterance two-fold, hence multiple Retrospective Oriented Elements are used in the utterance-beginning. In most cases, however, the preceding utterance requires only one element, and when two are required the speaker can deal with them individually by using two separate utterances. For this reason, it is very rare for multiple Retrospective Oriented Elements to be used in the utterance-beginning.

Chapter 6

Multiple Prospective Oriented Elements are also positioned in the

utterance-beginning. Chapter Six focuses on the order of such cases.

Two subcategories of Prospective Oriented Elements are identified: 'Disjunction marking elements' (ex. '*a*', '*nee*', '*de*') and 'Disjunction unmarking elements' (ex. '*nanka*', '*tabun*').

'Disjunction' refers to the boundary displayed between a preceding sequence and what follows. However, new sequences do not always initiate disjunction. This research identifies the following three environments as instances of disjunction: (1) When returning to the main sequence from inserted utterances; (2) when mentioning multiple related things; (3) when starting a new sequence differing from the preceding one.

Disjunction relates to the order of Prospective Oriented Elements. When multiple Prospective Oriented Elements are used, they are positioned in the order ['Disjunction marking elements' → 'Disjunction unmarking elements']. If the disjunction unmarking element is placed before a disjunction marking element, the disjunction marking element creates a boundary between it and the unmarking element that precedes it. This is problematic because the unmarking element becomes separated from the utterance that follows. This is why the order observed (['Disjunction marking elements' → 'Disjunction unmarking elements']) is upheld.

Below is a table summarizing the information introduced in Chapters Four through Six.

Retrospective Oriented Elements		**Prospective Oriented Elements**	
Elements which treat discord in perception	Elements which display an elicited reaction	Disjunction marking elements	Disjunction unmarking elements

Fig. 1　Order of utterance-beginning elements

Chapter 7

The order of utterance-beginning elements is discussed in Chapters Four through Six. Chapter Seven discusses the fact that this order is usage-based, that is, it arises out of the actual use of utterance-beginning elements in conversation.

Chapter 7 analyzes cases where utterance-beginning elements are used in a marked position, such as that which violates the principle governing the order of utterance-beginning elements, or one that occurs halfway through the utterance. When utterance-beginning elements appear in marked positions such as these, they function as three types of recourse: 'Self-repairing', 'Quoting', and 'Lag-response'. When they are used in a marked position, these elements signal the 'beginning' in a non-beginning position. With them, the speaker can alert participants of the possibility of a 'syntactical departure' within the ongoing utterance. 'Self-repairing', 'Quoting', and 'Lag-response' are three manifestations of syntactical departures.

In this chapter, the author demonstrates that utterance-beginning elements are used for displaying specific actions.

Chapter 8

This chapter summarizes the preceding chapters, and points out some difficulties encountered with regard to the data collection and analysis: (1) Visual information and 'pre-beginning elements' (Schegloff, 1996); (2) alternative orders of Prospective Oriented Elements; (3) consideration of the relation between Fig. 1 and 'gradation of utterance-beginning elements between retrospective and prospective'; and (4) analysis of the difference between 'utterance-beginning' and 'turn-beginning'. These four areas are suggested as directions for future research.

Importantly, what this research demonstrates is that utterance-beginning elements are not used at random, but in an orderly, predictable fashion. Moreover, whereas most previous research has focused on the use of a single

element, this study investigates the use of multiple elements in concert. This research thus offers a new perspective by analyzing the order of multiple utterance-beginning elements.

日本語の発話冒頭における言語要素の研究
－相互行為から見る冒頭要素の順序－

目次

要旨　i

英語要旨　vi

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　発話の冒頭を分析すること・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

２．１．会話の性質　5

２．２．会話分析研究の概要　6

２．２．１．会話分析の歴史的変遷　7

２．２．２．参与者の指向　10

２．２．３．行為と連鎖組織　12

２．２．４．会話における時間の経過　14

２．２．４．１．並び方　16

２．２．４．２．投射　17

２．３．発話冒頭の重要性　20

２．３．１．ターンの構成　20

２．３．２．発話冒頭の働き　21

２．３．３．冒頭要素の研究　23

２．４．関連する分野の研究　24

２．４．１．談話標識の研究　24

２．４．２．感動詞の研究　25

２．４．３．フィラーの研究　26
２．４．４．あいづちと応答詞の研究　27
２．４．５．関連する諸研究との違い　28
２．５．小括　28

第３章　分析の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

３．１．データについて　30
３．１．１．コーパスの利用の問題点　31
３．１．１．１．参与者の属性や関係の不透明さ　31
３．１．１．２．録音されているという状況が参与者に与える影響　34
３．１．２．データの概要　36
３．２．分析の手順について　38
３．２．１．分析に必要な概念　39
３．２．２．手順　40
３．３．小括　43

第４章　冒頭要素の二分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

４．１．遡及指向要素と後続指向要素　45
４．１．１．二つの分類基準　46
４．１．２．冒頭要素の全体像　49
４．２．遡及指向要素と後続指向要素の順序　51
４．２．１．遡及指向要素から後続指向要素へ　51
４．２．２．事例の検討　53
４．２．３．逆順で用いられている事例　57
４．３．連続使用可能性　59
４．４．小括　61

第５章　遡及指向要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

５．１．遡及指向要素の性質　65
５．２．遡及指向要素に関わるこれまでの研究　66
５．２．１．トラブルへの対処に関わるもの　67
５．２．２．価値付けに関わるもの　70
５．２．３．承認に関わるもの　72
５．３．遡及指向要素に関わる区分の複数に共通する特徴　75
５．４．複数の遡及指向要素の使用と順序　77
５．４．１．複数使用される連鎖環境　77
５．４．１．１．トラブルにより遅延していた反応　78
５．４．１．２．想定外を含む反応求めに対する反応　82
５．４．２．発話の冒頭における複数の対処　88
５．４．３．複数の遡及指向要素が使われる際の順序　89
５．５．小括　91

第６章　後続指向要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

６．１．後続指向要素の性質　94
６．２．後続指向要素に関わるこれまでの研究　96
６．２．１．連鎖の起点としての気付きに関わるもの　96
６．２．２．呼びかけに関わるもの　98
６．２．３．接続に関わるもの　100
６．２．４．態度表明に関わるもの　103
６．２．５．サーチに関わるもの　106
６．３．後続指向要素に関わる五つの区分について　109
６．３．１．後続指向要素に関わる区分の複数に共通する特徴　109
６．３．２．順序に関わる分類に向けて　111

６．４．複数の後続指向要素の使用と順序　112
６．４．１．断絶　112
６．４．２．断絶をマークする冒頭要素が用いられる環境　116
６．４．２．１．挿入からの復帰　116
６．４．２．１．１．問題解決の連鎖からの退出　117
６．４．２．１．２．説明の連鎖からの退出　119
６．４．２．１．３．やり直し　122
６．４．２．１．４．挿入からの復帰のまとめ　128
６．４．２．２．関連する複数のものへの言及　128
６．４．２．３．直前とは異なる新しい連鎖の開始　134
６．４．２．３．１．会話の開始から用件へ　136
６．４．２．３．２．会話の前終結への移行　139
６．４．２．３．３．直前とは異なる新しい連鎖の開始のまとめ　141
６．４．３．断絶をマークする要素と順序　142
６．５．小括　144

第７章　発話冒頭要素が担う発話の開始を示す働き・・・・・・・・・・・・・146

７．１．発話冒頭要素の順序　146
７．２．発話冒頭要素の利用　148
７．２．１．会話に現れる「非文法」　150
７．２．２．リソースとしての発話冒頭要素　152
７．２．２．１．自己修復　153
７．２．２．２．引用　155
７．２．２．３．立ち遅れ反応　159
７．２．３．「始まり」をマークすること　163
７．３．小括　164

第８章　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

８．１．これまでのまとめ　　165

８．１．１．順序規則　　165

８．１．２．使われる規則　　166

８．２．今後の課題　　167

参考文献　　170

謝辞　　188

巻末資料　トランスクリプトの記号一覧　　190

第１章　はじめに

本研究の目的は、日本語の会話において発話の冒頭に用いられる「えっ」「あっ」「うん」「で」「あー」「ほら」といった言語要素（発話冒頭要素）が複数使用される際に、どのような順序でそれらが配置されるのかを明らかにすることである。

我々は発話をやり取りすることによって会話を成立させている。会話が人と人とを結ぶ社会的な活動である以上、他者と共有された何らかの規則が発話の成立に不可欠であろう。会話でやり取りされる発話はどのような組み立てになっているのか。つまり、発話を作り上げていく時に、どのような語彙を使用し、それらをどのように並べているのか。この点について、発話の冒頭の組み立て、特に言語要素の順序に注目したのが本研究である。

このような発話の組み立ては発話者が自由に行なっているわけではない。我々は誰かと話しているとき、自分の言いたいことを相手に伝え、相手は相手の言いたいことをこちらに伝えるといった具合に、キャッチボールのようなものを想像するかもしれない。しかし、この比喩では、次のような二つの理由から、会話でなされている発話のやり取りをうまく捉え切れていない。まず、キャッチボールの比喩では、ボールで表される「自分の言いたいこと」が初めから完成された形としてあり、それを相手に投げるという想定がなされている。しかし、発話は一音一音組み立てていく必要があり、完成するまでに時間がかかる。その間に「自分の言いたいこと」が変わることもありうるだろう。発話の完成に時間がかかることは同時に、相手にも一音一音時間をかけて届くことを意味する。キャッチボールのボールのように、完成されたものが一瞬で届くわけではない。次に、ある発話が完成するまでの間の一音一音は相手に聞かれている。そのことに発話者は考慮する必要がある。例えば、話している最中に相手の視線がこちらを向いていない場合は、話している途中であっても相手の注意を引かなければならなくなるかもしれない。また、相手の様子から今話している内容のうち相手の知らないことが含まれていると判断した場合、補足説明をする必要が生まれるかもしれない。このように、発話は相手が個別具体的な存在であることを考慮に入れて組み立てられる(Sacks & Schegloff, 1979)。キャッチボールの比喩では、投げたボールを途中から別のコースに変更することや、途中から別の球に変えるといったことはできないため、ここでも会話でなされている活動をうまく捉え切れていない。

このように、会話ではその瞬間その瞬間の状況に対応した形で発話の組み立てがなされ

ることになる。会話の研究を行なう際には、このような会話の性質を考慮しなければならない。本研究では、発話の冒頭を分析するにあたって、会話分析の手法を採用している。これは上に挙げたような会話の性質を会話分析では自覚的に分析の中に取り入れているためである。

会話分析の分野において、発話冒頭の研究は近年徐々に増えてきており、特に2000年以降数多くの研究がなされるようになった(Heritage 1984,1998,2002、Heritage & Sorjonen 1994、串田 2005a、Mori 2006、Sidnell 2007、Hayashi 2009、Schegloff 2009、Schegloff & Lerner 2009、平本 2011、串田・林 印刷中等)。これらの研究によって、発話の冒頭が会話においてどのような重要な働きを担っているのかが明らかになってきたと言える。しかし、これらの研究は、ほぼ全てが個別的な言語要素を対象としてきており、複数の言語要素が使用される際の秩序や規則などはまだほとんど明らかになっていない。実際の言語使用においては、発話冒頭要素が複数用いられることが珍しくなく、個別的な要素を見ているだけでは言語使用をトータルに扱うことが難しくなるだろう。そのため、要素を単独で取り出して見るのではなく、実際に複数使用されているままの状態で観察することが重要となる。そうすることで、実際の言語使用により接近可能になるものと思われる。本研究は、複数の発話冒頭要素が使用される際の順序について分析するものであり、これまでの発話冒頭の研究が光を当ててこなかった領域である発話冒頭要素の複数使用に足を踏み入れるものである。

本稿は次のように構成されている。

次の第２章では、発話冒頭を分析するとはどのようなことなのかについて見ていく。まず、上に書いてきたような会話の性質について詳しく論じ、そのような性質を重視して、分析に取り入れている会話分析の手法について紹介する。会話分析の歴史的変遷について概観した後、参与者の指向、行為と組織連鎖、会話における時間の経過、そして投射というように、会話分析の重要な概念や視点について説明していく。その後、会話分析では発話の冒頭をどのように扱ってきたのか、そして、どのようなことが明らかになってきたのかについて述べる。また、会話分析の研究だけでなく、発話冒頭要素に関わってくる他の分野の先行研究も併せて紹介する。具体的には、「談話標識」、「感動詞」、「フィラー」、「あいづちと応答詞」の四つであり、これらの研究と本研究がどのように異なるのかについても述べる。

第３章では、分析にあたってどのような手順で行なっていくのかについて説明する。本

研究では、データとしてコーパスを利用するため、まず、会話分析の研究にコーパスを利用することについて論じる。その後、本研究で扱うデータの詳細を示す。そして、手順の説明をしていく中で必要な概念である「発話」や「ＴＣＵ(turn-constructional unit; Sack 他 1974)」なども併せて紹介する。

第４章では、発話冒頭要素が複数使用される時、それらが配置される順序があることを述べる。その順序を説明するのに、冒頭要素を「えっ」などのように前の発話に反応して、自身の認識の変化や判断を示す「遡及指向要素」と、「なんか」などのように、それ自体では発話を構成せず、直後に自分の発話が続くことを予期させる「後続指向要素」に分類することが有効であることを主張する。また、発話の冒頭で、後続指向要素は複数使用できるが、遡及指向要素は基本的に一つまでであることも併せて見る。

第５章では、遡及指向要素について詳しく述べる。先ほど、遡及指向要素は基本的に発話の冒頭で一つまでしか用いられないと述べたが、状況によっては複数使用されることもある。それがどのような状況なのか、そして、複数使用される際の順序はどのようになっているのかについて検討していく。

第６章は後続指向要素について記す。後続指向要素は発話の冒頭で複数使用可能であるが、その際の順序を説明するのに数多くある後続指向要素をどのように分類すればよいかについて見る。

以上の第４章から第６章までで、発話冒頭要素が複数使用される際の順序について大まかな展望図を示すことになる。続く第７章では、これまでの章で見てきた順序規則が会話参与者を外部から縛っている規則というよりは、むしろ会話参与者によって使用される規則であることを見ていく。

最後の第８章では、ここまでの章で示してきた内容についてまとめ、残された課題について触れておく。

以上が本稿の見取り図である。最後に、各章について筆者がこれまで書いてきた論文との関連について示しておきたい。

第４章は、伊藤 (2011a,b)の内容を大幅に修正し補筆したものである。第５章の一部（冒頭から 5.3.まで）は、伊藤(2012b)を大幅に修正したものである。特に、伊藤（2012b）の内容を再度検討し、扱っている対象(遡及指向要素の下位分類)の分類内容や、扱い方に大きな変更を加えている。第６章の 6.2.3.は伊藤(2012a)の一部を抜粋し、補筆したものである。第７章は伊藤(2013)を若干の修正および補筆したものである。以上が、これまでの

筆者の論文との関連である。

次章では、会話を分析すること、そして、発話の冒頭を分析することにどのような意味があるのかについて、先行研究を交えながら見ていく。

第２章　発話の冒頭を分析すること

本章では、本研究が分析の手法として用いている会話分析について説明する。そして、発話の冒頭に関して会話分析はどのようなことを明らかにしてきたのかを見る。また、関連する研究についても概観する。

まず、2.1.で会話の性質について述べる。その後、2.2.で、会話分析という手法の視点について詳しく見ていく。まず、会話分析の歴史的変遷を概観し、会話分析が重視している参与者の指向、行為と連鎖組織、会話における時間の経過について説明する。続く 2.3.では、本研究が焦点を当てている発話冒頭についてこれまでどのような研究がなされているのかを見る。2.4.では、会話分析以外で本研究に関連する先行研究を概観する。

２．１．会話の性質

本研究は会話を研究の対象としている。そのため、会話とはどのようなものであるのかについて、まず見ておく必要があるだろう。その際の足がかりとして、会話でのやりとりが「書き言葉」[1]とどのような点で異なるのかについて論じる。

会話が書き言葉と異なる点については、いくつか考えられる。一つの大きな違いとして、会話においては相手がその場に(あるいは電話の向こうに)いることが挙げられる。相手がいるため、発話の途中で相手が割り込んでくることや、相手の発話と重複してしまうことも考えられる。あるいは、相手にわかるような表現を用いるなど、受け手に適した言葉の使い方(recipient design; Sacks & Schegloff 1979)をする必要が生まれるだろう。もう一つの重要な違いとして考えられるのは時間の経過である。文章は読む段階において通常最初から最後まで既に完成しているが、会話のやり取りでは、一音一音時間の経過とともに展開していく。そのため、会話において時間の経過は見過ごすことができない性質であ

[1] なお、本稿では「書き言葉」を文章として書かれた言葉と想定している。例えば、小説や論説文、公文書、手紙などの文章で使用される言葉である。このように想定しているのは、このような言葉が本節のすぐ後に書かれている「相手がいること」と「時間が経過すること」という会話の性質と異なるものであるからである。

ると言える。上に挙げた、「相手がいること」と「時間が経過すること」という会話の性質[2]のため、発話一つとっても、発話者がその発話を最初から最後まで自由に一人で計画通り言える保障はなく、発話を組み立てていくこと自体が他の参与者の振る舞いに左右されることとなる。それゆえ、発話はそれ自体、他の参与者との相互行為の結果なのである(Goodwin 1979, Lerner 1991, Schegloff 1996, 林 2005 など)。

これまでの伝統的な言語学の研究の大半は書き言葉を対象としており、上に挙げた会話の性質は考慮する必要がなかった。それゆえ、串田・定延・伝(2005)が指摘するように「これまでの多くの言語学的研究では、「話し手は言いよどんだりつっかえたりしない」「文頭から文中、そして文末へと、文を話していくための時間は、話し手に常に保証されている」「文頭から文中、文末へと、文を話していく際の時間の経過は無視できる」といった前提がしばしば暗黙裡に設定されて」(p.ⅱ)いた。しかし、会話の研究を行う際には、これらの前提は一旦取り払う必要がある。

以上のような会話の性質に明確な自覚を持っているのが、Sacks により創始され、その後 Schegloff らによって発展した会話分析である。本研究は、発話の冒頭で用いられる言語要素の順序を研究対象としており、発話冒頭要素の順序を見ていく中で、時間の経過は非常に重要な視点であると考えている。また、相互行為がどのように発話冒頭要素の順序に影響を与えるのか、そして、その順序規則が相互行為においてどのように利用されるのかについて明らかにすることを目的としている。そのため、上で述べてきたような会話の性質を重視している会話分析によるアプローチを本研究では採用した。次節では、会話分析について詳しく説明する。

２．２．会話分析研究の概要

本研究は会話分析の手法を用いて分析を進めていくことになるため、本節では会話分析について説明しておく。以下では、まず、会話分析がどのような文脈の中で創始され、その後どのような変遷を辿ったのかについて簡単に述べる。次に、会話分析のアプローチに

[2] この、「相手がいること」と「時間が経過すること」は、会話の進行において幅広く参与者に指向される「間主観性」(intersubjectivity)と「進行性」(progressivity)の保持に関連すると思われる。説明が不十分であることを承知でそれぞれを一言で言うなら、「間主観性」とは、相手の見ているものや考えていることが、自分にもわかることであり、「進行性」とは、会話が前へと進んでいることである。この「間主観性」と「進行性」の関係については、Heritage(2007)などを参照されたい。

ついて紹介する。一言で言うなら、会話分析は「人が会話をどのように成し遂げているのか」を明らかにすることを目的としている。この目的のために、会話分析ではどのようなことを重視しているのかについて説明する。具体的には、参与者の指向、行為とその連なり、時間の経過についてである。

２．２．１．会話分析の歴史的変遷

本節では、会話分析の歴史的変遷について簡単に触れておく。

歩道を歩いている時に、向こうからも人が歩いて来たとしよう。このような事態に遭遇しても多くの場合、我々は向こうから歩いて来た人にぶつからずに、すれ違うことが「当たり前」のようにできる。これはおそらく、「一方が先に進行方向から少しずれた場合、もう一方がそれとは反対の方向に進行方向を少しずらす」というような双方による秩序立った振る舞いによって達成されていると思われる。この秩序だった振る舞いは当事者たちには「当たり前」であるがゆえに、それを行なう際[3]にはトラブルでもない限り、その「当たり前」の行動は当事者たちの意識には上ってこないだろう。つまり、この「当たり前」が達成できるのは「気をつけられているが、気づかれていない」(seen but unnoticed; Garfinkel 1967)振る舞いによってなのである。このような、我々が「当たり前」のようにできることが、どのような秩序だった方法で成り立っているのか解明することを目的とするのが、Garfinkel が 1950 年代から 1960 年代にかけて行なった研究で創始した「エスノメソドロジー(ethnomethodology)」である。

同時期に Goffman は、自分が一人しかその場にいないと思っている時の振る舞いと他者がその場にいるときの振る舞いが異なることに注目し、他者がいることで個人にどのような拘束力が働くのかを探求していた。Goffman は、このような複数の人がお互いをモニターする可能性のある環境を指して「社会的状況」と呼び、その中での「相互行為秩序」(interaction order)が人々の振る舞いの中にどのように立ち現れてくるのかの解明を目指した(Goffman 1964)。

このような Goffman の相互行為秩序の視点を深めつつ、エスノメソドロジーの影響下に

[3] 具体的には、進行方向と「ずれた」ことを相手にわかるように視線や頭、あるいは体全体の動きによって示すこと、相手のそれまでの進行方向と「ずれ」があるかどうかモニターすることが予想される。

生まれたのが、Sacks の創始した会話分析である。会話分析が目指しているのは、我々が「当たり前」に出来ている「会話」は、参与者同士のどのような相互行為的な振る舞いによって達成・維持されているのかを明らかにすることであると言えよう。Sacks の構想した会話分析は研究の手法でありながら、一方で、Schegloff や Jefferson との数々の共同研究(Sacks & Schegloff 1979; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974; Schegloff, Jefferson & Sacks 1977 など)を通して、相互行為の連鎖分析として一つの研究分野を確立した(串田 2010)。Sacks の死後、会話分析を牽引してきた Schegloff は、会話分析が扱っている主題について近年になって以下の①～⑥を挙げている(Schegloff 2007)。それぞれの主題の下に、その主題で解明しようとしていることを簡単に記す。

①ターンの交替(turn-taking)

発話のターンはどのように交替していくのか、その交替のメカニズムが個々の発話にどのような影響を与えているのか等。

②行為の構成(action-formation)

ある行為がその行為として相手にわかるのは(例えば「依頼」をしたとして、それが相手に「依頼」だとわかるのは)、どのようなリソース[4]によってなのか等。

③連鎖組織(sequence organization)

複数のターンが結束性を持って(coherent)連なるとき、それはどのようにして連なるのか、連なったターン同士の関係はどのようなものか等。

④トラブル(trouble)

発話の産出・聞き取り・理解にトラブルが生じた際に、相互行為の中でそのトラブルをいかに取り扱うか等。

⑤言葉の選択(word selection)

発話の中で、何かを表すためにある言葉が選択されているとき、その選択はどのように行われるのか等。

[4] ここで言う「リソース」とは、「相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な、言語的素材(語彙、統語構造、韻律)、発話に直接伴う非言語的素材(発話のテンポ、音の大きさ、音の長さ、音調、声質、間隙、吸気、呼気、発話の位置、など)、およびその他の身体的素材(視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作、など)への総称」(串田 2006; pp.53-54)のことである。

⑥全域的構造の組織(overall structural organization)

局所的な相互行為が全体としてどのように構造化され、その全体的な構造が各発話や各連鎖とどう関わっているのか等。

上の①～⑥のような基礎的な研究を踏まえ、1980 年代から現在にかけて、相互行為の連鎖分析を応用・拡大した研究がなされるようになった。串田(2010)はこのような発展的な研究のうち、次のような三つの主要な流れについて整理している。

Ａ：制度的場面の会話分析

Ｂ：マルチモーダルな相互行為分析

Ｃ：相互行為と文法

Ａの「制度的場面の会話分析」は、特定の制度的な場面での相互行為が日常の会話とどのように異なるのかに焦点が当てられた研究である。特定の制度的な場面とは、例えば教室(Mehan 1979)やニュースのインタビュー(Clayman & Heritage 2002)、医療場面(Heritage & Maynard (eds.) 1992, 西阪・高木・川島 2008,串田 2011)などであり、制度的場面での相互行為をテーマにした論文集(Drew & Heritage (eds.) 1992)もある。もともと会話分析は社会学の一分野であるので、一般の社会学者が関心を持つ制度的場面が相互行為の分析によってどのように明らかになるのかという方向への発展は至極当然とも言える。

Ｂの「マルチモーダルな相互行為分析」では、分析に言葉だけではなく、視線や身振りなどの身体的な側面や、道具の使用、人や物の空間的配置なども含めているもので、心理学や認知科学、工学的な関心と組み合わさり、学際的な研究領域へと発展している。例えば Goodwin(1981)、西阪(2008b)などがあり、日本では 2011 年に学術雑誌『社会言語科学』(第 14 巻第１号)で「相互作用のマルチモーダル分析」という特集が組まれるほど関心が高い。

Ｃの「相互行為と文法」では、相互行為の連鎖分析の観点から実際の会話を観察することによって、従来の言語学の文法研究に新たな視点を提供している。代表的な研究として、Ochs, Schegloff & Thompson eds.(1996)や Ford, Fox & Thompson eds.(2002)などが挙げられる。この領域での日本語の研究は Tanaka(1999)、Hayashi(2003)などをはじめ、マルチモーダル分析と同様『社会言語科学』(2008 年：第 10 巻第２号)で「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」という特集が組まれるなど、非常に活発である。本

研究は順序という観点から言語要素に着目しており、その意味でこの「相互行為と文法」研究の系に連なるものである。

以上、簡単にではあるが会話分析がどのように生まれ、どのような研究をし、どのように発展してきたかという歴史的変遷について述べた。次節からは、具体的に会話分析がどのような観点でデータを見るものなのかについて説明する。

２．２．２．参与者の指向

会話分析は「人が会話をどのように成し遂げているのか」を明らかにすることを目的としている。ここで「人」を主語に置いたのは、会話分析の重要な特徴として、実際に会話をしている人々がどのようなことに「指向」(orient)しているのかを分析に組み込んでいる点が挙げられるからである。まずこの点について述べる。

データを分析する際に、参与者の特定の属性(性別や年齢、出身など)や会話がなされている場面(病院、教室、電話など)、状況(録音されている、実験に協力している、テレビに出演しているなど)といった社会的な文脈はどのように記述に組み込めばいいのであろうか。このことに関して Goffman(1964)は、社会的文脈の組み合わせを前提にして状況を捉える研究手法を痛烈に批判している。それは、参与者同士の相互行為の「外部」にあるものを分析に含めてしまう危険性があるからである。本研究に関して言えば、「参与者が男で学生であること」「参与者同士の関係が家族(友達、先輩後輩)であること」「参与者がアメリカに住んでいること」「会話が録音されていること」などといった社会的文脈は、データにおいて現象を説明するのにいつでも用いることができる性質ではないということである。また、ある人物の属性を記そうと思ったときに、原理的には無限の記述が可能であることも問題である。例えば、筆者の本稿執筆時の属性を記そうと思えば「男」「次男」「一人暮らし」「未婚」「大阪府在住」「島根県出身」「日本国民」「日本語母語話者」「海外滞在経験者」「テレビ所有者」などといった、際限の無い記述が可能である。

これらの問題については Schegloff(1987b,1988,1992)が、参与者が何に指向しているか(orient)を分析するという指針を立てている。社会的文脈は上にも述べたように原理的に無限に記述できるものであるが、通常、会話において一方の参与者が今どんな社会的文脈を参照しているのかは、もう一方の参与者に容易にわかる。例えば、講演会で司会者が「資

料をお持ちでない方いらっしゃいますか」と聴衆に話すとき、まず、司会者は聞き手の「資料を持っている人」と「持っていない人」という属性に指向していることがわかる。また、このような質問を聴衆に向けて話していることから、あるいは丁寧な言葉によって公式の発言として発話を組み立てていることから、自身の「司会者」という属性に指向していることもわかる。聞き手は、その質問に対して「手を挙げる」「手を挙げない」という行動を取ることによって「聴衆」という属性に指向している。このような参与者の振る舞いは、「講演会」という場面ないし状況に指向しているものであろう。このようなことは、本人たちにも、第三者にも、容易に観察可能であろう。このことから、参与者は自身の振る舞いの中に、今自分がどんな社会的文脈を参照しているのか、つまり何に指向しているのかを他の参与者にも観察可能な形で示しているはずである。よって、ある社会的文脈を研究において記述に含もうとするならば、参与者の振る舞いがその社会的文脈に指向しているかどうかが証拠となる。一方で、参与者の振る舞いにその指向が見出せないのなら、記述に含もうとしていた「社会的文脈」は、研究者が相互行為の「外部」から持ち込んだ文脈である可能性がある。「外部」から持ち込んだ文脈は、相互行為の参与者にとっては意味を持たない可能性のある文脈であり、無限に記述できる文脈の一つに過ぎないのである。先ほどの講演会の例で言うならば、「資料をお持ちでない方いらっしゃいますか」という司会者の質問に手を挙げたからといって、「遅れてきたから」ぎりぎりになって入場してしまい資料を取り忘れたため手を挙げているというような「遅れた人」という記述は、司会者にも聴衆にも振る舞いに現れていないため分析には含めることはしないということである。確かに、講演の直前に司会者がそのような質問をするのは、取り忘れた人の救済措置であり、その「取り忘れ」の理由が「遅れてきたから」というのは十分にありうることである。そして、そのことは、アンケートによる統計的なデータや個別インタビューによって実証されるかもしれない。しかし、それはその場にいる人達の相互行為の「外部」にある文脈であるだろう。一方で、司会者が慌てて入場してきた聴衆を見て、その人物が座るのを待ち、聴衆全体に向けて「資料をお持ちでない方いらっしゃいますか」と言った場合、「遅れてきた人」のためにももう一度全体に確認しているという記述は十分可能であるだろう。その記述は、司会者の遅れてきた人への視線と、座るまで待つという行動と、質問をそれらの直後にしているという配置位置とによって証拠立てられるのである。

２．２．３．行為と連鎖組織

会話を相互行為として捉え、参与者の振る舞いを分析していくことになるため、会話分析では参与者の発話がどのような行為を構成しているかを分析において非常に重視している。ここで言う行為とは他の参与者への働きかけのことで、[質問]や[回答]、[誘い]、[依頼]、[承諾]、[拒否]、[非難]、[不満]、[褒め]といった日常の言葉として単語になっているものもあれば、[相手の質問に答える前に確認しておくべきことを聞く](Schegloff 2007)[5]、[悩みを切り出すための準備をする](戸江 2008)[6]といった日常用語として名前が与えられていないようなものも含む。会話分析では行為を参与者の指向に基づいて、どのようなコンテクストから当該の行為はその行為だとわかるのか、参与者がどのように当該の行為を構成しているのか、ある行為を選択することで他の参与者にどのような影響を与えるのかといったことを研究対象としている。

参与者自身の指向から行為を捉えるために、「なぜ今それをするのか」(why that now)という問いが重要となる(Schegloff and Sacks, 1973: p.299)。ある発話に対して「なぜ今それをするのか」という問いに答えるためには、「今」を明確にする必要があるだろう。「なぜ今それをするのか」の「今」とは、どのような発話の連なりの中に当該の発話があるのかということである。この発話の連なりのことを、「発話の連鎖」と言う(以下では「発話の連鎖」のことを単に「連鎖」と呼ぶ)。例えば、「８週間」という発話があったとする。この発話だけ分析しようと思っても、この発話が何をしているのか分析者にはわからない。ところが、次の事例における連鎖の中では「８週間」が何をしているのかが明確にわかるだろう[7]。

---

[5] Schegloff(2007)は相手からの質問や誘いなどで反応が待たれているときに、その反応を行うために必要なことを聞くという行為について説明している。例えば、「ご飯食べに行かない？」に対して「大体何時くらい？」と質問するとき、その「大体何時くらい？」というのは、先の誘いである「ご飯食べに行かない？」に答えるために必要なことを聞いている。相手からの質問や勧誘を第一部分とすると、待たれている反応は第二部分となる。「大体何時くらい？」というのは、その第二部分を行うための質問であり、第二部分の前に配置されるので、Schegloff は pre-second と呼んでいる。これは発話の連なり上の位置に注目した呼び名であるが、行為の記述と言っても差し支えないだろう。

[6] 戸江(2008)は、子どもを持つ母親同士の会話で、「夜何時ぐらいに寝る？」「どうなったオシッコ.」「起きるのは何時ぐらい？」のような質問に注目し、それが相手の回答の次のターンで自分の子どもについての悩みを語る場を生み出していることを明らかにした。戸江はこのような質問を「糸口質問」と呼んでいる。

[7] トランスクリプトの記号の意味は本稿の巻末資料として示してある。

(2-1)[japn4549　02:35-02:37]

１行目の「サマー」とはＱが受講している夏期講習のことと思われる。

　01Ｐ：何週間なのサマー.＝

→02Ｑ：＝８週間.

この事例では、「８週間.」というＱの発話は、Ｐの１行目の「何週間なのサマー.」という質問に「答える」という行為になっている。これは、質問の次のターンという位置が「なぜ今それをするのか」の「今」であるからである。では、なぜ２行目が「答える」ことをしていると我々にわかるのであろうか。それは、１行目の「何週間なの」という質問が、答え方を指定しているからである。つまり、１行目の質問は「Ｘ週間」という形式のＸを埋めるよう相手に差し出しており、２行目はまさにその差し出された形式に沿う形に発話をデザインしている。それゆえ、１行目の質問「に対して」なされた発話と理解されるだろう。このような発話のデザイン上の工夫こそが、先の「なぜ今それをするのか」の「それ」にあたるものである。つまり、２行目の分析をするときに「なぜ今それをするのか」を問うことは、「なぜ、質問の次という位置で、質問が求めている形式に沿う形で発話を差し出すことをするのか」ということであり、その答えは「質問に答えているから」となるだろう。

　以上のように、「なぜ今それをするのか」というのは、発話の連鎖上の「位置」と、発話がどのように「構成」されているのかを問うことである。このように、行為の分析にあたっては、当該の発話の「位置と構成」(position and composition: Schegloff 2007, p.20)の解明が重要となるのである。

　位置を特定するときには連鎖について考える必要があるが、連鎖の中で原理的に最小のものとしてSchegloff & Sacks(1973)は隣接ペア(adjacency pair)を挙げ、次のように特徴づけている(訳は串田(2006b：p.64)による)。

(a)「第一ペア部分(First Pair Part)」と「第二ペア部分(Second Pair Part)」という「二つの成分」からなる。

(b)それぞれの成分は、異なる話者によって産出される。

(c)第一ペア部分は、第二ペア部分が次のターンにおいて産出されることを要請する。

(d)第一ペア部分はそれに適合した第二ペア部分が産出されることを要請する。

この隣接ペアの代表的なものとして、[質問-応答][依頼-承諾／拒否][呼びかけ-応答][申し出-受諾／拒否]などがある。この隣接ペアをベースとして、連鎖が拡大することもある(Schegloff 2007)。例えば、「今日夜時間ある？」という質問は、隣接ペアの第一ペア部分であり、次に「応答」を要求する。さらに、この質問がなされた段階で、聞き手には後に誘いがなされることが予測可能である。そのため、「今日夜時間ある？」という質問は、[誘い-受け入れ／拒否]という隣接ペアの前置きとしてなされる隣接ペアの一部であると言える。このような、ベースとなる隣接ペアを前もって聞き手に予測可能にさせる隣接ペアのことを「前方拡張」(pre-expansion)という。あるいは、ベースとなる隣接ペアの第一ペア部分と第二ペア部分の間に入る「挿入拡張」(insert expansion)もある。例えば、「今日吉田さんに会った？」という質問に対して「誰？」というような修復の他者開始(Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)をすれば、「吉田さん。」と答えが返ってくることになり、「会ったよ。」というような答えをすることができる。このとき、「今日吉田さんに会った？」と「会ったよ。」という隣接ペアの間に、「誰？」と「吉田さん。」という隣接ペアが挿入される形となる。また、ベースとなる隣接ペアの後に配置されうるものが「後方拡張」(post-expansion)である。後方拡張は、ベースの隣接ペアの後に「連鎖を閉じる第三部分」(sequence-closing third：ＳＣＴ)が配置されるものと、別の隣接ペアが配置されるものがある。前者は、「夏休みいつまで？」「９月末。」という[質問-応答]隣接ペアの後に「へー」が配置される場合、後者は「えっ？」「だから９月末。」という隣接ペアが配置される場合をそれぞれ思い浮かべるとわかりやすいだろう。

以上、会話分析の行為に対する基本的なスタンスと、行為と行為の連なりについての基礎的な知見を紹介した。

２．２．４．会話における時間の経過

既に記したように、会話における時間の経過は会話の進行にとって非常に重要である。そのため、会話分析においては「相互行為の時間的な流れに焦点が置かれてきた」(西阪 2010a: p.47) と言える。言語学において、ソシュール (1972) は「要素は順次に現れ、連鎖をつく」り、その「音連鎖は、その第一の特質として線的である」(小林英夫訳による,

前者はp.101、後者はp.146)と述べており、その線的特質[8]が言葉にとって非常に重要な性質であることが指摘されている。しかし、伝統的な言語学的研究は、語順に関する研究を除けば、この線的特質に特段の注意を払った分析・記述を行なっていないように思われる。語順に関しては、日本語の文の構造がしばしば以下のようになることが指摘されている(例えば、仁田 1997、庵 2001 等[9])。

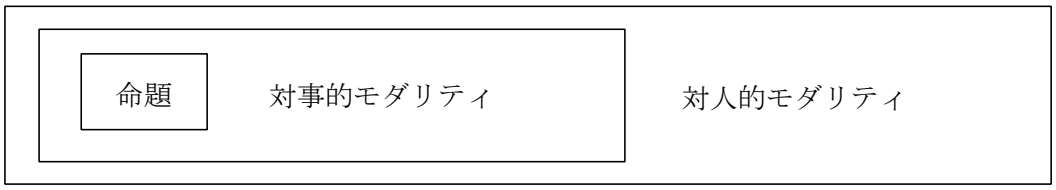

図 2-1：日本語の文の構造(庵 2001 より引用)

このような構造は、文において各要素がどのような順序で並ぶのかをも示しており、この図から文の始まりが「対人的モダリティ」→「対事的モダリティ」→「命題」という順序になることが予想される。ただし、これはあくまでも「文」を対象に行なった研究であり、小説などの書かれたものや筆者の内省から得られた知見である。2.1.でも示したように、書かれたものと話された言葉は様々な点で重大な違いがある。そのため、会話における発話の冒頭の順序を見るためには、実際の会話データを用いて、「発話」を対象にした研究を行う必要があるだろう。

以下、本節では、会話分析が時間の経過をどのように記述に組み込んでいるのかについて示す。具体的には、単位と単位（行為と行為、ターンとターン等）の並び方、そして「投射」という概念について説明することで、会話分析の「時間の経過」に対する考え方を説明していく。

[8] 一般的に「線条性」と呼ばれる性質である。なお、ここでのソシュールの引用部の「連鎖」とは、会話分析の連鎖組織とは異なり、概ね単語を想定しているものと思われる。つまり、時間の流れの中で「さ」と「い」と「ふ」という音が線的に流れてきたとき、我々は「財布」という一塊の音として意味を認識する。その一塊になった音を連鎖と呼んでいるものと思われる。

[9] 仁田(1997)は対事的モダリティを「事態めあてのモダリティ」、対人的モダリティを「発話・伝達のモダリティ」としている。また、文として成立する際の命題部分の文法カテゴリーの順序も踏まえ、日本語の構造は［［［［［［ヴォイス］アスペクト］みとめ方］テンス］事態めあてのモダリティ］発話・伝達のモダリティ／丁寧さ］となると述べている（p.142)。また、様々な従属節を対象に研究を行った南（1974)も、この図と両立可能な形で従属節の分類を行なっている。

２．２．４．１．並び方

一つの組み込み方の方向性として、二つ以上の単位が並ぶ時の「並び方」を考えるという視点が会話分析にはある。例えば、2.2.3.で示した隣接ペアなどの連鎖組織は、行為と行為が並ぶ際の並び方に関わるものである。隣接ペアでは、第一の行為が第二の行為を要求しているという関係にある。それゆえ、第一の行為がなされたにも関わらず第二の行為がなされなかった場合、第二の行為の不在として参与者に認識可能になるのである。会話分析において最も重要な知見の一つとして挙げられる「ターンテイキングシステム」(Sacks, Schegloff Jefferson 1974)も、ターンとターンの並び方に関するものであると言える。Sacks 達が定式化したターンテイキングシステムは、次の二つの構成要素と一つの規則群からなる。

構成要素１　ターンの構成要素

ターンを構成するのには語・句・節・文など様々な単位が用いられる。この単位は、現在どの単位が用いられているのか、どこで完了するのかを進行中に概ね予測(project)させる。また、話し手はターンを取得した場合、少なくとも一つの単位を発する権限を持つ。用いられた単位の完了可能点(possible completion)は、「ターンが替わってもよい場所」(transition-relevance place)となる。

構成要素２　ターンの配分要素

ターンを配分する技法は、(a)現在の話し手が次の話し手を選択する方法と、(b)次の話し手になろうとする者が自己選択する方法の二つに分かれる。

規則群

(1)ターンの最初の「ターンが替わってもよい場所」において

(a)ターンが「現在の話し手が次話者を選択する」技法を含んで組み立てられているならば、選ばれた者(party)は次のターンを取る権利・義務を持ち、そこでターンが移動する。

(b)「現在の話し手が次話者を選択する」技法が用いられていない場合、次話者になろうとする者による自己選択が行われうる。その際、最初に話し始めた者が次話者にな

る権利を獲得し、そこでターンが移動する。

(c)「現在の話し手が次話者を選択する」技法が用いられず、他の者も自己選択しない場合、現在の話し手が続けうる。

(2)上の(1)の(c)に則り、現在の話し手が話し続けた場合、次の「ターンが替わってもよい場所」で再び(1)の(a)～(c)が適用される。最終的にターンが移動するまで同じことがくり返される。

このシステムは、ターンとターンがどのように並んでいるのかを明らかにしており、時間の経過を記述に組み込んだ好例であると言える。例えば、ある発話の完了可能点までに次話者選択のための技法が用いられているのなら(1)の(a)が採用されることになるが、これは発話の開始から完了可能点までの時間の経過を強く意識した記述となっている。あるいは、(c)で現在の話者がターンを継続した場合のように、(b)の自己選択がなされていない「後」という時間の経過や、次の「ターンが替わってもよい場所」までのこれから経過する時間をシステムに取り入れていると言える。

本研究が焦点を当てている冒頭要素の順序も、冒頭要素がどのように並んでいるのかを明らかにすることを目的としているという点で、この「並び方」に関わるものであると言える。

２．２．４．２．投射

上のターンテイキングシステムにも含まれている性質であるが、会話分析の概念の中で最も時間の経過を重視しているものは「投射可能性」(projectability)であろう。投射可能性とは「時間の進行の中で言葉が用いられているとき、ある時点までに発せられた言葉は、その発話の統語的形状(すぐ次の瞬間にどんなタイプの統語要素が発話されそうか、その発話はどんな統語構造をとりそうか、など)、その発話の種類(その発話はどんな行為を行うものになりそうか)、その発話の完了可能点(その発話はいつ完了しそうか)、を予示・予告する性質」(串田 2006b：p.53)のことで、このような予示・予告を「投射」という。上のターンテイキングシステムでは構成要素１に発話の持つ投射についての記述があるが、この投射という性質があるために、発話と発話のオーバーラップやターン間の間隙を最小

化してターンテイキングを行うことができる。投射は、発話が一音一音進行していく最中も時間が進行していることを意識した概念であると言える[10]。次の事例を見てみよう。これは、A(息子)とB(母親)の会話で、直前までAがBに録音する経緯の説明をしていた。

(2-2)[japn1612　01:18-01:25]

01B：　[ｈ－]ｎど：う？＝あなた,

02　　テストはどうだっ[た？

03A：　　[tch－.hテストね：[：,ｈ：：＝

04B：　　[う：ん.

05A：＝＜わかんな：い.＞

06B：なに言って(h)ん(h)の(h)[(わ(h)か(h)ら－)]

ここではBの「ど：う？あなた,テストはどうだった？」に対して、Aが「テストね：：,ｈ：：＜わかんな：い.＞」と答えている部分を投射の観点から注目する。01の「ど：う？」と聞いただけでは何が「どう」なのかAにはわからないが、少なくとも「Aの何らかの状況を聞く質問」が次になされること、その質問がされた時点でBの発話は完了可能点に達することが投射される。その後「ど：う？あなた,テストは」まで聞けば、Bの発話が「Aのテストの出来に関する質問」を投射していることがわかるだろう。更に「ど：う？あなた,テストはどうだった？」まで聞けば、実際に投射された質問がなされたことがAにはわかるだろう。実際そこでターンは交替している。それに対して、Aの「テストね：:」という開始の仕方は、Bの質問に含まれる「テスト」という言葉を使うことで、「答え始めている」ことが示され、それゆえ直後に[応答]の行為が投射される。その後、05では「＜わかんな：い.＞」と[応答]とBが観察可能なものが続き、そこでターンが交替する。

投射に関しては、そのメカニズムに言語の文法構造が大きな役割を果たしている(林

[10] 言語学の分野においても、非常に少ないながら、この投射に関わるような研究がなされている。例えば、寺村(1987)は「その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと薦める人であった。」という夏目漱石の『こころ』の一文を用い、日本語母語話者に「その先生は」、「その先生は私に」、「その先生は私に国へ」と文節毎に順次提示し、その先を文節毎に予測させるという実験を行なった。その結果、提示の段階が進めば進むほど、先の予測が正確になっていくことが示されている。一音一音時間とともに展開していくことによって、その先が予測可能になるという性質に目を向けているという点で、寺村の知見は投射に密接に関わる。一方、寺村はこの「予測可能」であることを、聞き手の予測能力として捉えているが、会話分析の「投射」は発話の構造が持つ性質である。それゆえ、構造としては予測可能であっても、会話参与者がその構造を投射のリソースにしていない可能性も考慮に入れられることとなる。

2008a)。日本語はＳＯＶ型の言語であり、行為にとって中心的な役割を果たす動詞や、それに付随する終助詞が発話の末尾付近に置かれる。そのため、ＳＶＯ型の英語などと比べて投射が遅れるという、日本語の「遅れた投射可能性」(delayed projectability; Tanaka 1999)が指摘されている。例えば、英語では発話の開始で'Did you'とまで聞けば、それが「相手のことを聞く質問」という行為を行っていることが聞き手にわかるが、日本語では「今日ケイコに会っ」まで聞いてもそれが「(今日ケイコに会っ)た」という報告なのか、「(今日ケイコに会っ)た？」という質問なのかわからない。もちろん、投射のためのリソースは文法構造だけでなく音調や連鎖組織、身体動作なども関わってくるため、日本語であっても発話末付近まで全く予測できないというわけではない。Tanaka(1999)の指摘する「遅れた投射可能性」は、文法構造面において発話の前半で投射のための資源が乏しいことを指摘するものである。

この「遅れた投射可能性」への手立てとしてどのような手段が取られているかに関する研究もある。例えば、林(2008a)は後方照応の「あれ」に注目している。例えば、「最近あれなんですよ」という発話の「あれ」は、「あれ」の指示対象が後続発話で特定されることを予告するだけでなく、「最近あれなんですよ」という発話全体の形状によって後続発話が「説明」であることを投射する。つまり、実質的な発話である後続発話がなされる前に、後続発話の行為が投射されることになるのである。本研究が対象としている冒頭要素もこの「遅れた投射可能性」への手立てとして見ることが可能である。この点に関しては次節で取り上げる。

ここまで、2.2 では会話分析の歴史的変遷と分析の視点について紹介してきた。簡単にまとめておこう。会話分析は、会話参与者がどのように会話を成り立たせているのかという疑問から、参与者の振る舞いに現れる指向に定位した分析を行なう。その中で、参与者の振る舞いがどのような行為を生み出し、行為が他者の行為とどのように連なっていくのかにしばしば焦点が当てられる。また、会話における発話のやり取りは、時間の経過との関わりを持って行なわれることとなる。会話分析では単位と単位(行為と行為、ターンとターン等)の並び方、あるいは投射という概念によって時間の経過を分析に組み込んできたと言える。

次節では、本稿が分析の対象としている発話冒頭に関して、会話分析の知見を紹介する。

２．３．発話冒頭の重要性

本節では、発話冒頭に関する先行研究を示す。まず、ターンがどのような構成になっているのかについて簡単に見ておく。その後、発話の冒頭が相互行為において重要な役割を担っていることを確認する。最後に、その発話の冒頭で用いられる要素に関する研究を紹介する。

２．３．１．ターンの構成

発話冒頭を詳しく見る前に、まず、ターンがどのような構成になっているのかを示しておく。

Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)によると、ターンには通常以下の三つの部分が含まれており、一般的に１から３の順番で産出されるとしている。

１：先行ターンとの関連を示す部分
２：現在のターンの中身に関わる部分
３：後続ターンとの関連を示す部分

彼らはこの三つが含まれている例として次の例を示している(訳は西阪(2010b)による。

(2-3)Sacks 他(1974)の事例(30)

Ｄ：Jude loves olives.
　　ジュードはオリーブが大好きなんだ.
Ｊ：That's not bad.
　　別にいいんじゃない.
→Ｄ：She eats them all the time. I understand they're fattening, huh?
　　彼女はいつもそれを食べているんだ.それって太っちゃうんじゃないかと思うんだけど,ね？

ここでは、矢印で示しているＤのターンの‘She’と‘them’という二つの代名詞が、先行する最初のＤのターンの‘Jude’と‘olives’との意味の関連を示している。また、矢印のターンの末尾の付加疑問‘huh?’が次話者を選択しているため、次のターンとの関連を示している。

上の例では矢印で示しているＤのターンは二つの発話から構成されているが、ターンはしばしば一つの発話によっても構成される。その際、基本的には発話の冒頭部分が「１：先行ターンとの関連を示す部分」となり、末尾が「３：後続ターンとの関連を示す部分」となる。

２．３．２．発話冒頭の働き

上に示したように、会話において発話の冒頭では、前の発話と後続する発話がどのような関係にあるのかを示すことができる（Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)。また、発話の冒頭は、前の話者が言ったことと現話者が言おうとしていることの関係を伝える連鎖マーカー(sequential marker)を配置できる主要な位置である(Heritage 2002)。この連鎖マーカーは後続発話が前の発話とどのように関係するかに関して、解釈のための枠組みを聞き手に与える(Goodwin 1996, Heritage 1998, 2002, Sidnell 2007 等)ため、聞き手にとっては発話をどのように理解するかが示されていることとなり、会話の進行にとって非常に重要である。

また、発話の冒頭は発話全体の統語的形状や行為について予告がなされる位置でもある(Schegloff 1987)。例として下の発話を見たい。この例では直前に、日本食を食べないのでアメリカに住んでいるのにも関わらず日本食の食材を扱うスーパーに行った事がないとＴが言っていた(なお、02 の「わ :::」は、その情報提供への反応である)。それに続けて、Ｔが日本茶だけはどうしても飲みたいという話をしている場面である。

(2-4)[japn6739　14:30-14:42]

01Ｔ：＝i - あの :: [:: ,

02Ｕ：　　[わ :: [: .

03Ｔ：　　[あたしが：でも日本茶はねどうしても ::

04　　ｎ－ｎ－の－飲みたい[から：,[.hh

05Ｕ：　　[あ：お [茶ね：.うん[うん.

06Ｔ：　　[う：んジャパン

07　　タウンのほら,

08　　(0.3)

09Ｕ：うん.

10Ｔ：あの[うｄ－

→11Ｕ：　　[あド＜(ガ)シ＞[とか：？

12Ｔ：　　[う::ん grocery store へ行くのよ.

ここでは、Ｔが「日本茶はどうしても飲みたいから、ジャパンタウンの」(03-07)と言うが、「ほら」(07)と述べた後 0.3 秒何も話さず「あのう」と言葉を探しており、「ジャパンタウンの」特定の店を見つけることができずにいることを示している。このように、発話者が言葉探しによって発話の進行を滞らせている時には、その発話の受け手であるＵは、仮にその探している言葉に心当たりがあるのであれば、正当に[11]助けのための手立てを行なうことができる(串田 1999)。また、Ｔは「ほら」(07) と、探している対象へのアクセスがＵにも可能であることを示しており、Ｕによる言葉探しの手助けが一層しやすい状況である。そのような状況で、11 行目ではＵが強めの音で「あ」と知識状態が変化したことを示している(Heritage,1984)。このことは、後続発話がその手助けに関わる行為であることを予示するだろう。また、後続発話は「Ｘ.」「Ｘ？」「Ｘとか？」といったいくつかの限られた統語的形状になることも予測可能であろう。このように、発話の冒頭は発話全体の統語的形状や行為について予告がなされる位置であると言える[12]。

これらのことをまとめると、発話の冒頭とは、前の発話との関連を示すことができる位置であり、かつ、直後の発話がどのようなものになっていくのかを予告できる位置でもあるのである。この二つの点から、発話の冒頭は会話の進行において非常に重要な位置であると言える。

[11] ここで「正当に」と言ったのは、仮に受け手が助けの手立てをしたとしても、「割り込んだ」と話し手や分析者に認識されないということである。

[12] ただし、2.2.4.2.の「投射」の節で説明したように、日本語はＳＯＶ言語であり、ＳＶＯ言語である英語などと比べて、投射の統語構造的な資源が発話の冒頭では少ない。

また、日本語の冒頭要素に関しては、前節で説明した「遅れた投射可能性」への手立てとして見ることも可能である。串田(2006b)は次のように述べている。

> 「あ」「え」「うん」「そう」「いや」「でも」「だから」など、ターン開始部に配置され、後続するターン構成単位に統語的に連結されていない成分は、ターン構成単位の統語的形状を投射する働きは弱い。しかし、これらはしばしば「どんな種類の行為がこのターンで行われようとしているか」「どんな要素が現れたらこのターンは完了に向けた動きを始めるか」等を投射しうる。(p.54)

ここで指摘されているのは、日本語の冒頭要素は統語的形状の投射のリソースとしては強力なものではないが、行為や発話の完了点を投射するリソースにはなりうるということである。冒頭要素のこのような性質は「遅れた投射可能性」への対策になりうると思われる。

２．３．３．冒頭要素の研究

発話冒頭に関しての会話分析の研究の蓄積はまだ少ないと言えるが、近年徐々に増えつつある。例えば、"oh"(Heritage 1984,1998,2002)、"and"(Heritage & Sorjonen 1994)、「いや」(串田 2005a、串田・林 印刷中)、「へー」(Mori 2006)、"look"(Sidnell 2007)、「え」(Hayashi 2009)、"and/but/so"(Schegloff 2009)、"well"(Schegloff & Lerner 2009)、「なんか」(平本 2011a)などが挙げられる。これらの研究が明らかにしていることは、発話の冒頭要素は話者の内面がそのまま言葉として出たというようなものではなく、相互行為上の仕事を担っているということである。しかし、これらの先行研究は、個別的な言語要素に注目しているものである。実際の会話においては、ある発話の冒頭に複数の言語要素が用いられることもある。例えば次の発話では「えっ」と「じゃあ」という二つの言語要素が用いられている。

(2-5)[japn1773　07:45-07:46]

Ｉが恋人と別れたばかりだという話をＨにした後。

01Ｈ：[えっじゃあ今結構落ち込んでる :?

この例のように、冒頭に複数の言語要素が用いられている場合、要素と要素の関係はどのようなものなのであろうか。本研究では、冒頭における順序に注目し、分析を行なうものである[13]。

以上、本節では発話の冒頭が、前の発話との関連を示すことができる位置であり、かつ、直後の発話がどのようなものになっていくのかを予告できる位置でもあるため、会話の進行において非常に重要であることを述べた。さらに、この位置での言語要素に着目した研究は、個別的な要素のみに着目しており、複数の要素が用いられた場合についてはまだ明らかになっていないことを指摘した。

次節では、会話分析以外の関連する領域での研究について触れておく。

２．４．関連する分野の研究

本節では、本研究が対象としている冒頭要素と関連の深い日本語研究について概観し、本研究との違いについて述べる。具体的には、談話標識、感動詞、フィラー、あいづち・応答詞の先行研究を概観する。これらの研究領域は互いに独立しているわけではなく、重複している箇所も多いが、概ねの区分として示すものである。基本的には、先行研究の著者が自身の研究をどのように位置づけているかに沿うようまとめている。また、それぞれの先行研究は膨大な数にのぼるため、本節では、近年の代表的な論考に絞って触れることにする。

２．４．１．談話標識の研究

冒頭要素の多くは談話標識(discourse marker)[14]として扱われていることも多い。日本

[13] 上に挙げた先行研究においても、個別的な要素を検討する際に、他の要素とどのような順序になるかについて簡単に言及しているものはある。例えば、発話の冒頭に用いられる'look'の働きについて分析したSidnell(2007)では、'look'と共に用いられやすいものとして'well'を挙げており、その両方を用いるときは'well'が先行することが指摘されている。

[14] Schiffrin(1988)は談話標識を「話の単位を括る連鎖依存要素(sequentially dependent elements which bracket units of talk)」(p.31)としており、oh、well、and、but、or、so、because、now、then、I mean、y’ know を分析対象としている。

語の個別的な談話標識についての研究は、椙本(1994:「それで」「で」)、富樫(2002a:「ふーん」)、 富樫(2002b:「まあ」)、稗田(2003:「でも」)、山本・楊・佐々木(2008:「だから」)などが挙げられる。複数の談話標識についての論考として代表的なものとして田窪(1992)、富樫(2001)がある。田窪は、感動詞(え、ああ、へえ、ふうん、ああ、ま、あの、その、さあ等)、接続副詞(だから、それで、すると、それなら等)、終助詞(ね、よ)などが日本語においては談話標識に関わるもので「それ自身では、情報内容を構成するものではないが、情報の発出、受け入れに関する話者の処理状態や処理過程の登録、管理に関わるものであり、間接的に文形式を規定する」(p.1099)働きがあることを指摘している。富樫(2001)は、「あっ、えっ、おっ、ふーん、へえ、ほう、はーん、はい、うん、はあ」を知識の獲得を示す談話標識と位置づけ、その本質を話し手の心内での情報処理を示すものであることを示している。

談話標識研究は、談話という複数の文や発話に関係する言語要素を取り扱う領域であるので、本研究とも関わりが非常に深いと言える。本研究との違いとして指摘できるのは、まず、先行研究の多くが話者の心的処理過程を基軸に論を立てているのに対し、本研究では参与者双方の相互行為に基づく分析を行っていることが挙げられる。また、発話の冒頭に範囲を絞っているため、談話標識研究が対象としている範囲とは重ならない部分(終助詞や単独で使用された場合等)もある。

２．４．２．感動詞の研究

感動詞も本研究が対象としている冒頭要素の一部を成している。感動詞の研究は非常に多く、近年の代表的な研究として、田窪や金水による一連の研究(田窪 1992,2005、田窪・金水 1997)や、森山の研究(1989, 1996)、富樫の一連の研究(2001, 2002a, 2002b, 2005a, 2005b)などが挙げられる。例えば、田窪・金水(1997)では、感動詞を「あっ」「ほら」のような「入出力制御系」と、「ええと」「なんか」のような「言い淀み系」の二つに分類し、心的処理過程から各感動詞の用法について考察している。このように、上記の研究はいずれも話者の心的な情報処理から現象を捉えようとするものである。上の節でも述べたことではあるが、本研究は参与者同士の相互行為を分析の軸に据えている点で、分析の観点が異なると言える。また、これらの研究は著者が内省により作成した文を対象としている。

話者たちの相互行為を捉える上では、実際の会話を分析対象にする必要があると思われる。実際の会話を分析対象としたものに、対話コーパスを資料にして分析した土屋(2000)がある。土屋は先行文と後続文との関係を感動詞がどのように示しているのかについて分析しており、本研究の興味とかなり一致した研究を行なっている。土屋は、「そうですか」や「そうですね」といった「ソウ系コメント」の直後に配置される感動詞を「ふうん系」、「はい系」、「いいえ系」、「あ系」に分類し、先行文と後続文の関係から、「ふうん系」は先行文の受け止め、「はい系」は先行文の対他的受け止め、「いいえ系」は先行文の受け止めと情報発信の予告という機能を明らかにしている。ただし、「あ系」に関しては、一語の中にさまざまな事態を含むとしており、明確な機能は提示できていない。土屋の研究は実際の会話のデータを用いており、そこから先行文と後続文の関係を感動詞から示そうとしている点は特筆すべきであるが、一方で、統語的な形式のみにしか注目しておらず、話者同士の相互行為には目が向けられていないことが指摘できる。

２．４．３．フィラーの研究

「えっと」や「あのー」などのフィラーと呼ばれているものは、一つの発話の様々な位置で用いられるが、発話冒頭でも使用される。本研究では主に「サーチに関わるもの」[15]の諸要素がフィラーと密接に関わる。フィラーに関しては、田中(1982)、定延・田窪(1995)、野村(1996)、山根(2002)、小出(2006, 2008, 2009a, 2009b)、川田(2008)、大工原(2008)、中島(2011)、宮永・大浜(2011)等、数多くの研究が様々な視点からなされている。フィラーは、田中(1982)によれば「発話の進行を時間的に遅らせ、発話における困難な情報処理に寄与する」認知的機能と「他者に向けられたなんらかの信号」である対人的機能という二重の機能を持つとされる。また、山根（2002）は「話し手の情報処理能力を表出する機能」と「対人関係に関わる機能」という、田中の示した二つの機能とほぼ同じものに加え、「テクスト構成に関わる機能」を指摘し、フィラーの働きはこれら三つの機能に集約されるとしている。

本研究では発話を行為として捉えていることは既に述べた。「フィラー」という用語は、それ自体行為の名前ではないため、本研究では用いない。また、田中（1982）や山根（2002）

[15] 詳しくは6.2.5.を参照されたい。

が指摘するような発話者の内部で起こる認知的な側面についてではなく、双方が対人的機能と呼んでいる相互行為的な側面に焦点を当て、発話の冒頭に用いられる言語要素の順序を探るものである。

２．４．４．あいづちと応答詞の研究

あいづちや応答詞と呼ばれるものも、本研究が対象としている発話冒頭要素の一角を占めていると言える。応答詞に関わる先行研究は、第５章の「承認に関わるもの」で触れるため割愛し、ここではあいづちの研究について概観する。

水谷（1988a）は日本語のあいづちについて、「質的に言えば、文の途中で打つこと、量的には頻度の高さという点で、(他の言語のあいづちと比べて)日本語のあいづちはかなり特殊なものと考えられる」(p.6：括弧内は筆者による)と述べているが、このことは経験的にも頷けるところである。話し言葉の研究が盛んになるにつれて、この日本語のあいづちの「特殊さ」を明らかにしようとする研究が非常に増えてきた(杉戸 1988、水谷 1983,1988a,b、堀口 1991, 1997、メイナード 1993、喜多 1996、池田・池田 1996、ナガノ, M.・杉藤 1999、富樫 2002d、中島 2011 等)。あいづちの定義は研究によって様々であるが、堀口(1997)は様々な先行研究を考慮し、「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」(p.42)とまとめている。また、堀口はあいづちの機能として「聞いているという信号」、「理解しているという信号」、「同意の信号」、「否定の信号」、「感情の表出」という五つを挙げている。

基本的には会話分析の分野では「あいづち」を分析対象にすることが非常に少ない。それは、会話分析が発話を行為として捉えているためであろう。「あいづち」は行為のラベルではないため、「あいづち」という観点からは分析が行なわれることは基本的には無いのである。このようなスタンスから、「あいづち」という用語からの分析は本稿でも行なっていない。

２．４．５．関連する諸研究との違い

以上、非常に簡単にではあるが、本研究が対象としている冒頭要素と関連の深い日本語研究について概観してきた。多くの先行研究は、発話者の内部の認知的な側面に注目している。本稿が行なうような相互行為に着目した研究により、これまで光が当てられることが少なかった側面が明らかになるだろう。また、多くの先行研究では、当該の言語要素が発話のどのような位置で用いられているかについての言及がほとんどされていない。本研究では、基本的には連鎖環境に関する位置に言及した上で、当該の言語要素がどのように用いられているのかを示していく。

上に挙げてきた先行研究は、基本的には言語要素の働きについて考察しているものである。本研究が焦点を当てているのは、言語要素の「働き」ではなく、言語要素が複数用いられている際の「順序」であり、ここに先行研究と本研究の最も大きな違いがあると言える。もちろん、「順序」を考察するに当たって「働き」を考慮する必要はあるが、軸足は常に「順序」に置いて記述することになる。

２．５．小括

本章では、まず、会話の性質について見た。会話は、相手がその場にいる点、そして時間が経過する点で「書き言葉」とは大きく異なることを述べた。そのことに最も自覚的に研究を進めていったのが会話分析だった。2.2.ではその会話分析について詳しく見た。まず、会話分析の歴史的変遷を概観し、会話分析が重視する参与者の指向、行為と連鎖組織、そして会話における時間の経過について、会話分析がどのように扱っているのかを説明した。続く 2.3.では、本研究で焦点を当てている発話冒頭について、先行研究でどのようなことが明らかにされているのかを示した。発話冒頭は、前の発話との関連を示すことができる位置であり、かつ、直後の発話がどのようなものになっていくのかを予告できる位置でもあるため、会話の進行にとって非常に重要な位置である。この位置でどのような要素が用いられているかに関する研究は近年増えつつあるが、本研究のように複数の言語要素が用いられることに焦点を当てたものはないということを述べた。2.4.では会話分析以外で本研究に関連する先行研究を概観した。これらの多くは認知的な側面に注目しており、

相互行為を重視する本研究の視点とは若干興味を異にしている。また、「順序」に焦点を置いた研究もほとんど無いと言える。

４章以降の本論に入る前に、次章では分析の方法について記す。

第３章　分析の方法

本研究は発話の冒頭において、言語的な要素がどのような順序で用いられているのかを明らかにすることを目的としている。そのために、具体的にどのようなデータを扱い、どのような手順で分析を進めていくのかについて本章では記しておく。

以下では、まず 3.1 でデータについて述べる。本研究では電話会話コーパスを利用しているが、コーパスを本研究に用いる有用性と、指摘されうる問題点に対する本研究の立場を示す。また、本研究で使用するデータにも簡単に触れておく。その後、3.2 で分析の手順について述べる。分析するに当たって必要となる概念についても併せて紹介する。

３．１．データについて

本研究では TalkBank(http://talkbank.org/)という会話コーパス群の中の CallFriend という電話会話コーパスを分析データとして用いている。分析対象を電話会話に限ったのは、ジェスチャーなどの視覚的な情報を含めることで議論が複雑になることを避けるためである。電話会話では、それらの情報について会話参与者は考慮しなくてもよい。それゆえ、会話参与者の指向を見る分析者もそういった情報を除外して分析することができる。コーパスを利用する最大の理由は、本稿の読者がデータにアクセス可能であるという点である。本研究での分析は、会話の音声を様々な記号を用いて、出来る限り元の音声に忠実に書き起こしたデータを作ることから始まる(詳しくは 3.2.2 で述べる)。しかし、音の高さや強さ、声色、声の速さといった音調的な特徴の微妙な変化など現実に起きた音声を「完全に」文字にすることは不可能であると言える。しかし、そのような音調的な特徴が参与者同士のやり取りに非常に重要な影響を及ぼしうることはこれまでの研究では数多く指摘されてきている（例えば Hayashi 2009 等)。本研究では、会話の進行に影響を及ぼしうる音調的な特徴は出来る限り記号を用いて表記しているが、読者にとってイメージの湧きにくいものになってしまっている可能性がある。その場合、是非実際の音声を聞いていただきたいと考えている。また、筆者が見逃してしまった重要な音調的特徴があるかもしれない。そのような音調的特徴が、分析を補強することもありうれば、分析に対して反論にな

りうるかもしれない。つまり、分析の理解を促進させるもの、および、分析が正しいかどうかの一つの判断材料として、読者が実際の音声にアクセスできることは非常に有益であると考える。それゆえ、本研究ではインターネット上で公開されているコーパスを分析対象としている。同様の理由から、本研究で示す全ての事例において読者がデータの該当箇所にアクセスしやすいよう、該当箇所の開始時間と終了時間を示している[1]。

まずTalkBankとCallFriendについて記しておこう。Talkbankは1999年から2004年にかけてカーネギーメロン大学とペンシルバニア大学の研究プロジェクトの一つとして作られたものである。TalkBankには様々な会話コーパスが集められており、第一言語習得、第二言語習得、会話分析、教室談話、失語症患者の言語などの研究に利用されている[2]。本研究で利用しているデータは、その中のCallFriendというコーパスである[3]。CallFriendは様々な言語の母語話者による電話会話を収集したコーパスで、本研究で利用しているものは日本語母語話者同士の電話会話を集めたものである。

以下、このコーパスを利用することの問題点、利用するデータの概要について述べる。

３．１．１．コーパスの利用の問題点

このコーパスを研究に利用する上で問題になりうると指摘されるかもしれないこととして挙げられるのは、①参与者の属性や関係の不透明さ、②録音されているという状況が参与者に与える影響の二点が考えられる。以下、それぞれの問題に本研究ではどのように考えるのかについて記す。

３．１．１．１．参与者の属性や関係の不透明さ

CallFriendで公開されているデータは、参与者の性別や年齢、職業、現住所、出身、あ

[1] 各データ番号の横に[　]で記載する。例えば[japn6739　19:28-20:38]と書かれているものは、CallFriendのjapn6739というデータの19分28秒から20分38秒までの箇所をそこで使用しているという意味である。

[2] 詳しくはMacWhinney(2007)を参照されたい。

[3] 具体的にはTalkBankのHPでCABank→Media Database→CallFriend→japn/とクリックしていくとデータを見ることができる。

るいは参与者同士の関係などの詳しい情報が公開されていないものが多い。それゆえ、これらの情報が必要な場合は、会話参与者が会話の中で実際に話している内容から判断する必要がある。参与者の属性や関係が会話に先立って所与のものとして存在し、その与えられている属性や関係が個人の話し方を決定しているという視点で研究をしていた場合、このコーパスのように参与者の情報が相当程度に不足していることは、研究にとって致命的であるはずである。しかし、本研究は第２章でも述べたように、参与者の属性や参与者同士の関係は、会話においてその都度互いの参与者が分析可能な形で達成・維持している(Sacks 1992)という立場を取る。それゆえ、参与者が自分のどのような属性を他の参与者に示しているのか[4]、あるいは参与者がそもそも他の参与者に自分の属性を参照させて会話を展開しようとしているかどうかが、その都度の分析の観点となる。例えば次の事例を見てみたい[5]。Ｕはアメリカに住んでいるが、主婦で、夫は日本人で、隣家とも離れている。そのため、英語を使う機会が少なく、英語が上達しないと言っていた。それに対して、Ｕよりも英語の運用能力の高いＴがアドバイスをしている場面である。

(3-1)[japn6739　19:28-20:38]

01Ｔ：だ：から[ね：　やっ]ぱり：.hhh あの：：う語学の(方)に：上達＝

02Ｕ：　　[うんうん.]

03Ｔ：＝したかったらおもて出てないとだめ[よ.

04Ｕ：　　[あっそうみたいね：：.＝

05Ｔ：＝う：[ん.

→06Ｕ：　　[そうみたい.＝誰か他の人も言ってたわ.そ(れ／う)してから

07　　英語が上達 - (.)[　　上　達　し　　]たって[ゆってた.]

08Ｔ：　　[＃あ：やっぱり？＃]　　[. ｈｈｈ]ｈｈ＝

09Ｕ：＝[う：ん.

10Ｔ：　[＜ほん＞とにそう.

11　　(.)

---

[4] 例えば、筆者は原稿執筆時点において様々な属性を持っている。男、28 歳、30 歳以下、20 歳以上、成人、島根県出身、大阪府在住、豊中市民、ときどき眼鏡をかける人、コンタクトレンズ利用者、昨日学校に行った人等、原理的には無限に属性を記述できるだろう。しかし Sacks(1992)が指摘しているように、状況ごとにどれが利用されるかは異なっている。そして、会話においてその都度どの属性を利用しているのかは、他の参与者にわかるようになっているはずである。

[5] トランスクリプトの記号の意味は本稿の巻末資料として示してある。

12U：ゆっ[てった.

→13T：　　[あたしなんか今ほら働いてる所がとにかく.hhhh 世界中の

14　　国から::人-い-いろんな人が[集まってくとあの：う＝

15U：　　[あ::__

16T：＝なんて：の,.hhh[　h　h　h　h　　]

17　　((約30秒程度の会話を中略。なお、この間、社名と会社内の言語

18　　状況について説明されている))

19T：それ[で結局お互いにコミュニケーションするには英語しか：＝

20U：　　[ふ::ん.

21T：＝共[通の：言葉＞っていうと＜え]いごしかない[わけね：.

22U：　　[＜　そ　：　：　：　ね.　＞]　　[あっ.

23U：それは[そうね.]

24T：　　[.ｈｈｈ]h[んだからもう.hhh 英語使わなかったらもうあなた：_

25U：　　[(…)

26　　(0.2)

27T：なにもできないじゃない.

28U：°そうね::.°　((電話機の不調で声が遠い))

29　　(.)

30T：だから：もう必死よね：こうなると.

31U：°あっそうね[↑：.°　((電話機の不調で声が遠い))

ここでTによってなされているのは、仕事をすれば英語が上手になるというアドバイスであり、Tの職場環境では英語を使うことに必死になるという話である。

まず注目したいのは、Tのアドバイスである「語学の(方)に：上達したかったらおもて出てないとだめよ.」(01,03)に対して、Uが「そうみたいね::.」(04)と答えていることである。この発話は、Tのアドバイスと同様のアドバイスをUが既に聞いていることを示している。つまり、英語の上達には仕事をすることがよいと[既に聞いた人]として自分を位置づけているのである。6行目の「誰か他の人も言ってたわ」ではその位置づけをより明確にしていると言えるだろう。Tのアドバイスに対して、同様のアドバイスを既に聞いたと示すことは、少なくとも現段階までにそのアドバイスは役に立っていないことを意味

するため、Ｔのアドバイスの価値を低めることになる。そのようなＵの振る舞いに対して、Ｔは 13 行目以降で自身の職場について説明をしている。

注目したい二つ目の点は、このＴによる 13 行目の「働いてる所」である。Ｔは「働いてる所」と言うことで自身を[仕事をしている人]に位置づけている。このことは、先ほどの「語学の(方)に：上達したかったらおもて出てないとだめよ.」(01,03)という自身のアドバイスが単なる一般論ではなく、実体験からの示唆であることをＵに伝える布石となる。実際、以降のＴの発話は、英語を使わなければならない状況なので必死に英語を使うことになることが語られている。これは、直前でＵによって低められたアドバイスの価値を、再度高める作業であると思われる。上に示したデータの他の部分から、ＴとＵが互いの家族構成などを詳しく知っていることや、ＵがＴの家に行った事があるということがわかる。このことから、ＵはＴが仕事をしていることを知っている可能性が高いだろう。にも関わらずＴがここで[仕事をしている人]に自身を位置づけるのは、この場面においては[仕事をしている人]という属性の持ち主として以降のＴの話を聞く様、Ｕに教示しているためであろう。Ｔは女性であり、家に庭を持っている。しかし、上のような会話の状況では、Ｔの[女性]や[庭を持っている人]というような属性はそもそも参照されていないと言えるだろう。これらが参照される時には、会話参与者によってその都度相手にも参照可能な形で示されるのである。

以上の理由で、参与者の属性や参与者同士の関係を予め知らないという分析者の都合は、分析において致命的な問題点であるとは言えない。確かに、参与者に関する情報を分析者がデータに先立って知っていることで、より参与者の目線に立った分析がしやすくなることも事実ではあるが、参与者の振る舞いに参与者の属性や参与者同士の関係が示されるという立場の研究においては、事前情報の少なさは研究において若干の問題に過ぎないと言える。

３．１．１．２．録音されているという状況が参与者に与える影響

我々の日常に生じる「自然な」会話を分析対象としたいとき、本研究が対象としているような録音されたデータは、参与者が録音されていると知っている際に、「自然な」データと言えるのであろうか。

実際、本研究の対象とするデータにおいて、普段の録音されていない会話では起こらないと思われる話題や会話の仕方が見られることもあった。例えば、電話が始まってすぐ、多くのデータで「なぜ録音するのか」の説明がなされる。また、指定された録音時間に達するとどのように電話が終わるのかが話題に挙がることもあった。あるいは、家族であるにも関わらず最初の数分間にデス・マス体を使って話すこと、録音されているという理由で今している話題は別の機会に話そうという提案がなされることといった場面も見られた。電話の用件に関しても、「録音するため」というデータもあり、用件が済んだ時点で電話を切ることに向かうという状況が発生せず、できるだけ話を続けようとしているものもあった。確かにこれらのことは、録音がされていない我々の普段の電話会話では見られない特徴であると言えるかもしれない。

では、これらの特徴をもって、このデータは「不自然」であると考えるべきなのであろうか。確かに、上に挙げたような参与者の振る舞いは、会話が録音されているときに現れて、会話が録音されていないときには現れないものかもしれない。だが、そのことを持ってデータが「不自然」であるとは言えないというのが本研究の立場である。なぜなら、上に挙げた参与者の振る舞いは、「会話が録音されている状況」を参与者が指向している場合の「自然」な振る舞いであるからである。上に挙げたような参与者の振る舞いは、参与者が録音されていることに自分が指向していることを他の参与者に観察可能にした結果に過ぎない。他の参与者に観察可能にしているのであれば、分析者にも観察可能であろう。このように、参与者が「録音を意識している」ということ自体、参与者の振る舞いによってその都度観察可能な形で他の参与者に示されることになるだろう。仮に、参与者が「録音を意識している」場合であっても、振る舞いとして示さないのであれば、それは他の参与者にも観察不可能であるため、相互行為には影響を与えないと言える。参与者が「録音を意識している」ことを振る舞いとして観察可能にして「いる」場合、「会話が録音されているという状況」を参与者がどのように扱って会話を進行させているのかを分析することで、データの当該箇所は「自然」なデータになるだろう。反対に、参与者が「録音を意識している」ことを振る舞いとして観察可能にして「いない」場合、通常の録音されていない会話と同様に分析しうるものであろう。串田(2006a)の言うように、「自然さ」とはデータの収録方法のことだけではなく、むしろデータの見方に関わる問題なのである。

以上、コーパスを研究に利用する上で問題として指摘されうることとして、①参与者の属性や関係の不透明さ、②録音されているという状況が参与者に与える影響という二点を

挙げ、本研究の立場を示した。いずれの問題点も、参与者がその都度何に指向しているのかを丁寧に分析していくことで、これらの問題はかなりの程度解消されうることを述べた。

３．１．２．データの概要

本節では、分析の対象にしたデータについて紹介する。実際に本文中にデータを示す際は、データの一部を抜粋することになるため、ここではそれぞれのデータについて多少詳しく全体の流れを説明する。

データは日本語母語話者同士の電話会話で、基本的にはアメリカ在住の日本人がデータの提供者となる[6]。多くのデータにおいて、会話は共通語でなされている。

なお、公開されているデータの中から、これら 10 例(合計 223 分程度)のデータを選ぶ際には、筆者が実際に聞いて、①分析したい現象(複数の冒頭要素が用いられている事例)が多く含まれているもの、②方言や英語の過剰使用により筆者が分析しにくくなっていないものという基準から判断し選出した。

以下、本研究が対象とするデータの概要である。

japn1612　18 分 15 秒　母親(Ｂ)と息子(Ａ)の会話

息子のＡ(20 代か)は学生で、最近受けたテストが出来なかったことについて母親のＢに伝えている。Ａは母親とは離れて暮らしているようである。途中Ｂにかわって Ｃ(Ａの弟、Ｂの息子、10 代と思われる)が電話に出る。その際、Ａが進学のための受験に合格した場合にＢが車をプレゼントする可能性について話しており、その後はその車についての話題となる。

japn1684　29 分 58 秒　友人同士のＤ(女性)とＥ(女性)の会話

両者は、昔は近くに住んでいたが今は離れた場所にいる。Ｄに関しては職業の言及はないが、Ｅは学生である。ともにダンサーを目指しているようで、オーディションの話がしば

[6] このことから、本研究が対象としているデータはアメリカ在住の日本語母語話者の日本語という「偏り」がある。だが、そのことがこのデータを分析対象として選ぶ妥当性を低めることにはならないことは、3.1.1.で触れている。本研究は、参与者の属性が、会話においてその都度互いの参与者が分析可能な形で達成・維持しているという観点から行うものである。

しば交じるが、話題の中心は両者の恋愛の悩みである。Dは恋人がゲイで、その恋人が別の男に走った話を、Eはロースクールに通う恋人があまりに忙しくて自分たちの将来を考えていない話をしている。

japn1722　29分58秒　友人同士のF(女性)とG(女性)の会話

Fは19歳で山梨県出身、Gは22歳で千葉県出身である。録音の半分以上がFの恋人であるトムがいかに賢いか、いかに優しいか、いかに可愛いかといったFの語りであり、いわゆる「のろけ話」がなされている。Gはそれに対して羨ましがったり呆れたりしている。録音の後半の話題は、両者の共通の友人やお互いの近況についてである。

japn1773　16分17秒　友人同士のH(女性)とI(男性)の会話

H、I(栃木出身)のどちらも学生で19歳である。Iは最近恋人と別れて傷心しており、立ち直りつつあるところである。そんなIに対してHは恋人とうまくいっていないという悩みを語りだすが、Iには「のろけ話」に聞こえているようで、何度も叱っている。

japn4044　29分59秒　友人同士のJ(女性)とK(男性)の会話

J、Kともに学生(十代か)で、Jは昔ワシントンに住んでおり、Kは現在ワシントンに住んでいる。会話の前半は、両者の趣味である香水をめぐるエピソードが語られている。後半の話題は、Jが行くニューヨーク旅行の話である。JがKを旅行に誘っており、Kは断ろうとしているのだがJはKが行くものとして旅行のプランを勝手に決めていく。

japn4222　12分25秒　友人同士のL(男性)とM(男性)の会話

Lはレストランで働きながら学生をしており、Mはワイパー屋を営んでいる(どちらも30代か)。両者は半年以上会っておらず、住んでいる地域も離れている。近況報告として、Lは友人と銃のトレーニングに関するビデオを製作しており、雑誌に広告を載せて売ろうとしていることをMに伝える。Mは雑誌関係のコネクションがあるらしく、そのことにアドバイスなどをしている。

japn4261　23分20秒　友人同士のN(男性)とO(男性)の会話

N、Oともに仕事をしており(20代か)、「いかに仕事が大変か」についてそれぞれが語って

いる。ただし、Ｏに関しては学校へ書類を提出する話がされているので、インターンとして仕事に従事しているものと思われる。途中、両者ともに知っている土地の話題になることや、電話のトラブルで会話が途絶えることもあるが、基本的には仕事の話をしている。

japn4549　３分 15 秒　友人同士のＰ(男性)とＱ(男性)の会話

Ｐ，Ｑともに学生と思われる(10 代か)。Ｑが好きなロックバンドのボーカルが会話収録日の前日に亡くなり、Ｐがそのことを Ｑに伝えている。Ｑは期末試験の勉強に忙しく、その情報には触れていなかったため、非常に驚いた。なお、その話が一段落すると、Ｑが試験勉強をする必要があり電話を切ったため、収録時間が短くなっている。

japn6707　29 分 59 秒　姉妹の会話

会話の内容からＲが姉、Ｓが妹かと思われるが、正確な情報ではない。会話の大部分が両者の知人に関する話題で、ある人物の話題が一区切りすると、また別の人物の話題へと移るという流れになっている。会話の後半ではお互いの近況やＳの家族の話がなされている。

japn6739　29 分 59 秒　友人同士のＴ(女性)とＵ(女性)の会話

Ｔ(50 代)は言語センターで働いており、アメリカ人の夫がいる。Ｕ(50 代)は主婦で、日本人の夫がいる。会話の前半は家の庭の手入れやＵの夫の話をしている。中盤では日本のもの(食事やテレビ)とどう触れ合っているかに話が移り、その流れでＵが日本のテレビばかり見ているから英語が上達しないという話になる。それから最後まで、外国語を学ぶことに纏わる様々な話がなされる。

以上が、本研究が対象としたデータ 10 例である。次節では、分析の手順について記す。

３．２．分析の手順について

本節では、まず 3.2.1. で分析の際に必要となる概念について触れる。次の 3.2.2 で分析の手順について説明する。

３．２．１．分析に必要な概念

本研究では、発話の冒頭要素に注目している。それゆえ、何をもって「発話」とするのかについて説明しておく必要があるだろう。

本研究で「発話」という言葉を用いるとき、基本的には Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)のＴＣＵ(turn-constructional unit)を想定している。Sacks 達によると、会話は、話す順番(turn；ターン)を参与者自身がその都度誰かに割り振ることや、自己選択することで交替する順番交替システム(turn-taking system)で成り立っている。このシステムにおいて、ターンを構成するものがＴＣＵであり、語、句、節、文という様々な単位でありうる。基本的には、このＴＣＵの完了可能点[7]に「ターンが替わってもよい場所」(transition-relevance place；ＴＲＰ)が配置され、次話者の割り当てや自己選択がなされる。例として次の事例を見てみよう。

(3-2)[japn4044　14:05-14:14]

01Ｊ：.hh でも：,(.).hh ほらワシントン物価安いから大丈夫だよ.

02　(0.2)

03Ｋ：物価安くても：i-タックスたけ：んだよ.

04Ｊ：.hh 何パーセント？

05Ｋ：ハッテンニ.あ：ハチか.

01、03、04 は全て一つのＴＣＵによって構成され、各ＴＣＵの末尾には「ターンが替わってもよい場所」が配置されており、その後もう一方の話者にターンが交替している。なお、一つのターンにＴＣＵが一つしか含まれないわけではない。05 は、Ｋのターンに二つのＴＣＵが含まれている。一つ目は 04 の質問に答えている「ハッテンニ.」という部分で、もう一つは「あ：ハチか.」と直前の自身の発話を訂正している部分である。04 と 05 だけを取り出すと、ターンとＴＣＵ(□で示す)、「ターンが替わってもよい場所」(↑ＴＲＰで示す)は以下のようになる。

[7] Ford and Thompson(1996)によると、参与者はＴＣＵの完了可能点を分析する際に統語的完了可能点だけでなく、音調的完了可能点と語用論的完了可能点も利用している。また、Tanaka(1999)は、日本語においては、この三つの完了可能点のうち語用論的完了可能点が最も順番交替に重要であるとしている。

(3-3)

ＴＣＵ

04Ｊ：.hh 何パーセント？　　→Ｊのターン

↑ＴＲＰ

ＴＣＵ　　ＴＣＵ

05Ｋ：ハッテンニ.　あ：ハチか.　　→Ｋのターン

↑ＴＲＰ　　↑ＴＲＰ

本研究では、基本的には上で示したＴＣＵを分析の際の基本的な単位として考える。便宜上、ＴＣＵを本研究では「発話」とする。ただし例外もあるので、その点については次節で分析の手順を説明する中で述べる。また、分析の対象を「ターンの冒頭」ではなく「発話の冒頭」としたのは、上の５行目のように一つのターンの中に複数の発話が含まれるケースがしばしばあるためで、一つのターンにおける二発話目以降も分析の対象として含めるために「発話の冒頭」という語を使用している[8]。

３．２．２．手順

分析の手順は以下の通りである。

まず、音声データを筆者が実際に聞いて、できるだけ音声に忠実にトランスクリプトを作る[9]。なお、トランスクリプトにする際の記号は本研究の巻末資料として示してある。

次に、各人の発話を前節で説明した「ターンが替わってもよい場所」で区切り、分析の単位とした。ただし、冒頭要素の直後にターンが替わってもよい場所が配置されていたとし

[8] ただし、ターンの冒頭は「ターンを取得する」といった特別の仕事を行なっている可能性もある。一つのターンにおける二発話目以降の発話冒頭ではターンを取得する必要はないため、「ターン冒頭」と「発話冒頭」は厳密には区別すべきではあるが、その区別によって議論が複雑になりすぎることも予想される。本研究では、この二つの違いが分析にとって重要でありうると筆者が判断した箇所については「ターンの冒頭」であることがどのような効果を生んでいるかについて言及するに留めておきたい。

[9] トランスクリプトは TalkBank のＨＰにも掲載されているが、ローマ字表記であることや、実際の音声では「なんか」や「俺」だったものが「なにか」や「僕」に変更されているといった具合に原音に忠実ではないこと、会話分析の分野で一般に用いられている記号が使用されていない等の理由により、ＨＰに掲載されているトランスクリプトを参考に筆者が作り直したものをデータとする。

ても、下降音調などの音調的な区切れを配置することなく後続発話を続けている場合、話者が全体を一つの塊として産出しようと指向しているものと考え、全体を一つの分析単位とした。例えば、次の事例を見てみたい。

(3-4)[japn4261　01:18-01:29]
ＮがＯに「(仕事は)どうです？」と聞いた。Ｏは上司が出張と休暇を兼ねて日本に帰っており、その前に約十冊の本を渡されたこと、今週そのうちの五冊を読んだことを伝えた。

01Ｏ：毎日：＞だから＜いちんち一冊本読ん(で)るみたいな.
02　　(0.6)
→03Ｎ：へ：仕事先で読んでんの？
→04Ｏ：うんだから：(.)そうゆう：あの ::パワープラントっていわゆる
05　　あの鉄工所とか：,
06　　((以降、仕事先で読んでいる本がＯの仕事に関わるものであること
07　　をＯが説明している))

ここでは「本を読むこと」を仕事として勤務時間中に行っているかがＯによって語られることなく、１行目の「いちんち一冊本読ん(で)るみたいな.」という説明がなされる。それに対してＮは「へ：」と受け止め、「仕事先で読んでんの？」と質問する。この質問にＯは「うん」と答え、読んでいる本が仕事に関わるものであることを説明する。ここで注目したいのが３行目と４行目で、３行目は「へ:」と「仕事先で読んでんの？」という二つのＴＣＵから構成されている。４行目も「うん」と「だから」以降という二つのＴＣＵから成る。これらはいずれも、二つのＴＣＵを音調的な区切れを間に配置することなく続けて発音されている。これは、話者が全体を一つの塊として産出しようと指向しているものと考えられる。本研究では、このような一つの塊として産出されているものは、その塊を一つの単位と考え、その単位での冒頭要素を分析対象とした。つまり、３行目は「へ:」を、４行目以降は「うん」と「だから」を冒頭要素として捉えているということである。

以上のように発話を認定した後、各発話の冒頭にどのような言語要素が用いられているかに注目した。なお、発話冒頭要素の認定基準は、発話の冒頭から伝達内容に直接関わる部分の直前までに置かれるものとした。例として次のデータを見たい。

(3-5)[japn4549　02:40-02:47]

Ｑが学校で受講しているサマープログラムについて。

01Ｐ：いつから始まった↑ :?

02　　(0.5)

→03Ｑ：え :: と６月の終わりかな.

04　　(1.0)

→05Ｐ：え(h)：(h)：ほんと↑に :?

06Ｑ：うん.

ここでは３行目と５行目に冒頭要素が用いられている。３行目の伝達内容に関わるのは、１行目の質問に答える「６月の終わり」という部分で、それよりも前の「え ::と」が冒頭要素となる。５行目は「ほんと↑に :?」という伝達内容よりも前にある「え(h)：(h) :」が冒頭要素である。ただし、６行目の「うん」のように、他の発話で冒頭要素として用いられていたとしても、単独で用いられている場合は、その場においては冒頭要素として用いられていないものと考えた。

最後に、ピックアップした冒頭要素を用いられる順序という観点から分類して考察した。本研究では複数の冒頭要素の順序に着目しているため、発話に一つしか冒頭要素が使用されていない事例は基本的には分析の対象とせず、説明に必要になったときのみ取り上げる。発話の冒頭に複数の冒頭要素が使用されている事例を見ておく。

(3-6)[japn6739　14:16-14:27]

アメリカでの食生活についてＴがＵに話している。直前で、Ｔは日本食を食べないと述べている。なお、05 の「ヤオハン」は日本の食料品を中心に扱う店舗である。

01Ｔ：[↓う :: んo-なんか：ｎ - .hhhh あたしにとっては：

02　　お肉とか：チーズとかね,

03Ｕ：うん.

04Ｔ：ミルク＜とか：＞あｔ - あんなものが体に合うみたいよ↑ : .＝

→05Ｕ：＝あ：じゃヤオハンとかあんまり行か[ない？

06Ｔ：　　[行かない.

ここでは細かい分析は省くが、５行目で「あ :」と「じゃ」という二つの冒頭要素が用いられている。本研究では、このような複数の冒頭要素が使用されている事例を対象に、冒頭要素の使用順序を考察していくこととなる。その際、当該の要素が直前の発話に指向しているものなのか、後続する発話に指向しているものなのかという観点から各冒頭要素を分類し、考察している。このことの具体的な説明は次章以降で詳しく述べることとする。

３．３．小括

本章では、データと分析の手順について説明した。

データに関しては、電話会話コーパスを利用した。分析対象を電話会話に限ったのは、ジェスチャーなどの視覚的な情報を含めることで議論が複雑になることを避けるためである。コーパスを利用したのは、分析の理解を促進させるものとして、および、分析が妥当かどうかの一つの判断材料として、読者が実際の音声にアクセスできることは非常に有益であると考えたためである。

また、このコーパスを利用する際に指摘されうる問題点として、参与者の属性や参与者同士の関係が不透明であること、そして、録音されている状況が会話に影響を与えうることを挙げて検討した。この問題点に対しては、参与者の属性や参与者同士の関係、「録音されている状況」であることは、いずれも参与者の振る舞いを通して相互行為に立ち現れてくるものであり、その振る舞いを分析する限りにおいては小さな問題に過ぎないことを述べた。

最後に、分析の手順について説明をした。分析の際に必要となるＴＣＵという単位について説明し、基本的にはＴＣＵを発話と呼び、本研究での分析の基本単位とした。また、発話冒頭要素を、発話の冒頭から伝達内容に直接関わる部分の直前までに置かれるものとして認定することを述べた。

次章では、順序についての分析に入る。次章で示すのは、冒頭要素の二分類である遡及指向要素と後続指向要素についてである。

第４章　冒頭要素の二分類

本章では、発話の冒頭に用いられる言語要素(以下、冒頭要素)が複数使用される際には使用する順序があり、その順序を説明するのに冒頭要素を二分類することが有効であることを述べる。また、その二分類の下位分類もそれぞれ示すことで、冒頭要素の順序の全体像を提示する。

我々が発話するとき、その発話の冒頭には複数の冒頭要素が配置されることがある。例として(4-1)を見てみよう。

(4-1)[japn1773　07:45-07:46]
Ｉは恋人と別れたばかりだという話をＨにした。
01Ｈ：[**えっじゃあ**今結構落ち込んでる :?

この例では、恋人と別れたばかりのＩが「今結構落ち込んで」いるかどうかをＨが聞いているが、この発話の冒頭では「えっ」と「じゃあ」という二つの冒頭要素が用いられている。

さて、ここで注目したいのは、この二つの冒頭要素が用いられる順序である。仮に順序を逆にして「じゃあえっ」とすると、「じゃあ」で開始した発話を止めて、「えっ」から新たに発話を組み立て直しているように聞こえるだろう。このことから「えっ」と「じゃあ」を発話の冒頭で同時に用いる必要がある場合、それらを配置する順序になんらかの規則があることがわかる。複数の冒頭要素を同時に発声することはできず、発話には時間がかかるという制約上、冒頭要素は一つずつ配置していく必要がある。その際の規則とは一体どのようなものであろうか。第２章に記したように、個別的な冒頭要素についての研究はこれまでいくつかなされてきているが、複数の冒頭要素の関係についてはまだ述べられてはいない。

本章では、複数の冒頭要素間の関係の一つである順序に関しての最も重要な規則について述べていく。それは遡及指向要素と後続指向要素という二分類があり、複数の冒頭要素が発話の冒頭で使用される際には[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序で使用されるというものである。まず、その二つの分類について第一節では述べる。次の第二節では、

遡及指向要素と後続指向要素という区分が、発話冒頭における順序を説明するのに有効であることを示す。第三節では、この二分類が発話冒頭における要素の順序のみならず、「同じ要素群に属するものを立て続けに用いることができるか」という連続使用可能性の観点からも重要であることを指摘する。

４．１．遡及指向要素と後続指向要素

発話の冒頭で複数の冒頭要素が使用される際の冒頭要素の順序を考えると、冒頭に現れる要素は大きく「遡及指向要素」と「後続指向要素」に分類できる。以下では、どのように発話冒頭要素をこの二つに分類したのかについて示す。さらに、このように分類することで冒頭要素の順序がどのように明らかになるのかも併せて見る。

なお、この「遡及指向」(retrospective orientation)と「後続指向」(prospective orientation)という二つの指向性が会話において何らかの現象を明らかにするのに重要となることについては様々な先行研究がある。例えば、口論の際に発話によっていかに対立を示すかという点を分析した Goodwin(2006)は、次のような例を挙げている。

(4-2)Goodwin(2006)の事例（８）から引用（p.450)
父と息子の会話である。息子は教会の聖歌隊を辞めたいということを、歌の練習のために向かっていた教会に着く約 10 分前に父に言った。なお、行番号や記号等の形式は本稿に合わせて変更している

01 Dad：Honey, you <u>have</u> [to go.
→02 Ed ：　　[Ｉ:- <u>don't</u>- have to do anything.

Goodwin は、相手の発話と形式がほぼ同じでありながら一部だけ変えた発話をすることが、形式の一致という点で retrospective orientation を示しており、その発話が次の発話の産出を拒絶する働きをしているという意味で prospective orientation を示すと述べている。また、Schegloff(2007)は、通常の隣接ペアの第一部分は第二部分の産出を妥当にするが、連鎖が発話時点より遡って開始されるものがあることを指摘している。このような特

殊な連鎖として「他者開始修復」[1]と「笑い」という二つの「気づき(noticing)」を挙げ、それらの連鎖を retro-sequence として区別している。例えば、次の事例を見たい。

(4-3)[japna6707　11:09-11:13]

01Ｓ：みっちゃん会ったよね.

02　　(0.5)

→03Ｒ：**え**:?

04Ｓ：ミチコさん会ったよねこの前に.

ここでは、Ｓが「みっちゃん会ったよね.」(01) と確認要求をしているが、Ｒは「え:?」と言ったため、４行目で１行目とほぼ同じ内容のことを言い直している。注目したいのは３行目の「え:?」である。これは直前の発話に何らかのトラブルの原因があり、相手にそのトラブルの修復を求めるものである。先ほどの Schegloff の分類としては「他者開始修復」となる。ここで注意したいのは、この「え:?」は１行目にトラブルの原因があることを示すため、他者開始修復の連鎖の開始は「え:?」という発話よりも遡った１行目からということになる。このような、発話時点よりも遡った時点から開始される連鎖を Schegloff は retro-sequence と呼んでいるのである。

これらの研究において、retrospective あるいは prospective という語が指すものと、本研究で「遡及／後続」が指すものは完全には一致していないが、少なくとも、「遡及指向」(retrospective orientation)は時間を遡ったある時点のことに対応しており、「後続指向」(prospective orientation)は時間軸上でまだ起きていないある時点のことに対応しているという点においては、これらの先行研究と共通する部分であると言える。

４．１．１．二つの分類基準

本研究では、冒頭要素を遡及指向要素と後続指向要素の二つに分類している。その二分類の基準は次のようなものになる。

[1] 修復とは、発話の産出、聞き取り、理解の問題を解決するために取られる手段の総称のことである(Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)。ここで用いている「他者開始修復」とは、その問題源となる部分を含む発話の発話者以外の人が修復を始めることである。

遡及指向要素

前の状況に対して反応的(responsive)であることを示すものであり、前に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す要素である。また、それだけで発話を終えることができるものも多い。具体例としては、「えっ」「ん？」「(情報提供などの後の) あっ」「へー」「おー」「ふーん」「うん」「そう」「いや」などが挙げられる。

後続指向要素

直後の自身の発話のために発せられる要素であり、直後に自分の発話が続くことを予期させるものである。また、それ自体では発話を構成せず、続く発話の一部と見なせるものでもある。「(新しい連鎖を開始する) あっ」「ねえ」「お前」「(相手の名前)」「おい」「で」「じゃあ」「でも」「だから」「とりあえず」「まあ」「なんか」「えっとー」「あのー」などが後続指向要素に挙げられる。

まず、これらが実際に使われている事例を見ておこう。まず、遡及指向要素が用いられている例である。

(4-4)[japn4261　01:40-01:48]

直前までOが自分の仕事の説明をしており、その話題が一区切りした。

01N：.hhhhで：ビザ(の方)は問題なか[っ゜た]の？゜

→02O：　　[あっ]

03O：あれね：,

04N：うん.

05O：h：((笑い)).hhh結局行ったよあそこのオフィス：.

→06N：あ行ったの？＝

02ではOが、06ではNがそれぞれ遡及指向要素の「あっ／あ」を冒頭に配置した形で発話を開始している。直前の状況は、01ではNがビザの問題について話題にしようとしており、05ではOからの情報提供がなされている。それらの状況に対して、「あっ／あ」は反応を示していると言える。具体的には、02では直前の01の発話を受けて「言うべきことを思い出した」ことを示すため「あっ」が、06では直前の05の発話を受けて「前提としている知識状

態が変わった」ことを示す(change-of-state; Heritage 1984)ため「あ」が用いられている。いずれも直前の状況を指向していると言えるだろう。このようなものを遡及指向要素と本稿では呼ぶ。

次に後続指向要素が使用されている例である。

(4-5)[japn6739　03:34-03:44]

Ｔの庭の雑草の処理について話しており、直前ではＵがＴに「手でむしるんでしょう？」と質問し、Ｔが「そういうことよ」と答えている。

→01Ｕ：**でね：あの**アメリカの人はさみんなほら：薬を撒く[じゃない.

　02Ｔ：　　[撒く.

　03Ｔ：う::ん[::.

　04Ｕ：　　[あたしあれが怖いのよ：.＝

　05Ｔ：＝p-((口をあける音))↓あれはやめたほうがいいわ[ね.

→06Ｕ：　　[**なんか↑ね：**

　07　　薬撒いたところにさ：歩くのは：やなのよ[なん[か.

ここでは01で「でね:」と「あの」(トランスクリプトではわかりにくいが、ここで使われている「あの」は指示詞ではなく言葉を捜しているときの間投詞である)が、06では「なんか↑ね:」という後続指向要素が使用されている。これらはいずれも続く自身の発話の一部であり、直後に自身の発話が続くことを予期させるものとなっている。

なお、この遡及指向要素と後続指向要素という二つの区分は、様々ある冒頭要素をきれいに二分できる分類ではない。全ての発話は文脈の中にある以上、発話を構成する要素には前の発話との何らかの関わりが多かれ少なかれ示されるものと思われる。そのような意味で、どの要素にも遡及的な指向はあるだろう。あるいは、発話に明確な終わりが示されない限り、発話が続く可能性があるため、例えば「えっ」などの遡及指向要素であっても「えっ、行くって言ってなかったっけ？」のように後続発話が続く場合もある。このように、遡及指向要素であっても、後続発話への指向性は認められる。つまり、上に示した二分類は、ある要素が遡及指向要素か後続指向要素かに完全に分類できるというものではなく、遡及指向と後続指向のグラデーションの中でよりどちら側に位置しているのかという観点からの分類となる。

以上、遡及指向要素と後続指向要素を分類する際の基準と実例について見た。この分類は、複数の要素が発話の冒頭で用いられる際の順序を説明するのに有効である。遡及指向要素と後続指向要素を同時に使用する必要がある場合、[遡及指向要素→後続指向要素]という順序になるためである。この点については、4.2 で詳しく見ていく。その前に、次節では、冒頭要素の全体像をひとまず示しておきたい。

４．１．２．冒頭要素の全体像

ここでは、本研究が分析した結果明らかになった冒頭要素の全体像を予め示しておく。なお、ここで示した内容の詳細については第４章の後半、第５章、および第６章で順次見ていくことにし、ひとまず大まかな概略を説明しておく。

遡及指向要素は基本的には発話の冒頭で一つしか用いられない[2]。しかし、稀に複数の遡及指向要素が連続して用いられる事例がある。例えば、japn4044 の事例では、電話中に変な声を出したＫに対して、おそらく録音されていることを意識してＪが「そうゆう変な声出していいのか？」と聞き返した。しかし、Ｋの反応がないのでＪは相手の声マネをして「変な声」の実演をした。それに対してＫは「**あ：いや**いいんじゃないの：.」と答えた[3]。この最後の発話では「あ :」と「いや」という二つの遡及指向要素が連続して使用されている。このような二つの遡及指向要素が連続して使用される事例を検討した結果、遡及指向要素を次の二つに分類することが、遡及指向要素の順序を説明するのに有効であることが分かった。その二つとは、特定の発話に対する双方の行為の枠組みに対する認識の「不一致への対処をする要素」（「えっ」、「あっ」、「あー」など）と「求められている反応を示す要素」（Yes/No 質問の後の「うん」など）である。相手の発話の行為に対する理解が不十分であることを表明することや、相手の発話に関する誤解に対処するものを「不一致への対処をする要素」とし、それまでに求められていた反応を示すものを「求められている反応を示す要素」としている。上の japn4044 の例では、「あ :」が前者、「いや」が後者となる。遡及指向要素を複数使用する必要があるときに「不一致への対処をする要素」から「求

[2] このことについては 4.3. で詳しく見る。また、次の段落では後続指向要素が発話の冒頭で複数使用できることを述べているが、これも 4.3. で例証する。
[3] ここで実際起こっていることはもう少し複雑である。この事例については 5.4.1.1. で改めて詳しく見る。ここでは遡及指向要素が複数使用されることがあるということを示しておくために紹介している。

められている反応を示す要素」という順序になるのであるが、この区分の説明や順序については、第５章で詳しく見ていくためここでは取り扱わない。

後続指向要素は、「**ねキョウコ**あと２年ぐらいいんでしょこっちに.」(japn1684)の「ね」と「キョウコ（相手の名前)」のように、発話の冒頭で複数使用できる。このように、複数の後続指向要素が使用されている事例を検討した結果、次の二つの下位分類を設定することが順序の説明に有効であることがわかった。その二つとは「断絶をマークする要素」(話題を元に戻すときの「で」、新しい連鎖を開始するときの「あっ」、やり直しを行なうときの「ねえ」[4]など）と「断絶をマークしない要素」(「なんか」「あのー」「あと」「ほら」など）である。断絶とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続する発話が直前の連鎖との区切れを示していることである。後続指向要素を発話の冒頭で複数使用する必要があるときには、「断絶をマークする要素」から「断絶をマークしない要素」へという順序になる。この分類や順序規則については第６章で細かに見ていくことにする。

ここまでに示した遡及指向要素と後続指向要素の下位分類をまとめ、全体像を示しておこう。

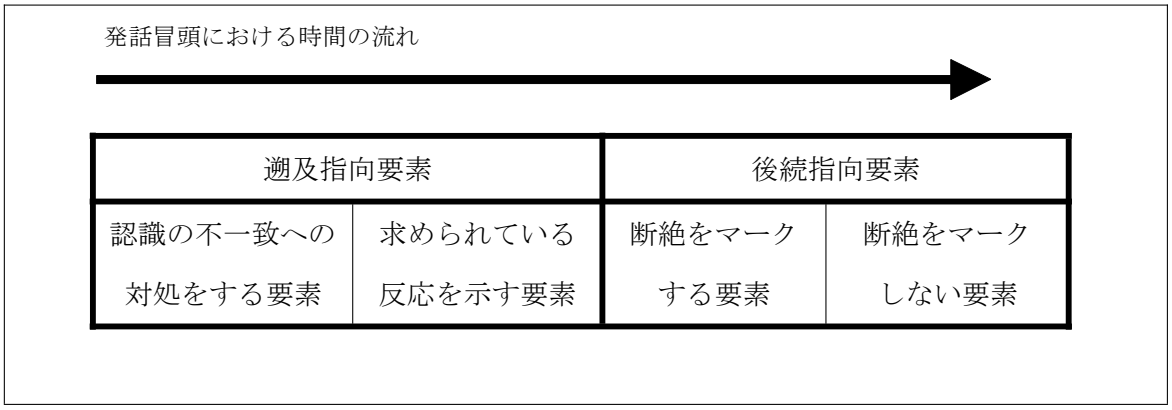

図 4-1：遡及指向要素と後続指向要素の全体像

この図の左から右は発話冒頭における時間の流れを表している。複数の冒頭要素が用いられる際に、遡及指向要素が後続指向要素に先行する。このことについては次の 4.2.で詳しく見ていく。遡及指向要素には、「不一致への対処をする要素」と「求められている反応を示す要素」という下位分類が、後続指向要素には「断絶をマークする要素」と「断絶をマークしない要素」という下位分類がそれぞれある。遡及指向要素は、稀に複数使用される

[4] この「ねえ」は実際にデータを見なければわかりにくいかもしれない。詳細は 6.4.2.1.3.を参照されたい。

ことがあるが、その場合、「不一致への対処をする要素」から「求められている反応を示す要素」へという順序になる。このことについては第５章で詳しく見る。後続指向要素が複数使用される際には、「断絶をマークする要素」から「断絶をマークしない要素」へという順序になる。このことに関しては第６章で詳述する。

さて、ここまで、冒頭要素を大きく遡及指向要素と後続指向要素に分け、それらの下位分類を簡単に紹介するとともに、冒頭要素が複数使用される際の順序規則の全体像について見てきた。次節では、この遡及指向要素と後続指向要素という二つの大枠について詳しく述べる。

４．２．遡及指向要素と後続指向要素の順序

前節では冒頭要素を遡及指向要素と後続指向要素との二つに分類し、それぞれにどのような要素が含まれるか、そしてどのような下位分類があるかについての全体像を見てきた。本節では、この遡及指向要素と後続指向要素という区別が、発話冒頭で複数の冒頭要素が用いられる際の順序に関わる分類であることを述べる。既に簡単に触れたように、遡及指向要素と後続指向要素を同時に用いる必要がある場合、[遡及指向要素　→　後続指向要素]という順序になる。このことを本節では検討していく。

４．２．１．遡及指向要素から後続指向要素へ

遡及指向要素と後続指向要素という分類は、冒頭要素が複数使用される際に[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順で用いられるという点において重要である。以下、具体例を挙げる。なお、ここでは遡及指向要素は斜体にしている。

(4-6)[japn4261　20:07-20:14]
直前ではOが電話の向こうで誰かと話をしていた。電話の向こうの人物は電話を使いたがっているようである。なお、５行目の「テープ」とは会話を収録するテープのことである。

01O：今なんぷん経った？

02　　(1.0)

03N：何が？

04　　(0.2)

→05O：**えっあの**[5]テープまわして：.

06N：あ‐あう：‐＜もう：＞そろそろ終わる.＝

この例では５行目の冒頭に遡及指向要素の「えっ」と後続指向要素の「あの」が用いられている。

(4-7)[japn6707　16:27-16:30]

ＲとＳの共通の知人について話している。その知人は夜勤の仕事をしているらしく、Ｒは去年のクリスマス以降会っていないと言っていた。なお、１行目の「帰ってくる」の主語はその知人である。

01R：＝朝：帰ってくるんだもん.＝

→02S：＝***お::じゃ***リサと同じだ.

03R：う：ん.

ここでは、２行目に遡及指向要素の「お::」と後続指向要素「じゃ」が用いられている。

(4-8)[japn4044　20:37-20:43]

ＫとＪが旅行の話をしている。今話題にされている計画ではＫが集合場所に着くまでにいくつも空港を経由しなければならない。Ｊはそれを心配している。

01K：でも＞それは俺が＜めんどくさいだけじゃん？

→02J：.hh(0.2)**＞うん＜でも::** s：[そうだけ]ど.

03K：　　[疲れる？]

[5] このトランスクリプトではわかりにくいかもしれないが、この「あの」は言葉のサーチをしている「あの」であり、指示詞として用いられているわけではない。ここでの「あのテープ」の「あのテ」の部分のアクセントは「低低高」になっており、もし「あの」を指示詞として用いるなら「低高高」となる。また、「テープ」と「テ」が強調されており、「あの」と「テープ」との区切りが明確になっていることも、この「あの」が指示詞として「テープ」に連結されているわけではないことを示している。同時に、言葉が見つからないという産出上のトラブルが解決されたことも表しているものと思われる。

04Ｊ：nnnnnん[::.

05Ｋ：　　[俺そうゆうのは大丈夫.

上の例では、２行目の冒頭に遡及指向要素の「＞うん＜」と後続指向要素の「でも ::」が使用されている。

このように、上の(4-6)～(4-8)の例は全て[遡及指向要素→後続指向要素]の順になっている。いずれも[後続指向要素 → 遡及指向要素]という逆順で用いると、後続指向要素で始めたことを取りやめて遡及指向要素から開始し直しているように聞こえるだろう。このことから、発話の冒頭で冒頭要素を複数配置する必要があるときは、[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序規則があるものと思われる。

次節では、上の(4-6)～(4-8)の事例を検討し、なぜ遡及指向要素から後続指向要素という順に配置されるのかについて考えてみたい。

４．２．２．事例の検討

遡及指向要素から後続指向要素へという冒頭要素の使用順序を検討していくにあたって、隣接性(contiguity)という概念が重要になる。Sacks(1987)は、質問と応答は隣接していること(隣接性)が選好されるということを指摘し、その隣接性への選好から、一般に質問はターンの末尾に、応答はターンの冒頭に配置されると述べている。このような隣接性への選好は、質問と応答のようなターンとターンの関係だけに留まらず、１つのターン内の発話と発話同士、更には一音一音の関係等様々なレベルにも当てはまり[6]、隣接性が保持されていることが「進行性(progressivity)」の体現となる(Schegloff 2007)。進行性が滞ってしまうと、それは相互行為において何らかの際立った特徴を可視化させることとなる[7]。

この隣接性への選好は、遡及指向要素と後続指向要素にも関わってくる。遡及指向要素は、既に述べたように「前」の状況に対して反応的(responsive)であることを示すもので

[6]「一音一音にも当てはまり」というのは、例えば「犬」と言うときに、「いぬ」というのが選好され、「い：ぬ」、「い ::::ぬ」となるにつれて、あるいは、「い(.)ぬ」、「い（1.0）ぬ」となるにつれて隣接性の度合いが低くなるということである。

[7] 例えば、同意要求に対して応答が遅れれば、それが不同意の応答であることを予期させる(Sacks 1987)。評価的な発話も同様で、評価的な発話に対して不同意がなされるときは秩序だった遅れが見られる(Pomerantz 1984a)。

あり、「前」に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す要素であった。一方、後続指向要素は「直後」に自分の発話が続くことを予期させるものであり、それ自体では発話を構成せず、続く発話の一部と見なせるものである。つまり、遡及指向要素は発話の「前」との繋がりが、後続指向要素は発話の「後ろ」との繋がりが、それぞれ相対的に強い。それゆえ、「前」との繋がりが強い遡及指向要素は発話の冒頭において前方に配置することで、前の発話との隣接性を保ち、「後ろ」との繋がりが強い後続指向要素は冒頭の後方に配置されることで、後続発話との隣接性を保持できる。

以下、隣接性の観点から上の(4-6)～(4-8)の事例を検討し、冒頭要素が複数使用される際に、遡及指向要素から後続指向要素へと配置されるということを確認したい。

下の例では５行目に､遡及指向要素の｢えっ｣と後続指向要素の｢あの｣が使用されている。

(4-9)[japn4261 20:07-20:14]　※(4-6)の再掲

直前ではOが電話の向こうで誰かと話をしていた。電話の向こうの人物は電話を使いたがっているようである。なお、５行目の｢テープ｣とは会話を収録するテープのことである。

01O：今なんぷん経った？

02　　(1.0)

03N：何が？

04　　(0.2)

→05O：**えっあの**テープまわして：.

06N：あ - あう：- ＜もう：＞そろそろ終わる.＝

ここでの連鎖は、１行目と６行目の隣接ペア[8]に、３行目の質問と５行目の応答が挿入される形となっている。１行目は「今なんぷん経った？」と質問しているが、この発話には「録音時間が」というような「経った」の主語や、「録音を始めてから」というような「経った」の起点を示す言葉が無い。しかし、Oはこのような「経った」の主語や起点を、発話の末

[8] ここでは、「今なんぷん経った？」が「＜もう：＞そろそろ終わる.」とセットになっているが、「＜もう：＞そろそろ終わる.」が「何分経ったか」を答えるものではないため、この二つの発話は単純な質問と応答の隣接ペアではない。直前で、Bが誰か別の人物と話しており、その人物が電話を使いたがっていることがAにはわかる。そのため「今なんぷん経った？」という質問は、「あとどれくらい録音する必要があるのか」という心配を述べているとも見なせる。このように考えると、Aの「＜もう：＞そろそろ終わる.」という発話は、このBの心配に対して安心させようとしていると言える。よって、ここでの隣接ペアは､[心配を述べる]という行為に対して[安心させる]というようなペアになっているものと思われる。

尾や２行目の沈黙の最中に付け足すことをしていない。それゆえ、「今なんぷん経った？」という質問は、そのままでNに聞きたいことが伝わる発話としてOが想定していると言える。これに対して、３行目の発話は「何が？」と聞いており、１行目の発話に「Xが」という項が「欠けている」ものとして想定している[9]。Hayashi(2009)では、「え」が前の発話の想定と自分の想定との間にずれがあることをマークすると述べられている。このことから、５行目の「えっ」は、３行目のNが想定する「欠け」に対して、自分の想定と異なっていたことに気がついたことを示していると言える。このような、前の発話の想定とのずれを示す要素は、前の発話とできるだけ隣接させる必要があるだろう。仮に、前の発話との間に様々な要素や発話が入り込んでしまった場合、何をターゲットに「えっ」が発せられているのかがわかりにくくなると思われる。そのため、「えっ」は発話の冒頭において先頭に配置されるのである。一方、５行目の「あの」という言葉のサーチは、現時点で提出できないというトラブルが発生しており、そのトラブル源(サーチ対象)はこれから生じることを示す(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)。もしサーチの「あの」とトラブル源「テープまわして」の間に別の言葉を挿入してしまうと、その言葉がトラブル源であったとNに認識されてしまう可能性が生まれる[10]。それゆえ、サーチとトラブル源は隣接していることが望ましい。以上の理由で、５行目は「えっ」が先行し、その後「あの」が配置されているのである。

下の事例では、「お：:」と「じゃ」が冒頭で用いられているものである。

(4-10)［japn6707　16:27-16:30］　※(4-7)の再掲

ＲとＳの共通の知人について話している。その知人は夜勤の仕事をしているらしく、Ｒは去年のクリスマス以降会っていないと言っていた。なお、１行目の「帰ってくる」の主語はその知人である。

01Ｒ：＝朝：帰ってくるんだもん.＝

→02Ｓ：＝***お::じゃ***リサと同じだ.

03Ｒ：う：ん.

---

[9] このような、先行発話に文法項の省略が生じていると話者が判断し、開始する修復については鈴木(2008)を参照されたい。

[10] ただし、別のサーチの言葉を挿入した場合は、言葉が見つからないというトラブルが継続中であることが示される。

ここでは、「(知人が)朝：帰ってくるんだもん」というＲの発話に対して、「お：:」と驚きを示す(日本語記述文法研究会,2009)ことで、Ｒの発話に情報価値を認め、情報提供がなされたことを示している。一般に、驚きの表示は驚きの原因から時間を離すべきではない。なぜなら、驚きの原因から離れてしまうと、その原因に対する「即座の反応」でなくなってしまうためである。そのため、驚きの原因に対して「わざとらしく」驚いたことや、理解できずに驚けていなかったことを示してしまう。また、驚きの表示と驚きの原因が離れてしまうことで、その間に何らかの要素が入り、驚きの表示が何を対象としているのかわかりにくくなってしまう可能性も考えられる。このような理由で、「お：:」は前の発話と隣接させる必要があるだろう。一方、「じゃ」はそれ単体では発話が完了できず、後続発話が続けられることを強く予期させるため、できるだけ後続発話と隣接させる必要がある。以上の理由で、２行目は遡及指向要素「お：:」から後続指向要素「じゃ」という順序に冒頭要素が用いられているのである。

次の事例では「＞うん＜」と「でも：:」が使用されている。

(4-11)[japn4044　20:37-20:43]　※(4-8)の再掲

ＫとＪが旅行の話をしている。今話題にされている計画ではＫが集合場所に着くまでにいくつも空港を経由しなければならない。Ｊはそれを心配している。

01Ｋ：でも＞それは俺が＜めんどくさいだけじゃん？

→02Ｊ：.hh(0.2)**＞うん＜でも：:** ｓ：[そうだけ]ど.

03Ｋ：　　[疲れる？]

04Ｊ：nnnnnん[：:.

05Ｋ：　　[俺そうゆうのは大丈夫.

ここでは、１行目のＫによる同意を求めるYes/No質問に、Ｊが２行目で答えている。まず「＞うん＜」が配置されているが、これは１行目のYes/No質問に対する応答である。応答であるためには、質問と隣接させるべきである(Sacks 1987)[11]。一方、「でも：:」はそれ単体では発話が完了できず、後続発話が続けられることを強く予期させるため、後続発話と

[11] ただし、この例では「＞うん＜」の直前に吸気(.hh)と0.2秒の沈黙が差し込まれている。これによって１行目と２行目に時間的な間が生じることになり、すぐに答える場合と比べて隣接の度合いが低いと言える。このような隣接の度合いの低さは、不同意の予兆となる(Sacks 1987)。実際、２行目でＪは「＞うん＜」と一旦同意しているものの、後に「でも：:」と反論しようと試みている。

できるだけ隣接させる必要がある。以上の理由で、２行目は「＞うん＜」から「でも ::」へという順序になっている。なお、１行目はYes/No質問であると同時に、「でも」から開始されており、直前のＪの心配(上のデータでは示していないが、「もしかしたらトランジット何回もしなきゃいけないかもしれない」と述べている)に対して「俺がめんどくさいだけ」と反論している。このように、Yes/No質問で、反論という行為も同時に行なっている。このように、質問によって別の行為を行なう場合、通常それに対するターンは、まず質問の形式に反応し、その後に行為に対して反応するという順序がある(Schegloff 2007)。実際、２行目も、「＞うん＜」と質問への承認を行い、その後「でも ::」と１行目の反論に対する反論を開始している。

以上、いくつかの事例を隣接性への選好という観点から検討し、遡及指向要素から後続指向要素へという順序で冒頭要素が用いられていることを見てきた。次節では、この[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序が逆転して使用されている事例を見る。

４．２．３．逆順で用いられている事例

[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序規則の存在は、規則が守られていないときのことを考えるとわかりやすいだろう。規則が守られていないとき、つまり、[後続指向要素 → 遡及指向要素]という順序になっている場合、それがやり直している(修復している)ことを相手に知らせることになる[12]。例えば、前節で検討した(4-９)～(4-11)の冒頭要素が仮に逆の順序で発話されているとした場合、遡及指向要素が発せられた時点で発話を最初からやり直しているように聞こえるだろう。実際の事例として(4-12)を挙げる。

(4-12)[japn4222　03:09-03:28]

Ｌは自作ビデオの広告を出して売り込もうとしており、そのことに詳しいＭはＬのビデオを自分のところに送るよう要求している。なお、ライトハウスとはロサンゼルスおよびサンディエゴで発行されている現地情報誌である。

[12] 厳密に言うなら、自身のターン内で修復の開始および修復を自ら行なっている。修復(repair)についての議論は(Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)に詳しい。
なお、規則が守られていないときに、常に修復が開始されているというわけではない。この点については第７章で詳しく見る。

01M：一本送ってよ.hh

02Ｌ：(あ)あ,Ｍちゃんとこに？

03M：うん.

04Ｌ：.hh 今いっこサンプルある.

05M：.hh ん - あの：新聞で：うまくすれば：ねえ？

06Ｌ：ふん.=

07M：=(り)ょうかいできるかもし[れ -]

→08Ｌ：　　[**だか**]**ら：そう**ライトハウスにどのく

09　　らいこう(くう)料_(0.9)アドバタイズメン載っけるとしたらどんくら

10　　いと - あ一ヶ月とられるんかな：と思って(.)それ聞こうかな：と思

11　　ってＭちゃんに.

この例では 08 でＬが「だから」(後続指向要素)と開始した発話を「そう」(遡及指向要素)と言うことによって、直前のＭの発話を聞いて思い出したものとして発話の組み立てをやり直している(修復している)。

このように、[後続指向要素→遡及指向要素]と順序を逆にするとやり直しになるということは、[遡及指向要素→後続指向要素]という順序規則が存在していることの証左となるだろう。

一方でこのことは、現在の話し手にとっては「修復を達成する」ため、そして受け手にとっては「修復が行なわれているということを理解する」ための道具として、この[遡及指向要素→後続指向要素]という順序規則が利用されていることも意味する。なお、この点については第 7 章で詳しく論じる。

以上、4.2 では、発話の冒頭で複数の冒頭要素を使用する必要があるときに、冒頭要素が[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序で用いられることを示した。また、そのような順序で用いられている事例を隣接性という観点から検討した。最後に、逆順である[後続指向要素 → 遡及指向要素]という順序で用いられている事例を検討し、それが発話の組み立てのやり直しになることを指摘した。このことは[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序が存在している証左となる。

次節では、冒頭で遡及指向要素と後続指向要素はそれぞれいくつ使えるのかについて考察する。

４．３．連続使用可能性

4.2 では、遡及指向と後続指向という二つの指向が冒頭における要素の順序に関連していることを述べた。本節では、この二つの指向が「同じ要素群に属するものを立て続けに用いることができるか」という連続使用可能性の観点からも重要であることを指摘したい。

まず、後続指向要素の連続使用可能性について考えたい。後続指向要素は連続して複数の要素を用いることができる。下はその例である。

(4-13)［japn4549　00:59-01:08］

この会話の収録日前日に、ある有名なロックバンドのボーカルが亡くなっている。Ｐが昨日はラジオではそのロックバンドの曲ばかりかかっていたとＱに教え、Ｑがそれに驚いた後。

→01Ｐ：**それでね：**,

02Ｑ：うん.

03　　(.)

→04Ｐ：**あの：：＞なんだったっけな**＜どっかの - そのラジオで↑ね,

05Ｑ：うん.

06Ｐ：午後(.)夜のさ：,

07Ｑ：うん.

08Ｐ：８時とか 10 時ぐらいから↑ね,((以下ラジオの話))

(4-14)［japn4222　09:44-09:53］

直前までの話題が一段落した時。

01Ｌ：゜そっかあ゜(.)ｈ：ｎ：：[　：　ｈ　ｈ　]

→02Ｍ：　　[**とりあえず：**].hh **え：：とね：じゃあ：：**

03　　また近々：：連絡ください.＝その：ワイパーの件とか.

04Ａ：オーケー.

(4-13)では「それでね：」「あの：：」「＞なんだったっけな＜」、(4-14)では「とりあえず：」「え：：とね：」「じゃあ：：」という後続指向要素が冒頭で立て続けに使用されている。

一方、遡及指向要素には冒頭において基本的に一つしか使えないという制約があるようである。これまで本章で示してきた事例で遡及指向要素が含まれているものは、全て発話の冒頭において一つだけ用いられているものである[13]。では、二つ以上用いられると会話にどのような影響を与えるのであろうか。次のデータは遡及指向要素が発話の冒頭で二つ使われている例である。

(4-15)［japn1722　21:25-21:35］
Ｆが母親と恋人を引き連れて旅行をするという話の後。

01Ｇ：(そ)の辺で観光地というと？
02Ｆ：この辺で観光地？
03　((中略　この間両者の沈黙とＢの口を開く ch - という音があるのみ))
04Ｆ：ｎ - ＤＣが近いかな：.
05　(0.7)
→06Ｇ：***u↑あ：***.h ***あっ***.h この¥ま(h)え行ってなんにも無かったとか
07　言って(h)たじゃん.¥

01 のＧによる観光地についての情報要求に対してＦは 04 で「ＤＣが近い」と答える。その答えに対してＧは 06 で「u↑あ :」と何か(おそらく観光地の候補として「ＤＣ」があるということ)に思い当たった直後に「あっ」と何かに気がつき、「この¥ま(h)え行ってなんにも無かったとか言って(h)たじゃん.¥」と言い、母親や恋人と一緒に行く旅行先としての不適切さを述べている。この「u↑あ :」から「あっ」までの間は、聞き手であるＦ(あるいは分析者)にとってどのように聞こえるのだろうか。おそらく、Ｇが「u↑あ :」で思い当たったことを「あっ」という新しい気付きによって「上塗り」する形でやり直しているという具合に聞こえるのではないだろうか。実際、後続する発話である「この¥ま(h)え行ってなんにも無かったとか言って(h)たじゃん.¥」という不適切さの表明は、冒頭の「u↑あ :」で気付いたことではなく、次の「あっ」で気付いたことの中身として聞かれるだろう。例えば、「お腹すいたねー」に対して「えっ あっじゃあご飯食べ行こっか」と言った場合など考えても、やはり「えっ」が行なおうとしていたことを「あっ」によってやり直しているように聞こえるだろう。このように、遡及指向要素が冒頭で連続して使われると発話を

[13] 具体的には(4-1)、(4-4)、(4-6/9)、(4-7/10)、(4-8/11)、(4-12)である。

やり直したように聞こえる。このことは、冒頭において遡及指向要素は基本的に一つしか使えないことの証拠と言えるだろう。なお、基本的には一つまでしか用いることができないのであるが、特定の連鎖環境においては遡及指向要素が連続して用いられる場合もある。その事例については次章で詳しくみるので、ここではそのような事例があることの指摘のみに留めておく。

以上、連続使用可能性という観点からも遡及指向要素と後続指向要素という分類が有効であることを見てきた。具体的には、後続指向要素は立て続けに使用できるが、遡及指向要素は基本的に一つまでという制約があるということである。では、なぜこのような制約が遡及指向要素にのみ生まれるのであろうか。

これはおそらく、遡及指向要素が「直前の出来事をどう理解したか」を示すものであるためである。ある遡及指向要素によって「直前の出来事をどう理解したか」を示したならば、二度目の遡及指向要素は一度目の理解を「上塗り」することになってしまう。二つ以上連続して使用することが修復を行なっているように聞こえるのはこのためであろう。一方、後続指向要素が立て続けに使うことができるのは、発話者が今まさに発話を組み立てている最中であり、その組み立てがどこに向かっていくのか、何を言った段階で終わりを迎えられるのかを聞き手にもわかる形で少しずつ明示していくためであると思われる。言い換えるならば、遡及指向要素は過去に起きたことに対するある種の理解表明の道具であり、一度しか表明しないことが基本である一方、後続指向要素は未来に起こるであろうことを予測させる道具であり、より確実な未来を見通すためにはその道具を複数使ってもよいということである。

４．４．小括

本章では、冒頭要素が[遡及指向要素→後続指向要素]という順序で配置されるという規則を示した。遡及指向要素とは、「へー」や「えっ」などといった、前の状況に対して反応的(responsive)であることを示すものであり、前に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す要素である。また、それだけで発話を終えることができるものも多い。後続指向要素とは、「えっとー」「で」などといった、直後に自分の発話が続くことを予期させるものである。また、それ自体では発話を構成せず、続く発話の一部と見なせるもの

でもある。この二つの区別は、発話の冒頭における順序に関連するだけではなく、「同じ要素群に属するものを立て続けに用いることができるか」という連続使用可能性の観点からも重要であることを指摘した。具体的には、遡及指向要素は冒頭において基本的に一度しか用いられないという制約がある一方、後続指向要素は複数使用できるという違いが見られる。

次の第５章では遡及指向要素について、第６章では後続指向要素について詳しく見ていく。第５章では、遡及指向要素の下位分類に触れ、遡及指向要素が複数使用されるいくつかの事例について検討する。第６章では、後続指向要素の下位分類を示しながら、後続指向要素が複数使用される際の順序について考察する。

第５章　遡及指向要素

本章では遡及指向要素について詳しく見る。具体的には、通常は発話冒頭において一つしか用いられない遡及指向要素が、発話の冒頭で複数使用されているケースを検討する。そして、その際の複数の遡及指向要素には順序があり、遡及指向要素を①特定の発話に対する「認識の不一致への対処」を行なう要素（「えっ」「あー」等）と②先行発話から「求められた反応」を行なう要素（Yes/No 質問の後の「うん」等）とに分類することで、その順序を説明できることを例証したい。

まず、本章のキーワードとなる「遡及指向要素」という語について確認しておこう。発話の冒頭で用いられる言語的な要素の中には、進行している会話において直前に起こった状況に指向している一群がある。この一群を本稿では既に述べたように「遡及指向要素」と呼ぶ。実際に用いられている事例として(5-1)を挙げる。ここでは４行目に「え：」、10行目に「あ」という遡及指向要素が使用されている。

(5-1)[japn1722　00:22-00:37]

会話の内容からＦとＧはアメリカの離れた地域に住んでおり、ＧはＬＡ(あるいはＬＡ付近)に住んでいるものと思われる。Ｆがこの冬にＬＡに行くことを考えていることが伝えられている。

01Ｆ：[.hhhh あ]のさ：,

02Ｇ：うん.

03Ｆ：冬にＬＡに行くんだ：.

→04Ｇ：.h **え：**何しに_:?

05Ｆ：遊びに.

06Ｇ：あ-あｈ

07Ｆ：ｈｈ

08Ｇ：.hh どこに_:?

09Ｆ：ＬＡと-大体サンタバーバラの方なんだけど：,＝

→10Ｇ：＝゜**あ**(.)サンタ゜バーバラなんだ：.＝

11Ｆ：＝ＬＡまで出て行けると思うんだよ.

ここでは詳細な分析は控えるが、大局としては、４行目の「え：」は３行目のＦの「冬にＬＡに行くんだ：」という発話に対して想定外であったことを示しており（Hayashi，2009)、10行目の「あ」は９行目のＦの「ＬＡと-大体サンタバーバラの方なんだけど：」という発話に対して自身の知識の状態が変化したことを示している(Heritage，1984)と言えるだろう。この「え：」と「あ」は、どちらも直前の発話に指向した「反応」を示す言語要素である。このような、直前の状況に対しての「反応」を示すために用いられる言語要素を遡及指向要素と呼ぶのである[1]。

以下では、まず、遡及指向要素が冒頭において基本的に一度しか用いられないということを改めて示す。次に、本研究が遡及指向要素と呼ぶものに関わる先行研究を概観し、どのような種類のものがあるのかについて見る。このことは、「反応」と呼ばれるものには具体的にどのような種類があるのかについて明らかにすることになるだろう。その後、基本的には発話の冒頭で一つしか用いられない遡及指向要素が複数使用されているケースを検討し、複数使用される際の順序について考察する。

なお、本研究では、分析対象とするデータに用いられていた冒頭要素が、それぞれどのような位置でどのように用いられていたのかについて、その全てを一つ一つ細かく記述することはしない。一つには、議論が煩雑になってしまうためであり、また一つには、用いられていた冒頭要素の全てに関して使用位置を特定しつつ示すことで非常に膨大な量の紙幅を費やすことになってしまうからである。そもそも本研究は網羅的な記述を目指しているわけではない。そのため、本稿では、ある要素に複数の使用位置と使用方法がある場合、そのうちの一つないし二つの事例を示すに留めたい。基本的には多くの事例が見つかったものを例示するが、一つ一つの事例が何例あり、他の事例と比べると何例多かったというような比較は示さない。それは、煩雑になることを避けるだけではなく、分析対象とするデータが異なればそのような数値は変動する可能性があるためである。したがって、本稿で示す事例は、本研究で多く見られた事例ではあるが、それが代表的な事例であるかどうかについてはそれぞれ個別に研究していく必要があるだろう。なお、先行研究で代表的な

[1] 遡及指向要素の中には、Schegloff(2007)の言う遡及的連鎖(retro-sequences)と関わるものが多い。遡及的連鎖とは、前章でも述べたように、時間軸上で遡ったある時点から連鎖が開始されるもののことである。Schegloff は遡及的連鎖には「他者開始修復」、「笑い」の二つが関わると述べているが、本稿でも「他者開始修復」は遡及指向要素の重要な一構成要素である。しかし、遡及指向要素は必ずしも遡及的連鎖のように遡って連鎖を開始するものだけではない。

使用位置について言及がある場合は、その先行研究を引くことによって事例紹介としている箇所もある。

５．１．遡及指向要素の性質

既に４章で述べてはいるが、遡及指向要素の性質について今一度思い出しておきたい。まず、発話の冒頭で複数の言語要素を使用する場合、遡及指向要素は後続指向要素より先に配置される。例として(5-2)を見る。

(5-2)[japn6739　14:16-14:27]
アメリカでの食生活についてＴがＵに話している。直前で、Ｔは日本食を食べないと述べている。なお、05 の「ヤオハン」は日本の食料品を中心に扱う店舗である。

01Ｔ：[↓う：:ん o-なんか：ｎ‐.hhhh あたしにとっては：
02　　お肉とか：チーズとかね,
03Ｕ：うん.
04Ｔ：ミルク＜とか：＞あｔ‐あんなものが体に合うみたいよ↑：.＝
→05Ｕ：＝**あ：**じゃヤオハンとかあんまり行か[ない？
06Ｔ：　　[行かない.

ここでは、遡及指向要素「あ：」が後続指向要素「じゃ」に先行している。仮に、「じゃ」と「あ：」の順序を逆転すると不自然に聞こえるだろう(正確に言うならば、「じゃ」で開始した発話の組み立てを止め、「あ：」から開始し直しているといった具合に聞こえるだろう)。

また、遡及指向要素の性質で重要な点として、遡及指向要素は発話冒頭において基本的に一度しか用いられないということも挙げられる。上の(5-2)は一度だけ用いられている例である。下の(5-3)は、二度使用されている例である。この例のように発話冒頭において二度使用されると、一つ目の遡及指向要素で始めていたことを取りやめ、二つ目から開始し直されることになる。

(5-3)[japn6739　20:37-20:44]

電話の中でUの音声が遠くなることがしばしばあった。

01Ｔ：ほらまた声ｋ - 遠くなった.

02　　(.)

03Ｕ：゜あ゜ｂｈ((呼気のような音))そう？＝ごめんなさい.＝

04　　＝ちょっと：じゃあは - あのうktkt((受話器を動かす音))＝

→05　　＝**あっえ**<u>::</u>ｈそ(h)う(h)な(h)の(h)：?.hhh[(はや) -

06Ｔ：　　[聞こえる:?

この例では03から05にかけて複数のＴＣＵが立て続けに配置されているが、注目したいのは05である。05は「あっえ<u>::</u>ｈそ(h)う(h)な(h)の(h):?」と、「あっ」および「え<u>::</u>」という二つの遡及指向要素が用いられている。しかし、この例は「あっ」で組み立て始めた発話を止め、「え<u>::</u>」から開始し直していると言える。このように、発話の開始し直しのリソースとして、遡及指向要素が基本的に一度しか用いられないという規則は用いられているのである。なお、この点については第７章で詳しく見る。

以上、遡及指向要素は後続指向要素に先行すること、遡及指向要素は基本的に一度しか用いられないことという二つの性質について改めて述べた。次節では、遡及指向要素には、具体的にどのような要素が含まれているのかを見ておく。その際に、先行研究では本稿が遡及指向要素と呼んでいるものをどう位置づけているのかを併せて示す。

５．２．遡及指向要素に関わるこれまでの研究

本節では、遡及指向要素には具体的にどのようなものがあるのか、それらの要素は先行研究でどのように触れられているのか、あるいはどのような連鎖のもとで使用されるのかについて簡単に見ていく。ここでは、読者が具体的にどのような要素があるのかを理解しやすくするための便宜上の区分として、先行研究を参考にして「トラブルへの対処に関わるもの」、「価値付けに関わるもの」、「承認に関わるもの」という三つに分けて概観する。これらの区分はあくまで具体的にどのような要素があるのかを知り、その要素に関してどのような研究がこれまでなされてきたのかを示すためのものである。よって、これらの区

分は順序を説明するための区分ではないことに注意されたい[2]。

なお、これらの要素は、いずれも金水(1983b)の感動詞の分類における「発始信号」に含まれるものと思われる。「発始信号」とは「あるコンテクスト(言語的・非言語的を含めて)にこの種の感動詞を差しはさんでそこを切れ目とし、そこから新しいコンテクストを始める」(p.132)ものである。金水は更に「発始信号」を次の五つに分類している。

第一種「呼びかけ」(「おい」等)　　第四種「応答」(「はい」等)
第二種「起動」(「さあ」等)　　第五種「反応」(「あっ」等)
第三種「持ちかけ」(「ねえ」)

本研究での、「価値付けに関わるもの」は第五種「反応」に、「承認に関わるもの」は第四種「応答」に対応する。「えっ」などの「トラブルへの対処に関わるもの」については金水は特に記述していないが、第五種「反応」に位置づけられる(大浜 2001)。注目すべき点として、「発始信号」は他のいかなる文要素にも先立つという、発話内の冒頭要素の順序に関わる記述がなされている。しかし、感動詞の整理を目的とした稿であったため、順序に関する記述が詳しく書かれているわけではない。

以下、各冒頭要素についての先行研究、および、連鎖上の位置について概観する。なお、ここでは詳しく一つ一つの要素に先行研究と用いられる連鎖環境を見ていくことで紙幅が長大なものとなってしまい煩雑になることを避けるため、各区分の要素全般に当てはまる指摘をしているものを取り上げ、各冒頭要素の先行研究に関しては本研究と関連が深いもの（相互行為を重視している研究、あるいは冒頭要素の順序に関わる研究）のみを挙げている。

５．２．１．トラブルへの対処に関わるもの

言おうと思ったことを上手く発音できなかった、直前の発話をうまく聞き取ることができなかった、何を言っているのか理解できなかったといったことが会話には起こりうる。Schegloff, Jefferson & Sacks(1977)は、このような産出、聞き取り、理解のトラブルに

[2] 順序を説明するための区分は 5.4.で見る。

対して参与者が組織だったやり方で修復を行なっていることを指摘している。そのようなトラブルへの対処に関わる冒頭要素をまず取り上げる。ただし、上に挙げた産出、聞き取り、理解のトラブルの他にも、予想とは異なるような発話を相手がしたといったトラブルもここでは視野に入れている。本研究が対象としているデータにおいては、次の要素が使用されていた。

え、えー、ん？、あれ？[3]

これらの要素は、何らかのトラブルに対処しようとしているという態度を示すという点で共通していると言える[4]。実例として「えー」が用いられている発話を下に示す。

(5-4) [japn1722　25:05-25:09]

01G：.hh マイアミすごい安いよ↓な::.なぜ[か.

→02F：　　[**え：**でもＬＡの方が安いよ.

03　(0.2)

→04G：**え：**<u>高いじゃ</u>::ん.

ここでは、Ｇが「マイアミの物価はすごく安い」という想定のもと１行目の発話をしており、その「すごい安い」というＧの想定がＦの想定とずれていることを「え:」を冒頭に置くことで示し（Hayashi 2009)、より物価が安いとＦが認識している「ＬＡ」を差し出して

[3] ここでは発話の冒頭で用いられているもののみを扱っている。そのため、単独で用いられているものはリストから除外している。単独で用いられているものの中に「はあ？」や「あら？」という要素があり、これらも冒頭要素として使用できる可能性はある。しかし、本研究で対象としているデータでは冒頭要素として用いられていなかったためリストに含めていない。

また、本文で順次示していくリストには、次の四つのバリエーションに関して基本となる形のみ記している。①音の引き伸ばしによるバリエーション(なんか／なんかー等)。ただし「あ」と「あー」のように働きが異なるものに関しては別の要素として扱っている。②音調によるバリエーション(語の一部の音が高く発音されている等)。③短縮によるバリエーション(ちょ／ちょっと等)。④「ね」「さ」の付加によるバリエーション(なんか／なんかね／なんかさ等)。これらのバリエーションが相互行為に与える影響はそれ自体研究対象となりうるものではあるが、本研究の焦点である順序性に関しては特に影響を与えるものではないと判断し、煩雑さを避けるためにも省略した。

[4] より大きな観点から見るならば、会話において発話は参与者同士の間主観性を達成／維持できるようデザインされるという議論とも、これらの要素は関わっている。間主観性(intersubjectivity)とは簡単に言えば「人と人との間で繋げられた、あるいは共有された理解」(Sidnell, 2010：p.12,筆者訳)のことである。会話において通常の場合、一方の言いたいことはもう一方に問題なく伝わる。これは間主観性が参与者によって達成／維持された結果である。しかし、時に、一方の言いたいことがもう一方に伝わりにくい場合がある。このような事態に対処する一つの方法が、本節で挙げている冒頭要素を用いて修復を行なうというものである。間主観性に関してはHeritage(2007)を参照されたい。

いる。また「ＬＡの方が安い」というＦの想定は、Ｇの想定とずれているらしく、４行目ではＧが「え：」を冒頭に配置して「(ＬＡは)高いじゃ::ん」と述べている。

この区分の要素に関する先行研究として、日本語記述文法研究会(2009)では「状況の変化や情報に対し驚きと同時にいぶかるタイプ」として「え？」「えー？」「あれ」等を挙げている。「ん？」に関しては特に記述は無いが、このタイプに含まれるものと思われる。

個別的な研究は、「え」や「えー」に関するものが多い（畠 1991、尾崎 1993、大浜 2001、富樫 2001 等)。これらの研究は、研究者の内省から得たものや、実際の会話を分析対象としたものまで様々であるが、相互行為を重視する本研究と沿うもので最も詳細な記述を行ったものはHayashi(2009)である。Hayashi は、発話冒頭要素として「え」や「えー」が使われる際[5]には、以下の三つの位置で用いられていることを示した。なお、それぞれの例は本研究が対象としているデータからトランスクリプトを非常に簡略化して示す。

１：情報提供に対する質問の冒頭

「(恋人は）写真ね、目が青くてさ、すぐ赤目になっちゃう。」

「**えっ**青で、髪の毛は金髪？」　(japn1722)

２：評価に対する反応の冒頭

「(物価が）マイアミすごい安いよなあ、なぜか。」

「**えー**でもＬＡの方が安いよ。」　(japn1722)

３：質問に対する反応の冒頭

「(進学祝いとして息子に車を）買う人いるかなー？」

「**えー**いるでしょー。」　(japn1612)

そして、「え」と「えー」は、前もってあった知識や前提、予想、指向から逸脱した何かに気がついたことを示すために使われていることを明らかにした。なお、「ん？」や「あれ？」も本稿のデータを見る限り、上の Hayashi の示した位置と同様の位置で用いられているよ

[5]「え」は発話の冒頭だけでなく、単独で一つのＴＣＵを構成することができる。その場合、修復の開始として用いられる。この修復の開始は、聞き取りのトラブルなのか、あるいは理解のトラブルなのかといったトラブルの原因を明確にはしない。このようなトラブルの原因を特定しない修復の開始を Drew(1997)は open-class repair initiator と呼んでいる。なお Hayashi(2009)は、「え」はトラブルの原因を明確にしないが、「えー」は予想からの逸脱がトラブルの原因であることを述べている。

うである。

５．２．２．価値付けに関わるもの

前の発話の中に、知識状態を変化させるものがあったことを示す、あるいは何らかの新情報（ニュース）が含まれていたことを示す冒頭要素がある。これは発話者が前の発話の中に何らかの価値を見い出したとも言える。それゆえ、本稿ではこれらの一群を「価値付けに関わるもの」とした。本稿が対象としたデータの中でこれに当たるのは、以下のものである。

あ、あー、あらあら、おー[6]、へー、ふーん

実例も併せて見ておこう。下の例では９行目の「お :」が冒頭要素として使用されている。

(5-5)[japn1773　01:51-01:58]
Ｈが自分と恋人との関係についてＩに話している。
01Ｈ：なんか一人だけ違うから：,
02Ｉ：うん.＝
03Ｈ：＝誰にもゆってないのそのことを.
04　　(0.2)
05Ｉ：何を？
06　　(.)
07Ｈ：.hh 付き合ってるって.秘密なのね.
08　　(.)

[6]「おー」についてはバリエーションが他の要素と比べて非常に豊富である。例えば、「おー」「うおー」「わおー」「おわー」「ぬわー」といった形式があり、さらに声量の増大、音調の高低、音の引き伸ばしも見られた。これはおそらく、定型にすることの冷静さに関わると思われる。「おー」は一般に「驚き」を示す要素であると言えるだろう。「驚き」は「冷静さ」を失った状態であるとも言える。つまり、定型的に「おー」とだけ発話するよりも、定型を崩したバリエーションの形で発話する方が、定型を発話する「冷静さ」を欠いた状態であることを相手に示すことができる。相手に自分の「驚き」を見せるという活動が、このようなバリエーションの豊富さを生んでいると思われる。

→09Ｉ：**お：**すごいじゃん.

ここでは01/03の広い意味での情報提供に対して、05でＩが「何を？」と明確にするよう求めている。それに対して07でＨは自分たちが付き合っていることを秘密にしているという内容を述べている。この情報に対してＩは「お：」を冒頭に配置して「すごいじゃん」と評価している。

この区分の要素を全般的に扱っているものとして、富樫（2001）が挙げられる[7]。富樫はこれらを「情報の獲得を示す談話標識」としている。更に、「あっ」「えっ」「おっ」を「あ」系としており、これらの要素が「バッファ[8]への情報書き込み」を示していることを指摘している。また、「ふーん」「へえ」「ほう」を「ふーん」系としており、獲得した情報をバッファに残さず、直接データベースに書き込みしたことを示す談話標識であるとしている。このことは、日本語記述文法研究会（2009）の、「あー」が「考えている最中であることを表すタイプ」、「ふーん」が「解決への接近あるいは納得を表すタイプ」であるという指摘と方向を同じにしているものであると言える。対話の実例をデータとしたものに、土屋（2000）がある。土屋は「ふうん」「へえ」「ほう」を「ふうん」系とし、「先行文の受け止め」を基本的機能としている。また、その時の先行文は、応答者への行動、発話を要求しないものに限るという制限があると述べている。また、「あ」「あっ」等を「あ」系としているが、これについては「一語の中にさまざまな事態を含む」として基本的機能を明確に提示できてはいない。

「あ」と「あー」に関しては、しばしば話者の知識状態に注目するアプローチがなされてきた（田窪・金水1997、富樫2001,2005a等）。知識状態についての先行研究で最も重要なものの一つとして、英語のohについて仔細な分析を行なったHeritage(1984)がある。Heritageは、ohは「現在の知識、情報、指向、認識に関する話者の現在の状態になんらかの変化が起きたことを示すために」(p.299、筆者訳)用いられるchange-of-state tokenであると述べている。この議論を受けて、西阪(1997a)は「あ」が「いまわかった」ということを示すと同時に「それまでわかっていなかった」ということを明らかにするという相

[7] 富樫はこれらの要素を個別にも研究している。例えば富樫（2005a）では、「あっ」の機能として変化点の認識を示すことを指摘している。また、富樫（2005b）では、「へえ」と「ふーん」はいずれも新規情報と既存情報との関連性の処理を行なっているとしている。

[8] 富樫は情報処理に関する「心的領域」の内部が「バッファ」と「データベース」に区分されていると仮定している。「データベース」とは情報の格納場所であり、「バッファ」とは情報の逐次的な処理を行う作業領域である。

互行為上の働きを持つことを指摘している。また、細馬（2005）は、「あ」によって知識状態に変化が起きたことを示すことで、相手の注意を後続する発語に向けさせることができると述べている。Heritage は oh が用いられる主要な位置として①情報提供(informings)と②修復(repair)の後であることを示した[9]。日本語の「あ」あるいは「あー」も基本的には Heritage の示す oh と同じ働きをしていることは、これまでの会話分析の先行研究の中で度々指摘されており(例えば Mori,2006、細馬,2005 等)[10]、。実際、本研究で対象とするデータを見る限り、上の①と②に関しては「あ」も「あー」も同様の位置で用いられていた。本稿で対象にしているデータを見る限り、「あらあら」も情報提供（正確には自身の質問が引き出した情報提供）に対して用いられているようである。

「へー」の連鎖上の位置および働きについては Mori(2006)が詳しい。Mori によると「へー」が用いられるのは情報提供に対してであり[11]、最も頻繁なのは「へー」を単独で使用するケースである。そして、冒頭要素として「へー」が用いられた際には、後続する発話が newsmark である場合と関連する別のトピックへとシフトする場合の二つがあることを示している。情報提供に対して用いられるという点に関しては、「おー」や「ふーん」も本稿のデータを見る限り同様である。

５．２．３．承認に関わるもの

相手の発話に対して、何らかの意味で承認すること、あるいは承認しないことを示す要素も冒頭要素として用いられる。例えば、以下のようなものである。

うん、そう、ねえ、まあね、ううん、いや

[9] なお、Heritage(1984)は、この二つの位置をさらに詳細に記述している。具体的には①の情報提供に関しては、情報提供された話者による oh、質問が引き出した情報提供(question-elicited informings)を受けた話者による oh、情報提供に対して別の情報提供がなされた場合(counter informings)に訂正を行なう発話の冒頭に用いられる oh という３つを検証している。②の修復に関しては、他者開始修復(other-initiated repair)がトラブルを解決した後の oh、自分の理解が正しいかチェック(understanding check)をし、それに対して相手が確認を与えた後の oh、相手が言っていないことに対して、自分の理解を示すときの oh という３つの位置を分析している。

[10] 一方、Heritage の示す change-of-state token とは言えないような「あ」「あー」も存在するため、oh と「あ」「あー」とが完全に一致するものとしては記述できないことも同じ論文などでこれまで多く指摘されてきている。

[11] Mori は更に詳しく、情報提供が完了可能点に到達した後と、到達する前とに分類し、それぞれの「へー」がどのように用いられているのかを分析している。

次の例では３行目に「うん」を冒頭に配置した発話がなされている。

(5-6)[japn1612　05:51-05:56]

ＡとＢの双方が知っている家族について話している。その家族の一人が別の地域に住んでおり、毎週家に帰ってくるらしい。その人物についてＡは 01 で話している。

01Ａ：帰って来ていつもほら下の子を：.hh 助けてるんだって.

02Ｂ：へ::[：.

→03Ａ：　　[うん下の子をいろ(いろ)教えてるだ[って.

この例では、両者の知人の家に「上の子」が帰って来て「下の子」を助けているという情報提供がＡからＢになされ、Ｂはそれに対して「へ::」と反応している。その「へ:::」の末尾と重なって、Ａは「うん下の子をいろ(いろ)教えてるだって」(03)と「うん」を冒頭に置いた発話をしている。

この区分の要素は「肯定／否定」の文脈で語られることもあるが、実際の使用を見てみると、「肯定／否定」だけには留まらない幅広い用いられ方をしている。本稿では、より広い意味でこれらの要素を捉えておきたいので、ひとまず「承認に関わるもの」としておく。これらは「承認することに関わる要素」として「うん」「そう」「ねえ」「まあね」、「承認しないことに関わる要素」として「ううん」「いや」とに分類できる。

上のリストに挙げたような要素を全般的に扱った先行研究として奥津(1989)、そして奥津の研究を発展させた沖(1993)がある。彼らは「はい」系と「いいえ」系の要素が談話の中でどのように使われているのかを調べるために数量的な分析を行ない、体系化を図っている。あるいは、富樫(2002c、2006)のような作例に基づく分析も行なわれている。

また、土屋（2000）は、「いいえ」「いえ」「いや」の「いいえ」系が持つ、「はい」「ええ」「うん」の「はい」系には無い特徴として情報発信の予告という機能を持っていることを指摘している。串田（2005a）も「「いえ」はそれだけで完結した発話になることがままあるのに対し、「いや」はそれだけで完結した発話になることがほとんどない」(p.44)と、土屋に似た指摘を行っている[12]。

どのような連鎖的環境でこういった要素が用いられているかに関しては、日本語記述文

[12] このように、「いや」は後続発話を強く予告する。その点において、遡及指向要素の中でも最も後続指向要素に近い要素と言える。ただし、「いや」は先行発話に対して反応しているということを主張している(串田・林、印刷中)という点でひとまず遡及指向要素に含めている。

法研究会（2009）が、疑問文、命令文、依頼文、誘いの文、許可求めの文に応答する場合としている。さらに詳しい連鎖上の位置についての記述は次のようなものがある。

まず、串田(2002,2006a/b,2009b)は、会話における引き取り[13]や理解チェック連鎖[14]で「うん」と「そう」が共通して使われていることを指摘している。なお、本稿のデータを見ると、「うん」は、相手の認識や知識の状態が変化した次のターンもでしばしば用いられているようである。つまり、一方が「あっ」等で知識状態が変化したことを示した(Heritage,1984)次のターンで、あるいは、「なるほど」、「へー」といったニュースの受け取りを示した次のターンで、しばしば「うん」が使われているのである（上の例(5-6)の３行目を参照)。

串田(2005a)も「いや」に関して、連鎖上の位置に注目した記述を行なっている。串田は「いや」が用いられる主要な位置として以下の六つを挙げている。

１：Yes/No 質問への応答の冒頭

２：WH質問への応答の冒頭[15]

３：評言・意見表明などに対する反論や釈明の冒頭

４：相手の聞き間違いや誤解を正す発話の冒頭

５：自分の先行発話（部分）を撤回する発話（部分）の冒頭

６：物語などひと続きの長い発話の発話者が、聞き手の性急な感想などの反応を制止し、発話を続けるときの冒頭

---

[13] 「引き取り」とは「一人が産出し始めた文を完了しうる統語的要素が現れる前に、もう一人がそこまでの発話と統語的に連続する形で次の発話を行うというやりとりのパターン」（串田 2002）である。例えば、串田の挙げている事例では、一方が「結局このトマトほとんど」と言った段階で、もう一方の参与者が「食べちゃったね」と言っており、この「食べちゃったね」という発話が引き取りとなる。串田は引き取りの後の「うん」と「そう」の違いについて考察している。引き取りは必ずしも引き取った後に発話を完了可能点まで進められるわけではないが、串田（2006b）では、引き取りの後、上の事例のように完了可能点まで発話を進行させる「先取り完了」への承認について見ている。

[14] 「理解チェック連鎖」とは、産出された発話に対して、聞き手が理解の候補を提出するというやり方で開始される修復連鎖のことである。串田（2009）で挙げられている事例では、ピザを食べながら会話しているときに一人が「あたしもこげてるの欲しい.」と相手の前にあるピザを指差して言い、それに対して「これ？」と自分の前のピザ片に手を添えて理解が正しいかチェックしており、それに対して「うん」と確認が与えられている。

[15] WH 質問への応答に用いられる「いや」に関しては串田・林（印刷中）が詳細な分析を行なっている。彼らによれば、WH 質問に対する返答の冒頭に配置された「いや」は、「質問への抵抗」として用いられ、次のような相互行為上の働きを持ちうる。①直前の質問に不適切性が見出されたという注意喚起となる。②どのような不適切性かを知るために後続部分をモニターせよという教示となる。③発話を質問への返答として聞けという教示となる。なお、彼らの言う「返答」(response)は「応答」(answer)ではないことに注意されたい。「いや」は WH 質問が要求している応答形式(例えば、「いつ」に対しては時間、「どこ」に対しては場所)に対して適合しない成分である。そのため後続発話が直後に続くことを投射する。もう一点注意しておきたいことは、「いや」は反応的な要素であるということである。そのため、参与者には応答が開始されていなくとも、何らか返答がなされていることが認識可能となる。

以上、簡単にではあるが、承認に関わるものについて見てきた。

ここまで、「トラブルへの対処に関わるもの」、「価値付けに関わるもの」、「承認に関わるもの」という便宜上の三つの区分ごとに、先行研究において連鎖上の位置に関してどのような指摘がなされてきたかを見てきた。これらは各要素が用いられる際の連鎖上の位置を網羅するものではないが、具体的にどのような要素があるのかを知ることにおいては十分であろう。次節では、これまで見てきた遡及指向要素の種類のうちの複数に関わるような横断的な特徴について述べていく。

５．３．遡及指向要素に関わる区分の複数に共通する特徴

前節では、遡及指向要素には具体的にどのようなものがあるのかについて、トラブルへの対処に関わるもの、価値付けに関わるもの、承認に関わるものという便宜上の分類によって見てきた。これらのいくつかに共通して当てはまる特徴について本節では二点だけ述べておく。

まず一つ目は、トラブルへの対処に関わるものと価値付けに関わるものは、response cry(Goffman,1981)の一種だということである。response cry とは、発話者の内面の状態が自然に現れたものとして他の参与者に理解されるもののことである。遡及指向要素の多くが response cry であるように見えるのは、遡及指向要素が「直前の状況に反応した」ものであることと密接に関わっている。内面の状態が漏れ出すことは反応の一種であると言える。その内面の状態が「自然に現れた」ものとして見えるためには、その原因となりうる状況からできるだけ発話間の距離が「近く」なければならないだろう。遡及指向要素は、まず第一に発話の冒頭に置かれる。さらに、後続指向要素よりも先に配置される。つまり、遡及指向要素は発話の組み立てにおいて、前の発話との距離が最も「近い」位置で用いられるのである。遡及指向要素が発話の組み立てにおいて他の要素よりも先行するという位置の制約は、発話者の内面が自然に現れたことを示すという要請から導き出されたものであると言えるだろう。ここで注意しておきたいことは、発話者の内面が自然に現れたことを示すということと、実際に発話者の内面が出てきていることはイコールではないということである。仮に発話者の内面というものがあると想定したとして、「えっ」や「あっ」や「おー」などで示された内面が本心であろうが作り物であろうが、相互行為にとって重要

なのは、つまり、会話に直接影響してくることは、「発話者の内面が自然に現れたもの」という装いである。そして、他の参与者は、その装いに対応することで会話を進行させているのである。

もう一つは、時間軸上で遡った「後ろ向き」のことに対応する後続部分、あるいは「前向き」に事態を進展させる後続部分という二方向の後続部分への橋渡しの働きをするということが挙げられる。具体的には価値付けに関わるもののうち「おー」「へー」「ふーん」、承認に関わるもののうちの承認することに関わる要素についてである。例えば、「彼女できたんだ」と言われたことに対して「へーそうなんだ」のような答え方もできれば、「へーどんな感じの人？」のような答え方もできる。前者は［情報提供-情報受理］という連鎖を最小限にしない形で閉じている[16]。後者は直前の連鎖を最小限に閉じることで、前の連鎖に関わる新しい連鎖（ここでは［質問-応答］という隣接ペアの第一部分）を配置するものである。上に挙げた要素は、冒頭要素に後続する発話の性質に二つの方向性が見られる。つまり、時間軸上で遡った「後ろ向き」のことに対応するもの(連鎖を閉じる働きを最小限ではないふるまいにするもの)と、事態を「前向き」に進行させるもの(前の連鎖に関わる新しい連鎖を配置するもの)という二つの方向性である。遡及指向要素自体は前の状況への反応であるが、「後ろ向き」の橋渡しとして使われる場合、後続発話は前の状況に対する反応がまだ続いていることを示す。それによって、相手が更に連鎖を後方に拡張する余地を残すことができる。一方、「前向き」の橋渡しとして使われる場合、後続発話は前の状況を踏まえた上で新たな局面へと展開することとなる。その場合、どのように展開するか、つまり、どのような連鎖を後続発話に配置するかは、その話者が比較的自由に決めることができる。この「後ろ向き」と「前向き」という二つの方向性への橋渡しとして、上に挙げた遡及指向要素は用いることができるのである。

以上、横断的な特徴として response cry との関わりについて、そして、後続発話が「後ろ向き」あるいは「前向き」の展開をする橋渡しのような働きについて述べた。次節では、本章で特に焦点を当てている複数の遡及指向要素の使用について検討する。

[16] ここで最小限という言葉を使っているのは、「へー」だけでもこの［情報提供-情報受理］という隣接ペアを閉じることができるためである。つまり、「へーそうなんだ」は「へー」に比べて最小限ではないという意味である。

５．４．複数の遡及指向要素の使用と順序

前節まで、遡及指向要素の全般的な性質を述べ、具体的な要素にどのようなものがあるか先行研究を交えつつ紹介してきた。遡及指向要素の重要な性質の一つが「発話の冒頭では基本的に一つまで」という制約であることは既に指摘しておいた。実際、本研究で対象としたデータにおいて、大多数の事例では冒頭において遡及指向要素は一度しか用いられていない。また、複数用いられていても、その多くは自己修復を行なっているものであった。しかし、特定の連鎖状況では複数使用されることもある。それゆえ制約に「基本的に」という語を入れておいたのであるが、本節では、遡及指向要素が複数使用される連鎖環境とはどのようなものなのか、そして、複数使用されている際の順序について実例の分析から考えてみたい。

以下、5.4.1.では遡及指向要素が発話の冒頭で複数使用される際の連鎖環境について、「トラブルにより遅延していた反応」と「想定外を含む反応求めに対する反応」という二つについて見る。次の5.4.2.では、そのような連鎖的環境から発話者に二つのことが同時に求められており、それぞれに対処した結果、発話の冒頭で複数の遡及指向要素が用いられていることを述べる。続く5.4.3.では、複数の遡及指向要素が用いられる場合の順序について考察する。その際、ある発話を巡って二人の認識に「不一致」があったことを示す要素が「求められている反応」に先行することを主張する。

５．４．１．複数使用される連鎖環境

まず、遡及指向要素が発話の冒頭で複数使用されていた事例を検討する。ここでは、「トラブルにより遅延していた反応」と「想定外を含む反応求めに対する反応」という二つに分け見ていく。実際には、遡及指向要素が連続して使用される連鎖環境はこの他にもあるかもしれないが、本稿で分析対象としているデータにおいては上記の二つの連鎖環境があったため、以下ではその連鎖環境を示していく。

５．４．１．１．トラブルにより遅延していた反応

一つ目は、質問等によって反応が求められているにも関わらず、その質問の意味が分からなかった等のトラブルが生じ、反応できずにいたという環境である。そのような環境で、トラブルが解決し、遅延していた反応を提出する際に複数の遡及指向要素が用いられることがある。

具体的には、価値づけに関わるもののうち「あ」および「あー」が使用される場合である。これらが発話の冒頭で用いられる場合、知識状態が変化したことを示すことになる（Heritage 1984、西阪 1997a、細馬 2005 等）。この変化が何らかの貢献となって、それまでできなかった「反応」ができるようになるという状況においては、「あ」や「あー」の後に遡及指向要素が配置されうる。例えば、下の例では「↑あ :」と「いや」という二つの遡及指向要素が用いられている。

(5-7)[japn4044　00:07-00:17]

ＫがＪのために何かを送るという話が、収録前になされていたようだ。なお、Ｋの６行目の「そうゆう変な声出していいのか？」というのは、この会話が録音されていることに配慮した発話である。

01Ｋ：じゃあ,送ってやる.
02　　(.)
03Ｊ：ｈ：[ｈｈ]°ｈｈｈｈ°[ｈ.hh]h
04Ｋ：　　[ｈｈ]　　[うん.]
05Ｊ：＜あ：り：↓が：と：[::＞＿]
06Ｋ：　　[そうゆう]変な声出していいのか？
07　　(0.7)
08Ｋ:¥あ[(h)りが：とうみたいな.¥
→09Ｊ：　[え？
10　　(0.5)
→11Ｊ：↑**あ：いや**いいんじゃないの：.＝
12Ｋ：＝あいいの :?

ここでは、01 でのＫの「じゃあ,送ってやる」という発言に対して、Ｊが 05 で「＜あ：り：↓が：と：::＞__」と感謝を述べている。この発話は、①スピードが遅く、②各母音が伸ばされており、③「が」の音でピッチが下がり、④文末が平板調であるという非常に演技がかった発話の口調となっている。この演技がかった口調に対してＫは「そうゆう変な声出していいのか？」(06)と、録音されている状況に配慮した質問をしている[17]。しかし、このＫの質問にＪは 0.7 秒もの間反応を示さない。この状況に対して、Ｋは８行目で「￥あ(h)りが：とうみたいな.￥」と、６行目の自身の質問に含まれる「変な声」という言葉を実演によって明確にしている。これは、Ｋが自分の質問(06)をＪの理解のトラブルの原因であったと捉え、７行目の 0.7 秒の沈黙に対処した発話であるだろう。時をほぼ同じくして、Ｊも９行目で「え？」とトラブルの原因を明確にしない形で修復の他者開始を行っている。さて、注目したいのは 11 行目である。ここでは「↑あ：いやいいんじゃないの：.」と「↑あ:」と「いや」という二つの遡及指向要素が冒頭に用いられている。ここで二つの遡及指向要素が用いることができるのは、直前にトラブルが発生しているためである。ここで直前に起きているのはＫの６行目の「変な声」という表現に関する理解のトラブルであった。その解決のためのヒント(08)が出されている状況で「↑あ:」と発することは、トラブルが解決されたことを示せるだろう。さらに、この連鎖環境において重要なのは、６行目でＫによってなされた質問にＪはまだ答えていないということである。一般に、質問に答える上で何らかのトラブルがあった場合、そのトラブルが解決したら「すぐに」質問に答えるべきであろう（Sacks 1992)。ここで「↑あ:」と「いや」が立て続けに配置されているのは、トラブルの解決の直後に質問への答えを始めるためであると言える。以上のことを、ポイントとなる行だけを示すと次のようになる。

06Ｂ：そうゆう変な声出していいのか？	質問
↓ 09Ａ：え？	↓ 反応ができないトラブル
↓ 11Ａ：↑あ：	↓ トラブルの解決
11Ａ：いやいいんじゃないの：.	応答

図 5-1：トラブルにより遅延していた反応の流れ１

[17] 厳密に言うならば、06 の「そうゆう」というのは、オーバーラップする前のＪの口調の状態を指している。つまり、①～④の特徴のうち、①～③を指して「そういう」と言っている。

このように、「あ：」によってトラブルの解決が示され、それまでできなかった「応答」ができるようになるという状況においては、遡及指向要素が発話の冒頭で複数使用できると言える。

ただし、次の事例のように、質問に答えることよりもトラブルの明確な解決が参与者に指向されている場合、「あ：」の直後に「うん」や「いや」が続かず、遡及指向要素が連続することはなくなる。次の事例でも、上の事例と同様に[「え？」＋「間」＋「あ：＋後続発話」]というターンの組み立てとなっているが、後続発話は１行目の質問に答えることに指向したものではなく、トラブルの解決に指向したものとなっている。

(5-8)[japn1722　01:30-01:37]

01Ｇ：.hhhhで,

02Ｆ：(そ[うそ)

03Ｇ：　[彼氏とはうまくいってるかな:?

→04Ｆ：.hhえ？ｈ：

05　(0.3)

→06Ｆ：.hh**あ：**こっちの？

07Ｇ：うん.

08Ｆ：まあね.ｈｈ[ｈｈ：

この事例でも「で,彼氏とはうまくいってるかな:?」(01,03) という質問に対して、「え？ｈ：」(04)とトラブルの原因を明確にしない形で修復の他者開始を行っている。事例 (5-7) と異なるのは「あ：」の後に遅延していた反応をするのではなく、「こっちの？」とトラブルの解決を優先させている点である。このような場合、遡及指向要素は連続して用いられることはないと言える。

反応が求められているにも関わらず、意味が分からなかったというトラブルが生じ、反応できずにいたという環境をもう一つ挙げておこう。下の例では、７行目に「あっ」と「あ」という二つの遡及指向要素が連続して使用されている。

(5-9)[japn6739　02:29-02:41]

ＴとＵは自分の家の庭について話している。直前では、庭でスイカを作ったことがあるとＴはＵに伝えており、１行目でＵが驚いている。なお、２行目の「う：ん」は１行目の「ほんと：:」に対する反応である。

01Ｕ：す(h)ご(h)：(h)い.h[h¥ ほんと]：[：.¥

02Ｔ：　　[それでね：,]　[う：ん一年のその夏の

03　　終わりに：あの：: う笑っちゃったんだけど：.hh 結局：買った方が

04　　ウォーターメロンの場合なんか安いの.

→05Ｕ：え↑ ：：:?＝

→06Ｔ：＝＜お水がいるのよね[：: .]＞　((困ったような音調))

→07Ｕ：　　[**あっ**]**あ**なるほどね：.＝

２行目から４行目まで、Ｔは庭で作るより買った方がスイカは安いということをＵに伝えている。それに対して、Ｕは５行目で「え↑ ：：:?」とかなり特殊な音調で驚きを表明している。この驚きは、直前の発話の聞き取りや意味の理解に問題があったことを示しているというより、直前の発話の理路が分からずを受け入れることができないことを示しているものと思われる[18]。この理路は６行目で水がいるからだと明らかにされている。注目したいのは７行目で、「なるほど」の前に「あっ」と「あ」が連続して用いられている。これは、最初の「あっ」が５行目から始まったトラブルを解決するための連鎖の答え（06）に対するものであるのに対し、二度目の「あ」は、そのトラブルの連鎖を経て理路が明らかになった２行目から４行目の情報提供に対する反応であるものと思われる。この事例も簡単に図示しておく。

[18] このような特殊な音調の「え:」は、日本語記述文法研究会(2009)が述べている「状況の変化や情報に対して驚きと同時にいぶかるタイプ」に分類されるようなものであると思われる。なお、Schegloff, Jefferson & Sacks(1977)が論じている修復の組織はあくまで、発話の産出、聞き取り、理解に関わるトラブルを対象としているものである。そのため、ここで扱っているような直前の発話の理路が分からずを受け入れることができないことを示すものは、厳密な意味では彼らの論じるトラブルに含められていない。しかし、驚きを示すこととトラブルへの対処は、①直前の発話をそのままでは受け取ることができないと示すものであり、②相手にその原因を解消するよう求めることになるという点で非常に似ており、ここではSchegloff らとは異なり、トラブルを広く捉え、理路に関わるトラブルも含めることとする。

02-04Ｔ：それでね：，　一年の…	情報提供
05Ｕ：　え↑：：:?	理路が分からないトラブル
06Ｔ：＜お水がいるのよね[：：.]＞	解決のための理路の説明
07Ｕ：**あっ**	トラブルの解決
０７Ｕ：**あ**なるほどね：.	情報の受理

図 5-2：トラブルにより遅延していた反応の流れ２

本節をまとめておこう。遡及指向要素が発話冒頭で複数使用される連鎖環境の一つとして挙げられるのは、トラブルが解決した直後に求められていた反応をする場合である。つまり、(5-7) および(5-9)で見た事例は、「トラブル」への対処と「反応を求める行為」に指向した反応の二つ作業を発話冒頭で行なった結果、遡及指向要素が複数使用されたものである。

５．４．１．２．想定外を含む反応求めに対する反応

想定外の反応求めに対する反応も、遡及指向要素が発話の冒頭で複数使用されている連鎖環境として挙げられる。例として次の会話を見てみたい。この会話場面の直前では、Ｎが仕事で関わっている冊子（地域情報誌と思われる）が和食レストランである「サクラバナ」に置いてあることがＮによって明らかにされた。ここではＯがその「サクラバナ」で食事したことが述べられている。注目したいのは５行目で、「え：」と「いや」という二つの遡及指向要素が用いられていることである。

(5-10)[japn4261　14:36-14:44]

01Ｏ：そうそうそうげ(h)つ(h)よ(h)う日の晩飯で￥サクラバナで￥

02　　ごは(h)ん食(h)べ(h)た.

03Ｎ：あそこっ[てなんかまあまあなんでしょう？]

04Ｏ：　　[　.hh　　.hh　　.hh　((笑い))]

→05Ｏ：￥**え：いや**＞**っていうか**＜お↑寿司食べるんだったら一番まとも

06　　だよあそこ：.￥

Ｏは１行目の冒頭で「そうそうそう」と何かを思い出し(日本語記述文法研究会 2009[19])、その思い出した内容について「げ(h)つ(h)よ(h)う日の晩飯で￥サクラバナで￥ごは(h)ん食(h)べ(h)た.」と述べている。ここで重要なのは、この発話が笑いながらなされているということである。このことによって、Ｏに何か「おもしろいこと」があることが示されている。しかし、述べられている発話は「月曜日の晩飯でサクラバナでご飯食べた」であり、「おもしろいこと」に当たるものが見出せない。それゆえ、この発話は「おもしろい話」を後に語るための予告になっていると言えるだろう。このように予告された聞き手にとって適切な反応は、その「おもしろい話」を語らせるよう語りの継続を促すことであろう。しかし、実際３行目でなされていることは、「あそこってなんかまあまあなんでしょう？」と「サクラバナ」の評価を聞く質問である。この質問によってＯは質問に答えなければならない状況になるため、「おもしろい話」が語れなくなってしまう、あるいは質問に答えながら「おもしろい話」を語らなければならなくなってしまう。そのような意味でＯにとって想定外の質問であると言えるだろう。また、「続きを促す」のに適切な場所で３行目のような質問をすることは、「続きを促していない」とＮには捉えることが可能となる。このことは、Ｎの質問が全く笑いの要素を含んでおらず、Ｏの「おもしろい話」への指向に同調していないことからもわかる。「おもしろい話」を予告したＢにとって、「おもしろい話」に同調するわけでもなく「続きを促していない」反応をされているという意味でも、３行目の質問は想定外の質問であろう。Hayashi(2009)によれば発話の冒頭に配置される「え：」は、話者の想定からの逸脱への気付きをマークする。ここでの「え：」も Hayashi が指摘している想定からの逸脱を示しているものと思われる。このように、５行目では、１・２行目でＯが既に投射している「おもしろい話」を語るという行為の軌跡からずれた３行目の質問の直後であり、その３行目の質問に答えなければならないという位置にＯは直面している。ここでＮが「え：」と「いや」という二つの遡及指向要素を冒頭に配置しているのは、この状況に対応するためであると言える。つまり、想定していたコースからずれていることを示すために「え：」[20]を、質問に答えるために「いや」を立て続けに配置しているのである。以上のことをポイントとなる行だけ示すと以下のようになる。

---

[19] 正確には「記憶を新規に呼び起こすことを示す」とされている。

[20] この位置で想定していたコースからのずれが示されたことは、Ｏにとって、自身の直前の発話（３行目）が、Ｎの想定からずれていることを認識する資源となりうる。この資源が活用されれば、Ｏはこの後、相手が想定していた行為の軌跡が何であったのかを探る活動(発言を控える、１・２行目をくり返して確認する等)を行なうかもしれない。

01O	：そうそうそうげ(h)つ(h)よ(h)う日の	「おもしろい話」を
	晩飯で¥サクラバナで¥…	投射する報告
03N	：あそこってなんかまあまあなんでしょう？	ずれた質問
05O	:¥**え：いや**＞っていうか＜お↑寿司…	想定外の表示＋応答

図 5-3：想定外の質問に対する反応 1

上の例では、質問が「想定外を含む反応求め」であった。下の例では、質問ではなく、説明が想定外の終え方を迎えた事例である。下の例では 13 行目の発話の冒頭に「あっ」と「↓ああ」という二つの遡及指向要素が連続して用いられている。

(5-11)[japn6739　02:41-02:49]　※(5-9)の続き

Ｔは自宅の庭でスイカを作っていたことがあるらしい。

01U：す(h)ご(h)：(h)い.h[h¥　ほんと　]：[：.¥

02T：　　[それでね：,]　[う：ん一年のその夏の

03　　終わりに：あの：: う笑っちゃったんだけど：.hh 結局：買った方が

04　　ウォーターメロンの場合なんか安いの.

05U：え↑：:：?＝

06T：＝＜お水がいるのよね[：: .]＞　((困ったような音調))

07U：　　[あっ]あなるほどね：.＝

08T：＝＜も：[う＞水をどんどんどんど[んどんどんどんどん＝

09U：　　[あっそっか：.　　[あ(h)：.

10T：＝入れないとスイカでしょう？＝

→11U：＝**あ：**[なるほど：.

→12T：　　[大きくならないのよ：.＝

→13U：＝**あっ**(.)**↓ああ**↓そうか：:: .＝

６行目でＴは、作るより買った方がスイカは安いということに関して「＜お水がいるのよね[：:.]＞」と困ったような音調でＵに伝えている。その詳しい説明が 8 行目から 12 行目までなされている。この説明に対するＵの反応で特徴的なのは 11 行目と 13 行目である。８行目から 10 行目にかけてＴが説明しているのは、スイカには水をかなり大量に使うとい

うことであるが、その発話の末尾が「入れないとスイカでしょう？」となっている。この発話は「入れないと」と、「入れないと～になる」や「入れないと～だ」の後続部分である「～になる／～だ」がまだ言われていない段階であるため、そのような後続部分がこれから発話されることを投射する。しかし、この発話がなされている連鎖上の位置を考えると、この投射がその後に続く複雑な状況を生むことになっている。

８行目から始まる発話の直前では、前節で説明した通りトラブルを解決するための連鎖（５行目から７行目）がなされている。このトラブルはUが２行目と４行目の発話から[なぜ安いのか]の理路が分からなかったためであった。そのトラブルが解決された直後である８行目は、次の二通りの連鎖上の位置として考えられる。一つ目の可能性は、もしＴが７行目のUの発話で示された解決を何らかの意味で不十分なものとして捉えた場合に、８行目は更に[なぜ安いのか]の詳しい説明をすることができる位置だということである。つまり、トラブルへの対処をやり直す場合のことである。二つ目の可能性は、[なぜ安いのか]の説明は既に解決されたこととして、次に[なぜ水が要るのか]の説明に移行することができる位置というものである。このことは、理路の説明をやり直しているというよりも拡張していると言えるだろう。やや複雑であるので、下に表にしておく。

表 5-1：８行目から 10 行目までの発話の二つの可能性

	６行目との関係	８から 10 行目のＴの発話の行動
可能性１	やり直し	「なぜ安いのか」の説明を開始
可能性２	拡張	「なぜ水がいるのか」の説明を開始

８行目がこの二つの可能性のうちどちらであるのかは、８行目から 10 行目までの発話からは判断しにくい。８行目から 10 行目までの発話が、可能性１の「なぜ安いのか」の説明としてなされている場合、後続部分は「水道代がほんとにかかるのよ」のような費用に関する言及が投射されるだろう。一方、可能性２の「なぜ水がいるのか」の説明としてなされている場合、後続部分は「育たない」や 12 行目のように「大きくならない」のようなスイカの性質に関する言及が投射されることとなる。

このように、二つの方向での投射の可能性があるけれども発話自体は完了していないという状況で、Uは「あ：なるほど：.」（11）と投射されうることを先取りして予測し、説明を受け取ったことを示している。その「あ：」の直後に、Ｔは「大きくならないのよ：.」

と 12 行目で述べている。これは先ほどの二つの投射可能性のうちの可能性２の「なぜ水がいるのか」の説明としてなされていたことがわかる。

しかし、続く 13 行目のUによる発話は、「あっ」と「↓ああ」という二つの遡及指向要素が用いられている。この発話は、U自身が 11 行目で相手の先取りして「あ：なるほど：」と言っているにも関わらず、12 行目の発話を聞いて、「あっ」と認識の状態が変化したことを示している（Heritage,1984)。この「あっ」は、おそらく 11 行目の「あ：なるほど：」と言った時に想定していたこととは異なることが 12 行目に配置されたことを示しているものと思われる。そもそも上に書いたように、８行目から始まる発話は二つの方向への投射の可能性があった。仮にUが可能性１の「なぜ安いのか」の説明として８行目から 10 行目の発話を聞いていた場合、12 行目の説明は想定外の答えとなるだろう。その場合、13 行目は、まず「あっ」によって自身が依拠していた連鎖（理路の説明のやり直し[可能性１]）とは異なる連鎖（理路の説明の拡張[可能性２]）に相手が依拠していたこと、簡単に言うならば[なぜ安いのか]の説明ではなく[なぜ水がいるのか]の説明であったことへの認識の変化を示していると言える。そして、続く「↓ああ」で、その[なぜ水がいるのか]の説明に対する反応であることを示しているのであろう。

この解釈を支持するUの発話の特徴として 11 行目と 13 行目で発話の構成が異なることが指摘できる。11 行目は「あ：なるほど：.」と言っており、７行目とほぼ同じ発話となっている。７行目は前節で書いた通り、「あっ」でトラブルの解決を示し、「あなるほどね：」と２行目の情報提供の理路がわかったことを示している。その後の、スイカには水が大量にいるというＴの発話に対して１１行目がほぼ同じ反応をしているということは、６行目のやり直し（つまり、可能性１[なぜ安いのか]の説明）として聞いていることがわかる。

一方、13 行目は「あっ」と認識状態の変化を示した後、「↓ああ↓そうか：::.」と言っている。この発話は低く発音されていることから、単に情報を受け取っているだけでなく、困ったことだと捉えていることが示されていると言える。これは６行目のＴの困ったような音調に対応している。８行目から 12 行目は、６行目の拡張としての説明（つまり、可能性２の[なぜ水がいるのか]の説明）であり、その終わりうる位置で「↓ああ↓そうか：::.」と困ったこととして捉えていることを示すことから、Uはその拡張された連鎖に依拠していることがわかる。11 行目ではそのような困ったこととして捉えたことの表示はなされておらず、Uが 11 行目では可能性１に、13 行目では可能性２に依拠した反応を行なってい

るものと思われる。

ここでは、依拠する連鎖環境が異なっていたため、想定した発話とは異なる発話がなされている様子を見てきた。説明の展開が想定外なものとなってしまい、「あっ」により知識状態が変化したことを示し、「↓ああ↓そうか:::.」によって求められていた説明の受け取りがなされていた。このように、二つの作業が発話の冒頭でなされているのである。

ここまでの議論をポイントとなる行だけ示すと次頁の図のようになる。

02-04Ｔ：[それでね：,]……買った方が……安いの.	情報提供
05Ｕ：え↑:::? ＝	↓ トラブルの発生
06Ｔ：＝<お水がいるのよね[::.]>	理路の説明
07Ｕ：　[あっ]	解決
あなるほどね：.＝	受け取り
08-10Ｔ：＝<も：[う>水を…入れないと	可能性１か２かわかり
スイカでしょう？	にくい説明の途中
11Ｕ：＝あ：[なるほど：.	可能性１として先行受け取り
12Ｔ：　[大きくならないのよ：.＝	可能性２の説明の終わり
13Ｕ：＝**あっ**(.)	↓ 想定外の表示
↓ああ↓そうか:::.＝	可能性２として受け取り

図 5-4：想定外の説明に対する反応２

ここでの会話の複雑さは 08-10 の説明が、可能性の１である[なぜ安いのか]の説明と可能性２の[なぜ水がいるのか]の説明のどちらなのか判断できないことに起因していた。11 行目でＵはＴの説明が終わる前に、その説明の受け取りを行なったものの、12 行目によって、その受け取った説明は異なる連鎖上の説明であったことが明らかになる。そのため、13 行目で「あっ」と認識が変化したことを示しているのである。このことは同時に直前の 12Ｔの発話が想定外であったことも伝えるだろう。その後、Ｕの説明に対して適切に受け取りを示しているのである。

最後に、本節をまとめておく。遡及指向要素が発話冒頭で複数使用される連鎖環境として二つ目に挙げられるのは、想定外の反応求めに対する反応の冒頭である。一つ目の例では、投射された行為の展開していくコースからずれた想定外の質問がなされたものであっ

た。その質問に対して、ずれを示しつつも答えるという状況では、遡及指向要素が複数発話冒頭で使用されうるのである。つまり、「ずれ」に対処することと、「質問」への「応答」を行なうという二つの作業が発話冒頭でなされているのである。二つ目の例では、依拠する連鎖環境が異なっていたため、投射の結果が想定とは異なっていた。この例では、想定が異なっていたことを示しつつ、「説明」への「受け取り」を行なうという二つの作業が発話冒頭で行なわれていた。以上のどちらの例も、想定外の対処をし、求められた反応をするという二つの作業を発話の冒頭で行っているものである。

５．４．２．発話の冒頭における複数の対処

ここまで、遡及指向要素が連続使用されている連鎖環境として二つの環境を挙げた。一つは、トラブルが解決した直後に求められていた反応をする場合である。もう一つは、想定外の反応求めに対する反応をする場合である。このどちらの連鎖環境においても言えることは、複数の対処が必要となる場面であるということである。

トラブルが解決した直後に求められていた反応をする場合は、「トラブルの発生」に対して「トラブルが解決されたことを示す」という対処、および、「反応を求める」行為に対して「反応する」という対処をする必要があった。

同様に、想定外の反応求めに対して反応をする場合は、「想定外の反応求め」の「想定外」という部分に対して「想定外である」ことを示すという対処と、「反応求め」に対して「反応」するという対処をする必要があった。

これら二つの対処を発話冒頭で立て続けに行なったため、発話冒頭で遡及指向要素が二つ用いられるという結果になったのである。

本研究のデータにおいては、遡及指向要素が複数使用されるケースは稀であった。なぜなら、遡及指向要素が用いられるケースのほとんどが、複数の対処を同時に求められることはなく、遡及指向要素が一つ用いられるだけで十分であったためである。上に挙げたような二つの対処が必要となる連鎖環境というのは、一つの対処だけが必要となる連鎖環境と比べて必然的に生じにくいと言える。また、実際生じた場合にも、一つの発話の冒頭だ

けでその二つの対処を行なわずに、二つ以上の発話に分割して行なうこともできる[21]。このような理由で、遡及指向要素が複数使用される事例が非常に少なかったものと思われる。

５．４．３．複数の遡及指向要素が使われる際の順序

さて、このような遡及指向要素が複数使用されるケースにおいて、遡及指向要素内でも何らかの順序があることがわかる。

発話の冒頭において、5.4.1.1.では「トラブルが解決されたことを示す」という対処がなされた後で、「反応を求める」行為に対して「反応する」という対処がなされていたことを見た。5.4.1.2.では、「想定外の反応求め」の「想定外」という部分に対して「想定外である」ことを示すという対処がなされた後で、「反応求め」に対して「反応」するという対処が取られていたことを述べた。これらを簡単に示すと以下のようになる。

5.4.1.1.で示した遡及指向要素の連続使用

直前の連鎖環境　　[反応求め]＋[トラブル]

それに対する発話の冒頭　[解決されたことの示し]、[反応]の順

5.4.1.2.で見た遡及指向要素の連続使用

直前の連鎖環境　　[想定外の反応求め]

それに対する発話の冒頭　[想定外の示し]、[反応]の順

いずれの場合においても、直前でなされた「反応求め」に対する「反応」は、連続して使用される遡及指向要素の２番目に来ているのである。つまり、発話冒頭においては、「トラブルが解決されたことの示し」や「想定外の示し」が求められていた[反応]よりも優先的に先行して用いられているのである。

この「トラブルが解決されたことの示し」と「想定外の示し」は、どちらも特定の発話に対する双方の認識の不一致への対処を担っている。

トラブルの連鎖は、そのトラブルが聞き取りの問題であれ、理解の問題であれ、あるい

[21] この事例として既に(5-8)を見た。

は上で見てきた理路の理解のトラブルであれ、相手の示した発話がそのままでは受け取れない時に開始される。つまり、ある発話を巡って、その発話者と聞き手の間に認識の不一致があるのである。「トラブルが解決されたことの示し」は、その不一致が解消されたことを示すという対処である。

想定外であると示すということも、ある発話をめぐる両者の認識の不一致を示すということである。発話の冒頭に「想定外の示し」に関わるような要素を配置することによって、その発話の聞き手は直前までの発話に何らかの「ずれ」があったことを感知できる。そして、相手の発話の冒頭に配置される「想定外の示し」をリソースにすることによって、どのような「ずれ」があったのかを探る行動に出ることができる。あるいは、これまでのかみ合わなかった発話の理解を促進する可能性になるかもしれない。

このような「認識の不一致への対処」は、求められている「反応」よりも先に配置されていた。これはおそらく、「認識の不一致への対処」を先行させることによって、不一致が解消された上での「反応」であることや、不一致がある上での「反応」であることを相手に伝えることができるようになるためであろう。

また、不一致の原因と対処はできるだけ隣接させるべきであろう。なぜなら、その間に要素が入り込めば入り込むほど、その原因の特定が聞き手には困難になるからである。直前に不一致の原因がある場合、発話の中で最もその原因に近いのは発話の先頭である。ただし、「反応求め」と「反応」も同じ論理で隣接させる必要がある。つまり、上で見てきた事例では、[不一致の原因と対処はできるだけ近くに配置すべき]という隣接性への指向と、[反応求めと反応はできるだけ近くに配置すべき]という隣接性への指向が競合関係にあるのである。5.4.で見てきたのは、この競合への解決策に他ならない。その解決策とは、[不一致]に関わる隣接性への指向を[反応]に関わる隣接性への指向より優先するというものである。つまり、発話の冒頭で前者に関わる要素を先に配置し、その後で後者に関わる要素を置くということである。

さて、様々あった遡及指向要素のうち、どれが「不一致への対処」で、どれが「求められている反応」なのかは、厳密にはデータに先立って分類することはできないものと思われる。例えば、(5-9) での「あっあなるほどね：.」という発話で用いられている「あっ」と「あ」は、どちらも連鎖環境次第では求められていた反応（情報受理）を行うために用いることができるものである。しかし、(5-9) のような情報提供に対する反応が求められており、かつ、トラブルが発生しているという状況で、発話の冒頭に複数の遡及指向要素

が用いられた場合に、前者が「不一致への対処」、後者が「求められている反応」として理解されるのである。一方で、「え」のように認識のずれを表示することで「不一致への対処」を行っているものは、求められた「反応」としては使われにくいだろう。あるいは、「うん」は求められた「反応」をするものであり、「不一致への対処」としては使われにくいかもしれない。このように、どちらにより使われやすいかという違いは各要素にあるものと思われる。よって、ここではひとまずの目安として、本稿のデータで遡及指向要素が連続使用されていた場合に「不一致への対処」に使用されていた要素と求められていた「反応」を示すために使用されていた要素に何があったのかを下に示しておく。

「不一致への対処」に使用されていた要素

「えっ」「えー」「あっ」「あー」

「反応」に使用されていた要素

「あ（っ）」「あー」「いや」「うん」

なお、そもそも遡及指向要素が連続して使用されるケースが稀であるため、上に挙げていないその他の遡及指向要素についてはデータがなく、ここでは触れていない。

遡及指向要素は基本的には発話の冒頭で一つまでしか用いられない。しかし、複数の遡及指向要素が発話の冒頭で使用されるケースは非常に少ないが確かにある。では、それはどんなときなのか。5.4.で示してきたのは次のことである。特定の発話に対して双方の認識がずれており、かつ「反応」が求められている場合、その「ずれ」が解決された上での反応なのか、あるいは「ずれ」があるものとしての反応なのかは、以降の会話の展開に大きな影響を及ぼす違いであるだろう。遡及指向要素は通常発話の冒頭では一度しか用いることができないが、このような違いを示す必要がある場合は、複数使用できるのである。

５．５．小括

以上、本章では遡及指向要素について見てきた。5.1.では遡及指向要素が後続指向要素より先に配置され、基本的に一度しか用いることができないということを改めて述べた。

続く 5.2.では、遡及指向要素を「トラブルへの対処に関わるもの」、「価値付けに関わるもの」、「承認に関わるもの」という便宜上の分類に分け、どのような要素があるのか、そしてどのような連鎖環境で使用されるのかについて先行研究を交えつつ示した。5.3.では、複数の要素に関わる横断的特徴として Goffman(1981)の response cry との関係に触れた。また、後続発話がそれまでの連鎖にとって「後ろ向き」か「前向き」かというような展開に関わる橋渡しの働きがある要素についても述べた。最後の 5.4.では複数の遡及指向要素が正当に用いることのできる連鎖環境について簡単に示した。一つは、トラブルが解決した直後に求められていた反応をする場合である。もう一つは、想定外の反応求めに対する反応をする場合である。このような環境では、遡及指向要素が複数使用される可能性がある。そして、複数使用された場合、特定の発話に対する双方の認識の不一致に対処をしている要素が、求められている反応よりも先行することを述べた。

次章では、後続指向要素にどのような種類のものがあり、どのように用いられているのか、そして順序に関わる分類について考察していく。

第６章　後続指向要素

第４章でも述べたように、冒頭要素は遡及指向要素と後続指向要素との二種類に大別できた。第５章では前者の遡及指向要素を中心に見てきたが、本章では後者の後続指向要素に焦点を当てる。そして、「断絶」という概念をキーワードにすることで、後続指向要素が発話冒頭で複数使用されるときの順序を考えていきたい。

後続指向要素はこれまで述べてきたように、直後の自身の発話のために発せられる言語要素であり、直後に自分の発話が続くことを予期させるものである。また、それ自体では発話を構成せず、続く発話の一部と見なせるものでもある。例えば次の会話では１行目と５行目に後続指向要素が用いられている。

(6-1)［japn4549　01:46-01:55］

この会話が収録された前日に亡くなったアーティストについて、Ｐが最近実際に見たときの様子をＱに伝えている。

→01Ｐ：**だって**俺がさ：: .hh あのおじさんと見に行ったときね今年：,

02Ｑ：う：ん.

03Ｐ：まだ髪の毛全部真っ白じゃなかったんだよ.

04Ｑ：う：[ん.

→05Ｐ：　　[**なんか** - (0.5)k - **なに**灰色っぽいようない[ろ？

06Ｑ：　　[うんうんうんうん.

07Ｐ：((以下、しばらくして再び見たときには髪も髭も真っ白になってい

08　　たということについてＢに伝える))

１行目および３行目でＰは、亡くなったアーティストの髪の毛の色が「全部真っ白」ではなかったことをＱに伝えている。続く５行目では、具体的に「灰色っぽいようないろ」であることを述べている。ここでは、１行目に「だって」、５行目に「なんか」および「なに」という冒頭要素が用いられている。「だって」「なんか」「なに」はいずれも後続発話が直後に続くことを投射するため、これらは後続指向要素の一種であると言える。

本章では、まず、第４章で述べたことの繰り返しになるが、後続指向要素全般に関わる

性質について 6.1 で述べる。具体的には、後続指向要素は遡及指向要素の後に配置されるということ、そして、後続指向要素は遡及指向要素と異なり、発話冒頭において複数使用可能であることについてである。次の 6.2 では、後続指向要素には具体的にどのようなものがあるのかについて、先行研究でそれらがどのように扱われてきたのかを見る。6.3 では、「断絶」をキーワードに後続指向要素が発話冒頭で複数使用されているときの順序について考える。

６．１．後続指向要素の性質

本章では後続指向要素に焦点を当てることとなるため、本節では後続指向要素の性質について第４章で述べたことを簡単に振り返っておく。

後続指向要素は直後に自分の発話が続くことを予期させる冒頭要素である。後続指向要素には二つの重要な特徴がある。一つ目は、一つの発話の中に遡及指向要素と後続指向要素を同時に用いる必要がある場合、後続指向要素は遡及指向要素の後に配置されるという特徴である。次の例では、遡及指向要素の「えっ」の後に、後続指向要素の「じゃあ」が用いられている。仮にこの順序を逆にして、「じゃあえっ」とすると、不自然に聞こえるだろう。正確に言うならば、「じゃあ」で始めた発話の組み立てを取りやめて、「えっ」から組み立て直しているように参与者に（そして分析者にも）捉えられることとなるだろう。

(6-2)［japn1773　07:45-07:46］
Ｉが恋人と別れたばかりだという話をＨにした後。
→01Ｈ：［**えっじゃあ**今結構落ち込んでる :?

このように、遡及指向要素と後続指向要素を同時に使用する必要があるときは、遡及指向要素が先行し、後続指向要素がその後に用いられるという規則がある。

もう一つの重要な性質は、遡及指向要素とは異なり、後続指向要素は発話の冒頭で二つ以上用いられることがしばしばあるということである。例として、次の会話を見てみたい。

(6-3)[japn4621　15:13-15:21]

Oは先日ある宗教団体が経営するレストランで食事をした。Oはその宗教団体、あるいは宗教全般に対してあまり良いイメージを持っていないことが、これまでの会話から伺える。Nは直前までの会話では、その宗教団体あるいは宗教全般に対するスタンスを明らかにしていない。なお、１行目の「そうゆうの」とは、レストランの経営をしているのが宗教団体であることを指している。

→01O：**うんだから：：ねえ：ほら：**,(0.3)**なんか：**そうゆうの考えると：

02　　¥考えちゃうけど：,¥＝

03N：＝うん：.

04O：まあ＞ご飯食(h)べ(h)る＜だ(h)けだったらいいや(.)ってゆうか.＝

05N：うんおんうん.＝

06O：＝うん：.

注目したいのは１行目である。細かい分析は省くが、この発話には「だから：:」「ねえ:」「ほら:」「なんか:」という四つの後続指向要素が用いられている。このように、後続指向要素は発話の冒頭で複数使用されることがしばしばある。冒頭要素は、いわゆる「命題」を伝える前に、その「命題」がどのような内容であるのか、そして、その発話がどのような行為を形作るのかを前以て示す働きをする（Schegloff,1996)。このことは同時に、発話の聞き手が後続発話をどのように聞くべきかを予め伝えておくことができることをも意味している。例えば上の例の場合、「だから：:」「ねえ：」「ほら：」「なんか：」と後続指向要素が連続して使用されているが、これらは「命題」の具体的な内容について予告するという働きは少ないかもしれない。しかし、実質的な「命題」内容の予告をあまりしない要素を立て続けに並べることによって、「命題」に関わる要素が発せられるまでの時間を引き延ばす結果となっている。このことは「言いにくいこと」が後続発話でなされることを予告し、聞き手に後続発話をそのように聞く様に方向付ける。このように、後続指向要素が発話の冒頭で連続して使用されること自体、何らかのリソースとなりうると言えるだろう。

本節では、後続指向要素について、遡及指向要素の後に配置されるということ、そして、発話冒頭において複数使用されることがあるということについて改めて確認した。次節では、後続指向要素にはどのような要素が含まれるのかについて見ていく。

６．２．後続指向要素に関わるこれまでの研究

第５章と同様に、本研究が後続指向要素と呼んでいる言語要素が先行研究でどのように扱われているのかを見ておく。以下では、先行研究での扱われ方を参考に五つに分けて見ていく。具体的には、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」「呼びかけに関わるもの」、「接続に関わるもの」、「態度表明に関わるもの」、「サーチに関わるもの」の五つである。これらは、あくまでどのような言語要素が含まれているのかを確認するための便宜上の区分であることに注意されたい[1]。以下、それぞれについて、どのような要素があるのかについて見ていく。なお、後続指向要素にはかなり膨大な数の要素が含まれるため、その全てについて一つ一つ性質や使用される位置について記述していくことは非常に難しい。それゆえ個別的なものを一つずつ取り上げて性質や連鎖環境を示すのではなく、要素全体に関わることの紹介に留めておく。

６．２．１．連鎖の起点としての気付きに関わるもの

何かに気がついたことを表明することで新しい連鎖を開始するというもので、具体的な要素として「あ」「そう」「あれ」があった。これらは新たな連鎖を開始するために発せられる要素であるので、後続部分を強く指向したものであり、後続指向要素と考えることができる。下の事例では、13 行目に「あ」が用いられており、それまでの試験についての説明の連鎖とは異なる新しい連鎖が配置されている。

(6-4) [japn1612　08:10-08:51]

Ｃが録音日前日に受けた試験についてＢが「どうだった？」(01)と聞いている。

01Ｂ：どうだった？＝

02Ｃ：＝せん - だからまだわからない.

03Ｂ：ｎ - ｃｈｎｊ - (.)[難 し か]った？ｈｈ

04Ｃ：　　[先週と -]

05Ｃ：ｎ - ↓難しいよ.＝

[1] 順序に関わる区分は 6.4. で詳しく見る。

06Ｂ：＝ｈ：：ｈ[ｈｈ

07　　((17行分省略。この間Ｃはいかに難しかったかを伝え、90点

08　　ぐらいあればいいと思っていると言っている。))

09Ｃ：うんだ[からそれでいいよ.]

10Ｂ：　　[そっかそっか：.]

11　(.)

12Ｃ：.hh うん.

→13Ｃ：.hh＞あ兄ちゃん(ちゃん)に＜￥聞きたいことあるの.￥

14Ｂ：あ：何゜き[く.゜

15　((以下、ＣがＢに車を買い換えるならＣの挙げる３種類の車の

16　　うちどれがいいかについて尋ねている。))

ここではＢが１行目の「どうだった？」という質問をして、「まだわからない」(02)と答えられた。そのため、３行目では「難しかった？」(03)と、試験の難しさに焦点を当てた質問をしている。このことによって、Ｃは試験の難しさに焦点を当てた形で「どうだった」かについて答えを求められていることになる。Ｃはそれに対して５行目で「↓難しいよ」と答え、７行目から具体的な難しさと結果に対するＣの考えが話されている。ここまでを連鎖で見ていくと、１行目および３行目は広い意味で説明要求であり、その説明にあたるのが５行目から９行目までになる。説明は原理的に説明することがある限りどこまでも続けられるものである。しかし、Ｃの説明をＢが「そっかそっか:」（10）と受け取った後、Ｃは「うん」（12）と発話しており、12行目が更に説明を付け足すことができる位置であるにも関わらず、それをパスしている。このことから「これ以上説明することがない」ことを示しているだろう。このように、12行目末尾は説明要求と説明という連鎖が終わりうる位置である。そのような状況でＣは「.hh＞あ兄ちゃん(ちゃん)に＜￥聞きたいことあるの.￥」と、「あ」を冒頭に配置して発話しているのである。この発話以降、これまでの説明の連鎖ではなく、質問の連鎖へと移行することになる（なお、13行目は質問の前置きである)。このように、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」は新しい連鎖を開始するものであるため、前の連鎖が終わりうる位置に配置されることとなる。そして、新しい連鎖を開始することによって、前の連鎖は「終わった」ものとして参与者に扱われることになるのである。

先行研究では、遡及指向要素で扱った「価値付けに関わるもの」と、ここで扱うものを区別せずに両者を併せて検討しているものが多い（金水 1983b、田窪・金水 1997、富樫 2001,2005a 等）。なお、日本語記述文法研究会（2009）では、「そうそう」「ああ」「あっ」「そうだ」を［思考のプロセスを表すもの］の一つである「記憶を新規に呼び起こすことを示すタイプ」と位置づけているが、分類だけに留まっており、詳細な記述は特に見当たらない。実際の会話を対象としている研究ではないが、堀口（1997）は留学生向けの日本語教科書に使われている言葉を分析し、「あ」や「お」などが会話の場を作るため（会話自体を始めるため）に使われていることを指摘している。具体的には「あ、おみこしですよ。」や「お、きょうは早いね。」[2]などの文である。これらは現場での会話において連鎖を開始するもので、新しい連鎖を開始することは会話自体を開始する働きがあることを指摘している点で重要である。

以上、連鎖の起点としての気付きに関わるものについて簡単に触れた。次節では呼びかけに関わるものについて見る。

６．２．２．呼びかけに関わるもの

後続指向要素の中には、相手を呼びかけることに関わる要素がいくつかある。例えば、本研究で分析したデータにおいて非常によく用いられていたものとして挙げられるのが、相手の名前を呼ぶというものである。このような、呼びかけに関わるものには、具体的には次のような要素があった。

お前(なあ)、あなた、あんた、相手の名前、おい、
あのね、あのさ、ね、ちょっと、

具体的な事例として、次のようなものがある。

[2] それぞれの引用した教科書は、前者は、水谷信子(1987)『総合日本語中級』凡人社［第３課］、後者は、同教科書の［第１課］である。

(6-5)[japn1684　27:09-27:11]

→01D：[**＞ね＜キョウコ**]あと２年ぐらいいんでしょこっちに.

ここでは、電話の相手であるキョウコに対して質問している。この事例において、呼びかけに関わる要素である「＞ね＜」および「キョウコ」は、発話の冒頭に配置されている。

相手を呼ぶという行為についてはこれまで様々な研究がなされてきている(鈴木孝夫 1973,1982、田窪 1997 等)。これらの多くは呼びかけの多様性、あるいは場面および参与者の関係による使い分けなどに注目しているものである。リアルタイムで進行する相互行為を重視する会話分析においても、呼びかけ(summon)は早い段階から注目されており、[呼びかけ-応答]という隣接ペアが相互行為の最初の連鎖として用いられ、以降の相手の参与を確保するための道具になっていること(Schegloff 1968)や一般的な前置き連鎖(generic pre-sequence)[3]になることが指摘されてきた(Schegloff 2002[1970], 2007)。また、Lerner(2003)は英語において、相手の名前が隣接ペアの第一部分の前に配置される場合(Name ＋ First pair-part)と後に配置される場合(First pair-part ＋ Name)とがあることに注目している。前者は、受け手側が発話へ応じる可能性(availability)に問題があるときに用いられ、後者は、受け手に対する特定のスタンスや関係性を示す必要があるときに使用されるとしている。また、前者は、相手の名前と隣接ペアの第一部分の間に相手の応答が①ある場合(exposed addressing)と②ない場合(embedded addressing)とがあるとしている。この相手の応答のある場合とない場合の区別に注目した森本(2008)は、日本語ではこの違いがどのように使い分けられているのかについて分析している。森本によると、会話に参加していなかった状態から受け手になる等のように受け手の参与地位が変化する場合に①に、会話に参加していたものの話しかけられていない受け手が次話者に変化する場合に②になるようである。このように呼びかけの研究は徐々に深まりつつある。一方、様々ある呼びかけの要素がどのような順序で用いられるかというような順序規則の視点からの研究はまだなされていないように思われる。

ここまで、呼びかけに関わるものについて先行研究でどのように扱われてきたのかを見た。次節では「接続に関わるもの」について見たい。

[3] Schegloff(2007)によると、前置き連鎖(pre-sequence)には、行為タイプを特定する前置き連鎖(type-specific pre-sequence)と、行為タイプを限定しない一般的な前置き連鎖(generic pre-sequence)とに分けられる。前者は、「今日の夜何してる？」のような前置きのことで、この発話がなされた段階で何らかの「誘い」の前置きであることが聞き手にはわかる。後者は「(少し離れたところにいる相手に)ちょっとこっち来て！」という時のように、その後の行為は特に特定しないものである。

６．２．３．接続に関わるもの

前になされた自身の発話の内容、または他者の発話の内容と後続発話の内容がどのような関係にあるのかを示すことを専門とする要素の一群が本稿で「接続に関わるもの」と位置づけているものである。基本的には一般的に言語学の分野で接続詞あるいは接続表現と呼ばれているものを想定している。なお、この種類に属する要素はあまりに膨大な数にのぼるため、その一つ一つをここで挙げることはしない。

日本語の多種多様な接続詞に関する研究はこれまで様々な角度から数多くの研究がなされてきた(大石 1971、渡辺 1971、井出 1973、森岡 1973、吉田 1987、甲田 2001、馬場 2006、石黒 2008 等)。これらの研究の中には書き言葉での使われ方だけではなく、話し言葉での使われ方にも注目しているものもあり、接続詞の全貌が明らかにされつつあると言える。しかし、これらの研究の多くが、個別的な項目についての意味用法を明らかにするものである。実際の会話においては下の事例のように複数の接続詞が用いられることもある。

(6-6)[japn4222　01:54-02:30]
Ｌは銃に関する自作のビデオを売り込もうとしている。なお、１行目の「アームズマガジン」は日本で発売されている雑誌の名前である。

01Ｌ：＝まあお - アームズマガジンいろいろそうゆうガンショップの：
02　　(0.4)住所が：(0.4)住所があるから：そこに全 - (0.6)もう
→03　　片っ端から送ろうかなと..hh **であと ::** (0.5)**あの**警備会社：
04　　＞日本の＜警備会社に：俺全部送ったんに.

ここでは３行目に「で」と「あと」という二つの接続詞が使われている。また、仮に「あと」「で」の順序にすると「あと」で始めたことを止めて「で」からやり直しているように聞こえることから、何らかの順序規則が働いているものと思われる。

このような複数の接続詞が使用されている際の秩序について記述を試みているものは非常に少ない。わずかな例として馬場(2003)および石黒(2005)がある。馬場(2003)は市川(1978)による接続詞の分類を軸に、順接型(だから、すると、こうして等)、逆接型(しかし、それなのに、ところが等)、添加型(そして、つぎに、そのうえ等)、対比型(むしろ、一方、あるいは等)、転換型(ところで、やがて、さて等)、同列型(すなわち、たとえば、とりわ

け等)、補足型(なぜなら、ただし、なお等)のそれぞれの接続詞が二重使用されている実例を分析し、分類同士の組み合わせや順序について以下のような表にまとめている。なお、表中の○は馬場が実例を見つけている組み合わせ、△は稀な例あるいは限られた用法、×は実例を見つけていない組み合わせである。例えば、「しかし一方」という[逆接型＋対比型]という組み合わせを見たいときは、表中の左上の先行の項目の中から[逆接型]を、後続の項目の中から[対比型]を見れば○となっており、実例が実際にある例ということとなる。

表 6-1：馬場(2003)による接続詞の二重使用の共起可能性と順序

先行 / 後続	順接型	逆接型	添加型	対比型	転換型	同列型	補足型
順接型	×	×	△	×	△	△	×
逆接型	△	○	×	×	×	×	×
添加型	×	○	○	○	○	×	×
対比型	○	○	○	○	○	×	×
転換型	×	△	×	×	○	×	×
同列型	○	○	○	○	○	×	○
補足型	×	×	×	×	×	×	×

この馬場(2003)の研究結果を踏まえた上で石黒(2005)は、接続詞が二重使用される際に、原則として次のような順序になることを指摘している。

転換型＞逆接型＞添加型＞順接型・対比型＞同列型

この[転換型＞逆接型＞添加型＞順接型・対比型＞同列型]という順序規則は書き言葉のデータを分析した結果であるが、この順序に関しては筆者の分析対象とするデータを見る限り、話し言葉にも当てはまるものであると言える。しかし、両者の分析対象は書き言葉であり、話し言葉においてはしばしば用いられる要素であっても、書き言葉に現れないものは分析対象から外されている。例えば、「で」[4]は、話し言葉では非常に多用されるものの、

[4] 本稿では、「で」と「んで」を一つにまとめ、「で」で代表させる。厳密に言うならば「で」と「んで」は異なる用いられ方をしている可能性がある。本稿での議論においては、両者は同じ用いられ方をしてい

書き言葉では基本的には見られず、両者の研究でも扱われていない。筆者は伊藤(2012a)で、この「で」の用いられ方について焦点を当てて分析し、「で」が他の接続に関わる要素より先に配置されることを指摘した[5]。例えば、上に挙げた(6-6)は[で→あと]となっており、[あと→で]の順になると「あと」で始めたことを「で」からやり直したように感じられるだろう。更に、「で」が先行発話の続きであることをマークする要素であることを述べ、「接続に関わるもの」を次の二つに分類した。そして、①と②を両方とも使う必要があるときは①→②という順序になるとした。

①後続発話が先行発話の続きであることをマークする要素
②先行発話が後続発話と内容的にどう関係するかをマークする要素

「で」以外で①に含まれる項目としては、「でも」が挙げられる。稗田(2003)は「でも」について本筋の話題へと話を戻す談話標識であるとしている。また、更に詳細な記述としては、西阪(2013)が「直前の発話を飛び越えて、一連の発言の要点を取り出し、あるいは一連の発言を一つの要点のもとにまとめ上げ、それに反応する」(p.125)発話の冒頭に「でも」が用いられていることを指摘している。このような「でも」の用法は、先行発話の中で直前よりも更に前の発話との関連を示すというものであり、①に該当すると言えるだろう。②には非常に多くの接続に関わる要素が含まれることになるが、②の接続に関わる要素を複数使用する必要があるときは、筆者の分析対象としたデータを見る限り、石黒(2005)の示した[転換型＞逆接型＞添加型＞順接型・対比型＞同列型]という順序になると言える。

以上、「接続に関わるもの」について先行研究を交えつつ見た。「接続に関わるもの」に関しては、他の区分より連続使用に関する先行研究が多く含まれていると言える。次は「態度表明に関わるもの」について見ていく。

たため分類せずに一つにまとめたが、両者の違いは今後検討していく必要があるだろう。なお、「それで」に関しては、指示詞「それ」＋「で」という語源であるものと思われ、指示詞の何らかの働きが関係してくる可能性があるため本論では「で」に含めない。

[5] 串田（2009a）は語り（自分の体験や誰かから聞いた出来事を描写する活動）の際に、直前までの語りを続けるために次の位置で「で」が使用されていることを指摘している。その位置とは、①「行って」のように［動詞＋「て」］という形式で継続開始された節末のあと、②語りの途上でひとつの発話が統語的に終了したあと、③語りの途上に挿入された脇道連鎖の終わりうる地点のあと、④語り全体が終わりうる地点のあと、⑤いったん終了した語りを「再開」させるときの語りの冒頭の五つである。なお、③の「脇道連鎖」(side sequence)とは Jefferson(1972)が用いた用語で、語りの最中になされる本筋の進行とは異なる発話連鎖のことである。

６．２．４．態度表明に関わるもの

言語学の分野で「モダリティ」あるいは「言表態度」に関わるものとして扱われているものの一部も冒頭要素として使用されている。本研究ではこれらをひとまず「態度表明に関わるもの」としておく。モダリティとは仁田(1997)によれば、「話し手の描き取った言表事態に対する、認識を中心とする話し手の捉え方および、それをどのように発話・伝達するかといった話し手の伝達的な態度のあり方を表したもの」(p. 187)で、文法カテゴリの一つである。一般に、日本語では「モダリティ」を表す形式は多くの場合、「ね」「だろう」「かな」といった具合に、文末・発話末に配置されるため、多くのモダリティ研究は文末・発話末を対象としている。しかし、これまでのモダリティ研究が文末・発話末以外に対して無関心であったわけではない。例えば、モダリティ副詞の研究で取り扱っている副詞の中には、本研究が注目している発話冒頭にも配置されるものがある。モダリティ副詞とは、小矢野（1997）によれば「文の対象的な内容に対する話し手の把握のしかたや聞き手に対する伝達的な態度を表現する副詞(類)の総称」のことである。発話冒頭での順序に関する言及に目を向けると、例えば、益岡（1991）では、「たぶん、必ずしも皆賛成しないだろう。」という例文を取り上げ、「皆賛成する」という命題に対して「必ずしも」と「ない」という「みとめ方のモダリティ」がそれを包み込み、更に「たぶん」と「だろう」という「真偽判断のモダリティ」が「命題」と「みとめ方のモダリティ」を包み込むという関係（つまり、[[[命題]みとめ方のモダリティ]真偽判断のモダリティ]という関係）にあることを述べている。これは、モダリティが命題の前後で呼応する関係にあること、そして「みとめ方のモダリティ」や「真偽判断のモダリティ」といった「モダリティのカテゴリー」に階層性があることを意味している。その上で、益岡は日本語のモダリティの階層的構造について下の図のように整理している。

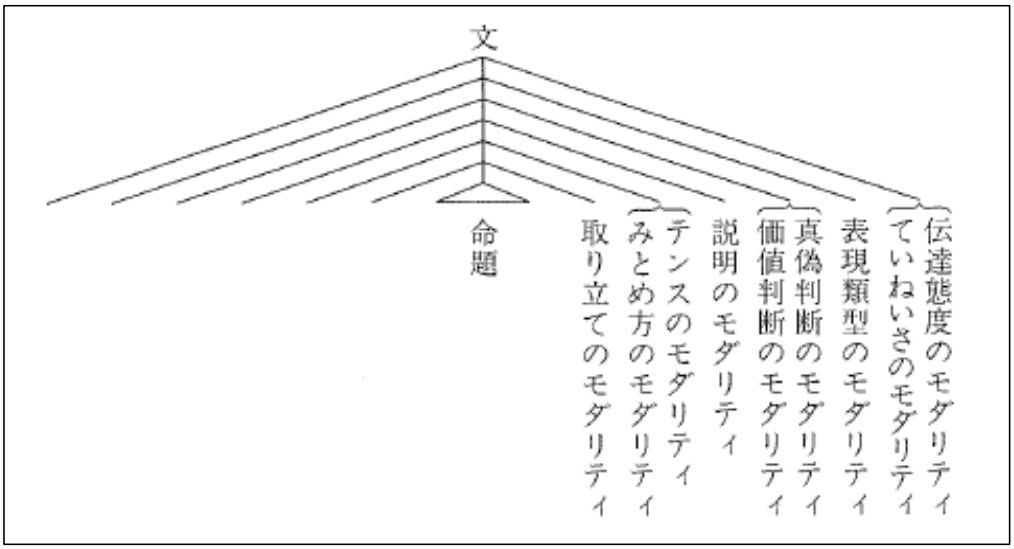

図 6-1：モダリティの階層的構造（益岡(1991：p.43)より引用）

この図では､命題を挟んで線で結ばれているものが呼応関係にあることを意味している。例えば、図中の一番左の空欄には、そこと線が繋がっている「伝達態度のモダリティ」および「ていねいさのモダリティ」が入る。各モダリティのカテゴリー[6]が階層的に配置されるということは、明言こそされてはいないが、文を構成する要素が図の左から右へと配置されることを意味するものと思われる。そのため、発話冒頭における態度表明に関わるものの順序も上のような順序になるものと考えられる。

さて、この態度表明に関わるものに含まれる要素であるが、非常に多種多用である。例えば次のようなものがある。

(6-7)［japn4222　09:46-09:52］

この会話の少し前にＫは自分のやっている仕事をＪもやるよう誘い、Ｊは了承している。

[6] それぞれについて益岡の定義(益岡(1991)の第３章にそれぞれ示されている)を示しておこう。伝達態度のモダリティは、文を伝達する際の話し手の聞き手に対する態度を表すもので「ね」「おい」などである。ていねいさのモダリティは、聞き手に対する丁寧さを表すもので「です」「ます」などである。表現類型のモダリティとは、表現・伝達上の機能の面から文を類型的に特徴づけるもので、具体的には「～て下さい」や「ぜひ」を挙げている。真偽判断のモダリティは、対象となる事柄の真偽に関する判断を表すもので、「だろう」「たぶん」などである。価値判断のモダリティは、対象となる事柄に対してそうあることが望ましいという判断を表すもので、「べきだ」「ものだ」を挙げている。説明のモダリティは当該の文の記述が他の事態に対する説明として用いられることを表すもので、「のだ」と「わけだ」を例として示している。テンスのモダリティとは、所与の事態を時間の流れの中に位置づける働きをするもので、「～た」や「かつて」などである。みとめ方のモダリティは、肯否の判断を表すもので、「～ない」や「決して」などが挙げられている。最後に、取り立てのモダリティは命題間の範列的な関係(paradigmatic な関係)を表すもので、「も」や「は」がその例として示されている。

しかし、Ｊには抱えている問題があり、少なくともすぐには働ける状況にないようだ。その問題についての話題が終わりうる位置でなされたＫの発話である。

→01Ｋ：[**とりあえず：** h.hh<**え：とね：じゃあ::** >**また近々::** 連絡

02　　ください.＝その：ワイパーの件とか.

(6-8)[japn6707　13:56-14:03]

両者の兄がアメリカに移住したがっており、Ｓはもう少しで移住のための制度が厳しくなる可能性があるので「早いところやんなきゃ」と言う。それに対してＲは手続きに時間がかかるので今から急いでもだめだという旨を述べた直後。

→01Ｒ：**大体**して - ちゃんとした仕事もないね：,

02Ｓ：うん.

03　　(0.2)

04Ｒ：tch- 来るっていうの(は／が)そもそも難しい(.)h ::問題だから？

(6-9)[japn6739　27:00-27:02]

直前では、日本に来なくてもアメリカにいたままで「びっくりするぐらい上手に」日本語を話すアメリカ人がいるという旨をＵは話している。

→01Ｔ：＝**やっぱりあのう**才能もある人いるのね：あれ.＝

上の例ではそれぞれ「とりあえず」「また」「近々」(6-7)、「大体」(6-8)、「やっぱり」(6-9)という要素が冒頭に用いられている。モダリティは、事態に対する話し手の認識論的な把握の仕方や捉え方に関わる「事態めあてのモダリティ」と、どのような発話・伝達上の機能を担って発せられたのかに関わる「発話・伝達のモダリティ」とに大別できる(仁田 1997)。ただし、例えば、(6-7)で用いられた「とりあえず」について考えてみると、「事態めあてのモダリティ」か「発話・伝達のモダリティ」かというよりも、その両者に関わっているように思われる。一方では[連絡する]ことが「とりあえず」、つまり本格的なものではなく差し当たりの対応であるという話者の捉え方を表している点で「事態めあてのモダリティ」として考えられる。また、他方では、Ｊがすぐには働けない原因となる問題についての話題が終わりうる位置で「とりあえず」と差し当たりの対応を示していることから、その発話が[提案]として聞かれることになる。そのような意味で「発話・伝達のモダリティ」と

しての側面が「とりあえず」にはあるだろう。ここで挙げている他の冒頭要素のそれぞれも、一つずつ詳しく見ることはしないが、命題内容の外側で話者の捉え方と伝達上の機能を表していると言えるだろう。

上に挙げたものの他にも「結局」「第一」「どうせ」「とにかく」「なに」[7]「もう」「まあ」といった具合に、この「態度に関わるもの」に含まれる要素は非常に多く、ここでその全てを示すことは控える。

６．２．５．サーチに関わるもの

発話の冒頭では、サーチに関わる要素が用いられることがある。サーチとは、簡単に言えば、何かを探していることを相手に見せることである。最も代表的な例として、「言葉探し」(word search)が挙げられる[8]。言葉探しは、話し手が、単語などの特定の項目を言う必要があるのにも関わらず、その項目が見出せないときになされるもので、修復の自己開始の一種である(Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。一般に、修復が開始される際、トラブル源は前の発話にあるため、修復の開始は遡及的な指向を持つ。一方、言葉探しにおけるトラブル源はトラブルが解決されたときに現れるため、指向は後続発話に向けられていると言えるだろう[9]。そのため、本稿ではサーチに関わる要素を後続指向要素の一つとして

---

[7] ここで挙げている「なに」とは、「何食べた？」のような質問で求めている情報の対象として用いられるような一般的な「なに」ではなく、「なんか-(0.5)k-なに-灰色っぽいような色？」(japn4222)や「でなにお兄ちゃんほら(0.2)北海道来たとき：.hhh あのう：,お嫁さんは来なかったの？」(japn6707)といった、質問であることを投射するものの、質問で求めている情報の対象として用いられているわけではない「なに」、つまり、「なに」に当たるものを質問しているわけではない「なに」である。

[8] 「言葉探し」はサーチの代表的なものではあるが、サーチの全てというわけではない。例えば、次の事例のように問われている答えをサーチする場合もあるだろう。

(6-a)[japn1612　10:30-10:36]
　01Ｂ：[[どれ -]]ｎ３つとも two door でしょう？
　02　　(0.3)
→03Ｃ：＜３つとも :: ツード - ＞あっそうだよそうだ[よ(……もん.)

ここでは１行目でＢが「two door でしょう？」と聞き、Ｃが「そうだよそうだよ」と答えている。注目したいのは３行目のＣの「＜３つとも :: ツード - ＞」である。これは①１行目の質問を繰り返しており、②ゆっくり発音されている。そのため、何かを探しているように聞こえるだろう。そして、ここで探されているものは特定の語というよりは、質問の答え(「そう」)と言える。このように、サーチには言葉探しだけではなく、答え探しも含まれる。

[9] 典型的な修復開始の「えっ」を考えるとわかりやすいかもしれない。「えっ」は前になされた発話の中に何かトラブル源があったことを示すため、聞き手はトラブル源を「えっ」よりも前に起こった発話の中から探すだろう。そのような意味で遡及的な指向を持つと言える。一方、言葉探しの典型的なものとして「あの

考える。具体的な例として下の事例を見ておこう。

(6-10)[japn4044　23:06-23:13]

直前ではＪがＫとの会話を中断し、電話の外で誰かと話していた。その会話は微かに聞こえていた。

01Ｋ：今のだれ:?

02Ｊ：.hh ナンシーさん.

03　　(0.4)

04Ｋ：あ：.

→05Ｊ：**あの**::::(.).hhh(0.5)

06Ｋ：((咳))

→07Ｊ：**ええと**：[：

08Ｋ：　　[あ：奥さん？

09Ｊ：＞↑そうそうそう.＜

この例ではＪが「ナンシーさん」について５行目から説明しようと試みているが、５行目では「あの:::」、７行目では「ええと:」という二つのサーチに関わる要素を使用している。ただし、この例では、サーチ対象がＪによって出てくる前に、Ｋ側から８行目に「奥さん」という候補が出されたため、５行目から開始された発話は途中で打ち切りになっている。

言葉探しに関しては、これまで様々な研究がなされてきており(M. Goodwin 1983、Goodwin & Goodwin 1986、 C. Goodwin 1987、 Lerner 1996、西阪 1999[10] 、串田 1999 、Hayashi 2003 等)、言葉探しが単に話者の認知プロセスが発話に現れているといったような個人的な振る舞いではなく、現在進行中の活動を一旦止め、言葉が見つからないというトラブルが発生していることを示すことで、発話の受け手がトラブルの解決に向けて参入できるような位置を作り出しているというような相互行為的な振る舞いであることが明らかにされている。日本語における言葉探しについては、Hayashi(2003)が具体的に次のよう

ー」が挙げられるが、これは「あのー」よりも後にトラブル源、つまり探していた言葉があるため、聞き手も後続発話に注意を向けるだろう。

[10] ただし、西阪(1999)が研究対象としているのは「言い淀み」である。言い淀みは、後続発話をどのように組み立てるのかということに関してサーチしているので、サーチの一種と言えるかもしれない。

な振る舞いがあるとしている。

１：「あの」や「なんか」などの「遅延装置」

２：「なんだったっけ」などの自分を宛先にした質問

３：目線を逸らすなどの指向的なシフト

４：手や顔のジェスチャー

これらのうち本稿が対象としている言語的な要素が関わるのは、１と２である[11]。上で示してきた先行研究は、相互行為における言葉探しがどのような意味を持つのかを明らかにしてきたが、本稿が研究の目的としている発話冒頭での振舞いや、他の発話冒頭要素との順序関係に関してはまだ研究されていないと言える。

「サーチに関わるもの」の中には、自分のサーチではなく、相手にもサーチ対象がアクセス可能であること示すものもある。つまり、「相手のサーチを促す」ことに関わるものがある。具体的には「ほら」という要素についてであり[12]、本研究では「ほら」を「サーチに関わるもの」の中に含むことにする。なお、相手のサーチを促すことは、自分がサーチをしていることと矛盾するわけではない。相手のサーチを促すという行為は、それ自体サーチ対象を見つけるまでの時間を稼ぐことにもなるからである。

サーチに関わる要素は、特定の項目なり答えなりを探す活動であるので、原理的には全ての語の前に配置しうるものであると言える[13]。原則としてどの語の前にも配置しうるが

---

[11] ３、４に関して、Goodwin(1987)は、言葉探しが内部探索として行われているときは考えているような顔や中空に視線を向けるが、外部探索として行われる場合は相手に視線を向けることを指摘している。

[12] なお、データには１例だけではあるが「ほらほら」というものもあった。

(6-b)[japn6707　16:04-16:08]
ＲとＳの会話である。前の話題は小さな声でなされた「ふ：ん」「うん」というやり取りで前の話題が終わりうる位置に達し、その後 3.5 秒の沈黙の後で、この発話はなされている。なお、この発話の話題は前の話題と何ら関連を持っていない。
→01Ｓ：.hh **ほらほら**(0.2)お宅のｕ-ｕ-ｕ-(し)ーちゃんとこの
　02　　ほら(0.5)チヨコさん元気でいる？

この「ほらほら」は、相手のサーチを促すことによって、後続発話が発話を向けられたＲにとってもサーチ可能であることを示しており、その結果、Ｒの注意を後続発話に向ける働きがある。このような、後続発話への投射と相手の注意を引きつけるという活動は話題の始まりと相性が良いかもしれない。「ほらほら」がこのような話題開始の道具になっているかどうか、さらには、「ほらほら」が「ほら」とどのように異なった用いられ方をしているのかについては、「ほらほら」が用いられている他の事例を検討すべきであろう。本稿では、一例だけであったので、ひとまず「ほら」に含めておく。

[13] 例外もある。例えば伊藤（2012a）では、「で」の前に「で」を対象としたサーチに関わる要素は配置できないことを指摘している。

ゆえに、発話の冒頭にも配置できると言った方がより適切かもしれない。ただし、同じ要素であっても、発話の途中で用いられる場合と発話の冒頭で用いられる場合では、異なる働きがある可能性がある。サーチに関わる語が、発話の冒頭で用いられる場合と、発話の途中で用いられる場合とで働きにどのような違いがあるのかについては、発話冒頭における要素間の順序を焦点に置いている本稿の興味とは逸れてしまうため、ここでは取り扱わない。

以上、サーチに関わるものついて見てきた。これまで様々な角度からサーチについて研究されてきてはいるものの、発話冒頭における順序という視点でサーチを取り扱っているものは管見の限りない。次節では、これまでの五つの区分についてまとめておく。

６．３．後続指向要素に関わる五つの区分について

前節まで、後続指向要素には具体的にどのようなものがあるのかを示すために、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」、「呼びかけに関わるもの」、「接続に関わるもの」、「態度表明に関わるもの」、「サーチに関わるもの」の五種類に分け、先行研究を交えながら見てきた。

本節では、まず、これらの五つの区分のいくつかに共通して見ることができる特徴について考察する。次に、上に挙げた五つの区分は、後続指向要素に具体的にどのようなものがあるのかを示すための便宜上のものであったが、発話の冒頭における順序を考えるときにはこれらの五つの区分ではうまく順序を説明できないことを述べる。

６．３．１．後続指向要素に関わる区分の複数に共通する特徴

後続指向要素には「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」、「呼びかけに関わるもの」、「接続に関わるもの」、「態度表明に関わるもの」、「サーチに関わるもの」の五種類があったが、ここではこれらの区分のいくつかに共通して当てはまる性質について指摘しておく。

これらの五種類のうち、「呼びかけにかかわるもの」、「サーチに関わるもの」、「態度表明に関わるもの」に共通している特徴がある。それは、発話の冒頭以外でも用いられること

があるという特徴である。「呼びかけにかかわるもの」の一部は、例えば「それ重症だよマユミさ：：ん.」（japn1684）のように、発話末尾にも用いられる。「呼びかけにかかわるもの」は相手を呼ぶことであり、基本的に注意喚起の働きを担う。注意を喚起することは、そこで伝えられる内容の前でも後ろでもなされうる[14]。それゆえ、発話の末尾でも用いられるものと思われる。「サーチに関わるもの」は、「この会話を：え：と：録音しますのでいいですか？」（japn1612）の「え：と：」のように、発話の途中で用いられることもある。「サーチに関わるもの」は、原理的にはサーチ対象の直前に置かれることとなる。それゆえ、サーチの対象が発話の途中にあるものである場合、「サーチに関わるもの」も発話の途中に置かれるのである。そして、「態度表明に関わるもの」の一部は、「だから：もう会社行ったらね：もうあなたもうシナ語からラン語：朝鮮語からヴィエトナム語：から日本語からも：うそう‐渦巻いてんのよ.」（japn6739）の「もう」[15]のように、発話の途中でも用いられる。「もう」のような副詞は基本的には後続の特定の語を修飾するものであり、その特定の語が発話の途中に配置された場合に冒頭以外にも配置されることとなるのであろう。

ある要素が、発話の冒頭で用いられる場合、発話の途中で用いられる場合、発話の末尾で用いられる場合のそれぞれで、働きにどのような違いがあるのであろうか。例えば、ターンの冒頭においてある要素が用いられた場合、ターンを取得することに関わる仕事を行なっている可能性がある。Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)は、英語においてターンの冒頭にしばしば用いられる well や but、and、so のような付加表現(appositional beginnings)について以下のように述べている。

> 付加表現は、それとともに始められた文が、組み立てのうえでどんな特徴を持つかについて、あまり多くのことを明らかにしない。つまり、付加表現で始めるときは、話し手は、その開始の時点で、まだ確たる計画を持っていなくてもよい。それだけではない。この付加表現の部分が他の発話と重なっても、いま始められた文は、その組み立ての展開も分析可能性も、損なわれることがない。
> （pp.719-720；訳は西阪(2010b:p.81)による）

[14] 例えば、大切なことを伝える際に、「これから言うことは大切なので覚えておくように」と伝える前に注意喚起をすることも、「今言ったことは大切なので覚えておくように」と伝えた後に注意喚起をすることも可能である。

[15] この発話では計４回「もう」が使用されているが、最初の「もう」に関しては命題に関わる語である「会社」よりも前に発せられているので発話の冒頭で用いられているものとして考えている。

ターンの冒頭は、相手の発話と重複してしまうという危険に晒されている。もし発話の冒頭が重複によって相手に聞こえにくくなってしまえば、聞き手が発話の組み立てを分析するのが困難になってしまうかもしれない。しかし、何らかの要素によって「発話を始めた」ということを相手に示さなければ、当然発話は始められない。そこで、発話の冒頭に付加表現を用いることで、発話の開始を示しつつも、もし仮にその付加表現が重複してしまったとしても、発話の組み立ての分析に致命的な欠陥は残さずに済むというわけである。

Sacks らの指摘は英語に関してのものであり、そのまま日本語の冒頭要素にも当てはめることができるかどうかは別途検証する必要があるだろう。しかし、同じ形式の要素であっても、それが発話のどこに置かれるかで、どのような相互行為上の仕事を担うかは異なる可能性があるものと思われる。発話の冒頭に配置された場合に、どのような働きがあるのか。この点については各要素を個別に分析していく必要がある。本稿は、冒頭における順序に焦点を当てるものであるので、この点については深入りはせずにおき、ここでは配置位置を特定した要素の研究が今後必要となることを指摘するに留める。

６．３．２．順序に関わる分類に向けて

ここまで「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」、「呼びかけに関わるもの」、「接続に関わるもの」、「態度表明に関わるもの」、「サーチに関わるもの」の五種類に分けて見てきたが、この区分では発話の冒頭における言語要素の順序を明らかにするには問題があることをここで指摘しておく。

これらの区分は、区分間の順序を説明するのには議論が複雑になりすぎてしまう。各区分における順序関係を示すことにおいてはある程度明らかにされている部分もある。例えば、「接続に関わるもの」に関しては、複数の要素が使用される際の順序はかなり明らかになっていることは 6.2.4. で既に示している。しかし、「接続に関わるもの」と「呼びかけに関わるもの」が同時に使われている時、「サーチに関わるもの」と同時に使われている時といった具合に、他の区分と同時に使用されている場合の順序を考えると、議論は飛躍的に複雑さを増してくる[16]。また、同じ区分に属する要素間の順序であっても、相互行為の

[16] 五つの区分のうち、二つの区分が使われている場合だけ考えても単純計算で十種類のパターンがあることになる。更に、三つ以上の区分が使われている場合なども考える必要が出てくるだろう。また、その

展開によって順番が前後する可能性も考えられる。更に、これらの五つの区分は様々な分類基準によって取り出されたものであり、これらの分類基準が統一されていないことも挙げられる。例えば、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」では連鎖に、「呼びかけに関わるもの」では「呼びかけ」という行為に、「接続に関わるもの」では結束性にといった具合である。

そのため、本稿ではこれらの区分を一旦取り払い、特定の相互行為の仕事を担っているものとそうでないものに分類し直すことにする。その特定の仕事というのは連鎖上の「断絶をマークする」というものである。この「断絶をマークする」という仕事は後続指向要素の順序に密接に関わっている。その点について次節以降見ていくことにする。

６．４．複数の後続指向要素の使用と順序

これまで見てきた五つの区分は、順序を説明する際には不適であったことは前節で述べた。それに代わる区分、つまり、発話冒頭における後続指向要素の順序に関わる区分を本節では考えていく。

その区分として、連鎖上の「断絶をマークする要素」と「断絶をマークしない要素」という二つに分類したい。以下では、まず、「断絶」とはどういうものなのかを詳しく見ていく。次に、断絶をマークする冒頭要素が用いられる連鎖環境について見る。具体的には、「挿入からの復帰」、「関連する複数のものへの言及」、そして「直前とは異なる新しい連鎖の開始」という三つを検討する。その後、後続指向要素が発話の冒頭で複数使用される際には「断絶をマークする要素」から「断絶をマークしない要素」という順序になることを述べる。

６．４．１．断絶

ここからは「断絶」がキーワードとなるため、まず、「断絶」とはどのようなものなのか

全てのパターンに対して筆者がデータを持っているわけではないため、分析できない箇所が多分に出てきてしまう。

を示しておく。

本稿で言う「断絶」とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続する発話が直前の連鎖との境界を示していることである。例として下の会話を見ておこう。

(6-11) [japn1612　08:10-08:51]　※ (6-4) の再掲(間を省略している)

Ｃが録音日前日に受けた試験についてＢが「どうだった？」(01)と聞いている。

01Ｂ：どうだった？＝

02Ｃ：＝せん sh - だからまだわからない.

03Ｂ：ｎ - ｃｈｎｊ - (.)[難　し　か]った？ｈｈ

04Ｃ：　　[先週と -]

05Ｃ：ｎ - ↓難しいよ.＝

06Ｂ：＝ｈ :: ｈ[ｈｈ

07Ｃ：　　[絶対一問できない.＝

08Ｂ：＝.h ほんと：.

09Ｃ：ｎ今度僕は一問 :: あのうｎ - ｇ - 全然時間がないからできなかった.

10　　((中略。ここではＣが、試験がうまくできなかったものの、それなり

11　　に満足していることが伝えられている。))

12Ｃ：うんだ[からそれでいいよ.]

13Ｂ：　　[そっかそっか：.]

14　(.)

15Ｃ：.hh うん.

→16Ｃ：.hh＞**あ**兄ちゃん(ちゃん)に＜￥聞きたいことあるの.￥

17Ｂ：あ：何゜き[く.゜

18　((以下、ＣがＢに車を買い換えるならＣの挙げる３種類の車の

19　　うちどれがいいかについて尋ねている。))

ここでは、01 および 03 が説明を要求しており、05-12 がその説明になっていることは既に 6.2.1. で述べた。13 行目でＢは「そっかそっか :」と説明を受け取ったことを示しており、15 行目でＣは「うん」と言い、これ以上説明することがないことを示している。このような、それまでの連鎖を閉じることができる場所で「あ」と知識状態が変化したことを示す

(Heritage, 1984)ことで、新しく記憶を呼び起こしたことを伝えること(日本語記述文法研究会, 2009)、より一般的な言葉で言えば、何かを思い出したことを伝えることができるだろう。また、この「あ」は連鎖を開始する起点となるものであり[17]、新しく何らかの連鎖が開始されることを示す。それゆえ、前の連鎖と新しい連鎖との間に境界を示すものでもある。このような、前の連鎖とは異なる連鎖が配置される際の境界を本稿では「断絶」と呼ぶ。実際、上の例では16以降、新しい連鎖が開始されており、それに伴って話題もおおよそ「試験について」から「買い換える車について」といった具合に移行している。このように、「断絶」が生じた際には話題の移行もなされることがある。

このような境界への参与者の指向は先行研究でも度々言及されている。例えば、Jefferson(1978)によると、 英語において"oh"や"incidentally"といった断絶マーカー(disjunction marker)が、後続する発話が直前の話題と連続していないことを伝えるために用いられていること、そして、断絶マーカーが語りの導入部でしばしば用いられることを指摘している。断絶マーカーは話題と話題の境界への指向についての指摘であると言えるだろう。あるいは、断絶マーカーに似たものとして、Schegloff & Sacks(1973)、Schegloff(1984)では連鎖上「自然ではない」あるいは「適切ではない」(not "naturally" or "properly")位置で参与者が何らかの発話をする場合、その発話の冒頭に"by the way"のような誤置標識(misplacement marker：日本語訳は北澤・西阪1995による)が用いられることが述べられている。その他の誤置標識としてShegloff(1984)は直前とトピックが変わることを示す発話冒頭の"oh"や、後続する発話が直前ではなく、それよりも前と適合するということを示す[18]発話冒頭の"anyway"などを挙げている。誤置標識は、端的に言えば「以下の発話は連鎖の流れから見ると不自然な展開のものであるので、そのようなものとして聞け」ということを聞き手に示すものであるので、話題の境界というよりも連鎖上の境界付けに焦点を当てているものである。戸江 (2008) でも断絶について述べられている。戸江は、質問した問いに回答者が答え、その後に最初の質問者が自分の質問したことについて話を始めるという「糸口質問」について分析している[19]。聞き手が最初の質問を、普通の質問ではなく糸口質問であると察知できるのは、糸口質問が前の話題や活動と途切れ

[17] 6.2.1.を参照。
[18] この性質をSchegloffは「後から括弧にくくる」(right-hand parenthesis) と述べている。
[19] 戸江が分析しているのは乳幼児を持つ母親同士の会話で、「そうそう起きるのは何時ぐらあい？」(p.138のデータ３から引用、以下同様)という相手の子供が何時に起きるのかを聞く質問に対して回答がなされた後、自分の子供について「起きんのがおっそいねん」と述べている例などである。戸江は、この糸口質問を悩み語りの前触れとして論じている。

たものであり（つまり断絶しており）、「なぜ、いま、ここで、この質問をするのか」という問いが差し出されているからであるとされている。以上のように、話題や連鎖、活動に関して発話の直前と直後で断絶があることは、参与者によって指向され、相互行為のリソースとして利用されるのである。

なお、前の連鎖とは異なる新しい連鎖が配置されるとき、いつも「断絶」が示されるというわけではない。ある特定の連鎖環境において、「断絶をマークする要素」が用いられることになる[20]。その環境には、本稿で分析したデータでは下の三つがあった。本稿では、下の三つの連鎖環境で示された連鎖と連鎖の境界を「断絶」と呼ぶこととする。

①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際
②関連のある複数のものを取り上げる際
③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際

①は直前の連鎖を打ち切り、それよりも前の連鎖との関連を示すことによって、直前の連鎖を挟み込む形となるもので、6.4.2.1 で詳しく見る。②は、それぞれに関連のある複数のものを話題に取り上げる際に、一つ目と二つ目（あるいは二つ目と三つ目等）という関係を示すものである。この詳細は 6.4.2.2. で示す。③は直前までと全く異なる新しい連鎖を開始するもので、上の（6-11）はこのタイプに当たる。これも 6.4.2.3. で詳しく見たい。

さて、これら三つの連鎖環境の関係について触れておきたい。ある連鎖の後に、それとは異なる連鎖を開始するため場合に「断絶」が示されるのであるが、その新しい連鎖には原理的に次の二つの選択肢がある。

Ａ：前の連鎖と関連を持たせる
Ｂ：前の連鎖と関連を持たせない

このＡの下位分類として①と②はある。①は、挿入から元の連鎖に戻るものであるので、

[20] Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)はこのことに関して次のように述べている。「現在の順番における発言は、通常、直前の順番における発言に方向付けられたものとして聞かれるはずである。もし現在の発言を、直前の順番の発言以外の発言にあえて方向付けられたものとして聞いてほしいならば、現在の話し手は、その［直前にはない］発言がどの発言であるかを、特別な技法によって特定しなければならないだろう。」(p.728; 訳は西阪(2010:p.114)による。なお、引用中の[　]内は西阪による。)この引用中の「特別な技法」の一つが本稿で扱う「断絶をマークする要素」の使用である。

連鎖としては直前よりも前と関連を持たせるものである。②は、関連のある複数のものを取り上げるものであるので、直前と関連を持った新しい連鎖となる。逆に、③は前の連鎖とは関わりを持たない新しい連鎖を配置することになるのでＢとなる。

以上のことを整理すると以下のようになる。

Ａ：前の連鎖と関連を持たせる

①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際（直前よりも前と関連）

②関連のある複数のものを取り上げる際（直前と関連）

Ｂ：前の連鎖と関連を持たせない

③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際（新しいことを始める）

次節では、①～③を一つずつ詳しく見ていく。

６．４．２．断絶をマークする冒頭要素が用いられる環境

ここでは、断絶をマークする冒頭要素がどのような連鎖環境で用いられるのかを示す。具体的には、広い意味での挿入から元の連鎖に戻る時（6.4.2.1.）、関連のある複数のものを取り上げる時（6.4.2.2.）、直前とは異なる新しい連鎖を開始する時（6.4.2.3.）に分けて見ていく。

６．４．２．１．挿入からの復帰

まず、直前の連鎖を打ち切り、それよりも前の連鎖との関連を示すことによって、直前の連鎖を挟み込むものを見たい[21]。冒頭要素によって断絶を示すことで直前の連鎖を広い意味での「挿入」として扱うこととなる[22]。挿入から元の連鎖に戻ることで挿入前の連鎖

[21] なお、西阪（2005c,2006）は中断していた連鎖に戻る機能のことを「連続子」と呼んでおり、その間の挿入部分が連鎖上削除（Jefferson 1972）されることを指摘している。連鎖上削除されるとは、連鎖の展開において特定の発話ないし連鎖が参与者たちに「なかったこと」として扱われるということである。

[22] ここでの「挿入」は、Schegloff(2007)が示している「挿入拡張」（insert expansion）ではないこと

をどうするのかに関して、次の二つの可能性が考えられる。

1：挿入前のことを進める

2：挿入前のことをもう一度行なう

1の「挿入前のことを進める」に関しては、問題解決の連鎖からの退出[23]、説明の連鎖からの退出という二つが本稿のデータには見られた。2の「挿入前のことをもう一度行なう」に関しては、やり直しをしている事例があった。以下では、これらの「問題解決の連鎖からの退出」「説明の連鎖からの退出」「やり直し」をそれぞれ詳しく見ていく。

６．４．２．１．１．問題解決の連鎖からの退出

一つ目は問題解決の連鎖からの退出である。問題解決の連鎖の後に配置される発話の冒頭で断絶を示すことによって、問題解決の連鎖よりも前の連鎖の続きを行なうものである。そのことによって、直前の問題に対する解決が十分であったことを暗に伝えることにもなるだろう。次の事例を見たい。ここでは、14 行目に「で」が用いられることによって、直前の問題解決の連鎖を打ち切りつつ、元の連鎖の続きを行なっている。なお、以降のデータにおいて、断絶をマークする要素（この例では「で」）によって挿入として位置づけられる連鎖は四角で囲んで示す。

に注意されたい。Schegloff の挿入拡張とは、隣接ペアの第一部分と第二部分の間に隣接ペアが挿入されるもので、例えば「ご飯食べにいこう」「いいよ」という隣接ペアの間に「何時ごろ？」「７時くらいかな」といった隣接ペアが入り込むことである。

[23] 退出というのは会話分析の用語である exit を想定している。Sacks, Schegloff & Jefferson(1974) は 'you know?'のような付加疑問(tag question)が、話し手が次の話者を選択せずにターンが替わってもよい箇所まで発話を進めてしまった際に、発話が完了した後で別の誰かを次の話者として選択することに使えることを指摘し、自身のターンからの「退出技法」(exit technique; 訳は西阪 2010 より)であるとした。あるいは、Jefferson(1978)は物語を終えるためにすることとして、語りの継続を放棄するのではなく、その後の会話を引き出すために語りの本題からは離れた事柄に話を向けるなどすることを指摘しており、物語の要素の一部を退出装置(exit device)として使用しているとしている。このように、退出（exit）は、ターンや語りといった話者が権限を持つ一続きの単位を終えて別の単位へと移行することを指している。本稿でも、トラブルの連鎖や説明からの退出というとき、これらを終えて別の連鎖(本稿では元の連鎖)に移行することを意味している。

(6-12)[japn6707 11:49-12:09]

これまでＳとＲは両者の知人の近況を報告し合っていた。１行目の前では、２行目の「お嫁さん」とは別の知人について話していた。この「お嫁さん」が出てくるのは２行目が初めてである。

01Ｓ：　[でなに兄ちゃんほら(0.2)北海道来たとき：,

02　　.hhh あのう：,(0.3)°ｎ-°お嫁さんは来なかったの？

03　　(0.6)

04Ｒ：[来ない..hh[hh　[な-

05Ｓ：[あｎ-　　[なん[たっけあの下の名前ｈ：ｈｈ.hh.hh

06Ｒ：[ｎ-ｎ-ミタｈ：[：((呼気))

07Ｓ：[ん-　　[ビ：タ.ミ-ビ：タ？

08　　(0.2)

09Ｒ：tch-ミタ.ｎ-＝

10Ｓ：＝そうミタ.

11　　(0.4)

12Ｒ：[うん.

13Ｓ：[ふ：ん＝

→14　　＝で彼女まだフィリピン行ってるわけ？

15　　(1.3)

16Ｒ：ん:::: ときどき行ってるでしょう？

１行目と２行目は兄の妻についての近況をＳが聞いており、４行目でそれに答えている。５行目から 13 行目の冒頭「ふ：ん」まで、その妻の名前について思い出せないという問題が生じ、それに対する解決案が提出された(06)が、うまく聞き取ることができなかったため、後方に修復の連鎖が拡張している。その後、Ｓは 14 行目の「で」から再び兄嫁の近況を聞いており、16 行目でＲがそれに答えている。この 14 行目の「で」によって、５行目から 13 行目の「ふ：ん」までの問題解決とそれに続く修復の連鎖が十分であったことを示しつつ、妻に関する近況の質問の連鎖に戻り、続きを行なっている。前の連鎖に戻る「で」は直前の連鎖と以降の連鎖が異なることを示すため、断絶をマークしていると言える。このような「で」の戻る働きや区切る働きを指摘した先行研究は多く(西野 1993、高橋 2001、

小出 2008、Yasui 2011 等)、中でも小出 (2008) は「境界と関連の形成とその表示」(p.34) と端的に表現している。

さて、問題解決の連鎖から退出した後、どこに戻るのかが聞き手には問題となる。しかし、「で」だけではどの連鎖に戻るのかまでは示すことができないため、「で」以降の後続発話を聞かなければならない。つまり、「で」は断絶をマークし、元の連鎖に戻ることを示すため、後続発話の中から「直前の連鎖よりも前のどこに戻るのか」に関するヒントを引き出すよう聞き手に注意喚起する働きもあるということである。上の例では、14 行目の「彼女」が２行目の「お嫁さん」の代名詞として使用されており、２行目の連鎖の続きであることがわかる。

以上、一旦近況報告を中断し、開始された問題解決の連鎖を終え、再び近況報告に戻る際に「で」が用いられている例を見た。ここでは、挿入部分が問題解決の連鎖であったが、次節では挿入部分が説明の連鎖であるものを見る。

６．４．２．１．２．説明の連鎖からの退出

断絶によって挿入として位置づけられる直前の連鎖が、説明の連鎖である事例を以下では見る。下の例では、10 行目から始まる説明要求と説明の連鎖から退出し、元の連鎖に戻って続きを行なう際に「まっ」が用いられているものである。

(6-13)[japn6707　19:12-23:05]

直前ではＲがＴシャツを作る仕事をしていることが述べられていた。

01Ｒ：　　[それから今ね,

02Ｓ：うん.

03Ｒ：あの：あれ(.)サンノゼに,(0.3)° nn-° バイリンチェアしてるの.

04　　(0.8)

05Ｓ：サンホゼ？

06Ｒ：サン(ホ)ゼのｓ：-シニアセンター.

07Ｓ：.hhhお：老人の.ｈ：[ｈｈ　((笑いではない))

08Ｒ：　　[ん：.＝それも：日本ｎ-日系の人が：(.)＝

09R：＝主に日系の人[が行く：,]　　[祝 い 会 -]

10S：　　[あ ： 日]系の人[ね.＝どういこ]ｔ-
11　どういうことするわけ？
12R：祝い会ｔ-私：,水曜日はあの：うライブラリー手伝って：,
12　((約３分中略。Ｒはライブラリーでの仕事を説明する。その後、
13　そこでの仕事で接している日本人を引き合いにどのようなことを
14　しているのか、その日本人がどのような生活をしているのかを説
15　明している。なお、次の行の「ここ」はサンノゼを指し、全体とし
16　てサンノゼにその日本人が住み続けるかどうかは本人次第である
17　という旨を述べている。))
18R：ただ本人次第.＝ここへ.hhい-いるかどうか(0.4)けっし：ん(0.4)
19　.hhするのがまあ(.)問題で：,
20　(1.6)
21R：°まだから.°
22　(4.3)

→23R：**まっそんなわけでまた**明日かｒ-明日：ライブラリー行く日.
24S：°ふ::ん.°
25R：°う::ん°ｈ::::((鼻息))

まず、この例では大まかな流れを見ていく。１行目と３行目でＲは自身の仕事について情報提供している。追加でなされている情報提供(８・９行目)の後である 10・11 行目で、ＳはＲの仕事について詳細を説明するよう要求している。その後、仕事の説明と、そこで担当している日本人の生活について述べている(12-21)。

さて、23 行目で、Ｒは説明を続けるのではなく、「まっ」とこれまでの説明をまとめた形にし(西阪・小宮・早野 2013)、１行目と３行目で行なっていた「今バイリンチェアをしている」という旨の情報提供を進め、明日がその仕事の日であることを述べている。「まっ」によってこれまでの説明がまとめられたことによって、直前になされてきた説明を情報提供で挟み込むことになり、挿入として扱うことになる。また、情報提供という直前の説明とは異なる連鎖が配置されるため、23 行目はそれ以前と断絶していると言える。

ただし、「まっ」だけでは説明の一環として直前の話をまとめているのか、断絶を示して

いるのかわからないが、「まっそんなわけで」とセットで使うことによって「まっ」が断絶として使われたことを示している。音調的特徴に注目してみると、21行目の「ま」は弱く発音されており、直前までの連鎖の一部としてまとめを投射しているのか、断絶をマークしているのか判断しにくいが、22行目の長い沈黙の後に、23行目では21行目と比べて相対的に大きな声で、更に「まっ」と促音を含んでおり勢いよく発音されているため、それまでの流れとは別のことを始めようとしていることが投射されるように思われる。この点から、「まっ」の段階で断絶をマークしていることが観察可能であるとも言える。また、22行目で説明の最中に4.3秒もの沈黙が配置され、「これ以上説明することがない」ことが示されている。そのような状況で「まっ」を使うことは、単に説明の一環として話をまとめているというより、説明の連鎖から退出していると考えた方が良いように思われる[24]。

このように、「まっ」は音調的な特徴や、「そんなわけで」と共に使われること、あるいは連鎖環境によって断絶をマークすることでそれまでの説明から退出し、直前よりも前の連鎖の続きを行なうことができるのである。

ただし、断絶を示して説明から退出した後は、どこに戻るかが問題となる。「まっ」自体では、どこに戻るのかは示されないため、後続部分を聞く必要が生まれる。上の例では、23行目の「そんなわけで」が回帰地点を示す仕事を担っており、これまでの説明全体を「そんなわけ」が指し示していることから、説明に入る直前との繋がりを明らかにしている。あるいは、「明日」というのも、１行目の「今」という時間表現と関わらせているように思われる。ここで「今」は「現在」や「最近」といった意味に近いものであり、ある程度時間に幅のある表現である。その幅のある表現から、より限定的な「明日」を用いることによって、23行目が１・３行目と関わりのあることを示し、１・３行目を進めた情報提供がなされることを予期させると言える。

以上、説明の連鎖からの退出技法として「まっ」という断絶をマークする要素が用いられていることを見た。

[24] また、そのような状況で23行目に断絶を示すことは、21行目で「続けようとしていたこと」をやめてしまったことをＢに示すことにもなる。

６．４．２．１．３．やり直し

前節まで「問題解決の連鎖からの退出」と「説明の連鎖からの退出」という二つを見てきた。既に指摘しておいたように、これら二つは戻る地点の連鎖を先に進めるものである。ここで見る「やり直し」は、戻る地点の連鎖を再び行なうものである。まず例を示す。

(6-14)[japn1684　26:58-27:11]

ＤとＥ(キョウコ)は昔近くに住んでいて、頻繁に会っていたようだ。今は飛行機で往復 300 ドル程度かかる距離の場所に住んでいるようである。おそらくＤはカリフォルニアの近くに住んでいるものと思われる。

01Ｄ：[.hh ちょっとオフシーズンに,(0.3)会おうよ.
02　　(0.2)
03Ｅ：[まｂ -
04Ｄ：[＞でも＜どっかに行く予定はないの？＝カリフォルニアとか.
05　　(.)
06Ｄ：.hh[h
07Ｅ：　　[今年の：(.)しょ -(.)正月 :?＝
08Ｄ：＝＞いや＜今年ってか＞まあ＜いつでもいんだけ[どさ.
09Ｅ：　　[.hhhh
10Ｅ：＞あでも＜カリ↑フォルニアは行きたいなと思っ
11　　[てるんで[す よ ： ：.　　]
→12Ｄ：[.hh　　[**＞ね＜　キョウコ**]あと２年ぐらいいんでしょこっちに.
13　　((この後、Ｄはオーディションが好調であることを告げ、このまま
14　　順調にいき、お金が入ったらすぐ遊びに行けると言う))

１行目は勧誘の隣接ペアの第一部分であり、第二部分に承諾か拒否を要求する。しかし２行目でそのような第二部分がきていない。そこでＤは４行目でＥの予定を聞く情報要求によって、二人が会えるチャンスを探っている。しかしＥは 10 行目でカリフォルニアに「行きたいな」と、予定ではなく願望を述べる情報提供に留まっている。

12 行目はキョウコ(Ｅ)があと２年アメリカにいることについて確認している。直前の４

行目から 11 行目までの情報要求と情報提供による連鎖が「Ｅの移動の予定」を聞くものに対し、12 行目から始まる連鎖は「Ｅの滞在の予定」を聞くものであり、質の異なる情報を要求しているため、11 行目までと 12 行目の間には断絶があると言える。その冒頭で「＞ね＜」が用いられて注意が促されており（日本語記述文法研究会 2009)、「＞ね＜」が断絶をマークしているものと思われる。

12 行目は「Ｅの滞在の予定」を確認するもので、断絶をマークしてまで配置することによって、「なぜいまここで」それを問うのかが聞き手であるＥには問題となる。そのありうる一つの答えが、12 行目はそれ自体が聞きたいことではなく、何かの前置きになっているという解釈であろう。実際、後にＤがオーディションに成功してお金が手に入ったら遊びに行けることを述べている(13-14)。ここで述べられているのは「ＤがＥのところに行ける可能性」であり、４行目から 11 行目で探られていた「ＥがＤのところに来る可能性」や「ＥとＤがどこかで会う可能性」とは異なっている。このことからも 4 行目から 11 行目の連鎖と 12 行目以降の連鎖の質が異なっていることがわかる。

４行目と 12 行目のＤの質問は、１行目の勧誘に答えてもらうために行なっているものである。１行目の勧誘に対する答え(承諾／拒否)が４行目から開始される連鎖の後に配置されるよりも先に、12 行目の質問を行なうということは、４行目で開始した連鎖では１行目の勧誘に対する答えが得られないとＤが判断し、12 行目の質問という答えを得るための別の手立てを行なったことを意味している。つまり、１行目の勧誘に対する答えを得るための手段として、４行目から始まる連鎖がうまくいかなかったので、12 行目から始まる連鎖でやり直しているのである。そのような意味で、４行目から 11 行目は１行目と 12 行目とに挟み込まれる形となり、連鎖上削除されたと言える。

このように、「ね」は断絶を示すことによって直前までの連鎖を削除し、直前よりも前の連鎖で行なっていたことをやり直すときに用いられているようである。

「ね」によって断絶を示した後は、どこのやり直しなのかを示す必要がある。それは 12 行目の連鎖上の位置によって示されている。12 行目の質問は、４行目の質問にＥが完全に答えていない段階で繰り出されている。完全に答えていない段階とは、４行目が「予定はないの？」と Yes/No 質問であるにも関わらず「行きたいなと思ってる」（10-11）と質問と若干ずれた答えをしていることを指している。このずれは４行目の質問の前提への抵抗を示している（Raymond 2003)。４行目の質問への応答が修復の連鎖（07/08）を挟むことに

よって遅れており、その遅れが非選好応答[25]を予期させる（Pomerantz 1984a, Schegloff 2007）ことからも、４行目の質問に答えにくい理由がＥにあることがＤには観察可能であろう。そのような状況で、「Ｅの滞在の予定」という別の角度からの質問を配置することによって、04 の「Ｅの移動の予定」を聞く質問のやり直しであることを示しているものと思われる。また、04 行目から 11 行目の連鎖は 01 の勧誘に対する承諾を延期している最中に配置されているものであり、10 ・ 11 行目を勧誘にとって有効な答えとしてＤが聞き取ったなら、12 行目の位置で「えーじゃあカリフォルニアに来て遊ぼうよ」のような勧誘自体のやり直しが配置可能である。それにも関わらず 12 行目には勧誘のやり直しではない質問が配置されており、そのことで 10 ・ 11 行目が有効な答えとして聞き取られていないことが示されている。このときにＤにできるのは、４行目の質問に対する有効な答えを引き出すための手段を取る（連鎖を後方に拡張する）か、４行目からの連鎖をあきらめて別の角度からの手立てを講じる（連鎖を削除して、別の角度からやり直す）かであろう。12 の質問は後者であるが、そのことがわかるのは冒頭の「ね」が直前の連鎖との断絶が示しているためであろう。

上の例では、隣接ペアの第一部分(勧誘)が要求する第二部分(承諾／拒否)を得るための手立てとして４行目から始まる連鎖をまず配置し、その手立てを 12 行目でやり直しているものである。下の例では、そもそもの第一部分をやり直している。その際の発話の冒頭にも「ね」が用いられている。

(6-15)［japn1684　07:59-10：34］

Ｅがまず「いやーお元気ですかー？」と聞き、Ｄがそれに対して自分の失恋の話をする。その失恋の話をする際に、Ｄは「生理は止まっちゃうわ道でうずくまっちゃうわさー、泣いて眼は変わっちゃうわさー」と体調に劇的な悪化が起きたことをＥ(キョウコ)に伝えた。Ｅは心配していたものの、「まだしんどいよ」と言うＤに対して、最終的に「でもどっこもいっしょですよ」(01)とコメントした。

01Ｅ： .hhhh でもどっこもいっしょですよ[hhh（……）　]

02Ｄ：　　[なんで？ キョウ]コは?

[25] 隣接ペアには、[挨拶-挨拶]といった具合に、第二部分が固定的なもの以外に、第二部分が複数あるものも多い。例えば、[同意要求]に対しては[同意]か[不同意]のどちらかがなされる。このとき、沈黙や言い訳、フィラーなどによって体系的に提出が遅れる行為の方を非選好応答と言う。通常、[同意要求]に対しては、[同意]が選好応答、[不同意]が非選好応答となる。

03　　(0.4)

04Ｅ：.hhh(0.1)＜キョウコは：＞[まあ（……)]

05Ｄ：　　[キョウコ元気？＝リチャード.　]

06　　(0.4)

07Ｅ：リチャードげん↓きぃ::

08　　(0.3)

09Ｅ：う[ん、リチャード元気に勉強してるけど：[　：　]

10Ｄ：　[てか、あな-　　[あな-]

11Ｅ：彼も彼なりに勉強が大変みたい[で：]

12　　((約２分のトランスクリプトを中略。この間、Ｅは恋人が弁護士に

13　　なるための勉強や仕事などで精一杯で、二人の将来のことを考え

14　　られないと言われたことをＤに伝えている。))

15Ｅ：[うまくいってるんだけど:[:

16Ｄ：　　[うん

17Ｅ：まあ将来のない二人：みｈたｈいｈなｈ↑ねhh

→18Ｄ:.hhh **ねえ＞それで＜**キョウコはそれを聞いてｓ－どうなっちゃうわけ?

19Ｅ：↑もう三回目だからねこれはｈ

Ｄは２行目でＥ（キョウコ）の恋愛の状況に関する情報を要求している。この質問にＥは0.4秒の沈黙の後に息を吸い、再び若干の間の後に発話の速度を落として「キョウコは：」と答え始めるが、これらの特徴はＤにはＥが答えにくそうにしているように見えるだろう。そこで、より答えやすいYes/No質問にやり直している。この質問は「キョウコ元気？＝リチャード.」という組み立てになっており、①キョウコと呼びかけてリチャードが元気かどうか聞く質問か、②リチャードに関することでキョウコが元気かどうかを聞く質問のどちらか判断しずらい。Ｅは①に対して７行目で答えている。一方、その答えにも関わらず10行目でＤは「てか、あな-」、「あな-」と、「あなた」と思われる言語要素を提出してＥの発話を遮ろうとしていることから、Ｄが聞きたかったのは②だったものと思われる。

①と②のいずれにせよ、５行目の質問はＥに恋人との状況を説明させる質問であり、９行目から17行目までＥによる説明が続いている。かなり長いデータになるのでここでは示さなかったが、この説明の中にはＥの体調の悪化についての説明は一度もない。そもそも、

２行目の「なんで？キョウコは？」という質問は、体調が悪化して「しんどい」Ｄに対して「どっこも一緒ですよ」(01) と言ったＥに向けられた質問である。つまり、Ｅの恋愛状況においてどこが「一緒」なのか、つまりＥの体調の悪化を探る質問であるはずである。そのような視点から見ると、５行目の質問が「キョウコ元気？リチャード.」とキョウコの現在の体調をＤが問うていることも、単に２行目の質問を５行目で Yes/No 質問に変えただけでなく、Ｅの体調にフォーカスを当てているという意味でも、よりＥに答えやすくした質問に変えていると言える。

体調の悪化についての言及がない説明の終わりうる位置（17 の末尾）で、Ｄは再び質問している(18)。この質問はキョウコが「どうなっちゃう」かに焦点を当てているものである。これは、生理が止まり、道でうずくまり、泣いて眼が変わってしまったというＤの体調の悪化に対応するものを提出するようＥに要求するものであり、平たく言えば「私はこうなった。では、あなたはどうなったのか」ということを聞こうとしているものである。この 18 行目の質問は、説明の連鎖の内部に組み込まれる質問（説明の理解できない部分を聞く質問）というより、２行目（あるいはそのやり直しである５行目）のやり直しであると考えるべきであろう。そのような意味で、５行目から 17 行目の説明は 18 行目と断絶しており、２行目と 18 行目に挟み込まれる形となる。

２行目のやり直しと呼べるものは５行目と 18 行目に起きているが、18 行目だけに「ねえ」が用いられている。この違いは、Ｅがどのような説明を行なおうとしているのかがＤにわかるかどうかにある。５行目では、まだ何をＥが話すかＤに分からない段階であるが、18 行目では約２分もの長い説明がなされた後である。17 行目で説明が終わりうる位置が配置されているが、ここまでくれば、ＤにはＥが「体調の悪化」について説明する必要があると思っていないことがわかるだろう。そのような状況で、「ねえ」を冒頭に配置して２行目の質問をやり直しているのである。このことから、「ねえ」は単にやり直しの発話に用いられるだけではなく、相手の説明しようとしていることにはない視点からのやり直しをする際に用いられるものと思われる。

断絶を示した後は、どこのやり直しであるかが問題となる。この事例でその仕事を担っているのが「それで」と「どうなっちゃう」である。「それで」は、断絶を示す「ね」の直後に配置されているため、直前の発話に直接繋がるというより、これまでされてきた説明全体を指すものと思われる。そのため、18 行目の発話は説明全体に関わる発話との関係を示している。説明全体に関わる発話の最も有力な候補は、説明を促した質問（02/05）であろ

う。「どうなっちゃう」に関しては、説明を促した質問に含まれていなかった観点を明確に示しているものである。この二点から 02 および 05 のやり直しであることがわかるのである。

さて、先ほど「ねえ」が単にやり直しの発話の発話に用いられるだけではなく、相手の説明しようとしていることにはない視点からやり直す際に用いられると述べたが、このことは事例（6-14）にも当てはまる（下に 6-16 として再掲）。

(6-16)[japn1684　26:58-27:11]　※（6-14）の再掲

ＤとＥ(キョウコ)は昔近くに住んでいて、頻繁に会っていたようだ。今は飛行機で往復 300 ドル程度かかる距離の場所に住んでいるようである。おそらくＤはカリフォルニアの近くに住んでいるものと思われる。

01Ｄ：[.hh ちょっとオフシーズンに,(0.3)会おうよ.
02　　(0.2)
03Ｅ：[まｂ -
04Ｄ：[＞でも＜どっかに行く予定はないの？＝カリフォルニアとか.
05　　(.)
06Ｄ：.hh[h
07Ｅ：　　[今年の：(.)しょ - (.)正月 :?＝
08Ｄ：＝＞いや＜今年ってか＞まあ＜いつでもいんだけ[どさ.
09Ｅ：　　[.hhhh
10Ｅ：＞あでも＜カリ↑フォルニアは行きたいなと思っ
11　　[てるんで[す よ ： ：.　　]
→12Ｄ：[.hh　　[＞ね＜　キョウコ]あと２年ぐらいいんでしょこっちに.
13　　((この後、Ｄはオーディションが好調であることを告げ、このまま
14　　順調にいき、お金が入ったらすぐ遊びに行けると言う))

この例では、４行目のやり直しが 12 行目であった。４行目の質問に対してＥが話している内容（10/11）は「Ｅが移動する」という視点から答えているものである。一方、12 行目は「Ｄが移動する」という視点へと繋がる手立てへの前置きとなっている。つまり、この事例でも、「ね」は、相手の話している内容にはない視点からのやり直しをする発話の冒頭

に用いられているのである。

以上、「ね(え)」が相手にはない視点からやり直しをする際に用いられていること、そして、やり直しゆえに直前までの連鎖からの断絶をマークすることを述べた。

６．４．２．１．４．挿入からの復帰のまとめ

ここまで、広い意味での挿入から元の連鎖に戻る事例を見てきた。挿入から元の連鎖に戻るやり方として、挿入前のことを進めるものと挿入前のことをもう一度行なうものとがあった。前者の例として「問題解決の連鎖からの退出」で「で」が用いられている事例と「説明の連鎖からの退出」で「まっ」が使用されている事例を見た。挿入前のことをもう一度行なうものの例としては「やり直し」で「ね(え)」が用いられていることを示した。いずれの例も、冒頭要素だけではどこに戻るのかは示されないため、後続発話の中からそのヒントを探さなければならなかった。それゆえ、聞き手にとっては、後続発話への注意を強めなければならなくなるだろう。なお、これまで書いてきたことは「問題解決の連鎖からの退出」の際には必ず「で」が使われることを主張するものではない。「で」を使う方法以外にも、退出の手段はありうるかもしれない。このことは「まっ」や「ね(え)」にも当てはまることである。あるいは、「で」「まっ」「ね」「ねえ」が必ず断絶をマークする要素として用いられると主張するものでもないことに注意されたい。上に書いてきたような特定の連鎖環境や、音調的特徴、あるいは共起する要素によって、これらの要素は断絶をマークする要素として用いられるのである。

６．４．２．２．関連する複数のものへの言及

関連する複数のものを説明する際、あるいは話題に取り上げる際に、二つ目以降の導入時に「で」が用いられることで、一つ目と二つ目（あるいは三つ目、四つ目など）という関係を示しつつ、それらが別のものであるという断絶が示される。二つ目の導入に関わる発話の冒頭で断絶を示すことによって、その発話以降が二つ目であることを聞き手に理解させると同時に、一つ目が十分に取り上げられたことを伝える。

このような複数のものを話題に取り上げる「で」の働きについては、「で」と「それで」の機能を分析した椙本（1994）が「別の下位の話題へ話を移す」(p.39）としたものであると思われる。あるいは、小出（2008）が指摘する「対話の「で」の機能」の一つである「展開」として指摘されているものである。小出の「展開」とは、「それまでの内容と何らかの関連性を保ちながら、新たな段階に進める」(p.31）ことである。また、6.4.2.1.1.で扱った「戻る」ことをする「で」[26]が、いわば後ろ向きの方向を持つのに対して、ここで扱うような「展開」の「で」は前向きの方向を示していることを指摘している。小出は更に、「で」の基本的な性質として「境界」を形成することを指摘しており、これは本稿の言う一つ目と二つ目の間に断絶が示されるということと沿うものである。

さて、次の事例のような手順の説明の際に、しばしば「で」が用いられる。なお、本節では関連付けられた複数の連鎖はそれぞれ四角で囲んで分けてある。

(6-17)[japn6739　00:31-00:41]

ＵはＴに電話が録音されていることに関して、その手続きの手順について説明している。

01Ｕ：[.hhh￥なん]か難(h)し(h)いｈｈ￥
02　　.hh[.hh
03Ｔ：　　[ああインストラクションがいっぱい書いてあるわけ.
04　　(.)
05Ｕ：↑そうなのよ：.＝
06　　＝それでｎ-[初めに↑ね],
07Ｔ：　　[ふ:::::　]：ん.＝
08Ｕ：＝あのなんだっけあのう identifi：cation number を入れるわけね.
09Ｔ：う:::：[：ん.
→10Ｕ：　　[**でその後にね**自分のあの：う電話番号：を入れるわけ.
11Ｔ：あ：なるほど：.
12　　((以下略。この後、自分の経験として、どのような手続きを経たか
13　　について述べている。))

ここでは６行目からＵが手続きの手順の説明をしている。６行目の「初めに↑ね」から、

[26] なお、小出はこの「戻る」機能を「回帰」と呼んでいる。

手続きでやらなければならないことが複数あることが明らかにされている。一つ目がidentification number を入れることであることが８行目で示されている。その次の手順として、自分の電話番号を入れることが述べられている。

この二つの手順は[情報提供(説明)－情報(説明)の受理]という同じ連鎖を構成している。６・８行目が[情報提供（説明）]で、９行目が[情報（説明）の受理]、同じく 10 行目が[情報提供（説明）]で、11 行目が[情報（説明）の受理]となっている。この二つの連鎖が「録音の手順」の一部であるという関係を示しつつ、それぞれが別の部分であることを示しているのは 10 行目の冒頭に配置された「で」の働きによる。

上に挙げた例では、「関連する複数のもの」の「関連」が「手順」であった。下の例では、「兵隊」と「民間人」という二つの要素について「対比」している。その対比の二つ目である「民間人」の説明をする際に「で」が用いられている。

(6-18)[japn6707　28:28-28:50]

直前には、Ｓの夫と思われる人物が戦地に行く可能性があることがＳによって述べられており、給料がいいことが伝えられている。

01Ｓ：　　[だけど：,[命が危ないからねやっぱりね.[あそこ.
02Ｒ：　　[ｈ　　[う::ん.
03　(0.2)

04Ｓ：.h[hhh 結局ほら：[あの：兵隊を使うと：,
05Ｒ：　[tch-　　[ｈ:::((息))
06Ｒ：うん.
07　(1.0)
08Ｓ：ほら,いろいろ,
09　(0.8)
10Ｒ：ｈ：[：　((息))
11Ｓ：　　[年数ｈ長くいなきゃだめでしょう.((ここのｈは呼気))
12Ｒ：ん：.

→13Ｓ：**でほら**,(.)**＞あのう＜**民間人を使うと：結局：
14　＞その時だけ＜使って＞あといらなくなったら＜(.)
15　[はい要りませんって[返せるから.＝

16R：[＞そうゆうわけ.＜ [う：ん.
17R：＝°ひ°つようなときだ[けね.
18S：　　[＞いやｉ-＜,いえ：-
19　　１年契約でいくわけ°よ°.
20R：うんう[ん.

ここでも二つの連鎖が配置されている。まず一つ目が４・８・11行目の[確認要求]と12行目の[確認]の連鎖、二つ目が13-15行目の[情報提供（説明）]と16・17行目の[情報（説明）受理]である。なお、二つ目の連鎖は、17行目でＡが言った事がＢの言いたかったこととずれていたため、18-20行目で修復の連鎖が配置されている。

この二つの連鎖が関係のある別の部分であることを示しているのが「で」である。その際、二つの連鎖がどのような関係で、どう別の部分であるのかは、「で」が含まれている発話の後続部分を聞く必要がある。この例では13行目の「民間人を使うと」まで聞く事によって、４-11行の発話と対比の関係にあり、「兵隊」と「民間人」という別の部分についてＳが話していることがわかる。この「関係のある別の部分」という枠組みを聞き手に観察可能にさせる働きが「で」にはあると言える。このことは、聞き手に、そのような枠組みがどのように適用されたのかを後続発話を聞いて分析するよう促すだろう。また、「で」によって断絶がマークされるため、それ以前の連鎖はひとまず十分であったと発話者が判断したことを聞き手に伝えることにもなる。

ここまで、「関連のある複数のものを取り上げる際の断絶」について述べてきた。これまでの例では、手順や対比という「関連」であり、断絶によって連鎖と連鎖の境界を明確にしつつ繋げられている様を見てきた。次の例では、複数の話題が「で」によって提出されている。

(6-19) [japn6707　08:24-10:40]
01S：やっちゃんからこの前(0.3)手紙が来て？
02R：う：ん.
03　(0.2)
04S：あの：,
05　(0.8)

06R：ｈ ::::[::((鼻息))

07S：　　[パキスタンと：,oo-

08R：うん.

09S：なんかあっちの方まだ行ってないから行きたいんですってｈ

10R：ふ:::ん.

11　　((中略。この後、「やっちゃん」の近況がＳによって語られる。))

12S：品川の：,事務所でまだ働いている.

13　(.)

14R：ふ：[ん.

→15S：　　[で旦那さ：んは：,

16R：うん.

17S：なんか

18　(0.3)　　┤

19R：　ｈ ::::((鼻息))　　|(2.5)

20　(0.7)　　┤

21S：建築の方やってんのかな？おうち建てる方.

22　(0.4)

23R：なんかほら,[(骨折／国鉄)：だめんなって,＝

24　　((中略。「やっちゃん」の夫の近況がこの間語られる。))

25S：　　[ｈ　　[ふよ‐(0.2)冬は何してんだか知らないけ(h)どｈ＝

26R：＝う：ん.

→27S：で息子：のナオちゃんは：,[.h

28R：　　[うん.

29S：.hなんか大学出たんだけどｓ‐(0.3)彼(0.3)札幌の専門学校

30　出てんだよね？

31R：うん.

32S：だけど(.)なんか(.)したい仕事がなかなか見つからないんでまだ

33R：ｈ：[::((鼻息))

34S：　　[浪人してんだって.＝°(でも)°＝

35	((以下、「息子のナオちゃん」の近況についてＳが報告している。))

ここでは「やっちゃんの近況」(1-14)、「やっちゃんの夫の近況」(15-26)、「やっちゃんの息子のナオちゃんの近況」(27-35)という３つの話題がＳによってＲに提供されている。このとき、二つ目および三つ目の話題を提供する発話の冒頭に「で」が配置されている。この「で」もこれまでと同様、一つ目から二つ目、二つ目から三つ目というように関連するものを順番に取り上げていくものであり、それぞれを境界付けるものとして用いられている。

この「で」は単に複数の報告の連鎖間の繋がりだけでなく、話題同士の繋がりを示すものとしても捉えた方が良いだろう。「で」によって、これらの話題のそれぞれが関連のあるものとして示されることになる。その際の関連は会話参与者によってその都度作り直されていく。15 行目の「旦那さん」によって、「夫婦の近況」という関連が示される。27 行目の「息子」によって「やっちゃんの家族の近況」という関連が、複数の話題間に共有されることになる[27]。

本節をまとめておこう。関連のある複数のものを取り上げる際、「で」によって一つ目と二つ目（あるいは二つ目と三つ目等）の間に断絶がマークされ、一方では、それぞれが別の連鎖であることが、他方で、それらが関連を持ったものであることが示される。その際の「関連」のあり方は、手順、対比、近況といった具合に様々なレベルのものであるが、どう関連するかは後続部分を分析する必要がある。つまり、「で」は後続部分が先行する発話と「関連する」ことを投射し、どう関連するかなどの内実は後続発話によって判断する必要があるのである。このことは、聞き手にとっては、「で」によって、「関連する別の部分」という枠組みで後続部分を聞き、どう「関連」するのかを後続部分から探すよう促されることとなるのである。

前節と本節で、前の連鎖と関連を持たせた形で断絶を行なうものを見てきた。次節では、前の連鎖とは関連を持たせない形で断絶を行なうものについて述べる。

[27] 15 行目と 27 行目が[で Ｘ は：,]という同じ形で始められていることは興味深い。第三者の近況を話していて、その人物と関係の深い人物の近況へと移行する際に、この[で Ｘ は：,]という形式を使用するのは筆者の内省に照らし合わせてみても肯けるところである。この形式では、「は」を引き伸ばし、強く発音することで、相手にいわゆる「あいづち」を打たせるものとなっている。これはおそらく、①Ｘという人物に聞き手がアクセスできるかどうかを確認させる、②直前までとは異なる話題であることを聞き手に確認させるという二つの働きがあるものと思われる。

６．４．２．３．直前とは異なる新しい連鎖の開始

直前とは異なる新しい連鎖がこれから始まるということを観察可能にするために冒頭要素によって断絶がマークされることがある。

このタイプは多くの場合「あっ」によって断絶が示され、それによって新たな連鎖が配置される。その際、「あっ」が配置されるのは、直前の連鎖が終わりうる位置を迎えた後になる。次の例を見たい。なお、本節では、断絶がマークされることによって新しく始まる連鎖を四角で囲んでいる。

(6-20)[japn1612 08:10-08:58] ※(6-11)の省略部分の一部を補って再掲

Ｃが昨日受けたばかりの試験について、兄のＢが感想を聞いている。

01Ｂ：どうだった？＝

02Ｃ：＝せん sh - だからまだわからない.

03Ｂ：ｎ - ｃｈｎｊ -

04　　(.)

05Ｂ：[難　し　か]った？ｈｈ

06Ｃ：[先週と -]

07Ｃ：ｎ - ↓難しいよ.

08Ｂ：ｈ :: ｈ[ｈｈ

09Ｃ：　　[絶対一問できない.＝

10Ｂ：＝.h ほんと：.

11Ｃ：ｎ今度僕は一問 :: あのうｎ - ｇ - 全然時間がないからできなかった.

12　　((９行(14 秒)省略。))

13Ｃ：　[９　０]点ぐらいあればいいと思ってるよ.＝

14Ｂ：＝うんふん[ふん.

15Ｃ：　　[°.hhhh°う：ん.それで僕：(.)ね？ｈ：ｈｈ

16　　もう,それでもう.hhh あの - 喜んでるから.

17Ｂ：あ：ん.

18Ｃ：うんだ[からそれでいいよ.]

19Ｂ：　　[そっかそっか：.]

20　(.)

21Ｃ：.hh うん.

→22Ｃ：.hh＞**あ**兄ちゃん(ちゃん)に＜￥聞きたいことあるの.￥

23Ｂ：あ：何゜き[く.゜

24Ｃ：　　[.hhhh ｎ-

25　(0.4)

26Ｃ：ｎ-ｎ-

27　(0.2)

28Ｃ：あｎ-￥ママがね：,￥

29Ｂ：うん.

30Ｃ：兄ちゃんがね：,

31Ｂ：うん.

32Ｃ：ハーバード入ったらね：,

33　((以下、ＣがＢに車を買い換えるならＣの挙げる３種類の車のうち

34　　どれがいいかについて尋ねている。))

ここでは、ＢがＣに１行目で試験について話すよう促している。Ｃはそれに「まだわからない」(02) と、試験の結果について述べている。それを受けて、Ｂは５行目で「難しかった？」と客観的な試験の結果ではなく試験への主観的な判断にフォーカスを当てた質問にやり直すことによって、01 で聞きたかったことが「試験を受けてみてどう感じたのか」というだと明らかにし、その点について話すよう促している。この説明が最終的に終わるのは 18 行目で、それと同時にＢは 19 行目で「そっかそっか：」と説明を受け止める。Ｃは、21 行目で「うん」と言うことでこれ以上話すことがないことを示しており、「説明要求」(01／05)と「説明」(07-18)、およびそれに続く「説明の受け入れ」(19)という連鎖が終わりうる位置が配置される。

その状況で「.hh＞あ兄ちゃん(ちゃん)に＜￥聞きたいことあるの.￥」と、「あ」を冒頭に置いた発話を配置している。この発話は、「聞きたいこと」とこれから行なう行為が質問であることを投射しており、前置きとして働くものになっている[28]。そのため、１行目か

[28] 正確には単純な「前置き」ではなく、「前置きの前置き」(pre-pre; Schegloff 2007) である。pre-pre とは、「聞きたいことがあるんだけど」、「言いたいことがあるんだけど」、「お願いがあるんだけど」とい

ら21行目までの説明の連鎖とは別の連鎖であることがわかる。このような状況で「あ」が用いられることによって、「あ」が直前の連鎖との断絶をマークしているのである。

22行目の発話の冒頭には「あ」が配置されている。「あ」は記憶が呼び起こされたことを示すものである（日本語記述文法研究会 2009）。連鎖が終わりうる位置というのは、これ以上会話が続かなくなる可能性が高まる位置である。そのため、会話の進行が止まり、会話参与者の双方が話さない間が生じてしまう危険性が生まれる。そのような状況で、記憶が呼び起こされたことを示せば、そのことについて話す権利を得ることができるだろう。そのため、新たな連鎖を開始する手続きとして「あ」が使用できるのである。

さて、断絶を示すことによって直前までとは違った新しい連鎖を配置できることから、このタイプは会話全体の構造である全域的構造（overall structure; Schegloff & Sacks 1973）に敏感に対応しているものもある。具体的には、会話の開始の仕方と終了の仕方に関わるものである。以下では、この二つについて見ていく。

６．４．２．３．１．会話の開始から用件へ

会話は突然始まるわけではなく、特定の作業を通じて開始される。Schegloff(1986)によると、通常、電話は呼び出し-応答の連鎖、相互認識の連鎖、挨拶の連鎖、調子の伺いの連鎖('howareyou' sequence)という四つの連鎖が立て続けに配置され開始される。特に、[呼び出し-応答]の連鎖では、相手との会話のチャンネルが確保されているかの確認作業としても非常に重要である。また、相互認識は電話に限らずほとんど全ての会話によるコミュニケーションにおいて、開始の早い段階で確立されるとしている。これらの連鎖の後、電話のかけ手から電話の用件が伝えられることとなる。この点についてSchegloff(1986)の例を用いて確認しておこう(訳は筆者による。形式などは本稿のものに合わせている。また、訳の右側に書かれた連鎖については筆者が付け加えた。)。ここでは、呼び出し-応答の連鎖、相互認識の連鎖、挨拶の連鎖、調子伺いの連鎖が立て続けになされ、その後用件へと

った具合に、後の自身の行為を投射する質問である。このような質問は通常拒否されることがなく、もしされたとしたら冗談として扱われることとなる。また、直後にpre-preで投射した行為がすぐ配置されるのではなく、その前に「前置き」が配置される。非常に長くなるので割愛しているが、(6-20）の例では「聞きたいことあるの」というpre-preの後、Ｂが大学に入学できたら車を買い換えるかもしれないという前置きがあり、その候補として三つあるという更なる前置きがなされ、もしＢが選べるならどれがいいかという質問（pre-preで投射された質問）がなされている。

移行している。

(6-21)　※Schegloff(1986)のp.115から引用

01　：ring	呼び出し音	┐	呼び出し
02R：Hallo.	もしもし.	┘	応答
03C：Hello Jim?	もしもしジム？	┐	
04R：Yeah,	ああ,	│	相互認識
05C：'s Bonnie.	ボニーよ.	│	
06R：Hi,	ハイ,	┘┐	挨拶
07C：Hi, how are yuh	ハイ,元気？	┘┐	挨拶
08R：Fine, how're you,	元気,そっちは？	│	
09C：Oh, okay I guess	あーまあ元気かな.	│	調子伺い
10R：Oh okay.	あっ良かった。	┘	
11C：Uhm (0.2) what are you	あー(0.2)ニューイヤーズ	┐	用件
12　doing New Year's Eve.	イブに何するの.	┘	

このように、電話の始まりは秩序立てられたやり方によって開始されているのである。なお、この開始の仕方は「通常」取られる手段である。これらのうちいくつかを省くことや簡略化すること自体が何らかの相互行為上のリソース（相手との「親しさ」を示す、緊急の要件であることを伝える等）として用いられることもありうる。

このような電話会話の開始の仕方において、上の四つの連鎖（呼び出し-応答の連鎖、相互認識の連鎖、挨拶の連鎖、調子伺いの連鎖）は電話で話すべき内容である用件にとって、いわば準備のようなものである。この準備的な連鎖と用件に関わる連鎖との違いを明確にするために、断絶が示されることがある。簡単に言い換えるなら、「本題に入る前」から「本題」への移行を明確にする断絶である。上の事例では11行目の発話の冒頭に*Uhm*が断絶を示すために使用されている。このような言い淀みは聞き手の注意を引くものであるだろう(Goodwin 1979)。本題に入る前から本題への移行という連鎖の変化に聞き手の注意を向ける仕事をこの*Uhm*は行なっているものと思われる。

さて、下の例では、会話の開始から用件に入る時に「え：と」が直前との断絶をマークするものとして用いられている。

(6-22)[japn1612 00:00-00:12]

母親（A）と息子（B）との電話の冒頭である。録音の前にアナウンスがあり(このアナウンスは録音されていない)、その後双方の電話が繋がる。

01A：ｎｈｈ[ｈ

02B：　　[あ今から - 今から始まるんだ.＝じゃ今からね.

03A：うん[hm.

04B：　　[pee(電話の番号ボタンを押した時の音)

05　　(0.5)

→06B：**え：と**この-この会話を：.h(0.5)え：と：録音しますのでいいですか？

07A：あよろしいですよ：.＝

08B：＝は::い..hhh(.)って感じなの.

この電話の冒頭では、通常の電話会話でなされる四つの連鎖の多くが省かれている。しかし、電話会話の冒頭で行なうべきチャンネルの確保と相互認識という最低限の仕事は３行目までの段階でなされている。まずチャンネルの確保であるが、２行目のＢの「じゃ今からね」という確認要求に対して、Ａは「うん」(03) と答えており、双方のチャンネルが繋がっていることが明らかになっている。相互認識に関しては、Ｂにとっては１行目のＡの笑いから、Ａにとっては２行目の発話から、双方の声のサンプルが得られている。そのため、相互認識の連鎖を丁寧に行なわなくても[29]、最低限の相互認識は達成されていると言える。このことから４行目以降が(挨拶などしなければ)電話の用件を伝える最も早い位置となる。ただし、４行目でＢは何らかの作業を行なっており、電話の用件とも考えられる「会話を録音する」ということは６行目に伝えられている。

チャンネルの確保および相互認識を行なう連鎖(01-03)と、用件を伝える連鎖(06-07)とは、前者が会話を始めるための準備、後者が実質的な会話の開始をそれぞれ担っているという意味で、質的に異なる連鎖となる。そのような意味で６行目の冒頭は連鎖と連鎖との断絶が際立つ位置と言える。会話の冒頭から用件へと移行する際には断絶をマークする要素を冒頭に配置することによって、後続部分が用件であることを聞き手に予告する働きが

[29] 「丁寧に行なう」というのは、例えば、２行からＢ：「あっＡ？」、Ａ：「うん.Ｂ？」、Ｂ：「うん」のような、相互認識のための発話を配置することを想定している。

あるものと思われる。この例で用いられている「え：と」はいわゆる言い淀み[30]の一種であり、会話の進行性（progressivity）[31]の滞りを示すものである。このような進行性の滞りはしばしば相手の注意を引くことになる(Goodwin 1979)。上の例のような位置で相手の注意を引く要素を配置することで、会話の開始作業から用件へと移行するという断絶を際立たせることができ、聞き手に後続部分が用件であることを予告するのである。このように会話における進行性の滞りはそれ自体相互行為のリソースとなるものである(Schegloff, Jefferson & Sacks 1977、Goodwin 1979、西阪 1999 等)。

ここでは、言い淀みの一種である「えっと :」が会話の開始作業から用件へと移行する際に断絶をマークしているのを見た。次節では、会話の終了に関わる断絶について述べる。

６．４．２．３．２．会話の前終結への移行

断絶をマークする要素が会話の全域的構造に関わる位置としてもう一つ挙げられるのが、会話の終了である。電話会話においては、端的に電話を切る前のやり取りについてである。

会話は自然と終わるのではなく、特定の作業を通じて終えられる。このことを明確に論じたのが Schegloff and Sacks(1973)である。彼らの論は次のようなものである。まず、会話は「じゃあね」「じゃあね」のように最終交換（terminal exchange）を含む終結部（closing section）によって終了させられる。しかし、終結部はいつでも配置可能というわけではなく、適切な配置位置というものが重要となる。その位置を作り出すのが前終結（pre-closing）である。例えば、「うん」「うん」といった発言をパスする発話のやり取りなどがそれに当たる。このやり取りの直後に参与者は、一方では言おうと思っていたが言えなかったことを話題化できるが、他方では会話自体を終結部に向かわせることもできる[32]。その他の前終結として、「電話代けっこうかかるんじゃない？」のように相手の関心を利用するものや、「～に行かなくちゃいけないんだ」というような終了の正当な理由を宣言

[30] 小出(1983)によれば、言い淀みとは「話し手がためらい、そのために音の流れが停滞し、淀むこと」(p.82)のことである。

[31] 「進行性（progressivity)」とは会話が前へと進んでいることであり、「何も介入することなしにある要素から次の要素へ移動することが進行性の体現であり、また、基準でもある」(Schegloff 2007、訳は筆者による)。進行性の滞りになるものとして、ここで挙げた言い淀みの他に、修復や挿入連鎖なども含まれる。

[32] このように、前終結は会話を新しい展開に導くことができる場所でも終えることができる場所でもある。このような意味で Schegloff らは、正確には前終結というより「前終結になりうるもの」(possible pre-closing) としている。

するもの等、様々な手段がある。なお、この終了の正当な理由を宣言するタイプは前の話題が終了した後に配置されるようである。

下の事例では、前の話題が終了した後に、会話終了の正当な理由を宣言することに近い作業が前終結が用いられている。その発話の冒頭に「ちょ：」という要素が用いられている。これも、前の連鎖(質問と応答の連鎖)と前終結の連鎖との境界を明確にしており、断絶をマークしていると言える。

(6-23) [japn4549 02:12-02:22]

この電話の前日にあるロックバンドのボーカルが亡くなっており、そのことについてＰとＱは話していた。直前では、これからそのロックバンドは「どうするんだろうな」とＱが質問し、Ｐが自分の考えを述べている。

01Ｑ：なるほど.

02Ｐ：.h わからんけど.

03Ｑ：°う：ん.°

04　(.)

05Ｐ：.hh

06　(0.8)

→07Ｑ：**ちょ：あの**<u>俺：</u>後でまた電話かけなおすわ.

08　(.)

09Ｐ：あ俺もう寝るからいいよ.

10Ｑ：あほんとに.

11Ｐ：う：ん.＝

12Ｑ：＝うん.

ここでは長くなるので示さないが３行目までは前の話題に関する連鎖である。その後、どちらも話さず、話題を終了することができる位置が生まれる。そのような位置で７行目の発話は提出されている。７行目は会話を終えるのに正当な理由を直接述べているわけではないが、これまでの会話の中からＱが収録日前日にテレビもラジオもつける暇のないくらい勉強していたことが伝えられており、その勉強が今も続いていることを暗示させる発話である。実際は電話を切る理由は別のところにあるのかもしれないが、「後で」と述べてい

ることから、少なくとも「今」手を離せない何らかの事情があることはわかる[33]。この発話は電話の終了を提案するもので、この提案が承認されれば電話は終結部に向かうだろう(実際は、この後Ｐが新しい話題を提出したため終了はかなり先に延ばされることになっている)。

さて、その発話の冒頭に「ちょ :」という注意喚起の冒頭要素が配置されている。ここでの注意喚起は、Ｑの「今手が離せない何らかの事情」をＰに気付かせるためになされていると言える。通常、「今手が離せない何らかの事情」の提示は電話の冒頭に近い場所で伝えられる（Schegloff and Sacks 1973)。しかし、ここではデータとして見せていないが、この会話では、電話の冒頭ではそのような言及はＱからなされておらず、現在試験勉強をしていることも伝えられていなかった[34]。このように、本来なら冒頭で知らしておくべき自身の状況の提示を、会話がある程度進んだ段階で突然示すのは不適切な位置での振る舞いであると言える。「ちょ：」という注意喚起の要素で促しているのは、おそらく後続発話がこのような不適切な位置にあることへ注意であろう。つまり、電話会話の冒頭という本来とはあるべき位置以外に発話が配置されていることを示す誤置標識(misplacement marker)として「ちょ :」が使われているものと思われる。また、直前の連鎖とは異なる局面（会話を展開させる局面ではなく、終了に向かう局面）の連鎖であることを際立たせるため、直前との断絶もマークすることになる。

６．４．２．３．３．直前とは異なる新しい連鎖の開始のまとめ

さて、以上の断絶を示すことによって「直前とは異なる新しい連鎖の開始」がなされるタイプについてまとめておこう。このタイプのものとして、前の連鎖が終了可能な位置でなされる「あ」が挙げられる（6.4.2.3.)。このような、直前とは異なる新しい連鎖を開始するという働きは、会話の全域的構造に関わる仕事と相性が良い。なぜなら、会話の開始

[33] このＱの振る舞い、つまり正当な理由を暗示させるだけで直接は言及しないことは、データには示していないが後々の展開に影響を与えている。具体的には、12 行目の後にＡから「なに勉強してるのまだ」という質問がなされ、その話題が広がっていき、電話を切るまでに結局１分程度の時間を要することになっている。

[34] ただし、収録日前日に試験勉強をしていたことは伝えられている。しかし、これはロックバンドのボーカルの訃報を知らなかった理由として示された情報であったため、「今手が離せない状況」に関わる情報としてはＰにもＱにも利用されていない。また、「前日」勉強していただけなので、収録日「当日」も勉強しているかどうかについても述べられていない。

から用件に移行することも、それまでの話題を終えて会話の終了へ移行することも、それ自体参与者の作業によって達成されなければならないものであるからだ。その移行には必然的に、これまでの連鎖と異なる連鎖を配置する必要が生じる。そのため、このタイプの冒頭要素がしばしば用いられることとなるのである。ここまで、会話の開始から電話の用件に移行する際に、「え：と」という言い淀みが使用されていること（6.4.2.3.1.）、そして、「ちょ :」が会話の前終結への移行する際に使用されていること（6.4.2.3.2.）を見てきた。このように全域的構造に関わる仕事を断絶をマークする要素は行なっているのである。もちろん、このタイプの冒頭要素は「あ」「え：と」「ちょ :」だけではないだろう。その他にどのような要素が用いられており、似たような環境で用いられている要素とどのような違いがあるのかなどは、今後データを増やして検証していく必要がある。

６．４．３．断絶をマークする要素と順序

6.4.2.では、「断絶をマークする要素」が用いられる連鎖環境について詳しく分析してきた。これらを詳しく見てきたのは、「断絶をマークする要素」が発話冒頭における後続指向要素の順序について重要だからである。つまり、発話の冒頭で後続指向要素が複数使用される際に、「断絶をマークする要素」は他の後続指向要素よりも先行するのである。ここでは他の後続指向要素のことを「断絶をマークしない要素」としておく。

これまで「断絶」に関わる事例として示してきた全ての事例で、「断絶をマークする要素」は発話の最初に配置されており、このうちのいくつか（具体的には6-13/14/15/16/17/18/23）は「断絶をマークする要素」が「断絶をマークしない要素」に先行している。このように、「断絶をマークする要素」は他の後続指向要素よりも先行するのである[35]。

なお、これまで何度か触れてきたが、改めて注意しておきたいのは、ここでの例で見てきた「あっ」「で」「まっ」「ね」「ねえ」「え：と」「ちょ :」といった要素は、いつも「断絶をマークする要素」として使われるというわけではない。そうではなく、特定の連鎖環境

[35] ここで見た全ての事例において「断絶をマークする要素」は他の要素に先行していたが、「断絶をマークする要素」は全ての冒頭要素において先頭に配置されるという記述を避けたのは、本稿が分析したデータには見られなかったものの「うんまっそんなわけで」といった具体に、遡及指向要素の「承認に関わるもの」は「断絶をマークする要素」よりも先行する可能性があるからである。

でこれらの要素が用いられた際に「断絶をマークする要素」としての仕事を担うのである。ここでの特定の環境とは、6.4.2.で示したように①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際、②関連のある複数のものを取り上げる際、③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際という三つである。また、もう一つ注意しておきたいのは、「断絶をマークする要素」がこれで全てというわけではないということである。例えば、手順を説明する際に「で」が用いられる事例を6.4.2.2.では紹介したが、手順を説明する方法は「で」だけではなく「まず最初に」「二番目に…」「三番目に…」というやり方も考えられるだろう。このやり方でも「断絶」はマークされると言ってよい。

なぜ後続指向要素の中でも「断絶をマークする要素」は先頭に配置されるのであろうか。それはまさに断絶のもつ「直前の連鎖との境界を作る」という性質と関係している。「断絶をマークしない要素」を先頭に配置した後に「断絶をマークする要素」を配置してしまうと、先行した要素との間に境界を作り上げてしまう。それゆえ、「断絶をマークする要素」は他の後続指向要素に先行するのである。

また、直前の連鎖との境界を示すのに最も適切な位置は、直前の連鎖に最も近い発話の先頭であるからとも言えるだろう。直前の連鎖との境界がある場合、それは後続部分全体の理解にとって非常に重要な情報となる。なぜなら、境界を示されずにいた場合、後続部分が前の連鎖と繋がったものとして聞かれうるからである。そのような誤解を避けるためにも、後続部分を理解する枠組みに関わるものは発話の先頭に配置されるのが望ましいだろう。このことから、断絶をマークする要素は他の後続指向要素よりも先に配置されることとなる[36]。

以上、本節では「断絶をマークする要素」が他の後続指向要素に先行することを指摘し、その理由について考察した。「断絶をマークする要素」は、「断絶」という境界作りの仕事ゆえに発話のできるだけ早い位置である先頭に配置されるのである。

[36] 「断絶」自体は必ずしも発話の先頭、より正確に言えば連鎖の開始地点の発話の先頭だけに示されるわけではない。例えば、ある程度話を進めた段階で「あっこの話はさっきの話とは別の話ね」と付け足すことも可能ではある。ただし、その場合は「あっ」のような誤置標識(misplacement marker)が配置されるものと思われる。

６．５．小括

最後に、本章についてまとめておこう。

まず、後続指向要素の性質について 6.1 では述べた。後続指向要素とは、直後に自分の発話が続くことを予期させる冒頭要素である。これらは必要があれば発話の冒頭で複数使用できるという特徴を持つ。その点が第５章で記した遡及指向要素との大きな違いである[37]。

次の 6.2. では具体的にどのような要素が後続指向要素に含まれるのかについて見た。先行研究での扱われ方を参考に、概観のため便宜上後続指向要素を五つに分けた。具体的には、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」「呼びかけに関わるもの」、「接続に関わるもの」、「態度表明に関わるもの」、「サーチに関わるもの」の五つである[38]。ただし、このような分類で発話の冒頭での順序を見るのには、五つの組み合わせを全て見る必要が生まれ、議論が煩雑になりすぎること、そして、これらの五つが分類基準の異なるものであり統一の視点が必要であることから、順序のための分類としては不適であることを 6.3. で述べた。

6.4. では、「断絶」というキーワードで再度後続指向要素を見つめ直した。「断絶」とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続指向要素が直前の連鎖との境界を示していることである。具体的には次の三つの連鎖環境で示される境界付けのことを指している。

①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際
②関連のある複数のものへの言及をする際
③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際

これらの連鎖環境では「断絶をマークする要素」は発話の先頭に配置されており、「断絶をマークしない要素」よりも先行することを指摘した。それは、「断絶」という境界付けの仕事ゆえに、できるだけ発話の早い位置に置くべきだからである。

以上で後続指向要素についての記述をひとまず終える。後続指向要素の順序に関しては

[37] ただし、５章で述べたように、特殊な連鎖環境においては遡及指向要素も例外的に発話の冒頭で複数使用できる。
[38] これらと「断絶」との関係に簡単に触れておくと、「連鎖の起点としての気付きに関わるもの」は本研究での「断絶」の働きを必ず伴うものであると言える。それ以外の四つの区分は、「断絶」の働きがあるものと無いものが含まれている。

「断絶をマークする要素」が「断絶をマークしない要素」に先行する。このことは本章で指摘してきたことではあるが、後続指向要素の順序に関わる規則はこれだけではないだろう。なぜなら、「断絶をマークしない要素」にはかなり膨大な要素が含まれており、これらが複数使用される際の順序規則もおそらくあるからである。よって、本章で指摘した規則は、後続指向要素の順序に関わる規則の一つに過ぎない。これ以外の規則に関しては今後の課題とする。

次の第７章では、冒頭要素の順序関係について、遡及指向要素・後続指向要素あわせて、ここまで明らかにしたことをまとめる。その上で、冒頭要素がどのように使われているのかを分析し、冒頭要素の一般的な性質を探る。

第７章　発話冒頭要素が担う発話の開始を示す働き

第４章から第６章まで冒頭要素の順序について見てきた。第４章では冒頭要素が遡及指向要素と後続指向要素に分けられることについて述べた。そして、第５章では遡及指向要素について、第６章では後続指向要素についてそれぞれ記してきた。

本章ではまず、これまでに明らかにしてきたことをまとめる。そして、このような順序規則があることを踏まえ、発話冒頭要素全般にどのような働きがあるのかについて考察していく。そのことによって、順序規則が単に会話参与者の発話に制約を与えているというよりもむしろ会話参与者によって順序規則が使用されているということを示していきたい。

７．１．発話冒頭要素の順序

本節では第４章から第６章までに述べてきたことを手短にまとめる。

発話の冒頭要素に対して、「遡及指向要素」と「後続指向要素」という二つの分類ができ、それらを同時に使用する必要があるときは、[遡及指向要素→後続指向要素]という順序になる。また、発話冒頭においては基本的に遡及指向要素は一つだけ、後続指向要素は複数使用できる。

ただし、遡及指向要素は場合によっては正当に複数使用できる状況もある。遡及指向要素が正当に複数用いることのできる連鎖環境とは、一つは、トラブルが解決した直後に求められていた反応をする場合である。もう一つは、想定外の反応求めに対する反応をする場合である。このような連鎖環境で遡及指向要素が複数使用された場合、特定の発話に対する双方の認識の不一致に対処をしている要素が、求められている反応よりも先行することを述べた。

後続指向要素に関しては、複数の後続指向要素が発話の冒頭で使用されている場合、「断絶をマークする要素」が「断絶をマークしない要素」に先行する。「断絶」とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続指向要素が直前の連鎖との境界を示していることであり、具体的には①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際、②関連のある複数のものへ言及する際、③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際に示される境界付けのことを指している。

以上のことを、図にまとめると次のようなものになるだろう。図の左から右は時間軸であり、左の方が発話の冒頭において先行するという意味である。なお、縦の並びは含有関係を表している。例えば、「遡及指向要素」の中に「認識の不一致への対処をする要素」と「求められている反応を示す要素」が含まれていることを示している。

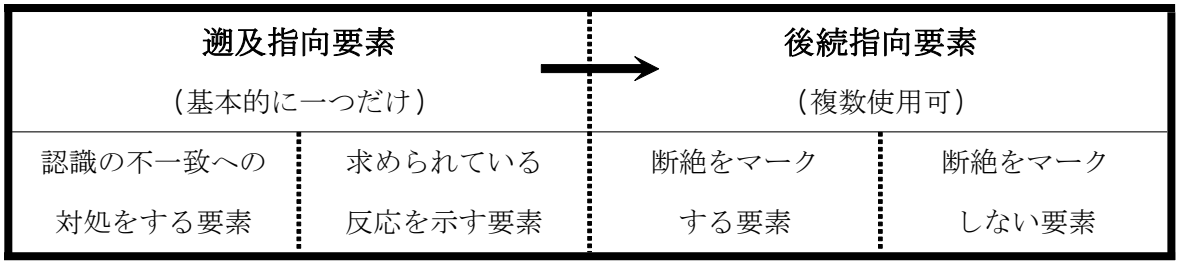

図 7-1　発話冒頭要素の順序

この図で注意しておきたいことは、これらの二つの大枠としてのカテゴリー（遡及指向要素と後続指向要素）やそれらの下位分類としてのカテゴリー（認識の不一致への対処をする要素等）は、必ず発話の冒頭で全て用いられるということを意味するのではないということである。例えば、後続指向要素の「断絶をマークする要素」が用いられる場合、本稿が対象とするデータにおいては遡及指向要素が用いられている例がそもそも無い[1]。上の図はあくまでいくつかの要素が用いられた際の順序を示すものであって、全てが使われるという意味ではないことに注意されたい。

また、具体的にどのような要素が図のどれにあたるのかは連鎖環境を考慮に入れなければならない。例えば、６章では「え：と」が「断絶をマークする要素」として使用されていたことを見たが、このことは「え：と」がいつも「断絶をマークする要素」であると主張するものではない。６章で述べたことは、特定の連鎖環境において「え：と」は「断絶をマークする要素」として用いられるということである[2]。あるいは、「あっ」という形式は遡及指向要素としても、後続指向要素としても用いることができる。情報提供の後等の

[1] しかし、６章でも述べたように、配置されうるものと思われる。例えば機械の使い方を説明しているときに、Ａ：「まず、このレバーを押してからメモリを３に合わせる。」、Ｂ：「３に」Ａ：「うんで一次に角度を合わせてボタンを押すだけ」のような会話が実際でもありうるとするなら、最後のＡの発話では「うん」という遡及指向要素と「でー」という「断絶をマークする要素」（挿入された連鎖から復帰することをマークしている）が用いられていることになる。なお、このような「うん」は連鎖としては直前の「３に」という発話に対して確認を与えるものであるが、Ａの発話は「うん.で」ではなく「うんでー」と一つの塊のように聞かせるデザインとなっているため、３章でも述べたように、本稿では発話の冒頭要素として含めることにしている。

[2] 「え：と」の場合、特定の連鎖環境というのは、電話の開始のやり取りから用件へ移行する発話の冒頭で使用された場合のことを述べている。詳しくは 6.4.2.3.2. を参照されたい。

「あっ」は遡及指向要素、前の連鎖が終わりうる位置での「あっ」は後続指向要素として使用されていることは、それぞれ第５章と第６章で見た。これも、「あっ」がデータに前以て遡及指向要素か後続指向要素かに分類できるものではなく、どのような連鎖環境で用いられるのかを考慮に入れて初めてどのように使われているのかがわかることを意味している。確かに、ある特定の要素が必ず「断絶をマークする要素」として使われるというように、特定の作業に特化した要素があるかもしれない。しかし、本稿では複数の冒頭要素の関係を扱っているものであり、個別の要素に深く立ち入ることは避ける。

以上が、第４章から第６章までに述べてきたことのまとめである。これらのことが示しているのは、話者は発話の冒頭に使用される要素を決してランダムに並べているわけではなく、順序立てて使用しているということに他ならない。この順序の規則は、各冒頭要素の通常の配置位置を示すものである。次節では、この通常の配置位置「以外」で冒頭要素が用いられている事例を検討する。そのことによって、通常の配置位置で用いられている事例を検討するだけでは気付きにくいような冒頭要素の働きについて明らかにする。また、その検討を通じて順序規則が「使われる」ものであることを述べたい。

７．２．発話冒頭要素の利用

これまで見てきたことは複数の冒頭要素が用いられる際に、それらがどのような順序で用いられるかということである。本節では、冒頭要素が通常の配置位置「以外」の場所で用いられた際にどのような働きをするのかということに焦点を当てる。この分析によって、通常の配置位置での使用を見ていたのでは見逃してしまう可能性のあるような冒頭要素全般の性質を示したい。

冒頭要素の通常の配置位置以外の場所とは次の二点が考えられる。

１：冒頭要素の順序規則に反する位置

２：発話の冒頭ではなく、発話の途中

１の「冒頭要素の順序規則に反する位置」というのは、本研究でこれまで示した順序規則にそぐわない位置に冒頭要素を配置している場合のことである。例えば、通常だと[遡及

指向要素→後続指向要素]となるところを、既に後続指向要素が用いられたにも関わらず遡及指向要素をその後に配置している事例などを想定している。より具体的に言えば、「えっでも」となるところを「でもえっ」としているとき等で、前から聞いていくときに「えっ」まで発話が進んだ段階で「えっ」が一般的な配置位置以外で使用されていることが認識可能になる。そのため、この場合では、「でも」ではなく「えっ」が一般的な配置位置以外で使用されているものとして本研究では考える。順序規則が守られていないことによって何らかの作業が達成されるのであれば、それは順序規則が研究者にとっての規則である前に、参与者にとっての規則であるはずである。つまり、前章までに明らかにしてきた冒頭要素の順序が参与者にとっても重要な規則であることを意味することになる。また、冒頭要素の順序がいかに会話に利用されているのかを明らかにすることにも通じるだろう。

２の「発話の冒頭ではなく、発話の途中」というのは、いわゆる命題内容に直接関わる言語要素が発せられた後に冒頭要素が使用されている事例を念頭に置いている。あるいは、本研究では、二つの発話が下降音調や間隙といった切れ目もなく続けられる場合、その二つの発話を一つの塊として考え、その塊を分析対象としている。その際の、一つの塊における二つ目の発話の冒頭に冒頭要素が用いられている場合も、発話の途中（正確には塊の途中）で冒頭要素が使用されているものとして考える。例えば、詳しくは後に分析することになるが、「(前日にニュースになった有名人の訃報について）新聞も見なかった？＝今日」という質問に対して「信じらんね：おう見てねんだよ（以下略)」と言っている事例（japn4549）における「信じらんね：おう見てねんだよ（以下略)」という発話がそれにあたる。これは「信じらんね：」と「おう見てねんだよ」という二つの発話から成り立っているが、その二つの発話の間には下降音調や間隙もなく立て続けに発せられており、発話者がこの二つの発話を一塊の発話のように扱っている。このように、複数の発話が一塊のように扱われている時、その塊の途中で冒頭要素が用いられていれば（上の例では「おう」がそれにあたる)、それを「通常の配置位置とは異なる場所」で冒頭要素が用いられている事例として考える。

さて、このような通常の配置位置ではない場所で冒頭要素を用いるということは、言語学で言うところの「非文法的」な文を発話として生み出すことにもしばしば関わる。そこで、まず、非文法的な発話は会話においてどのように扱われるのかについて考えておきたい。その上で、発話冒頭要素が通常の配置位置以外の場所でどのように利用されているのかについて検討する。

７．２．１．会話に現れる「非文法」

書き言葉[3]には基本的には非文法的な文は出現しにくいと言える。それは、書き手が非文法的な文を修正して、文法的にすべきであるということに指向しているためであろう。更に、書いたものが読み手に届くまでの間に、書き手には修正のための時間が用意されていることも非文法的な文が出現しにくい理由であると思われる。それゆえ、一般的に書き言葉に現れる非文法は「誤植」として判断され、「出来る限り無い方が良い」ものとして扱われると言えるだろう。一方、修正のための時間が用意されていないリアルタイムでの会話においては、しばしば非文法的な箇所を含む発話が産出される。また、非文法的な箇所を含む発話がしばしば発話者によっても受け手によっても修正されないことを考えると、会話においては「文法に適った発話にすべき」という指向が文章を書く時よりも相対的に低いものと思われる。更に、会話においてはそういった非文法も実際に産出されているが故に、即座に、あるいは後々になって発話者も受け手もそれに対処することや何かのきっかけにすることができるため、会話参与者たちにとって何らかのリソース[4]として扱われうる。このように、非文法は会話と書き言葉では異なる扱いとなる。

以下では、発話冒頭要素が一般的な配置位置以外で用いられる事例の検討に入る前に、若干の遠回りとなるが、会話に現れる「非文法」が会話参与者によってどのように扱われる可能性があるのかについて簡単に整理しておきたい。

会話においてある発話者が非文法的な発話をしたとしても、他の参与者によって特に取り扱われることもなく会話が進行することも多い。あるいは、発話が非文法的になっていたとしても、参与者によって問題がなかったことにされることもある[5]。また、発話者や他の参与者に言い直されることもしばしば観察されることである。このことを体系的に扱ったのが修復（repair）の研究である[6]。しかし、参与者による発話の非文法への取り扱いはこれだけではない。発話の非文法はそれ自体何らかの相互行為のリソースとして用いられることもある。次の例では非文法的な発話が、更なる説明の前置きを予示している。

---

[3] 本研究の「書き言葉」に対する考えについては 2.1.も参照されたい。

[4] リソースとは、簡単に言うならば、行為や活動を成し遂げるために会話参与者によって利用可能・観察可能なもののことである。本稿２章の注４を参照されたい。

[5] 例えば、西阪（1997a）は、相手の言い淀みなどの産出のトラブルが見られる位置の直後に理解を示すことは、そのトラブルがあったにも関わらず、その発話の意味することへの理解に問題がなかったこと、更には、相手の発話が意思疎通において問題がなかったことを主張できると述べている。このような振る舞いは、相手の発話の非文法を全く取り扱わないというより、相互行為の中で問題がなかったことにされているものと言える。

[6] 詳しくは Schegloff, Jefferson & Sacks(1977=1990)を参照されたい。

(7-1)[japn1773　00:39-00:48]

ＨがＩ(しんすけ)に、共通の友人である「あやちゃん」(この会話においては初出)から手紙が来たことを伝えている。なお、ＨとＩは離れた場所に住んでいる。

→01Ｈ：.hh.hh あやちゃんがね：手紙来たんだきのお：.＝

　02Ｉ：＝お：ん.

　03Ｈ：でね：しんすけに電話したらね：[手紙はたまにでも＝

　04Ｉ：　　[うん.

　05Ｈ：＝書くようにってゆっといてくださいって書いてあった..hh

１行目でＨは「あやちゃんがね：手紙来たんだきのお：.」と発話しているが、この発話はいくつかの特徴からまだ続きがあるように聞こえるだろう[7]。

まず、Ｈが「あやちゃん」から手紙が届いたことが言われているだけで、そこにどのようなことが書かれていたのかがまだ述べられていないという特徴によって、まだＨの発話が続くということを聞き手に予告することになる。

あるいは、発話末の「きのお：」という部分から、この出来事がＨの近況であることがわかる。電話開始から39秒とあまり時間が経過していない段階であり、両者の近況を語るに適切な位置でＨ側から近況に関わることが示されていることも、Ｈの発話が続くことがＩに観察可能なリソースとなるだろう。

さらに、本節で焦点を当てている文法性から１行目の発話に注目すると、「あやちゃんがね：手紙来たんだきのお：.」は「あやちゃんから手紙来た」となっていないことから、統語論的に非文法的であると言える。しかし、リアルタイムでＩがどのように発話を聞いているかを考えると、「あやちゃんがね：」まで聞くと、ＨがＩに「あやちゃん」についての何らかの情報を提供するつもりであることが読み取れる。そこに「手紙来たんだきのお：」と続くのであるが、これは先ほどの「あやちゃん」についての何らかの情報提供とは見なせない。なぜなら、①「手紙が来た」だけでは「あやちゃん」が何をしたのか、あるいは、

[7] このような「まだ続きがあることを示す発話」の代表的な例は、Sacks(1992)の「ストーリーの前置き」(story preface)である。通常、発話の末尾には「ターンが替わってもよい場所」が配置される。ただ、「ストーリー」のように、話す内容が多い場合、一つの発話だけでは伝えられないこともある。そのような場合に相手にターンが移行しないように発話者が取れる手段の一つとして、これから複数の発話を配置することをいわば「予約」するということが挙げられる。Sacks が明らかにした「ストーリーの前置き」は、まさにそのような仕事を行うものである。ただし、注意したいのは、１行目「あやちゃんがね：手紙来たんだきのお：.」は、「まだ続きがあることを示す発話」ではあるが、「ストーリー」が続くかどうかはわからないということである。実際、３行目と５行目に続いているのはストーリーではない。

どうなったのかについてまだ述べられておらず、また、②「手紙が来た」はHについての情報であって、「あやちゃん」についての何らかの情報提供はまだなされていないからである。これらの理由から、まだ示されていない「あやちゃん」についての情報提供が後に配置されることが予測できる。つまり、「あやちゃんがね：手紙来たんだきのお：.」という発話の非文法性はそれ自体、発話がまだ続くことを予告するリソースとしてＩには利用される可能性があるということである。

以上のような「発話がまだ続く」というデザイン上の工夫がなされた発話に対して、２行目でＩは「お：ん」と続きを促しており、３行目および５行目でHはその続きを話しているのである[8]。

このように、発話の非文法性はそれ自体何らかの相互行為のリソースとして用いられることがあるのである。多少の寄り道となってしまったが、7.2.で注目しているのは、「発話冒頭要素が通常の配置位置以外の場所でどのように利用されているのか」という点であった。通常の配置位置以外の場所で発話冒頭要素が用いられるとき、全てではないものの、しばしば「非文法的」と判断されるような発話となる。しかし、本節で述べてきたように、「非文法」であったとしても何らかの相互行為のリソースとして用いられることもある。発話冒頭要素が通常の配置位置以外の場所で用いられる時、一体どのようなリソースになりうるのであろうか。

７．２．２．リソースとしての発話冒頭要素

以下、冒頭要素が通常の配置位置以外の場所で用いられる事例を検討する。そのような位置で用いられることで、多くの事例においては、上で見てきた非文法的と言えるような発話となっているのであるが、そのような位置で用いることによってどのようなリソースとなっているのかについて検討する。具体的には、「通常の配置位置以外での場所」で冒頭要素が用いられる際に「自己修復」、「引用」、「立ち遅れ反応」という三つの作業がなされて

[8] Schegloff(2007)は、ベースとなる隣接ペアを提出するために、それよりも前に配置される連鎖のことを「前方拡張」(pre-expansion) と呼んでいる。前方拡張には「誘いの前に配置される連鎖」(pre-invitation) や「申し出の前に配置される連鎖」(pre-offer) などが含まれる。(7-1)は「報告の前に配置される連鎖」(pre-announcement) である。Schegloff によれば、前方拡張での隣接ペアの第二部分では、「続きを促す」(go-agead)、「続きを阻止する」(blocking)、「保留する」(hedging) のいずれかになる。(7-1)の２行目では「お：ん」と「続きを促す」振る舞いをしており、Ｉも１行目をこれで終わりではなく「まだ続く」ものとして捉えていることがわかる。

いることを明らかにした上で、これらが冒頭要素の前後で依拠する統語構造が異なることを聞き手に示すことを述べる。そして、このことから冒頭要素の持つ「始まり」をマークするという性質が浮き彫りになるということを主張する。

７．２．２．１．自己修復

まずはじめに、冒頭要素が通常の配置位置以外の場所で用いられることで、発話の自己修復（Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977=1990）がなされている事例を見る。これまで様々なところ[9]で何度か既に触れてきていたことではあるが、冒頭要素が順序規則に反した位置で用いられることは、自己修復が開始されたことを聞き手に示すリソースとなる。Schegloff 達の議論によると、修復とは発話の産出トラブル、聞き取りのトラブル、理解のトラブルに対処するものである。修復は開始と操作という二つの局面があり、またトラブル源の話者(自己)がするものと他者がするものがある。これらの組み合わせで、自己開始自己修復、自己開始他者修復、他者開始自己修復、他者開始他者修復の４つに分類される。ここで扱う自己修復は産出のトラブルに対処する自己開始自己修復のやり方の一つである。

下の事例では７行目に自己修復がなされているものである。

(7-2)[japn6739　04:54-05:04]

直前までのやり取りは、ＵがＴに隣の家の裏庭が見えるかどうか聞き、それに対してＴが、隣の家と自分の家の間に塀があるものの、自分の庭の木の手入れをするときにその塀をよじ登るので、その時に見ると答えた。そして、隣の家の庭について「ま：ちゃんと芝生が植わってねぇ」(01)と言っている。

01Ｔ：[ま：ちゃんと芝生が植わってて[ね：.

02Ｕ：　　[あっそううちは↑ね：,

03Ｔ：う：[ん.

04Ｕ：　　[あのう隣との間にあｒ - あのう２メートルぐらいの塀が：

05　　してあるのよ.

[9] 具体的には４章の冒頭、4.2.3.、5.1.等を念頭に置いている。詳しくは 4.2.3.を参照されたい。

06Ｔ：う：::ん.

→07Ｕ：**だからね,で**ビシーとしてあるから全然見えない.

08　　(0.3)

09Ｔ：あっ＜ほん[：と：う.＞

ここでは、Ｕが２行目から５行目で自分の家と隣の家の間に２メートル程の塀がある旨をＴに伝えている。Ｔが「う：::ん.」と情報を受け取ったことを示した後、Ｕは更に７行目で「ビシーとしてあるから全然見えない」とそれまでの情報提供の続きを述べている。ここで注目したいのは、７行目の冒頭である「だからね,で」という部分である。伊藤 (2012a) で示しているように、「で」は他の接続詞より先行するという順序規則がある[10]。このことから、「だからね,で」というのは、「で」が一般的に配置される位置以外の場所で「で」が用いられていると言える。このような位置で「で」を使うことによって達成されているのは、「だからね」で始めた発話の組み立てを取りやめ、「で」で発話を組み立て直すという自己修復である[11]。つまり、冒頭要素の順序規則が参照されることによって、冒頭要素が自己修復のリソースとして用いられているということである。言い換えれば、自己修復がなされていることが他の参与者にわかるためのリソースとして、冒頭要素が用いられているのである。

同様の事例を見ておこう。

(7-3)[japn4222　03:09-03:28]

Ｌは自作ビデオの広告を出して売り込もうとしており、そのことに詳しいＭはＬのビデオを自分のところに送るよう要求している (01)。なお、ライトハウスとはロサンゼルスおよびサンディエゴで発行されている現地情報誌であると思われる。

[10] 筆者は伊藤（2012a）で、「で」が相互行為においては「直前の単位との断絶をマークした上で「続き」を投射する」(p.37) という指摘をしておいた。この直前の単位との断絶を示すという働きのため、「で」の前に別の要素を配置してしまうと、その要素が後続発話に対して及ぼす影響（投射）まで断ち切られてしまうため、「で」の前に別の要素が置けなくなってしまうのである。なお、伊藤(2012a)については、6.2.3. で多少詳しく説明している。

[11] この事例ではなぜ「だから」を取りやめているのであろうか。「だから」で開始すると直前の発話を根拠として、そこから導かれる帰結が述べられることになるだろう。もし直前の根拠が曖昧なものであるならば「だから」は不適となる。７行目のＵの発話に「ビシーとしてあるから」とあえて「全然見えない」根拠になりうる描写をしていることから、４行目および５行目で「２メートルぐらいの塀がしてある」という描写では根拠として弱いということに「だから」を言い始めた段階でＵが気がつき、自己修復を行なっているのではないかと思われる。

01M：一本送ってよ.hh

02Ｌ：(あ)あ,Ｍちゃんとこに？

03M：うん.

04Ｌ：.hh 今いっこサンプルある.

05M：.hh ん - あの：新聞で：うまくすれば：ねえ？

06Ｌ：ふん.=

07M：=(り)ょうかいできるかもし[れ -]

→08Ｌ：　　[だか]ら：そうライトハウスにどのく

09　　らいこう(くう)料_(0.9)アドバタイズメン載っけるとしたらどんくら

10　　いと - あ一ヶ月とられるんかな：と思って(.)それ聞こうかな：と思

11　　ってＭちゃんに.

この例では８行目でＬが「だから」と開始した発話を「そう」と言うことによって、発話の組み立て直しを行なっている。そのような作業が行なわれているのが我々に（そしておそらくＭにも）わかるのは、冒頭要素の順序規則を参照しているからである。つまり、「だから」という後続指向要素から「そう」という遡及指向要素という順番で使用されているのであるが、これは第４章で見た[遡及指向要素→後続指向要素]という冒頭要素の順序規則に反するものであり、「そう」が一般的な配置位置とは異なる場所で用いられているからである。そのため、「そう」を起点に自己修復が開始されていることが観察可能になるのである。

ここまで、一般的な配置位置以外で冒頭要素が用いることが、自己修復がなされたことのリソースとなっていることを見た。次節では、「引用」が開始されたことのリソースになっている事例を検討する。

７．２．２．２．引用

自己修復の他に、引用[12]の開始のリソースとして、発話冒頭要素が用いられている事例

[12] なお、ここで言う「引用」とは、「今の私」ではない発話者が発したものとしてデザインされている発話のことである。典型的には、過去に他の人物が言った発話を自分の発話の中で使うことであるが、過去に

もあった。例えば、次のようなものである。この例では、Ａは話題にしている男がいかに嫌な人物であるかを、自分の経験を語ることでＢに伝えている。なお、引用部分は網掛けにしている。

(7-4)[japn4044　06:59-07:32]

会話収録日にＪは知人である長髪の男を大きなラウンジで見かけたようだ。飲酒運転を自慢げに話すその男のことをＪは前から気に食わないと思っており、普段から無視しているようである。なお、15行目の「新顔」というのは長髪の男のことであり、このことからその長髪の男はＪの後輩に当たる存在である可能性がある。

01Ｊ：[でそんなさ離れてるんだし：.h[h人をね：そんな.hhh＝
02Ｋ：　　[うん.
03Ｊ：＝いないからさ：大きな声で話さなくてもわかるじゃ：ん.＝
04Ｋ：＝うん.
→05Ｊ：だけどさ：な：んか.hいや：とっ捕まっちゃって：＞とか言っｔ－＜
06　　で超長髪でだぼだぼのズボンとか¥履い[てて：,¥
07Ｋ：　　[あ：あ：[よく(いる).
08Ｊ：　　[.hh
09Ｊ：¥＞それで＜なんか¥.h先週ずっと↑ね：(s-)エスケイプ
10　　してたのねその人：.
11Ｋ：うん.
12　　(.)
13Ｊ：だからみ-(0.2)見なかったの顔を：.
14Ｋ：うん.
→15Ｊ：で：あっ新顔だ＞とか＜思って：,
16Ｋ：うん.＝
→17Ｊ：＝そしたらなんかね：いや＜捕まっちゃって：＞とか言って[：,
18Ｋ：　　[ｈ：
19Ｊ：千ドルの罰金なっちゃってさ今日払いに行かなきゃいけないんだ：

自分の言ったことも「引用」に含む。また、本稿で扱う「引用」には、実際に言ったことであるかどうかは関係なく、「言ったかもしれない発話」や「言いそうな発話」というのも含む。

20　　とか言っ＃て[：,＃

21K：　　[あ：すばら(h)[しい.

22Ｊ：　　[＜↓自慢げに＞はｈなｈすの

23　　＜゜なん゜か：.＞　((22と23は憎々しげな音調))

ここで語られているのは、Ｊが常々悪く思っていた長髪の男を会話収録の日に見かけ、そこでその男がいかに嫌な発言をしていたかということである。注目したいのは、Ｊによって引用されている発話である、5行目の「いや：とっ捕まっちゃって:」、17行目の「いや＜捕まっちゃって：＞」という長髪の男の過去の発話、および15行目の「あっ新顔だ」というＪ自身の過去の発話である。これらの発話を下に抜き出しておく。

(7-5)冒頭要素を引用部分に含む発話

05A：**だけどさ：な：んか**.h**いや：**とっ捕まっちゃって：＞とか言っｔ－＜

15A：**で：あっ**新顔だ＞とか＜思って：,

17A：＝**そしたらなんかね：いや**＜捕まっちゃって：＞とか言って[：,

これらの引用部分は①発話の途中から開始されており、発話の内部に組み込まれる形(網掛け部)で聞き手に示されている。また、②冒頭には、いずれも「いや」や「あっ」という冒頭要素(上では□で示している)が配置されている。

ここで用いられている「いや」や「あっ」はいずれも遡及指向要素である。その前に配置されている「だけどさ:」「な：んか」(05)、「で:」(15)、「そしたら」「なんかね:」(17)はいずれも後続指向要素である。第４章および第５章で既に述べたように、遡及指向要素は後続指向要素に先行する。それゆえ、この引用部分で用いられている「いや」や「あっ」はいずれも一般的に配置される位置以外の場所で用いられていると言える。

発話の途中に「冒頭」要素を配置することによって、発話の途中にも関わらず「発話の冒頭」がそこに配置される可能性が聞き手に示されることになるだろう。その可能性の一つが引用である。引用とは発話の内部に発話を組み込むことであると言える。内部に組み込まれる発話(引用部分)は、「発話」として認識させるために、なんらかの意味で「発話」

に見えるようなデザインとなっているだろう。「発話」に見えるようなデザインとして、例えば、引用内部で冒頭要素や終助詞を含むというデザインであったり、引用内部だけ声を真似るという音調的なデザインであったりと、いくつかの手段が考えられる。その点から考えると、本稿が焦点に当てている冒頭要素は、それが配置された箇所が「発話」に見えるようなデザイン上の特徴の一つである。このように、発話の途中で冒頭要素を用いることは、聞き手に「引用」の可能性を示し、その可能性を考慮しつつ後続発話を聞くよう促すことに繋がるのである。

なお、ここで改めて注意しておきたいのは、発話の特定の部分が「引用」（あるいは発話に組み込まれた「発話」）であると聞き手に示すためのリソースは冒頭要素だけではないということである。発話の特定部分が「引用」であると聞き手にわからせる手段[13]はそれ自体重要な研究テーマとなりうるものであるが、本研究で示したいことはその特徴を網羅的に明らかにすることではない。本稿で述べてきたのは、冒頭要素が引用が開始された可能性を聞き手に示すための手段として冒頭要素が用いられているということである。

以上、冒頭要素が一般的に冒頭で用いられるがゆえに、冒頭以外の場所で冒頭要素が用いられた際に、発話の途中にも関わらず「発話の冒頭」が配置される可能性を示すこと、そして、その可能性の一つが引用であり、冒頭要素が引用開始のリソースとなりうることを述べた。次節では立ち遅れ反応の開始のリソースになっていることを見る。

---

[13] 冒頭要素以外が「引用」のリソースとなっている実例を一つ挙げておこう。この例ではUが録音の準備のために音声ガイドに従って何をしたのかについてTに説明している。なお、１行目の「入れた」は、自分の電話番号を音声ガイドに従って入力したという意味である。

（7-a）[japn6739　00:45-00:49]
01U：　[で入れたんですよ：.
02T：う::ん.＝
03U：＝そし(て／＞たら＜)あなたの電話番号はこうですねって向こうが言うわけよ：.

この例で、３行目の「あなたの電話番号はこうですね」の部分が引用であると聞き手に示すために用いられているリソースは少なくとも四つある。一つ目は「あなた」である。「あなた」という語は一般に現場にいる相手のことを指す。しかし、Uだけしか経験していない出来事についてTに説明している際に、この「あなた」がTのことを指すとは考えられないだろう。そのため、「ここではない現場」で用いられたもの、つまり引用であると解釈できる。二つ目は「こう」という現場指示の表現である。これも上の「あなた」と同じ論理で、ここではない現場で用いられたものと解釈できるものである。三つ目は「ね」という終助詞が発話の途中に用いられていることである。最後に「って向こうが言う」という引用を明示するマーカーである。このように、話し手は様々な手段によって発話の特定部分が「引用」であることを聞き手に示しているのである。

７．２．２．３．立ち遅れ反応

相手から質問などをされて、その反応を求められている状況にも関わらず、反応を求められた者がその反応以外の振る舞いをしてしまうことがある。そのような時に、反応を求められた者が先ほど求められた反応をしたいならば、どのようなやり方が可能であるのであろうか。その手段の一つとして、次のように冒頭要素が用いられている事例があった。

(7-6)[japn4549　01:20-01:27]

ＰがＱに対し、前日にあるロックバンドのボーカルが死んだことを伝え、そのときのラジオの様子を詳しく説明した後。

01Ｐ：＞ほんとだよガラシア死んじゃったよ！＜
02　　(0.5)
03Ｑ：tch-
04　　(0.8)
05Ｐ：新聞も見なかった？＝今日.＝
→06Ｑ：＝信じらんね：**おう**見てねん[だよ俺ぜ -]
07Ｐ：　　[今日のし]んぶん見れば絶<u>対</u>
08　　トップで載ってる.

ここでは５行目でＰが「新聞も見なかった？＝今日」と質問をしている。これに対してＱは６行目で「信じらんね：おう見てねんだよ」と述べている。注目したいのはこの６行目で、５行目のＰの質問に対してＱは答えずに、まず「信じらんね：」とアーティストの訃報に対する評価的なコメントをしている[14]。その後、Ｑは一般的に発話の終了を示す音調的な下降や、発話と発話の区切りを示す間を配置することなく、「おう見てねんだよ」と５行目の質問に答えているのである。６行目は「信じらんね：」という評価と「おう見てねんだよ」という応答という二つの行為から成り、その点でこれは二つの発話で構成されている。しかし、この二つの発話を下降という音調的な工夫や、間を配置するという工夫を用いる

[14] この評価的なコメントは独り言であると言えるかもしれない。独り言は参与者に聞き取り可能であるがゆえに、そこから話題が展開する可能性がある（筒井 2012)。一方、この評価的なコメントは１行目の「＞ほんとだよガラシア死んじゃったよ！＜」というＰのコメントに対する反応であるのかもしれない。独り言であれ、１行目に対する反応であれ、重要なのは５行目のＰの質問の直後に位置しているということである。質問の直後であるがゆえに、この「信じらんね：」は位置的に不適切な発話である。

こともしないことで、一塊の発話のような装いとなっている。この時、一つ目の発話と二つ目の発話の区切れを明確にしているものが「おう」という冒頭要素であろう。「おう」は会話の時間軸上で遡ったある時点の質問に対して肯定していることを示す[15]。この事例の場合は５行目のＰの質問が最も直近の質問であり、Ｑはそれに答えていないという状況であるため、Ｐにとって「おう」が５行目の質問に対する応答であると理解できるだろう。このように、二つの発話に音韻的な切れ目や間がなくとも「おう」があるために、どこから二つ目の発話なのかが明確に聞き手に伝わることとなる。

では、このような二つの発話を一つの塊のようなデザインにすることで何が達成できるのであろうか。少なくとも言えるのは、一つ目の発話が統語的に終わりうる位置で「すぐに」質問に答えることを開始できるということである。つまり、一方では①一つ目の発話を完了と見なしうる点まで進めることができ[16]、他方では②二つ目の発話である「要求されている反応」を一つ目の発話が終わり次第可能な限り早いタイミングで開始できるのである。

①の一つ目の発話である「信じらんね :」を完了と見なしうる点まで進めることによって、質問されているのにも関わらず、その応答ではない自身の評価を完了可能点まで進めることになるため、質問に答えられない理由を聞き手が見出す機会が生まれる。ここでの評価が「信じらんね :」であり、受け入れるのが難しいことを表明していることと相まって、この「質問に答えられない理由」が「あまりにショックであり呆然としていた」といった具合に聞き取られうるだろう。このように「あまりにショックであり呆然としていた」といった振る舞いは、質問されているにも関わらず、その応答ではなく「受け入れることが難しい」ことを意味する評価を提出することによって構成されているのである[17]。

②の二つ目の発話である「要求されている反応」を一つ目の発話が終わり次第可能な限り早いタイミングで開始することは、音調的な区切れや間を配置しないことで、相手が反応の追及を行う可能性を最小化[18]しているとも言える。質問などをしたときに、相手から

---

[15] 詳しくは５章を参照されたい。

[16] 別の手段としてＱが６行目にできることは、一つ目の発話を完了可能点まで進めずに応答を開始するということもありうるだろう。

[17] 当然のことではあるが、「あまりにショックであり呆然としていた」といったような振る舞い自体は、状況ごとに様々な手段によって達成されるだろう。このデータにおいては、ここに書かれている手段によって達成されているという意味である。

[18] ここで「最小化」という言葉を使っているのは、６行目の「信じらんね：」の直後にＰ側から何らかのアクションがなされる可能性があるからである。６行目の「信じらんね :」の末尾は音調的には完了していないものの、統語的には完了しうる位置であると言える。仮にＰ側から反応の追及があるのであれば、その直後に発話を開始する可能性がある。その可能性はＱが「信じらんね :」を下降音調で発することや、間を

適切な反応が得られない場合、適切な反応を得るために我々はしばしば反応の追及をする(Pomerantz 1984b)。最初の質問をされた側にとっては、もしその質問に答えるつもりがあるのであれば、その追求よりも先に答えるべきであろう。上の事例で、一つ目の発話と二つ目の発話の間に音調的な区切れや間を配置しないことにより、ＢはＡが反応の追及をするよりも早く二つ目の発話である「要求されている反応」を行なうことができるのである。

立ち遅れ反応に似た事例を見ておこう。上の例では、評価によって応答が遅れている事例であった。下の事例では、確認要求と説明の開始が同じタイミングで行なわれたため、確認要求に対する確認が説明を開始した後になってなされているものである。

(7-7)[japn6739　02:29-02:41]

ＵとＴは自分達の家の庭について話している。直前では、Ｔが庭でスイカを作ったことがあるとＵに伝えており、Ｕは驚いている（01)。なお、２行目の「う：ん」は１行目の「ほんと：:」に対する反応である。

01Ｕ：す(h)ご(h)：(h)い.h[h¥ ほんと]：[：.¥

→02Ｔ：　　[それでね：,]　[う：ん一年のその夏の

03　終わりに：あの：: う笑っちゃったんだけど：.hh 結局：買った方が

04　ウォーターメロンの場合なんか安いの.

Ｔが庭でスイカを作ったことがあるという話に対して、Ｕは１行目で「す(h)ご(h)：(h)い」と評価している。Ｔは２行目で「それでね：,」と先ほどのスイカの話に続ける形で説明を開始している。しかし、この説明の開始は、Ｕの確認求め「ほんと　:」(01）と重なってしまう。そのため、Ｔは「それでね：,」と開始した発話を一旦ストップし、「う：ん」と求められていた反応である確認を与え、ストップしていた説明をすぐに開始しているのである。ここでは、「う：ん」の後に「それでね」と言って再び説明をやり直すことができるが、Ｔはそうせず、発話を継続させる手段を取ることで確認要求と確認の連鎖を「やり過ごしている」（串田 2005b）[19]。

置くことによってさらに高まっていくだろう。そのような意味で、区切れなく発話することでＰ側からの反応の追及の可能性を最小化していると言えるだろう。

[19] 串田（2005b）では、相手の発話と自身の発話が重なった場合に、重なりが解消された時点で重なった部分を再びやり直す「再生」と、重なった部分の続きを行なう「継続」とがあることを指摘している。前者は、相手が開始している行為を制止する働きが、後者は相手の発話をやり過ごす働きがあるとしている。ただし、ここでの例では相手の確認要求に対して「う：ん」と反応した後で継続しているものであるため、

Ｔの発話だけ見ると、「それでね：, う：ん一年の…」と、一つ目の発話（それでね：／一年の…）の間に二つ目の発話（う：ん）が挿入される形となっている。このような理解が可能であるのは「それでね:」という後続指向要素から「う：ん」という遡及指向要素という順序（つまり、[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序規則に反する順序）で使用されていることによるのである。ただし、このような配置は、反応が遅れているというわけではなく、むしろ反応に遅れないためになされているものであるので、立ち遅れ反応とは言えないかもしれない。立ち遅れ反応は、相手が反応を求めているにも関わらず、その求められている反応とは異なる振る舞いをしてしまったために、反応が遅れているものである。ここでの例は、相手が反応を求めているにも関わらず、同じタイミングで次の段階に話を進めてしまったため、反応が遅れないようにこのような冒頭要素の配置になっているのである。

いずれにせよ、求められた反応をする際の位置的な不適切さに対処するための手段として冒頭要素が用いられているのである。前者は別のことをしてしまい答えていなかった質問に答えるという位置的な不適切さであり、後者は話の続きを始めてしまった後で、前の話に対する反応求めに応じるという位置的な不適切さである。どちらも冒頭要素を「通常の配置位置以外の場所」で用いることによって、既に行なった不適切な行動に対処しているものと思われる。

以上、相手が反応を求めているにも関わらず、その求められている反応とは異なる振る舞いをしてしまったために、反応が遅れてしまうという立ち遅れ反応について見てきた。そして、その類例として反応求めと話の継続が重なってしまった事例を見た。どちらも冒頭要素を通常の配置位置以外の場所で用いることによって、位置的な不適切さに対処しているものであった。

次節では、これまでの記述をまとめる意味でも、冒頭要素が一般的に持っている性質について考えてみたい。

串田が分析した対象と完全に一致しているわけではないが、串田の記述はこのケースにおいても当てはまるものと思われる。

７．２．３．「始まり」をマークすること

これまで見てきたのは冒頭要素が一般的な配置位置以外の場所で用いられる事例であった。このような位置においては、自己修復、引用、立ち遅れ反応といった行為が開始されたことを示すという働きが冒頭要素にはあった。では、なぜこのような行為のリソースとして冒頭要素が用いられるのであろうか。そのことについて考えてみたい。

冒頭要素は、その名の通り、発話の「冒頭」に配置される要素である。したがって、冒頭要素は発話の「始まり」をマークする。これまで見てきた事例は、通常の配置位置以外の場所で冒頭要素が配置されており、発話の「始まり」ではない場所で「始まり」を行なっていることになる。このことは、冒頭要素の直前と直後とで、統語上のずれが生じていることを聞き手に示すことになるだろう。ここで言う「統語上のずれ」とは、冒頭要素の前後で、依拠する統語構造が異なることである。その一つの例が自己修復である。自己修復は発話の組み立てを一旦止めて、修復対象に替わる新しい項目を提出するという流れがあるが、そこで起きているのは冒頭要素が配置されるまでの統語構造と、冒頭要素が配置されてからの統語構造との間にずれを生む作業である。また、別の例として引用がある。引用とは発話の内部に別の発話を組み込むことである。それゆえ、組み込まれる発話(引用部分)自体は「地」の発話の内部に、「地」の発話とは別の統語構造を持つこととなる。これもまた統語上のずれが会話において生じていることを意味するだろう。最後の立ち遅れ反応は、一つ目の発話と二つ目の発話が異なる統語構造をしており、二つの発話を音調的な区切れもなく続けた際には、一つ目の発話と二つ目の発話の間に統語上のずれが生じることになる。

以上のことをまとめると、「始まり」ではない場所で冒頭要素が用いられたならば、そのことは、後続発話に直前までの発話との統語上のずれが生じていることを他の参与者に示す。このことは、冒頭要素が個別の働きとは別に、「始まり」をマークするという、まさに「冒頭である」ということを示す仕事も行なっているということである。冒頭要素が発話の冒頭にある限り、冒頭要素がマークする発話の「始まり」は、あまりに自明であるがゆえに発話者や受け手にはあまり意識されないかもしれない。しかし、通常の配置位置以外の場所で用いられると、「始まり」ではない箇所で「始まり」をマークすることとなり、受け手に後続発話を特定の注意を払いながら聞くよう促すこととなる。その特定の注意とは、自己修復や引用、立ち遅れ反応の可能性であることは7.2.2.で見てきた通りである。

７．３．小括

本章では、まず、第４章から第６章までに述べてきたことをまとめた。これらの章で明らかにしてきたことは、話者は発話の冒頭に使用される要素を決してランダムに並べているわけではなく、順序立てて使用しているということである。

このことを踏まえ、7.2.以降では、通常の配置位置以外の場所で冒頭要素が用いられる事例を検討した。通常の配置位置以外の場所とは「１：冒頭要素の順序規則に反する位置」と「２：発話の冒頭ではなく、発話の途中」のことである。この分析から、このような場所で冒頭要素が用いられることで、「自己修復」、「引用」、そして「立ち遅れ反応」という特定の行為がなされていることのリソースとなっていることを示した。これは、冒頭要素が、その名の通り「冒頭」つまり発話の「始まり」をマークしており、それらが通常の配置位置以外の場所で用いられることで「始まり」ではない場所で「始まり」を示すためである。その結果、冒頭要素の直前と直後で依拠する統語構造にずれが生じることをマークするのである。冒頭要素の持つ「始まり」を示すという働きは、通常の配置位置で用いられている事例を検討するだけでは気付きにくいだろう。しかし、通常の配置位置以外の場所で使用される際には、この「始まり」をマークする働きが「今何がなされているのか」を理解するために非常に重要となるのである。

「冒頭要素の順序規則」と記すことで、守らなければならない規則かのように受け取られてしまうかもしれないが、本章で示してきたことは、この規則自体、何らかの行為のリソースになりうるものであるということである。本章では、規則が破られることが会話における特定の仕事（「自己修復」、「引用」、「立ち遅れ反応」）を担っているということを見てきた。そのような意味で、この冒頭要素の順序規則は守らなければならない規則というよりも、むしろ、使われる規則として考えた方が良いだろう。

第８章　おわりに

これまでの締めくくりとして、本研究で述べてきたことをまとめ、本研究では扱うことが出来なかったことなど今後の課題について述べておきたい。

８．１．これまでのまとめ

本研究がこれまでの章で明らかにしてきたことを簡単に言うならば、次の二つのことに他ならない。一つ目は、発話冒頭要素が複数使用される際には順序規則があるということ、そして二つ目は、その順序規則は会話参与者によって使われるものであるということである。

以下、それぞれについて振り返っておく。

８．１．１．順序規則

一つ目の順序規則に関しては、第４章から第６章で見てきた。

第４章では、冒頭要素を、①前に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す「遡及指向要素」と、②直後に自分の発話が続くことを予期させる「後続指向要素」の二つに分類し、冒頭要素が複数使用される際には[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序になることを例証した。また、発話の冒頭において、遡及指向要素は基本的には一つまで、後続指向要素は複数使用できることも併せて指摘した。

第５章では、遡及指向要素の「基本的には一つまで」という性質に反している事例、つまり、遡及指向要素が発話の冒頭で複数使用されている事例を検討した。その結果、遡及指向要素が複数使用されている事例では、発話者が当該の発話で複数の対処をしなければならない状況にあることがわかった。一つは、特定の発話に対する双方の「不一致への対処」であり、もう一つは、先行発話から「求められた反応」をするという対処である。この二つを担う冒頭要素は、そのまま[不一致への対処 → 求められた反応]という順序で使

用されることも示した。

第６章では、後続指向要素について見た。発話の冒頭では後続指向要素は複数使用できるが、その際の順序について検討した。その結果、後続指向要素を「断絶」というキーワードから再度見直すことで、「断絶をマークする要素」が「断絶をマークしない要素」に先行することを明らかにした。「断絶」とは、簡単に言えば「直前の連鎖との境界を作る」ことであり、もし仮に、他の後続指向要素が「断絶をマークする要素」に先行してしまえば、その先行した後続指向要素との間に境界を作ってしまうことになる。そのため、「断絶をマークする要素」が先行することになるのである。

第４章から第６章までの内容を図にしたものが下である。図の左から右は時間軸であり、左の方が発話の冒頭において先行するという意味である。

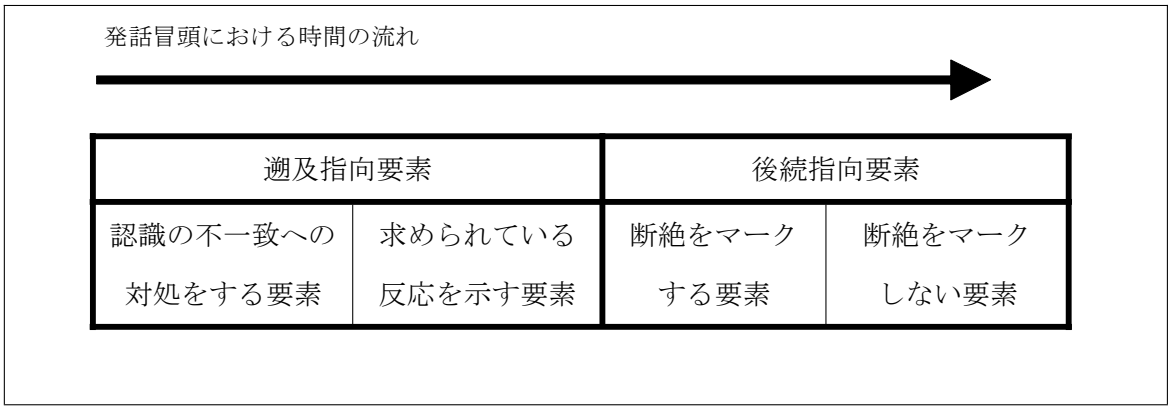

図 8-1：遡及指向要素と後続指向要素の全体像

以上が、順序規則に関して本研究が明らかにしたことである。次節では、第７章についてまとめておく。

８．１．２．使われる規則

二つ目である「順序規則が会話参与者によって使われるものである」ということについては、第７章の中で見た。

第７章では、通常の配置位置以外の場所で冒頭要素が用いられる事例を検討した。通常の配置位置以外の場所とは、「１：冒頭要素の順序規則に反する位置」あるいは「２：発話

の冒頭ではなく、途中」のことである。このような場所で冒頭要素が用いられると、特定の行為がなされていることを相手に知らせる働きが生じる。その特定の行為とは、「自己修復」、「引用」、「立ち遅れ反応」の三つである。

通常、冒頭要素は発話の冒頭に用いられるものであり、発話の「始まり」を示す。そして、冒頭要素を通常の配置位置以外の場所で使用することは、発話の「始まり」ではない場所で「始まり」を示すことに繋がる。そのことによって、通常の配置位置以外の場所で使用された冒頭要素は、冒頭要素の直前と直後とで依拠する統語構造にずれが生じていることを聞き手に伝え、そこで「自己修復」、「引用」、あるいは「立ち遅れ反応」という特定の行為がなされていること示すのである。

以上のことは、冒頭要素の順序規則が[1]、発話者が守らなければならない、あるいは、守らなければ理解不能になってしまうというような規則ではなく、むしろ、上に書いてきたような特定の行為がなされていることを示す道具として利用されているということである。

８．２．今後の課題

最後に、本研究で扱うことができなかった問題について、四点触れておきたい。

まず、そもそも本研究が分析の対象外にしていたものと、本研究で得られた知見がどのように関わってくるのかを明らかにする必要があるだろう。本研究が分析の対象の外に置いていたものは次の二つである。一つ目は、身体的な動作や物・人の配置などの視覚的な情報である。本研究では、電話会話を分析の対象にすることによって、議論を複雑にしないためにこのような視覚的な情報をあえて取り払った。しかし、対面会話においては、このような視覚的な情報は発話の組み立てにおいても非常に重要な情報となるものと思われる。このような視覚的な情報がどのように発話の冒頭の組み立てに関わってくるのかは本研究では見ることができなかった。二つ目は、冒頭要素よりも前に配置される要素についてである。具体的には、吸気や呼気、咳、表情の変化、うなずきなどである。このような要素のことをSchegloff（1996）は「開始に先立つ要素」（pre-beginning elements）と呼び、その性質として、発話（あるいはターン）が「開始された」とは認識されないが、発

[1] 正確には、冒頭要素の順序規則だけでなく、「冒頭要素は発話の冒頭に使う」というような規則も含まれる。

話（あるいはターン）が後続することを投射すると述べている。このような発話冒頭よりも前に配置される要素については本研究では分析の対象に入れていない。しかし、このような要素が冒頭要素の使用に影響を及ぼすことは十分に考えられる。以上のような、本研究が分析の外に置いていた「視覚的な情報」と「開始に先立つ要素」は、冒頭要素の全体像をより正確に掴むためには必要なものであると言えるだろう。

本研究で扱うことができなかった二つ目のことは、後続指向要素の規則についてである。後続指向要素は「断絶」をキーワードに順序規則について見た。しかし、「断絶」だけで全ての順序が説明できるわけではないので、順序規則はそれ以外にもあるものと思われる。「断絶」以外にどのようなことが順序規則に関わるかについては、本研究では着手に至っておらず、今後研究していく必要があるだろう。

三つ目として、遡及指向要素と後続指向要素のグラデーションについてである。ある特定の要素が遡及指向要素か後続指向要素のどちらに属するかは完全に分かれるわけではなく、遡及指向と後続指向のグラデーションの中でよりどちら側に位置しているのかで各冒頭要素を分類したことについては 4.1.1. で述べた。このグラデーションと本研究が明らかにした順序規則（図 8-1）はどの程度関係があるのかについては、別途考察する必要があるだろう。この二つに関連があるのか無いのか、それをいかに論じていくかは今後の課題としたい。

最後に、今回の分析対象である「発話の冒頭」はしばしば「ターンの冒頭」であることから、「ターンの冒頭ではない発話の冒頭」と「ターンの冒頭」でどのような違いが生じるのかについて更なる分析が必要であることも指摘しておく。「ターンの冒頭」ではターンを取得する必要があり、その仕事の幾分かを冒頭要素が担っているだろう。「ターンの冒頭ではない発話の冒頭」ではそのような仕事をする必要がない。このような違いがまだ他にもあり、発話冒頭要素の使用順序に何らかの影響を与えている可能性も考えられる。本研究では「ターンの冒頭ではない発話の冒頭」も分析に加えるために、あえて両者を混ぜて分析したのであるが、より正確な分析のためにはこれらを別々に論じるべきであろう。この点についても今後の課題としたい。

以上、本研究が触れることの出来なかった問題について見てきた。これらは、発話の冒頭で人は何をしているのかについての全貌を明らかにするためには、いずれも解決しておく必要があるだろう。

本研究は、発話冒頭に現れる言語要素のみを対象としているものである。そのため、本

研究が明らかにしたことも、発話冒頭について全貌を明らかにすることから見れば、小さな一歩に過ぎないかもしれない。しかし、本研究で少なくとも明らかになったことは、冒頭要素はランダムに使用されているわけではなく、規則的に用いられているということである。これまでの発話冒頭要素の研究では特定の要素のみに注目するものが多く、複数の要素同士の関係に焦点を当てるものはほとんど無かったと言える。本研究が順序という観点から複数の要素同士の関係を明らかにしたことで、新たな視点を提供できたのではないだろうか。たとえ本研究が小さな一歩であっても、発話冒頭に関する研究の大きな前進に何らかの貢献ができていれば幸いである。

参考文献

庵功雄(2001)『新しい日本語学入門　ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク

池田裕・池田智子(1996)「日本人の対話構造」『言語』25(１)　大修館書店 48-55

石黒圭(2005)「接続詞の二重使用とその表現効果」『表現と文体』中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子(編)　明治書院　160-169

石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書

石黒圭(2010)「講義の談話の接続表現」『講義の談話の表現と理解』佐久間まゆみ(編) くろしお出版 138-152

市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版

井出至(1973)「接続詞とは何か ―研究史・学説史の展望―」『品詞別 日本文法講座 接続詞・感動詞』鈴木一彦・林巨樹(編)　明治書院 45-88

伊藤翼斗(2010)「一度終わった発話の再開」『社会言語科学会　第二六回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.146-149

伊藤翼斗(2011a)「日本語のＴＣＵ冒頭要素の順序性」『社会言語科学会第 28 回大会発表論文集』社会言語科学会 214-217

伊藤翼斗(2011b)「日本語の発話冒頭に用いられる要素の順序 ―電話会話の分析から―」『日本語・日本文化研究』21　大阪大学日本語日本文化教育センター 43-54

伊藤翼斗(2012a)「発話冒頭における接続に関わる要素の順序ー「で」を中心にー」『間谷論集』６　日本語日本文化教育研究会 27-49

伊藤翼斗(2012b)「日本語における発話冒頭での遡及指向要素の分類」『日本語・日本文化研究』22　大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻　45-58

伊藤翼斗(2013)「「始まり」のリソースとしての発話冒頭要素」『EX ORIENTE』20　大阪大学言語社会学会　67-90

岩崎勝一・大野剛(1999)「「文」再考　会話における「文」の特徴と日本語教育への提案」『言語学と日本語教育　実用的言語理論の構築を目指して』アラム佐々木幸子編　くろしお出版　129-144

岩崎志真子(2008)「会話における発話単位の協調的構築　―「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考―」『「単位」としての文と発話』串田秀也・定延利之・

伝康晴編　ひつじ書房 169-220
榎本美香・伝康晴(2003)「3 人会話における参与役割の交替に関わる非言語行動の分析」『言語・音声理解と対話処理研究会』38　人工知能学会　25-30
大石初太郎(1971)「日常談話の中の接続詞」『話しことば論』秀英出版 322-333
大浜るい子(2001)「「えっ」の談話機能」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』50 広島大学 161-170
沖久雄(1993)「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』４(12)　明治書院 58-67
沖裕子(2008)「談話論からみた「文」と「発話」」『「単位」としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房　45-70
奥津敬一郎(1989)「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』８(８)　明治書院 4-14
尾崎明人(1993)「接触場面の訂正ストラテジー「聞き返し」の発話交換をめぐって」『日本語教育』81　日本語教育学会　19-30
金田純平(2008)「発話内における単位認定の問題点　―談話から見た文法単位の再検討―」『「単位」としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房 71-94
川田拓也(2008)「ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について」『京都大学言語学研究』27 京都大学大学院文学研究科言語学研究室 151-168
喜多壮太郎(1996)「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』15(１)　明治書院 58-66
北澤裕・西阪仰[訳](1995)『日常性の解剖学』マルジュ社
北原保雄(1975)「修飾成分の種類」『国語学』103　国語学会 18-34
金志宣(2002)「Turn-taking 研究の動向 －“turn”と“turn-taking”をめぐる議論を中心に－」『言語文化と日本語教育．増刊特集号，第二言語習得・教育の研究最前線 ：あすの日本語教育への道しるべ 2002』日本言語文化学研究会　205-221
金水敏(1983a)「接続詞」『研究資料日本古典文学　第十二巻 文法付辞書』大曽根章介・久保田淳・檜谷昭彦・堀内秀晃・三木紀人・山口明穂(編)　明治書院　126-130
金水敏(1983b)「感動詞」『研究資料日本古典文学　第十二巻 文法付辞書』大曽根章介・久保田淳・檜谷昭彦・堀内秀晃・三木紀人・山口明穂(編)　明治書院　131-134
串田秀也(1994)「日常生活と社会的相互行為」『モダンとポストモダン －現代社会学からの接近－』千石好郎編　法律文化社 31-55
串田秀也(1999)「助け舟とお節介 会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」『会話

分析への招待』好井裕明・山田富秋・西阪仰 編 世界思想社 124-147
串田秀也(2002)「会話の中の「うん」と「そう」 ―話者性の交渉との関わりで―」『「うん」と「そう」の言語学』定延利之編 ひつじ書房 5-46
串田秀也(2005a)「「いや」のコミュニケーション学 ―会話分析の立場から」『月刊言語』34(11) 大修館書店 44-51
串田秀也(2005b)「参加の道具としての文 オーヴァーラップ発話の再生と継続」『シリーズ文と発話１ 活動としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編 ひつじ書房 27-62
串田秀也(2006a)「会話分析の方法と論理 談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」『講座社会言語科学 第６巻 方法』伝康晴・田中ゆかり編 ひつじ書房 188-206
串田秀也(2006b)『相互行為秩序と会話分析 「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
串田秀也(2008)「指示者が開始する認識探索―認識と進行性のやりくり―」『社会言語科学』10(２) 社会言語科学会 96-108
串田秀也(2009a)「聴き手による語りの進行促進―継続支持・継続催促・継続試行―」『認知科学』16(１) 日本認知科学会 12-23
串田秀也(2009b)「理解の問題と発話産出の問題 －理解チェック連鎖における「うん」と「そう」－」『日本語科学』25 国立国語研究所 43-66
串田秀也(2010)「サックスと会話分析の展開」『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』串田秀也・好井裕明編 世界思想社 205-224
串田秀也(2011)「診療場面の会話分析－精神科病院外来診療室の事例から－」『日本語学』30(２) 明治書院 42-53
串田秀也・定延利之・伝康晴[編](2005)『活動としての文と発話』ひつじ書房
串田秀也・林誠(印刷中)「WH質問への抵抗：感動詞「いや」の相互行為上の働き」友定賢治[編]『感動詞の言語学(仮)』ひつじ書房
串田秀也・好井裕明 編(2010)『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社
小出慶一(1983)「言いよどみ」『話しことばの表現 講座 日本語の表現３』水谷修[編] 筑摩書房 81-88
小出慶一(2006) 「フィラー「このー」「そのー」「あのー」について：その由来、機能、相互関係」『埼玉大学紀要 教養学部』42(２) 埼玉大学教養学部 15-27

小出慶一(2008)「発話行動における「で」の役割 ―「で」のフィラー化をめぐって―」『埼玉大学紀要 教養学部』44(２) 埼玉大学教養学部 27-40

小出慶一(2009a)「「えーと」再考 ―談話管理という観点から―」『埼玉大学紀要 教養学部』45(１) 埼玉大学教養学部 45-57

小出慶一(2009b)「「えー」と談話の性質―独話データを中心に―」『埼玉大学紀要 教養学部』45(２) 埼玉大学教養学部 33-48

甲田直美(2001)『談話・テクストの展開のメカニズム ―接続表現と談話標識の認知的考察』風間書房

小矢野哲夫(1983)「副詞の呼応 ―誘導副詞と誘導形の一例―」『副用語の研究』渡辺実[編] 明治書院

小矢野哲夫(1996)「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件」『日本語・日本文化研究』６ 大阪外国語大学日本語講座

小矢野哲夫(1997)「疑似モダリティの副詞について―「まるで」を例として―」『国語論究』６ 明治書院

サーサス, G.(1998)『会話分析の手法』北澤裕・小松栄一訳 マルジュ社

定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構 ―心的操作標識「ええと」と「あの(一)」―」『言語研究』108 日本言語学会 74-93

杉戸清樹(1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち ―談話行動における非言語的表現―」『日本語教育』67 日本語教育学会 48-59

椙本総子(1994)「談話標識の機能について ―ソレデ・デを中心として―」『日本語・日本文化研究』２ 京都外国語大学留学生別科 33-44

鈴木佳奈(2008)「「なにかが欠けている発話」に対する他者開始修復 会話の事例から「文法項の省略」を再考する」『社会言語科学』10(２) 社会言語科学会 70-82

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店

鈴木孝夫(1982)「自称詞と他称詞の比較」『日英語比較講座第５巻 文化と社会』國廣哲彌編 大修館書店 19-59

須藤潤(2001)「感動詞「あ」の音声的特徴と会話参与者間の社会的関係」『日本語・日本文化研究』11 大阪外国語大学日本語講座 117-128

須藤潤(2005a)「感動詞の使用が及ぼす「丁寧さ」―「あ」の分析を中心に」『社会言語科学会第 15 回大会発表論文集』社会言語科学会

須藤潤(2005b)「会話参与者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴　ー応答における「あ」のバリエーション」『社会言語科学』8(1) 社会言語科学会　181-193

須藤潤(2008)『音声的特徴から見た日本語感動詞の機能』大阪大学言語社会研究科　博士論文

須藤潤(2010)「否定の「うん系」感動詞の音調パターン」『音声研究』14(3)　日本音声学会　40-50

ソシュール(1972)『一般的言語学講義』岩波書房　(Ferdinand de Saussure, *COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE*, publie par Charles Bally et Albert Sechehaya, 1949)

大工原勇人(2005)「間投詞「あの(ー)」・「その(ー)」の使い分けと指示詞の機能との連続性」『日本語学会 2005 年度秋季大会研究発表会発表要旨』日本語学会　174-175

大工原勇人(2008)「指示詞系フィラー「あの(ー)」・「その(ー)」の用法」『日本語教育』138 日本語教育学会 53-62

大工原勇人(2009a)「副詞『まあ』の２用法―但し書き的「まあ」と強調的「まぁー」―」『日本語学会 2009 年度春季大会研究発表会発表要旨』日本語学会　103

大工原勇人(2009b)「副詞「なんか」の意味と韻律」『日本語文法』9（1）　日本語文法学会[編] くろしお出版　37-53

高木智世(2008)「相互行為を整序する手続きとしての受け手の反応 ―治療的面接場面で用いられる「はい」をめぐって―」『社会言語科学』10（2）　社会言語科学会 55-69

高橋淑郎(2001)「談話における接続詞「で」の機能」『国語学』52（3）　日本語学会　98-99

滝浦真人(2003)「「だって」の語用論」『言語』32（3）　大修館書店 33-39

滝浦真人(2007)「呼称のポライトネス―“人を呼ぶこと”の語用論」『言語』36(12)　大修館書店 32-39

田窪行則(1992)「談話管理の標識について」『文化言語学―その提言と建設』三省堂 1097-1110

田窪行則(1997)「日本語の人称表現」『視点と言語行動』田窪行則編　くろしお出版　13-44

田窪行則(2005)「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』34(11)　14-21

田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』３（３）　59-74

田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会[編] くろしお出版 257-279

田中敏(1982)「日本語発話における有声休止の２重機能」『心理学研究』53（1）46-49

土屋菜穂子(2000)「感動詞の分類 ―対話コーパスを資料として―」『紀要』41　青山学院大学文学部　239-255

筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』くろしお出版

寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』６(３)明治書院 pp.56-68

伝康晴(1996)「話し言葉における非文法的現象とその機械的処理」『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-9503 9-16

伝康晴・渡辺美知子(2009)「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能」『音声研究』13(1)　53-64

戸江哲理(2008)「糸口質問連鎖」『社会言語科学』10(２)　社会言語科学会　135-145

富樫純一(2001)「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』６　筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室 19-41

冨樫純一(2002a)「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』２巻２号　日本語文法学会 95-111

冨樫純一(2002b)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』７　筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室 15-31

富樫純一(2002c)「「はい」と「うん」の関係をめぐって」『「うん」と「そう」の言語学』定延利之編　ひつじ書房 127-157

富樫純一(2002d)「あいづち表現形式に見る心内の情報処理操作について」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書 平成 13 年度Ｖ』筑波大学 27-42

富樫純一(2005a)「驚きを伝えるということ ―感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通じて―」『シリーズ文と発話１　活動としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房 229-251

富樫純一(2005b)「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」『言語』34(11) 22-29

富樫純一(2006)「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」『現代日本語文法　現象と理論のインタラクション』矢澤真人・橋本修[編]　ひつじ書房 23-46

中井陽子(2003)「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』３　早稲田大学　23-39

中島悦子(2011)『自然談話の文法 －疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞－』

おうふう
ナガノ-マドセン、ヤスコ・杉藤美代子(1999)「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」『日本語科学』５　国立国語研究所 26-45
西阪仰(1992)「エスノメソドロジストは、どういうわけで会話分析を行うようになったか」『エスノメソドロジーの現実』好井裕明編　世界思想社 23-45
西阪仰(1996)「対話の社会組織」『言語』25(１)　大修館書店　40-47
西阪仰(1997a)『相互行為分析という視点　文化と心の社会学的記述』金子書房
西阪仰(1997b)「会話分析になにができるか ー「社会秩序の問題」をめぐって」『社会学になにができるか』奥村隆編　八千代出版 115-154
西阪仰(1999)「会話分析の練習 相互行為の資源としての言いよどみ」『会話分析への招待』好井裕明・山田富秋・西阪仰 編 世界思想社 71-100
西阪仰(2005a)「語句の配置と行為の連鎖：プラクティスとしての文法」『講座社会言語科学 第５巻 社会・行動システム』片桐恭弘・片岡邦好(編) ひつじ書房 176-201
西阪仰(2005b)「分散する文 ―相互行為としての文法」『言語』34(４)　大修館書店 40-47
西阪仰(2005c)「複数の発話順番にまたがる文の構築 ―プラクティスとしての文法Ⅱ―」『シリーズ文と発話１　活動としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房 63-89
西阪仰(2006)「反応機会場と連続子：文のなかの行為連鎖」『研究所年報』36　明示学院大学社会学部付属研究所 57-71
西阪仰(2008a)「発話順番内において分散する文　ー相互行為の焦点としての反応機会場ー」『社会言語科学』10(2)　社会言語科学会　85-95
西阪仰(2008b)『分散する身体ーエスノメソドロジー的相互行為分析の展開ー』勁草書房
西阪仰(2010a)「道具を使うこと　ー身体・環境・相互行為ー」『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』串田秀也・好井裕明[編]　世界思想社 36-57
西阪仰[訳](2010b)『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』世界思想社
西阪仰 (2013)「飛び越えの技法　ー「でも」とともに導入される共感的反応」『共感の技法 福島県における足湯ボランティアの会話分析』西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂[著]　勁草書房　113-126
西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008)「特集『相互行為における言語使用ー会話データを用いた研究』について」『社会言語科学』10(２)　社会言語科学会　13-15

西阪仰・小宮友根・早野薫(2013)「山形119番通報に関する会話分析の視点からの所見 その２　通信員による問題の分析」西阪仰氏のＨＰ　山形大生死亡事件119番通報に関する会話分析の視点からの所見
http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/119_rep.html よりダウンロード(2013年12月７日アクセス)

西阪仰・高木智世・川島理恵(2008)『女性医療の会話分析』文化書房博文社

西野容子(1993)「会話分析について ―ディスコースマーカーを中心として―」『日本語学』12(５)　明治書院 89-96

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説 日本語の記述文法を目指して』くろしお出版

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

仁田義雄・益岡隆志[編](1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会[編](2003)『現代日本語文法４ 第８部 モダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会[編](2009)『現代日本語文法７ 第12部 談話 第13部 待遇表現』くろしお出版

野田尚史(2000)「語順を決める要素」『言語』29(９)　大修館書店 22-27

野村美穂子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語 ―「フィラー」に注目して―」『教育研究所紀要第５号』文教大学付属教育研究所
(http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/nomura/nomura.html よりダウンロード可)

初鹿野阿れ(1998)「発話ターン交代のテクニックー相手の発話中に自発的にターンを始める場合ー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24　東京外国語大学 147-162

畠弘巳(1991)「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』７（３）明治書院　100-117

馬場俊臣(2003)「接続詞の二重使用の分析 ―用例と各接続類型の特徴―」『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』53(２)　北海道教育大学　1-18

馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現　―指示・接続・反復―』おうふう

馬場俊臣(2011)「接続詞の二重使用に関わる研究について」『語学文学』49　北海道教育大学語学文学会　1-10

林宅男[編著](2008)『談話分析のアプローチ 理論と実践』研究社

林誠(2005)「「文」内におけるインターアクション :日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」『活動としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房 pp.1-26

林誠(2008a)「相互行為の資源としての投射と文法 - 指示詞『あれ』の行為投射的用法をめぐって」『社会言語科学』10(2)　16-28.

林誠(2008b)「会話における「指示」と発話の文法構造」『言葉と認知のメカニズム - 山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ書房 603-619.

稗田三枝(2003)「談話標識「それで」による話題展開」『STUDIUM』31　大阪外国語大学大学院研究室　140-151

稗田三枝(2003)「会話の展開と談話標識：談話標識「でも」に焦点を当てて」『日本語・日本文化研究』13　大阪外国語大学日本語講座　193-202

平本毅(2011a)「発話ターン開始部に置かれる「なんか」の話者性の「弱さ」について」『社会言語科学』14(１)　社会言語科学会 198-209

平本毅(2011b)「話題アイテムの掴み出し」『現代社会学理論研究』５　日本社会学理論学会 101-119

坊農真弓(2011)「手話会話に対するマルチモーダル分析－手話三人会話の二つの事例分析から－」『社会言語科学』13(２)　社会言語科学会　20-31

星野祐子(2008)「コミュニケーションストラテジーとしての引用表現　―発話末の「みたいな」の表現効果―」『人間文化創成科学論叢』11　お茶の水女子大大学院人間文化創成科学研究科 133-142

星野祐子(2010)「課題解決型の話し合い活動における協働的な発話連鎖　―聞き手の積極的な参与に着目して―」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局 192-198

細馬宏通(2005)「発話における応答詞「あ」の機能 :発し手にとっての「新規情報」は相互行為にどう利用されるか？」『社会言語科学会第 16 回大会発表論文集』社会言語科学会

堀口純子(1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10(10)　明治書院 31-41

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 編(2007)「規範があるとは、どのようなことか」『エスノメソドロジー 人びとの実践から学ぶ』新曜社

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

丸山直子(1996)「話しことばにおける文」『日本語学』15(９)　明治書院 50-59

水川喜文(1992)「エスノメソドロジーの歴史的展開」『エスノメソドロジーの現実』好井裕明編　世界思想社　203-225

水川喜文(2010)「会話分析による談話単位の革新とその課題」『北星論集』47　北星学園大学 53-65

水谷信子(1983)「あいづちと応答」『講座日本語の表現３　話しことばの表現』筑摩書房 37-44

水谷信子(1988a)「あいづち論」『日本語学』７(12)　明治書院　4-11

水谷信子(1988b)「話しことばの比較対照」『話しことばのコミュニケーション』国立国語研究所[監修]　凡人社

水谷信子(1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12(４)　明治書院 4-10

水谷信子(1995)「日本人とディベート　―「共話」と対話」『日本語学』14(６)　明治書院 4-12

水谷信子(2000)「日英語の談話の展開の分析　－話しことばにおける接続表現を中心として－」『明海大学大学院応用言語学研究』２　明海大学大学院応用言語学研究科

水谷信子(2002)「日英語の談話の展開の分析　－話しことばにおける接続表現「し」を中心として」『明海大学大学院応用言語学研究』４　明海大学大学院応用言語学研究科 79-90

水谷信子(2004)「日英語の談話の展開の分析　―話しことばにおける接続表現「のに」を中心として」『明海大学大学院応用言語学研究』６　明海大学大学院応用言語学研究科 197-209

水谷信子(2005)「日英語の談話の展開の分析　－動詞句の用法の比較」『明海大学大学院応用言語学研究』７　明海大学大学院応用言語学研究科　135-146

水谷信子(2006)「日英語の談話の展開の分析　―日本語の文末の伝聞表現と英語の comment clause を中心として―」『明海大学大学院応用言語学研究』８　明海大学大学院応用言語学研究科　135-145

水谷信子(2008)「談話の展開とあいづちを誘導する語句　－「共話」の底にあるもの－」『明海大学大学院応用言語学研究』10　明海大学大学院応用言語学研究科　143-154

水谷信子(2009)「日英語の談話の展開の分析　―受け身表現を中心として―」『明海大学大

学院応用言語学研究』11　明海大学大学院応用言語学研究科　121-131
水谷信子(2010)「日英語の談話の展開の分析　―例示表現を中心に―」『明海大学大学院応用言語学研究』12　明海大学大学院応用言語学研究科　125-138
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
宮永愛子・大浜るい子(2011)「道教え談話におけるフィラーの働き―「あの」に注目して―」『日本語教育』149　日本語教育学会 31-38
村田純一(1985)「人称の成立―子供における相互主観性の成立―」『世界と意味』岩波書店 69-95
メイナード，泉子 K.(1993)『会話分析』くろしお出版
森岡健二(1973)「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別 日本文法講座 接続詞・感動詞』鈴木一彦・林巨樹(編)　明治書院 7-44
森田良行(1958)「文章論と文章法」『国語学』32　武蔵野書院 91-105
森本郁代(2008)「会話の中で相手の名前を呼ぶこと ―名前による呼びかけからみた「文」単位の検討―」『「単位」としての文と発話』串田秀也・定延利之・伝康晴編　ひつじ書房 221-255
森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1　大阪大学文学部日本学科（言語系）63-88
森山卓郎(1996)「情動的感動詞考」『語文』65　大阪大学国語国文学会 51-62
山崎敬一・川島理恵・葛岡英明(2006)「エスノメソドロジー的研究をいかに行うか」『ヒューマンインターフェース学会誌』８（４）　ヒューマンインターフェイス学会 223-228
山田富秋(1999)「会話分析を始めよう」『会話分析への招待』好井裕明・山田富秋・西阪仰編　世界思想社 1-35
山田富秋(2004)「エスノメソドロジー・会話分析におけるメッセージ分析の方法」『マス・コミュニケーション研究』64　日本マス・コミュニケーション学会　70-86
山本綾・楊虹・佐々木泰子(2008)「談話標識「だから」から見た説得方略の発達　ー少人数の話し合い談話を資料としてー」『社会言語科学会　第22回大会発表論文集』社会言語科学会 16-19
山根知恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

吉田則夫(1987)「国語教科書の接続語」『日本語学』6(9)　明治書院 95-103

李廷玉(2003)「接続詞に準じる形式について」『STUDIUM』31　大阪外国語大学大学院研究室 40-51

渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房

Bolden, Galina B. 2009. Implementing incipient actions: The discourse marker 'so' in English conversation. *Journal of Pragmatics* 41: 974-998.

Brown, R. and M. Ford, 1961. Address in American English, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62: 375-385.

Clayman, S. and J. Heritage. 2002. *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*, Cambridge: Cambridge University Press.

Drew, Paul. 1997. "Open" class repair initiators in response to sequential sources of troubles in conversation. *Journal of Pragmatics* 28: 68-101

Drew, P. and S. Hester (eds.) 1992. *Talk at Work: Interation in Institutional Settings*, Cambridge: Cambridge University Press.

Ford, C. E., B. A. Fox and S. A. Thompson (eds.) 2002. *The Language of Turn and Sequence*. Oxford: Oxford University Press.

Ford, C. E. and Thompson, S. A. 1996. "Interaction Units in Conversation: Syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns". In Ochs, Schegloff, and Thompson (eds), *Interaction and Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press, 134-184

Garfinkel, Harold(1964)Studies of the routine grounds of everyday activities, *Social Problems* 11(3) 225-250 (北澤裕・西阪仰訳(1995)「日常活動の基盤　ー当たり前を見る」『日常性の解剖学』G.サーサス・ H.ガーフィンケル・ H.サックス・ E.シェグロフ著　マルジュ社 31-92)

Garfinkel, H., 1967. *Studies in Ethnomethodology*, New Jersey: Prentice-Hall

Goffman, Erving. 1964. The neglected situation. *American Anthropologist* 66(6): Part 2: 133-136.

Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual: An Essays on Face-to-Face Behavior*. Doubleday Anchor. (広瀬・安江[訳](1986)『儀礼としての相互行為』法政大学出版局)

Goffman, Erving. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Goodwin, C. 1979. The Interactive Construction of a Sentence in Natural Conversation. In G. Psathas(ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. New York: Irvington,

97-121.

Goodwin, C. 1981. *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*, New York: Academic Press.

Goodwin, C. 1987. Forgetfulness as an In teractive Resource, *Social Psychology Quarterly* 50(2), 117-131.

Goodwin, C. 1996. Transparent vision. In Ochs, E., Schegloff, E. A., Thompson, S. A. (eds.), *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press. 370-404.

Goodwin, C. 2006. Retrospective and prospective orientation in the construction of argumentative moves, *Text & Talk,* 26(4/5): Walter de Gruyter 443-461.

Goodwin, M. H. 1983. Searching for a word as an interactive activity. In J. N. Deely & M. D. Lenhart (eds.), *Semiotics 1981*. New York: Plenum 129-138.

Goodwin, M. H., & Goodwin, C. 1986. Gesture and coparticipation in the activity of searching for a word. *Semiotica*, 62, 51-75.

Hayashi, M. 1999. Where grammar and interaction meet: A study of co-participant completion in Japanese conversation. *Human Studies* 22: 475-499.

Hayashi, M. 2003. Joint Utterance Construction in Japanese Conversation. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins

Hayashi, M. 2004. Projection and grammar: Notes on the 'action-projecting' use of the distal demonstrative are in Japanese. *Journal of Pragmatics* 36(8), 1337-1374. [Reprinted in P. Drew and J. Heritage, (eds.) 2006, *Conversation Analysis, Volume 3: Turn Design and Action Formation*, 189-232. London: Sage.]

Hayashi, M. 2009. Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 41(10), 2100-2129.

Heritage, J. C. 1984. A Change-of-State Token and Aspects of Its Sequential Placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press, 299-345.

Heritage, J. 1998. *Oh*-prefaced to inquiry. *Language in society*. 27. 291-334.

Heritage, J. 2002. *Oh*-prefaced responses to assessment: a method of modifying agreement/disagreement. In Ford, C. E., Fox, B. A., Thompson, S. A. (eds), *The Language of Turn and Sequence*. New York: Oxford University Press. 196-224.

Heritage, J. 2007. Intersubjectivity and progressivity in references to persons (and places). In Tanya Stivers and N.J.Enfield (eds.), *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*, Cambridge: Cambridge University Press, 255-280.

Heritage, J. and D. W. Maynard (eds.). 2006. *Communication in Medical Care: Interaction Between Primary Care Physicians and Patients*, Cambridge: Cambridge University Press.

Heritage, J. and Marja-Leena Sorjonen, 1994. Constituting and maintaining activities across sequences: *And*-prefacing as a feature of question design. *Language in Society*, 1994, 23: 1-29.

Jefferson, G. 1972. Side sequences. In D. Sudnow(ed.), *Studies in Social Interaction.* New York: The Free Press. 294-338.

Jefferson, G. 1978. Sequential Aspects of Storytelling in Conversation, in J. Schenkein (ed.). *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. Academic Press.

Jefferson, G. 1983. On a Failed Hypothesis: 'Conjunctionals' as Overlap-Vulnerable. *Tilburg Papers in Language and Literature*, No. 28, Tilburg: Tilburg University. 1-33.

Jefferson, Gail. 1984.On the organization of laughter in talk about trouble, in J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis.* Cambridge: Cambridge University Press. 346-369.

Jefferson, G., 2004, "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction," G. H. Lerner ed., *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, Amsterdam: John Benjamins, 13-31.

Lerner, G. H. 1991. On the syntax of sentense-in-progress. Language in Society 20: 441-458.

Lerner, G. H. 1992. Assisted storytelling: Deploying shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology* 15(3): 247-271.

Lerner, G. H. 1995. Turn design and the organization of participation in instructional activities, *Discourse Processes* 19: 111-31.

Lerner, G. H. 1996. On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another speaker. In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (eds.), *Interaction and grammar*, Cambridge, England: Cambridge University Press. 225-256.

Lerner, G. H. 2003. Selecting next speaker: the context-sensitive operations of a context-free

organization. *Language in Society*, 32: 177-201.

Lerner, G.H. 2004. On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: Grammar as action in prompting a speaker to elaborate. *Research on Language and Social Interaction*, 37(2) 151-184.

Local, J. 1992. Continuing and restarting. In Auer. P & A. di Luzio(eds.), *The Contextualization of Language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 273-296.

Lynch, Michael, 1993. *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge: Cambridge University Press.(水川喜文・中村和生[監訳](2012)『エスノメソドロジーと科学実験の社会学』)

MacWhinney, B. 2007. The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: PalgraveMacmillan

Mehan, H. 1979. *Learning Lessons: Social Organization in the Classroom*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Mori, J., 2006. The workings of the Japanese token *hee* in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody. *Journal of Pragmatics* 38; 1175-1205.

Och, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson. (eds.) 1996. *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.

Pomerantz, A. 1984a. Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shape, In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press. 57-101.

Pomeranz, A. 1984b. Pursuing a response. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. 152-164.

Raymond, Geoffrey. 2003. Grammar and social organization: yes/no interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review* 68: 939-67.

Sacks, H. 1972. An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology, David Sudnow (eds), *Studies in Social Interaction,* The Free Press 31-73, note 430-431 (北澤裕・西阪仰訳(1995)「会話データの利用法　ー会話分析事始め」『日常性の解剖学』G.サーサス・H.ガーフィンケル・H.サックス・E.シェグロフ著　マルジュ社　93-174)

Sacks, H. 1987. On the Preference for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation. in G. Button and J. R. E. Lee (eds.) *Talk and Social Organizasion.* Clevedon: Multilingual Matters, 54-69.

Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation,* 2 vols. Oxford: Blackwell.

Sacks, H. and Emanuel A. Schegloff. 1979. Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In G. Psathas (ed) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. Irvington, 15-21.

Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): pp.696-735.

Schegloff, E. A. 1968. Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist* 70: 1075-1095.

Schegloff, E. A. 1979. The relevance of repair to syntax-for-conversation. In T. Givon(ed.), *Syntax and Semantics vol.12: Discourse and Syntax*, New York:Academic Press. 261-286.

Schegloff, E. 1982. Discourse as an interactional achievement: some uses of "uh huh" and other things that come between sentences. *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1981: Analyzing Discourses: Text and Talk*, ed. D. Tannen, 71-93.

Schegloff, E. 1984. On questions and ambiguities in conversation. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis.* Cambridge: Cambridge University Press. 28-52.

Schegloff, E. 1986. The routine as achievement. *Human Studies* 9: 111-151.

Schegloff, E. 1987. Recycled turn beginnings: A precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization. In Button, Graham, & Lee, John R. (eds). *Talk and social organization.* Cleavedon/ Philadelphia: Multilingual Matters. 70-85

Schegloff, E. 1987b. Between macro and micro: contexts and other connections. In J. Alexander et al. (eds.), *The Micro-Macro Link.* Berkeley: University of California Press. 207-234.

Schegloff, E. 1988. Description in the Social Sciences I: Talk-in-Interaction, *IPrA Papers in Pragmatics*, 2(1/2): 1-24.

Schegloff, E. 1992. In another context. In A. Duranti & C. Goodwin (eds.), *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press. 191-227.

Schegloff, E. 1996. Turn Organization: one intersection of grammar and interaction. *Interaction and Grammar*, ed. E. Ochs, S. Tompson, and E. Schegloff. Cambridge: Cambridge University Press, 52-133

Schegloff, E. A. 2002[1970]. Opening Sequencing.*Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance.* in J. E. Katz and M. Aakhus(eds.). Cambridge: Cambridge University Press, 321-385

Schegloff, Emanuel. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis 1*, Cambridge: Cambridge University Press

Schegloff, E. 2009. 'A Practice for (Re-)Exiting a Sequence: And/But/So + Uh(m) + Silence', in B. Fraser and K. Turner (eds) *Language in Life, and a Life in Language: Jacob Mey – A Festschrift*, Bingley: Emerald Group Publishing Limited, 365-74.

Schegloff, E. and Sacks, H. 1973. Opening Up Closing. *Semiotica* 8: 289-327

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. 1977=1990. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, In G. Psathas(ed.), *Interaction Competence*, Washington, D. C.: University Press of America. 31-61.

Schegloff, E. A. & Lerner, G. H. 2009. Beginning to Respond: Well-Prefaced Responses to Wh-Questions. *Research On Language And Social Interaction*, 42(2), 91–115.

Schiffrin, D. 1988. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press

Sidnell, J. 2007. 'Look'-prefaced turns in first and second position: launching, interceding and redirecting action. *Discourse studies* 9(3), 387-408.

Sidnell, Jack. 2010. *Conversation Analysis: An Introduction*: Wiley-Blackwell

Tanaka, H. 1999. *Turn-taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Tanaka, Hiroko. 2000. 'The particle *ne* as a turn-management device in Japanese conversation', *Journal of Pragmatics* 32: 1135-1176.

Tanaka, H. 2000. Turn-projection in Japanese talk-in-interaction. *Research on Language and Social Interaction* 33: 1-38.

Tanaka, Hiroko. 2004 'Prosody for marking transition-relevance places in Japanese conversation: The case of turns unmarked by utterance-final objects'. In Couper-Kuhlen, Elizabeth & Cecilia E. Ford (eds.) *Sound Patterns in Interaction: Cross-linguistic Studies from*

Conversation. Amsterdam: Benjamins, 63-96.

Yasui, Eiko. 2011. *Negotiating story entry: A micro-analytic study of storytelling projection in English and Japanese*, Unpublished doctoral dissertation, the University of Texas at Austin.

謝辞

本稿の執筆に際し、本当にたくさんの人にご支援いただきました。研究を始めてから４年が経ちましたが、おかげでようやく完成までたどり着くことができました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

まず、指導教官の筒井佐代先生には本当にお世話になりました。本稿の執筆に行き詰まったとき、精神的に不安定なとき、先生の厳しくも温かいお言葉の数々に何度も救われてきました。先生には、私が学部生の頃に受講した日本語教育学概論の授業以来、10 年もの長い間面倒を見ていただきました。会話分析の分野に興味を持ち、進んでいくきっかけになったのも先生の授業のおかげです。先生の様々な授業から、そして数々の主題について先生との議論を通じて､会話という現象の奥深さや面白さについて知ることができました。

副査を引き受けていただいた鈴木睦先生、そして真嶋潤子先生にも、本研究だけに留まらず様々な局面で長い間お世話になりました。鈴木先生には、筒井先生とはまた違った角度から会話を見る方法を教えていただき、会話を多角的に見ることの重要性が実感できました。真嶋先生には、特にデータの扱い方に関するコメントをよくいただきました。それに向き合う時間を経たことで、本研究の第３章もそれ以前よりかなりましなものになったのではないかと思います。

大阪教育大学の串田秀也先生からは本研究が手法として採用している会話分析に関して数え切れないほどたくさんのことを学びました。特に、串田先生が若手の会話分析研究者を集めて行なった授業に長い間参加することができ、データの見方を手取り足取り教えていただけたことで、分析する能力が飛躍的に伸びたと実感しています。授業中の議論や先生との会話の中で生まれたアイディアは、本稿のいたるところに散りばめられています。

東京で開かれた会話分析初級者セミナーでは、西阪仰先生、串田秀也先生、林誠先生、高木智世先生、細田由里先生、早野薫先生にデータを見る力を伸ばすチャンスをいただきました。私が参加したのは第３回と第４回のセミナーで、前者は連鎖組織、後者は修復の組織について、どちらも三日間朝から日が暮れるまでみっちりデータに接するというものでした。このような貴重な経験を与えていただいたことに感謝申し上げます。

会話分析の研究を続けていくにあたって、串田先生の授業の参加者の皆さんや、串田先生が主催する会話分析研究会のメンバーの方々、あるいは勉強会や読書会でお世話になっ

た方々からも多くのことを学ぶことができました。特に、平本毅さん、戸江哲理さん、張承姫さん、今田恵美さんにはお話を聞いていただく機会も多く、困ったことがあったときにすぐに質問できる人がいることに大変心強く思いました。また、平本さんには本研究の中心とも言える第４章のもととなる論文、そして第６章の一部をなす論文を読んでいただき、忙しいのにも関わらず、大変重みのあるコメントを書いてくださいました。その全てを改善することは出来ず、今後の取り組むべき課題として考えております。

平本さんの他にも、本稿が完成するまでに草稿や本稿のいくつかの章のもととなる論文を多くの方に読んでいただけました。大阪大学の蔦清行先生には丁寧かつ本質的なコメントを何度もいただき、文献の紹介も数多くしていただきました。三原千佳さん、畝田和佳さん、Ashlyn Moehle さんにも論文の断片に目を通していただき、論文の不備に関するコメントをいただくことができました。その他、私の主催する会話分析の勉強会でも第２章を説明する機会に恵まれました。実際に読んでもらうということに関して最もお世話になった人は香月裕介さんです。香月さんには、各種の論文提出の度に草稿を見ていただき、その都度鋭い指摘をしていただきました。香月さんとは学部生の頃からの付き合いでもあり、本研究に限らず非常に多くのことについて議論してきました。その議論のいくつかを形にすることができたことを嬉しく思っています。

本研究とは直接関わっていないものの、質的研究の勉強会に参加できたことは、執筆に行き詰まった時にはとても良いリフレッシュの機会となりました。また、私が担当している大学での授業での学生とのやり取りも、凝り固まった頭に気持ちの良い風を送り込んでくれました。質的勉強会のメンバー、そして学生達に改めて深く感謝したいと思います。

大学院に行くことに決めたときから、反対せず常に応援し続けてくれた家族にも大変感謝しています。非常に長い間にわたって見守り続けてくれたことで、無事論文を完成させることができました。また、ルームメイトの小村年男さんには、論文執筆時には幾度となく迷惑をかけたのではないかと思いますが、様々なことで気を使っていただき、執筆中は快適に過ごすことができました。ありがとう。

最後に、本研究で分析の対象としたデータの参与者の皆さんに最大限の感謝を示したいと思います。会話分析の研究はデータを提供していただける方の協力なくして成り立ちません。そのような意味で、最も本研究を強力に支えてくれた方々だと言えます。

本稿の完成までに本当にたくさんの方々にお世話になりました。皆様の温かい励ましとご支援のおかげで、無事書き終えることができました。心よりお礼申し上げます。

巻末資料　　トランスクリプトの記号一覧

会話分析では、音声を文字にする際にG. Jeffersonが開発した記号がしばしば用いられる[1]。本研究は、Jeffersonのトランスクリプト記号をもとにしたもので、日本でよく用いられる西阪・串田・熊谷（2008）で示されている記号を多少変更して利用している。

.	：下降調の抑揚。
,	：継続調の抑揚。
?	：上昇調の抑揚
？	：弱めの上昇調の抑揚。
＜文字＞	：発話の速度がゆっくり。
＞文字＜	：発話の速度が速い。
↑	：直後の急激なピッチ上昇。
↓	：直後の急激なピッチ下降。
(秒数)	：誰も話していない間の秒数。
(.)	：ごくわずかの間。
°文字°	：「文字」が小声でなされたことを示す。
＝	：前後が途切れなく続く。
！	：弾むような音調
￥文字￥	：笑いながらに近い発話。
文(h)字	：呼気を含んだ笑い。
[　　]	：重複の開始。終わり。
文ｈ字	：呼気を含んだ発話。
文字-	：直前の語や発話の中断。
文字_	：平板調。
文字：	：直前の音の引き伸ばし。
ｈ　.ｈ	：呼気。　吸気。
→	：分析の焦点。
<u>文字</u>	：強調。

[1] 詳細はJefferson(2004)を参照されたい。

((文字))　　：文字化者による注釈や説明。

(文字)　　：聞き取りが不鮮明。

(…)　　：聞き取れない箇所。

(A／B)　　：A または B と聞こえることを示す。聞き取りが不鮮明な際に使う。

なお、本稿では、分析の焦点（→）の行で用いられている冒頭要素は太字で示している。

文字　　：冒頭要素（ただし、分析の焦点の行のみ）